

柱穴40049 (314) 瓦器埵の底部。内面見込み部に平行線状暗文を施す。13世紀頃か。

柱穴40051 (315) 315は和泉型瓦器埵である。口径14.5cmを測り、内面に平行線状暗文と渦巻き状暗文を施し、外面のヘラミガキは省略する。13世紀前半（尾上編年Ⅲ－3期）。

柱穴40054 (312) 312は和泉型瓦器埵である。口径13.8cm・器高4.5cmを測り、内面に平行線状暗文と渦巻き状暗文を施し、外面のヘラミガキは省略されている。13世紀前半（尾上編年Ⅲ－3期）。

柱穴40060 (316) 316は和泉型瓦器埵である。口径14.0cm・器高3.8cmを測り、粘土ヒモ状の高台を貼りつける。13世紀前半（尾上編年Ⅲ－3期）。

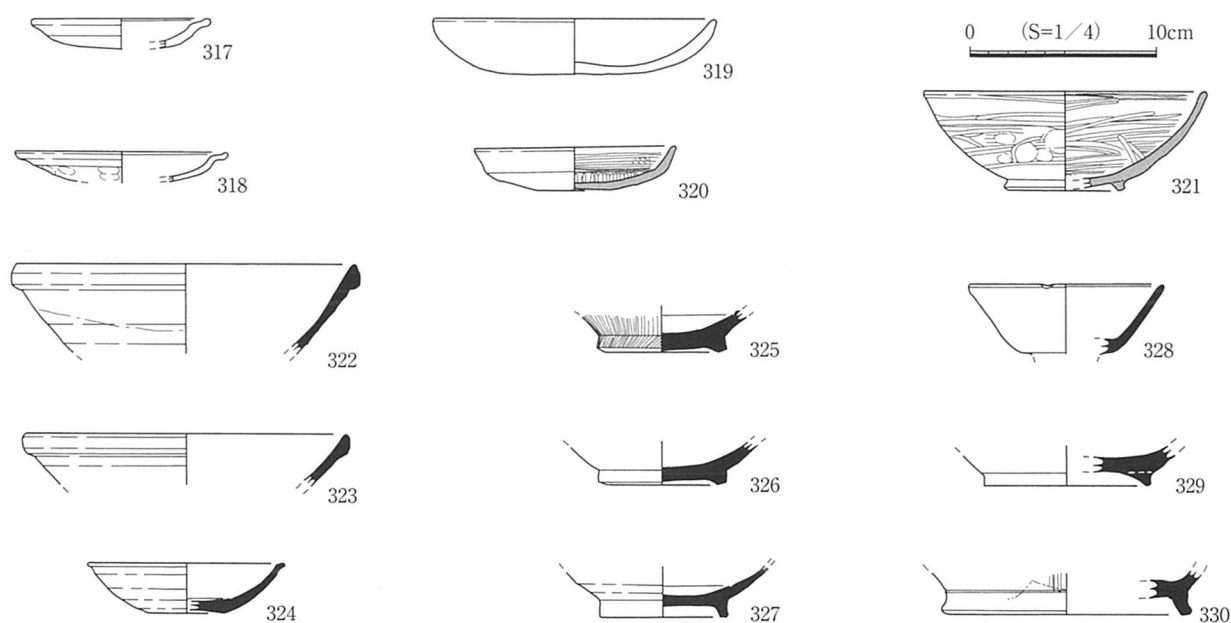
7. 第Ⅲ包含層

土師器Ⅲ、瓦器埵・皿のほか、白磁・青磁、山茶埵が出土した。また、青白磁の四耳壺が出土した。土師器 (317～319) 皿。317・318は「て」字状口縁皿で11世紀後半から12世紀（平安京Ⅳ期～Ⅴ期）。319は底部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上る。13世紀のものであろう。

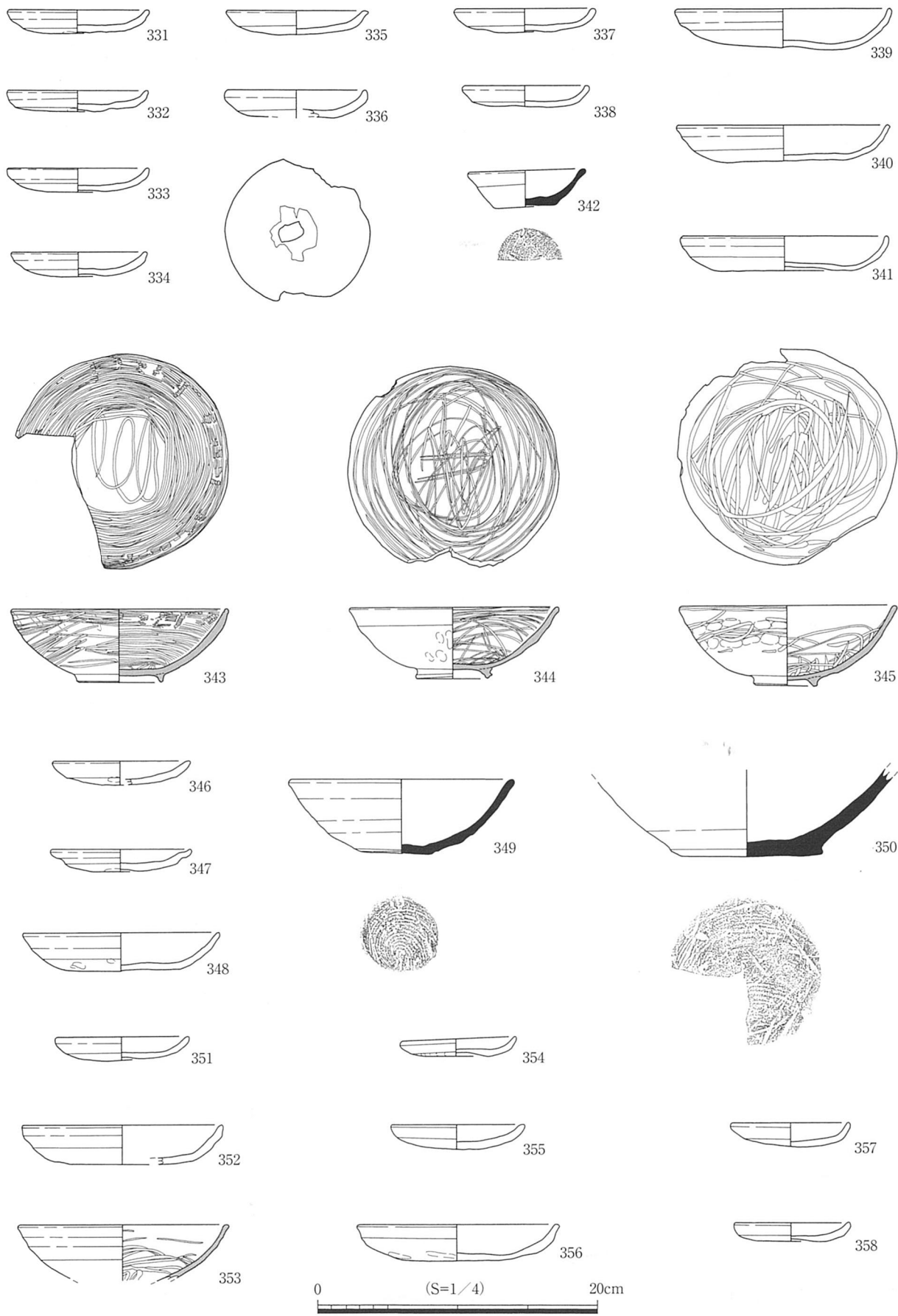
瓦器 (320・321) 皿 (320) は内面に丁寧なヘラミガキを施すが、口縁部のヘラミガキで一部単位の短いヘラミガキを連続させる。外面はヨコナデのみでヘラミガキは省略する。埵 (321) は口径15.0cm・器高5.3cmを測る。内外面ともにヘラミガキを施し、断面逆台形のしっかりした高台がつく。12世紀前半の所産である（尾上編年Ⅱ－1、2期）。

国産陶器 (329) 山茶埵である。底部は糸切り痕が残り、断面三角形の高台がつく。12世紀の所産か。

輸入磁器 (322～328・330) 白磁 (322～325) 玉縁状口縁がつく碗 (322・323) (山本分類碗Ⅳ類) と、底部 (325～327) がある。324は皿である (山本分類皿Ⅴ－2 a類)。325は高台外面と底部外面に放射方向のケズリ痕が残る。高台内部の削込みは浅い。326も高台内部の削込みが浅く、底部外面のケズリの痕跡もみられる。二次焼成を受けた可能性がある。327はやや高台が高い。内面見込み部に段をもつ。青磁 (328) 龍泉窯系の小碗である。口縁端部に輪花をもち、高台が欠損する (山本分類碗Ⅰ－3類)。青白磁 (330) 四耳壺底部で、体部下半に縦ヘラがはいる。12世紀の所産である。



第79図 第Ⅲ包含層出土遺物



第80图 第四—1 遺構面出土遺物

8. 第Ⅳ－1 遺構面出土遺物

第Ⅳ遺構面からは土師器皿、東播系須恵器碗・鉢、瓦器碗が出土し、この時期から白磁・青磁など輸入陶磁器が多くみられる。遺物はおもに11世紀末頃から12世紀中頃で、一部13世紀の遺物を含む。

溝90136 (347～350) 土師器・瓦器碗・須恵質土器以外に龍泉窯系青磁を含む輸入磁器、瓦が出土している。瓦器碗は、半数を内外面ともヘラミガキを施す12世紀前半頃の楠葉型が占める。

土師器 (347・348) 皿である。347は厚手の「て」字状口縁をもつ。348は口縁部を2段凹みナデする土師器皿大で、12世紀中頃から後半（平安京Ⅴ期新段階）。

須恵質土器 (349・350) 349は東播系須恵器碗で、丸みをもつ口縁部の立ち上がりと底部の糸切りから、12世紀前半から中頃のものであろう。350は須恵質のこね鉢であるが、底部のみの残存である。胎土が密で暗青灰色を呈する。底部は糸切りしたあとにヘラがあたった痕跡がある。

溝100104 (331～345) 土師器皿・瓦器碗、墨書土器 (612) と線刻のある瓦器皿 (605) が出土した。完形に近い状態の瓦器碗が4点と破片が2、3点、また土師器皿も断面が摩滅したものが少なく割れ口が新しいものばかりである。また、比較的狭い範囲から出土していることから、時間差なく投棄された可能性がある。さらに、穿孔した土師器皿など特異な遺物が相伴していることから、祭祀のような特殊な行事に関連する可能性も考えられるだろう。

土師器 (331～341) 皿である。いずれも口縁部に2段凹みナデを施しており、12世紀前半から中頃（平安京Ⅴ期古、中段階）の所産である。口径が9.0～10.0cmと15.0～15.5cmの大小があり、この大小は時期的に対応する。また、336は底部を内面から外面に向けて穿孔しており、祭祀的な意味をもっているかもしれない。

須恵質土器 (342) 小形の鉢で底部糸切りする。同様の須恵器が7Dトレンチの第Ⅱ包含層中から出土している。

瓦器 (343～345) 瓦器碗は完形に近い状態で3点出土した。343は口縁端部内面に沈線をめぐらすが和泉型瓦器碗である。口縁部内面に密なヘラミガキを施すが、ヘラミガキの単位は同時期の楠葉型と同じように細い。上半部3分の1の範囲では、ヘラミガキをめぐらすときに、一度止めてからわずかに当て、また止めては当てるという調整を数段にわたって施す。同様の調整を施した瓦器碗が、茨木市教育委員会が調査した溝昨遺跡で出土している（茨木市教育委員会『平成12年度発掘調査概報』2001）。また、外面には2、3cmの間隔をあけて口縁部付近にやや強い指圧痕がみられる。これは、先の内面の調整をおこなうときに、この場所を強く持ったためについた圧痕と考えられ、手回しでこれらの調整をおこなったのであろうか。ただし、この指圧痕は全周していない。11世紀末頃から12世紀前半に相当すると思われる（尾上編年Ⅰ－3～Ⅱ－1、2期）。344・345も和泉型瓦器碗で、344は口径14.8cm・器高5.2cmを測り、口縁部内面に横方向のヘラミガキ、見込み部に格子状を意識したような乱方向のヘラミガキを施し、外面のヘラミガキは省略する。高台はしっかりしたものが「ハ」字状に開いてつく。345は口径15.3cm・器高5.8cmを測り、内面に乱方向のヘラミガキ、外面にも上半部に横方向のヘラミガキを施し、断面逆台形の高台がつく。いずれも12世紀前半から中頃に相当する（尾上編年Ⅱ－1、2期）。

溝100072 (346) 土師器皿。口縁部ナデの後、口縁端部を面取りしており、12世紀か（平安京Ⅴ期）。

土坑80211 (355) 土師器皿である。口縁部にナデするもので、12世紀の所産であろう（平安京Ⅴ期）。

土坑90106 (351～353) 土師器皿は、351が口縁部ナデ、352は口縁部に2段凹みナデを施し、12世紀

の所産である。また瓦器壙(353)は、口径14.5cmで口縁部内面に渦巻き状暗文、見込み部にジグザグ状暗文を施しており、12世紀後半に相当する(尾上編年Ⅱ-2、3期)。

土坑90116(354)土師器皿。口縁部にナデとユビオサエをめぐらせ2段の凹みをもつもので、12世紀(平安京Ⅴ期)。他に12世紀の瓦器壙、コースター形の土師器皿が共伴する。

柱穴90108(356・357)いずれも口縁端部に面取りを施す土師器皿で、12世紀末頃から13世紀前半の所産である(平安京Ⅴ期新段階)。他に13世紀の瓦器壙が共伴する。

柱穴90112(358)口縁端部に面取りをする土師器皿で、12世紀末頃から13世紀前半(平安京Ⅵ期)。

9. 第Ⅳ-1 包含層出土遺物

第Ⅳ-1 包含層からは7 Dトレンチから多量の遺物が出土した。凶化したうち、396と427~429、431~435以外はすべて7 Dトレンチの東端からの出土遺物である。これらは落込み状になっているところからまとまって出土しており、同時に投棄された可能性がある。

瓦器(359~371)壙(359~366)359は楠葉型瓦器壙で、口径15.2cm・器高6.1cmを測り、やや高い高台がつく。口縁端部に浅い沈線をめぐらし、内面に密なヘラミガキと、見込み部に同心円状の暗文、外面に分割したヘラミガキを施す。360~366は和泉型瓦器壙である。口径15.0~16.0cm・器高5.3~6.2cmで、いずれもしっかりした高台がつく。内面、外面とも密なヘラミガキを施す。また、360は楠葉型瓦器壙に施されるような幅の細いヘラミガキが内外面に施されており、見込み部には丁寧な格子状の暗文がある。口縁部下半の外面にはやや強い指圧痕があり、その凹みの周りをなぞるようにヘラミガキを施しており、特異である。366にも口縁端部に359のような浅い沈線をめぐらせており、和泉型で成形されたものに、楠葉型でみられるような調整を施していることがうかがえる。このような特徴から、これらの瓦器壙は和泉型・楠葉型の瓦器壙が流入した後に、両者を模倣して独自に生産された可能性が考えられる(尾上・橋本編年Ⅰ期)。

皿(367~371)瓦器皿は口径が9.5~10.0cmで、369・371を除き、いずれも内外面ともに細く丁寧なヘラミガキを施す。367と370は底部外面に放射線状にのびるナデが残っており、内型成形したことを示すか。調整も類似しており、口縁部外面と底部に分割したヘラミガキを施すが、両者が互い違いになっており、丁寧に作られたことがうかがえる。また、368・371も、見込み部内面に斜格子状暗文が施されている。

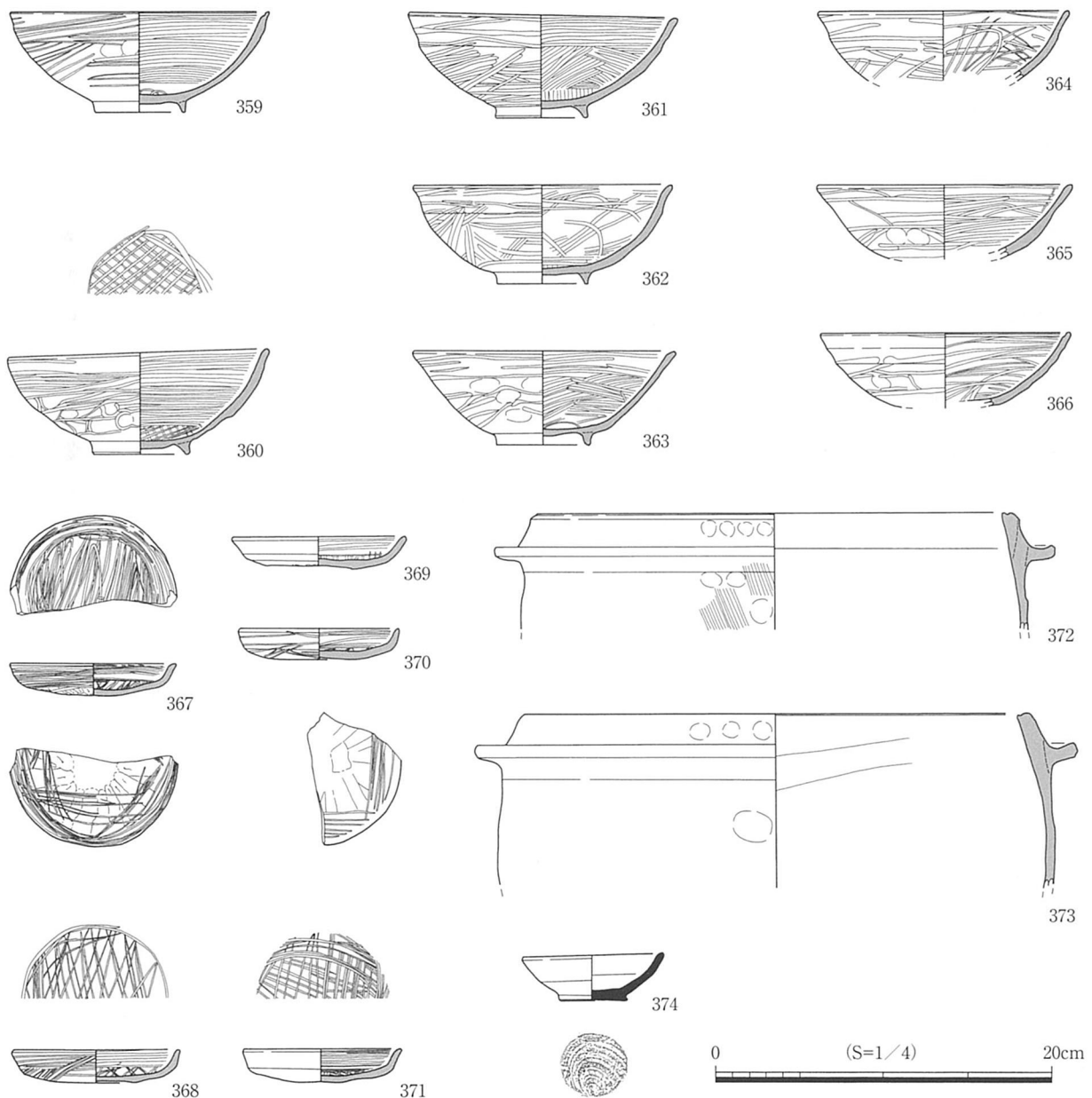
瓦質土器(372・373)羽釜。口縁部はやや内傾し、口縁部端面に沈線をめぐらす。口縁部より比較的低い位置に断面方形の短い鏝がつく。調整は内面がナデ、外面がユビオサエであるが、372は縦方向にハケを施している。

須恵質土器(374)小形の壙である。底部を糸切りする。

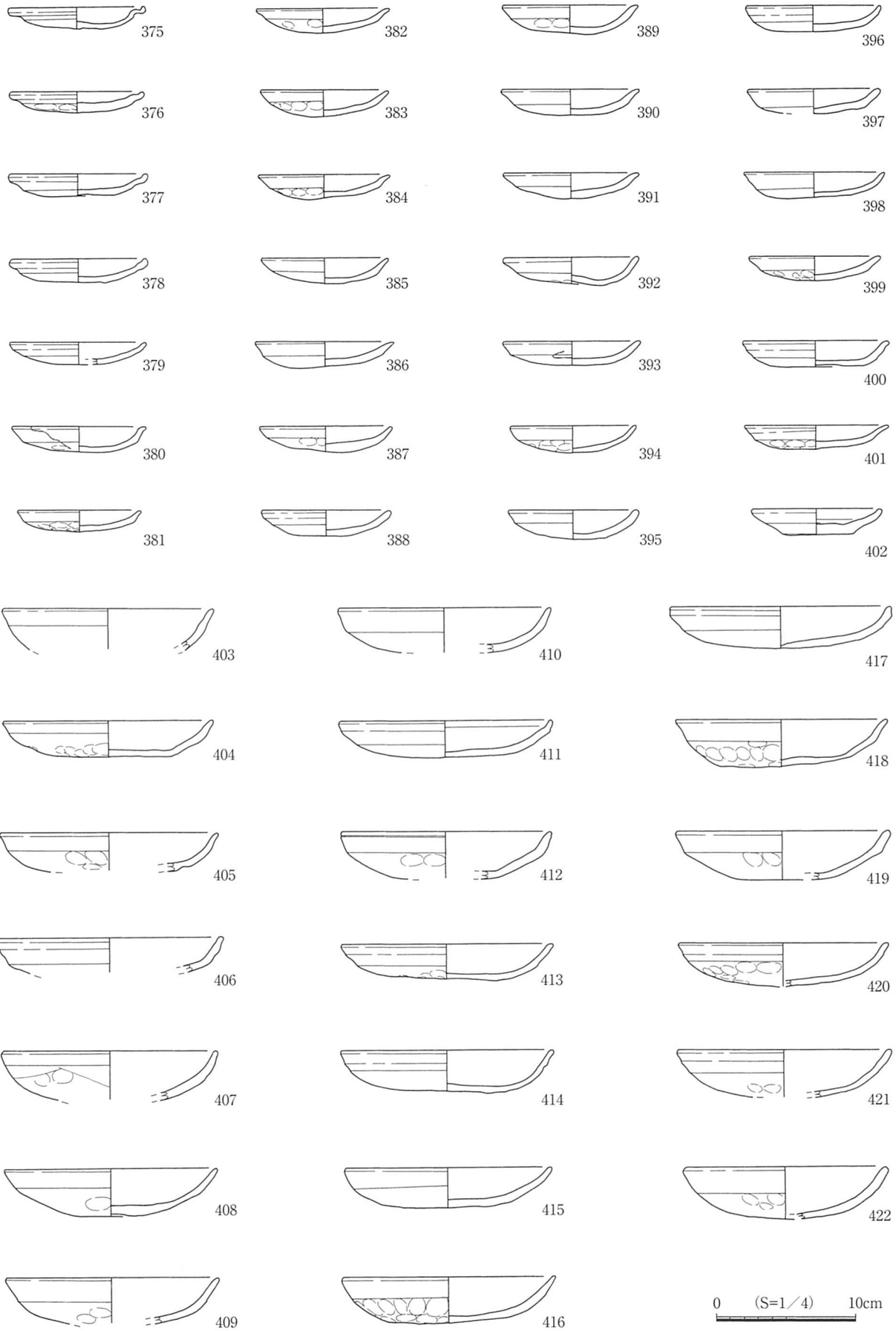
土師器(375~422)皿小(375~402)口径9.0~10.0cmと、皿大(403~422)口径15.0cm前後に分かれる。皿小のうち375~378は「て」字状口縁をもつ皿であるが、器壁がやや厚いことから11世紀後半の所産である(平安京Ⅴ期)。ほかに2段凹みナデを施すもの、あるいはナデが1段で、その下にユビオサエをめぐらせて2段の凹みをもつもの、平たい碗形を呈し、口縁部ヨコナデ、外端面にわずかな面をもつものがみられる。また、皿大にしても、皿小と同じ傾向がみられる。これらはほぼ11世紀後半から12世紀初頭に相当する(平安京Ⅳ期新~Ⅴ期古段階)。402は回転台成形の土師器皿で、底部糸切りする。内面見込み部に渦巻き状の成形痕がみられる。

土師質土器（423～426）鍋である。口径が40cmに近いものが出土した。いずれも頸部が「く」字に屈曲し、短い口縁をもつ。口縁端部は断面方形におさめ、内面に横方向のハケを施す。体部内面はハケ目がみられないが、424にはハケが当たったような筋が数本みられることから、実際には内面にもハケを施していた可能性がある。また、外面はハケを施し、頸部には指圧痕が残る。いずれも外面全体に煤が付着しており、煮沸具として利用されていたのであろう。

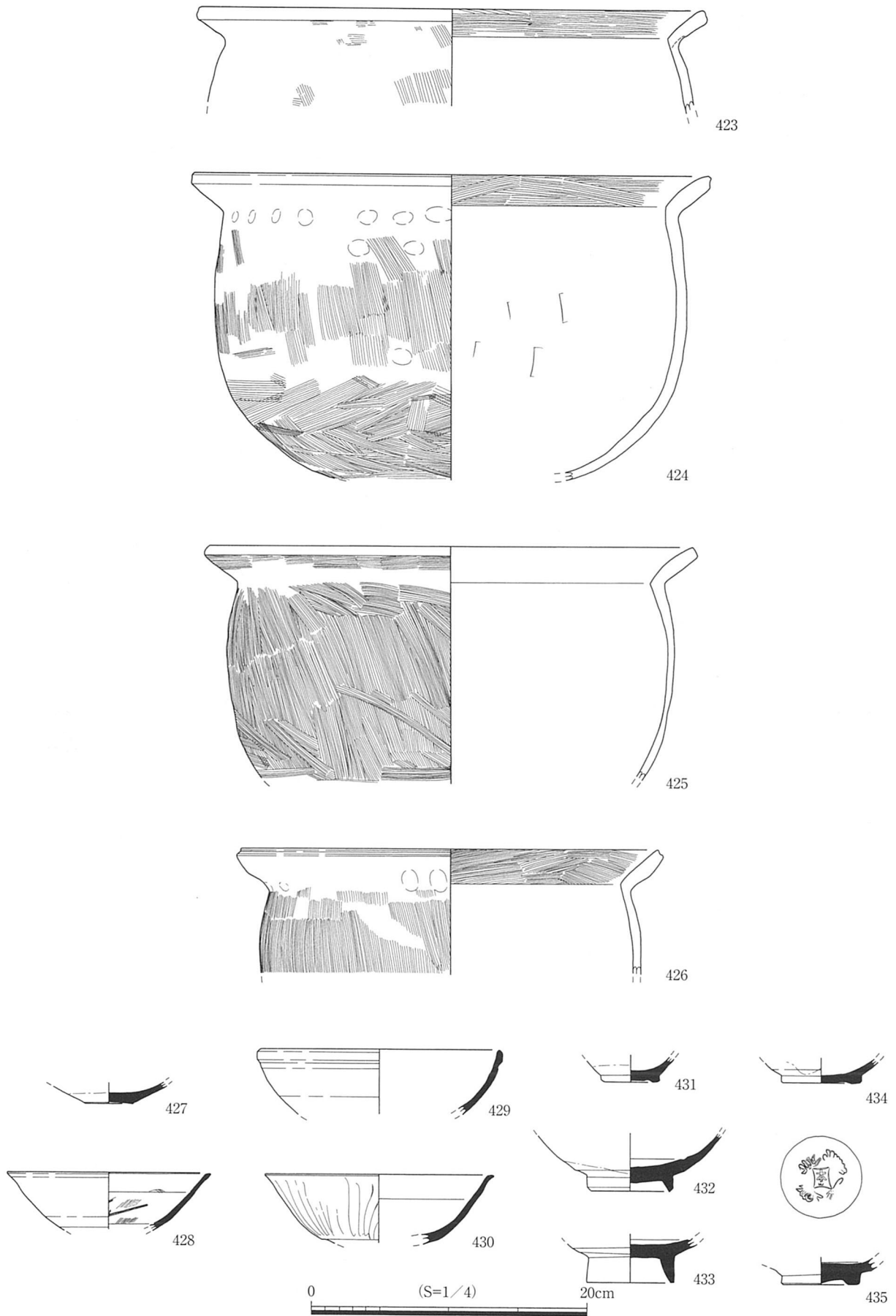
輸入磁器（427～435）白磁（427～433）427は内面に櫛目文を描き、428は小さめの玉縁状口縁をもつ碗（山本分類皿Ⅳ類）。430は灰白色を呈し、外面に縦ヘラ花卉文を描く（山本分類碗Ⅴ類）。432は碗で底部外面は露胎する。破損後に被熱した痕跡がある。433は高台が高く直立する碗（山本分類碗Ⅴ類）。青磁（435）龍泉窯系青磁碗で見込み部内部にスタンプをする。433を含む9Dトレンチで取り上げられた遺物は13世紀のものが混入しており、7Dトレンチ包含層出土遺物とは時期が異なる。



第81図 第Ⅳ-1 包含層出土遺物（1）



第82図 第IV-1 包含層出土遺物 (2)



第83図 第IV-1 包含層出土遺物 (3)

10. 第IV-2 遺構面出土遺物

溝30024 (436~445) 土師器・瓦器埴以外に黒色土器A・B類片、白磁片1点ずつが出土した。

土師器 (436~439) 皿。436・437は厚手の「て」字状口縁をもち、438・439は口縁部を2段凹みナデする皿大小である。11世紀後半から12世紀中頃の所産である(平安京IV期中、新段階)。

瓦器 (440~445) 楠葉型瓦器埴 (440~443) は口径15cm・器高6.0cmを測り、不明瞭なものもあるが内外面に密なヘラミガキを施す。口縁端部内面に沈線をめぐらし、しっかりした高台がつく。441・443は高台内部に十字あるいは直線を数条重ねたヘラ記号がある。和泉型瓦器埴 (444~446) は口径15.0~15.5cm・器高5.0~6.0cmで、高台がつく。いずれも11世紀中頃から後半の所産(橋本・尾上編年I期)。

溝30027 (446) 瓦質羽釜である。口縁部の立ち上がりが短く、断面方形の鑊がつく。内面に板状の工具が当たった痕跡があり、ハケを施したと思われる。

溝80248 (447~449) 瓦器埴・土師器皿の他に焼土塊と思われるものが1点出土した。

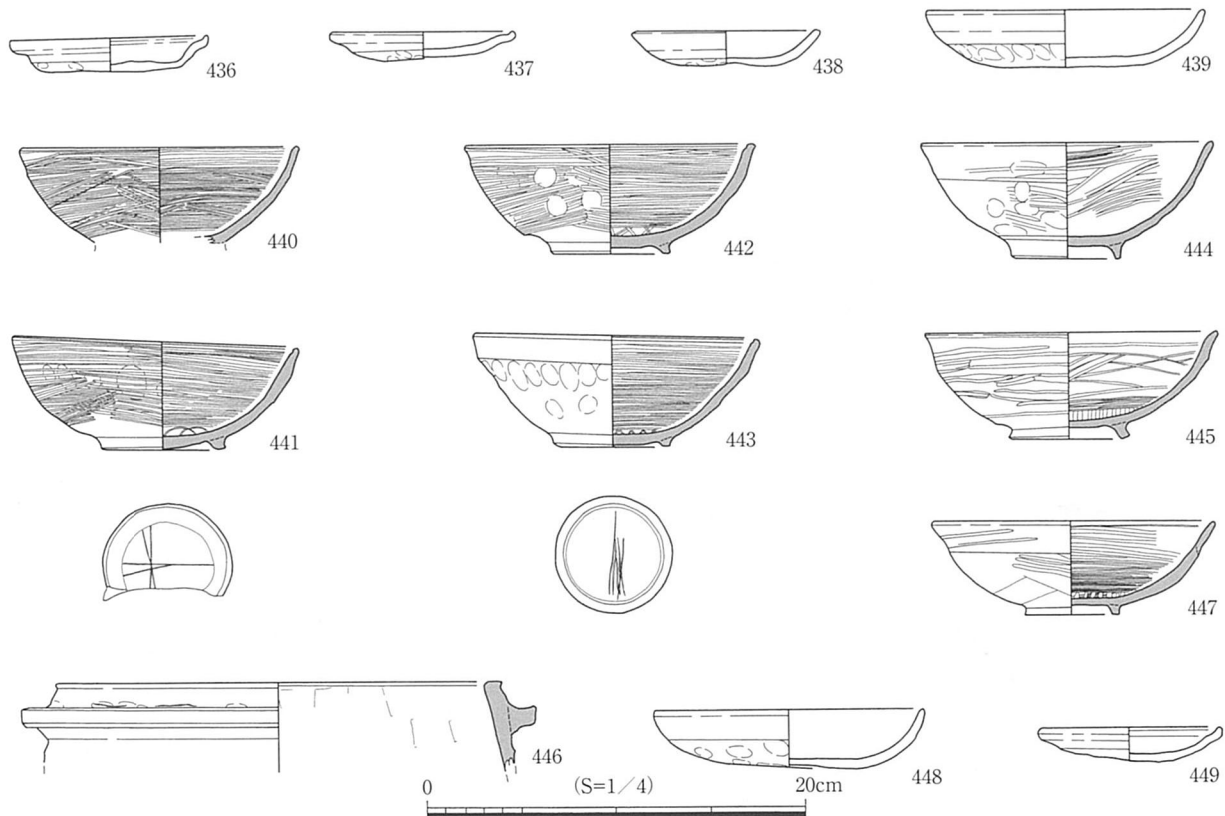
瓦器 (447) 和泉型瓦器埴で、外面はヘラケズリ後にヘラミガキを施す。内外面ともに密なヘラミガキを施しており、11世紀後半の所産である(尾上編年I期)。図化できなかったが、12世紀代の楠葉型瓦器埴が数点出土している。

土師器 (448・449) 皿。2段凹みナデをするもので、口径で大小に分かれる。448は2段凹みナデのうち下方のナデのかわりにユビオサエをめぐらす。いずれも11世紀後半の所産(平安京IV期新段階)。

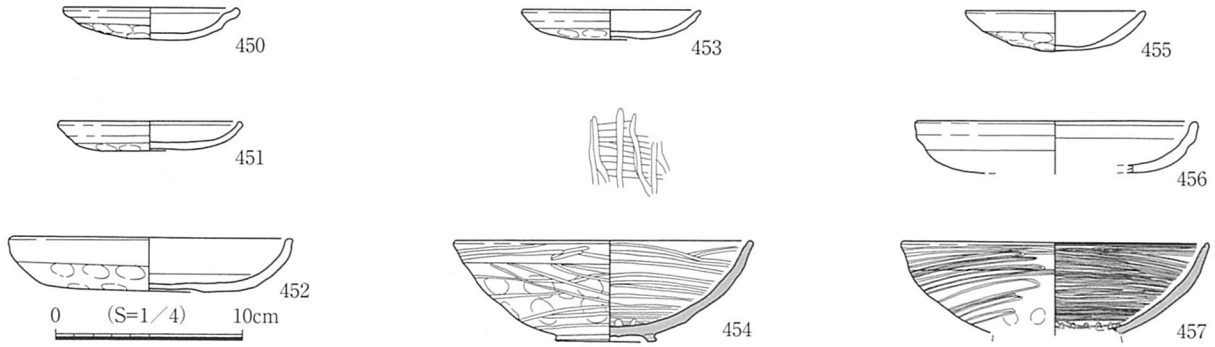
11. 第IV-3 遺構面

溝90199 (450) くずれた「て」字状口縁をもつ土師器皿で口径9.2cm。11世紀後半から12世紀。

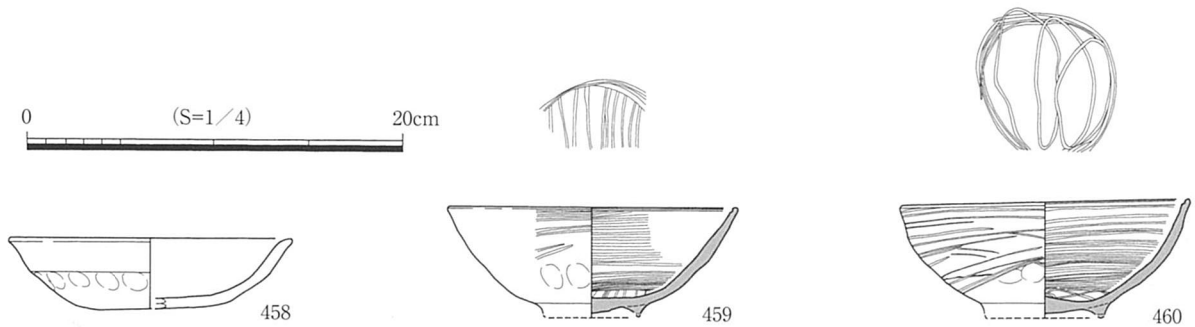
柱穴70021 (456) 土師器皿大。口縁部外面の2段凹みが顕著で、12世紀前半の所産(平安京V期)。



第84図 第IV-2 遺構面出土遺物



第85図 第Ⅳ-3遺構面出土遺物(1)



第86図 第Ⅳ-3遺構面出土遺物(2)

柱穴70022 (455・457) 455は土師器皿。平たい椀形を呈し口縁部ヨコナデ、底部は無調整である。11世紀後半から12世紀前半のものである。457は楠葉型の瓦器碗である。内面見込み部にジグザグ状暗文、外面に分割性をもつヘラミガキを施しており、11世紀末頃から12世紀初頭(橋本編年Ⅰ-2、3期)。

土坑80293 (453) 土師器皿である。口縁部外面に2段凹みナデを施す。12世紀前半。

土坑80295 (454) 和泉型瓦器碗である。口径15.7cm・器高5.4cmを測り、外面に分割性をもつ粗いヘラミガキ、内面に格子状暗文を施す。しっかりした高台が「ハ」字状につく。11世紀末頃から12世紀前半の所産である(尾上編年Ⅰ-2、3期)。

土坑90193 (451・452) 土師器皿。口縁部に2段凹みナデを施しており、12世紀前半(平安京Ⅴ期)。

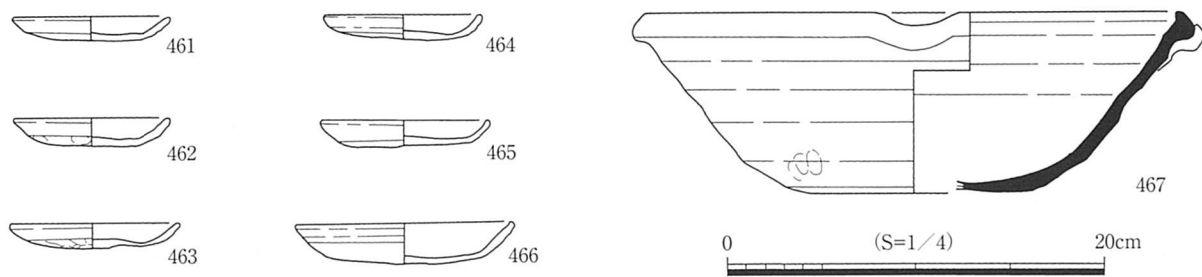
溝70024 (458~460) 土師器・瓦器・須恵質土器が出土したが、瓦器碗はすべて楠葉型瓦器碗である。

土師器(458) 皿。口縁部外面にナデとユビオサエをめぐらし2段の凹みをもつもので、12世紀。

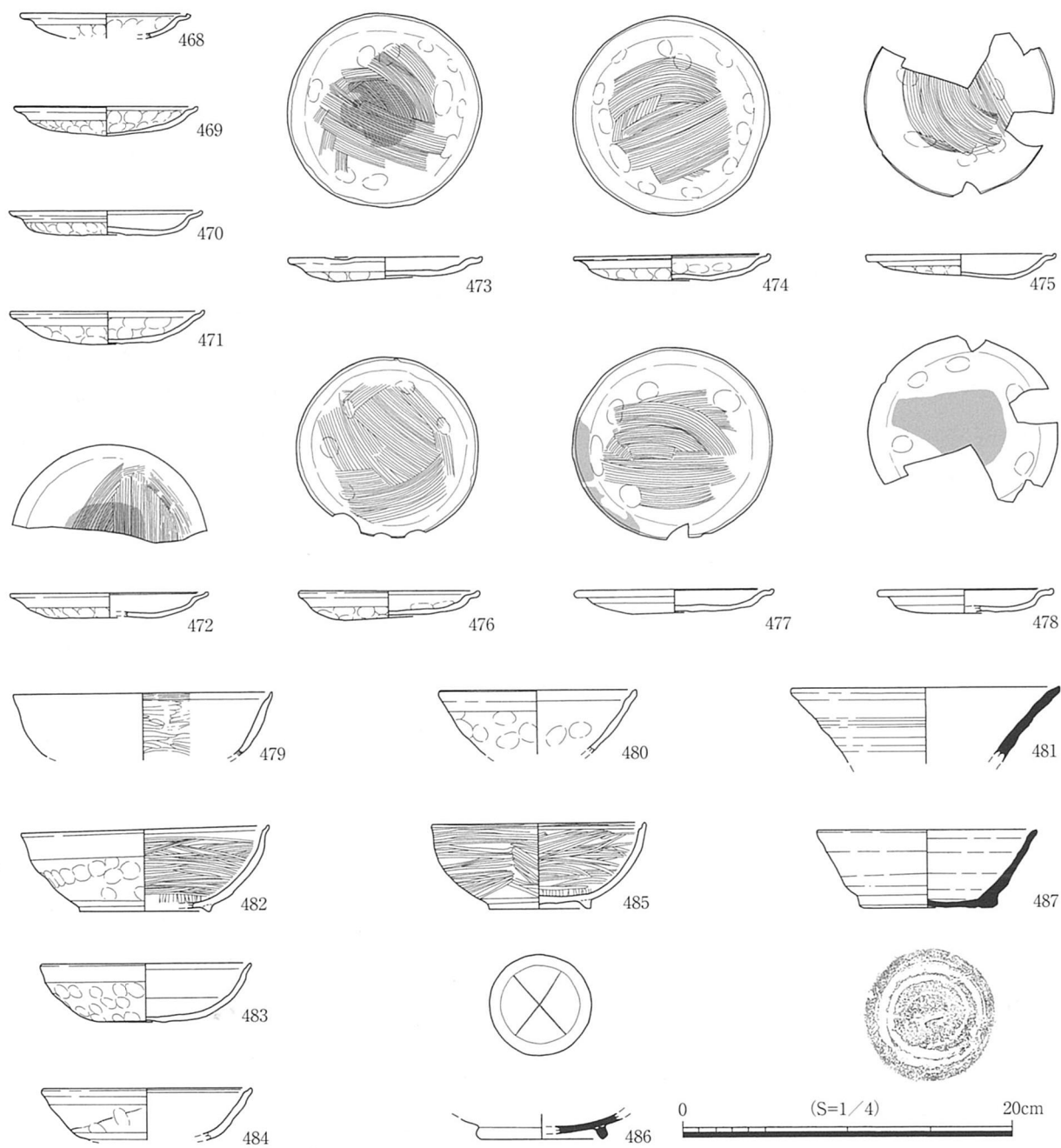
瓦器(459・460) 楠葉型瓦器碗で、口縁端部内面に沈線をもつ。内面に密な圏線状のヘラミガキを施し、外面にもヘラミガキがみられる。459は口縁部内面のヘラミガキより先に、見込み部に平行線状暗文を施し、逆に460は口縁部のヘラミガキのあとに内面見込み部の同心円状暗文が施されている。外面に分割性をもつヘラミガキを施す。外面に粘土の接合痕が残っており、外面のヘラミガキ調整前のナデ、ユビオサエは粗いことから、11世紀末頃から12世紀初頭に相当する(橋本編年Ⅰ-3期)。

12. 第Ⅳ-3包含層

土師器皿(461~466)と片口鉢(467)が出土した。土師器皿はやや深く、口縁部にナデとユビオサエで2段の凹みをもつ。片口鉢は、粗い胎土で瓦質と須恵質の間のような焼成で在地産と思われる。口縁部が上下に肥厚し、11世紀から12世紀の所産であろう。



第87图 第IV-3包含層出土遺物



第88图 第V遺構面出土遺物

13. 第Ⅴ遺構面

溝2022 (468～481) 2000年度(その3) 調査で検出された溝である。後述する溝10175と同一の遺構と考えられる。土師器・黒色土器が出土した。なお、481は古瀬戸で混入したものであろう。

土師器(468～478)「て」字状口縁をもつ皿である。口径10.4～12.0cm・器高1.5cmを測る。器壁が薄く、内面にハケを施しており、黒斑がつく部分もある。内面口縁部の立ち上がり部分には、円を描くように指圧痕が残る。473～475は重なった状態で出土した。口径12.0cmのものが多く、内面のハケメなどは「て」字状口縁の初期段階と考えられ、10世紀前半から中頃の所産であろう(平安京Ⅲ期古段階)。

黒色土器(479) 内黒焼成のA類塊で、内外面に密なヘラミガキを施す。10世紀の所産であろう。

土師器(480) 坏。口縁部にヨコナデ、底部外面はユビオサエを施す。

溝10175 (484・485) 溝2022の延長と考えられる溝である。特異な遺物として人形代が出土した。

484は土師器坏。口縁端部内面に内傾する面をもち、外面の粘土の接合痕に沿って指圧痕が残る。10世紀前半か(平安京Ⅱ期新段階)。485は内黒焼成した黒色土器A類塊で、口縁端部内面に沈線をめぐらせ、内外面に密なヘラミガキを施す。底部外面には「+」字のヘラ記号が記されている。10世紀前半。

溝80305 (482・483・486) 482は内黒焼成した黒色土器A類塊である。口縁端部内面に沈線、内面に密なヘラミガキ、見込み部には平行線状ヘラミガキを施すが、外面は成形時についたと思われる指圧痕が斜め放射状につき、ヘラミガキは粗い。10世紀前半か。483は土師器坏で、体部外面はユビオサエである。486は東美濃産の灰釉陶器塊である。内面に釉がハケ塗りされており、重ね焼の痕跡がみられることから、10世紀前半に相当しよう(黒笹90窯式併行)。胎土が密である。他に東美濃産と考えられる大形品の灰釉陶器の破片が、7D・9Dトレンチで数点出土している。塊は486の1点のみである。

溝90209 (487) 底部ヘラ切りの須恵器坏。底部径が小さく、立ち上がりが上方に開く器形で、10世紀前半の所産であろう。摂津以西から搬入品の可能性がある。

14. 第Ⅵ包含層出土遺物

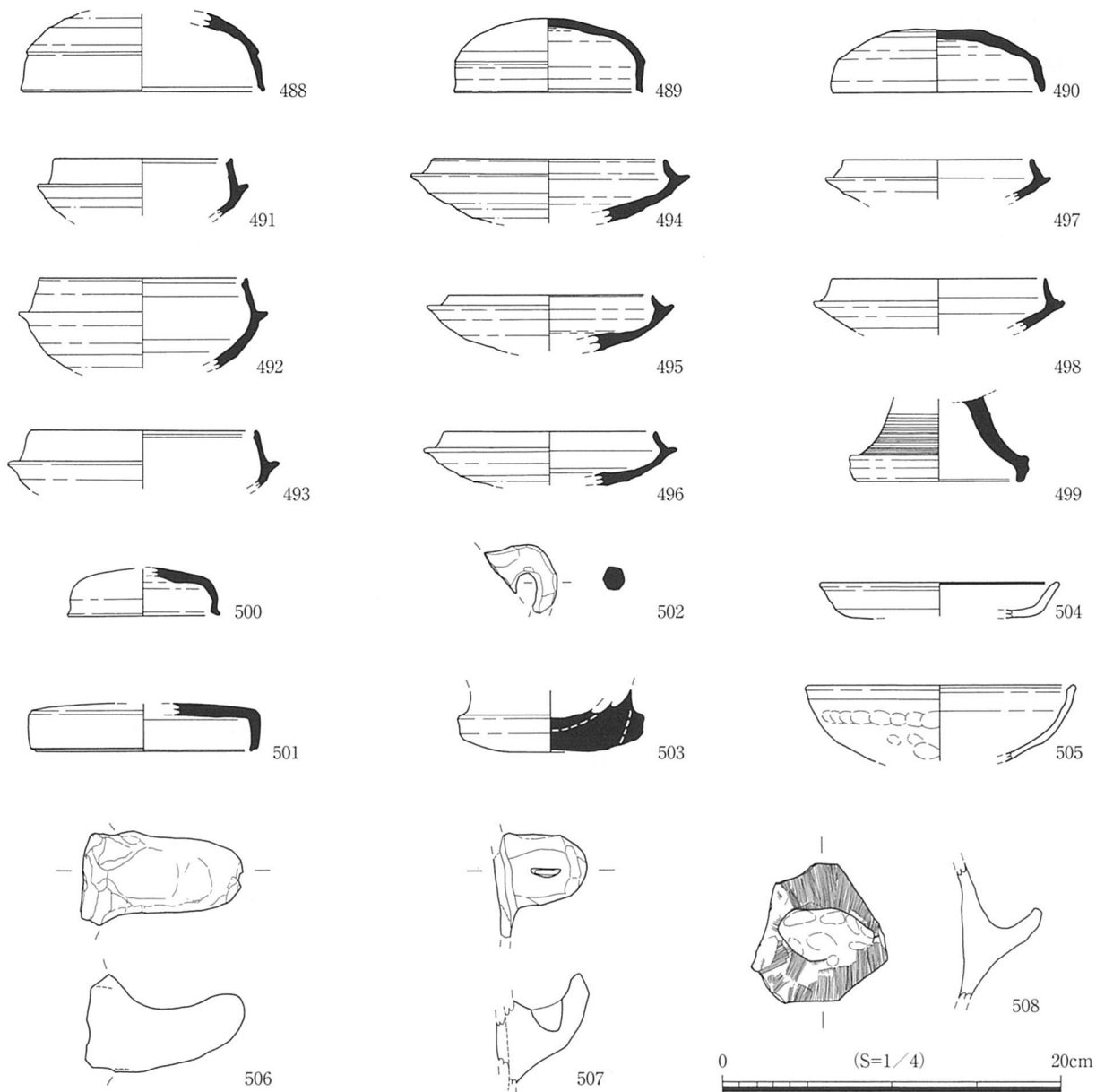
第Ⅵ包含層からは主に古墳時代の遺物が出土し、若干、飛鳥・奈良時代のものを含む。

須恵器坏蓋(488～490) 488は口径が14cmを測り、口縁部と天井部の境の稜も鈍く、6世紀初頭(田辺編年MT15)。口縁端部内面にやや凹んだ面をもつ。489は稜線がわずかにみとめられ、口縁端部に内傾する面をもつ。5世紀末頃の所産であろう(田辺編年TK23～TK47)。490は天井部と口縁部の境を示す稜線がなく、口縁端部を丸くおさめる。なお、天井部の2分の1を回転ヘラケズりする。6世紀末頃から7世紀初頭に相当しよう(田辺編年TK43～TK209)。

須恵器坏(491～498) 491～493は口縁部が高く、口縁端部は内傾する面をもつが、493は全体的に鈍い形態で、5世紀末頃から6世紀初頭(田辺編年TK47～MT15)。494～498は口縁部の立ち上がりが低く、端部は丸くおさめるもので、6世紀末頃から7世紀初頭(田辺編年TK209～TK217)。

499は須恵器高坏脚部。透しがなくゆるやかに外反し、脚端部は丸くおさめる。外面にカキ目調整を施し、5世紀末頃か。500・501は須恵器短頸壺蓋である。500は天井部が丸く、口縁部は外反気味で内傾する面をもっており、6世紀初頭か。502は須恵器提瓶の把手。503は須恵器こね鉢の底部である。

土師器(504～508) 504は皿で、口縁端部内面に沈線がめぐる。505は坏。506～508は把手である。507は甌の把手で、中央に幅の狭い凹みがある。胎土に角閃石を含んでおり、生駒西麓産の可能性が有る。周辺からは他にも生駒西麓産と考えられる甌片が出土している。



第89図 第Ⅵ包含層出土遺物

15. 第Ⅶ遺構面出土遺物

土坑40105 (509~512) 509・510は須恵器坏で、6世紀初頭の所産(田辺編年MT15)。511は須恵器高坏で、脚部に三方向に小穴を穿孔しており、6世紀初頭か。512は土師器把手付鉢の把手である。

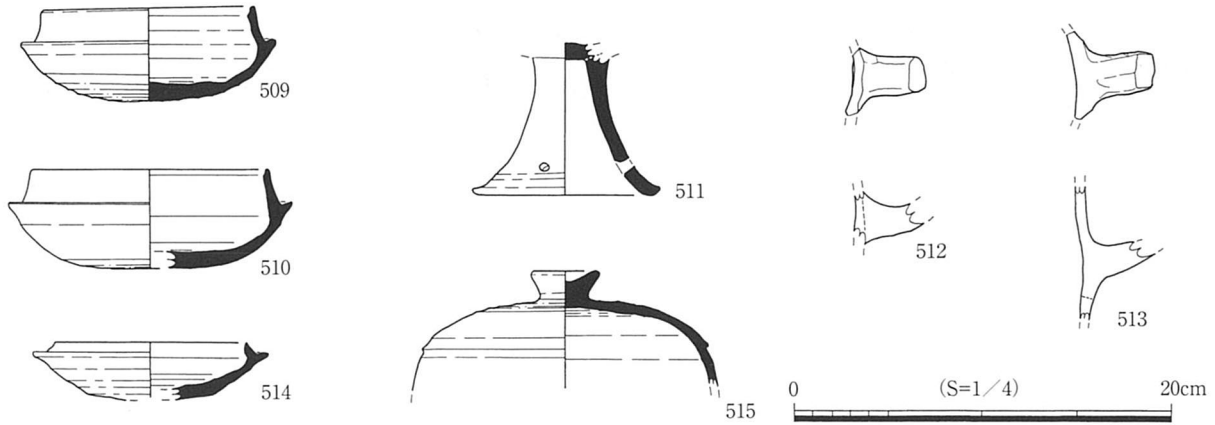
柱穴60436 (513) 土師器把手付鉢の把手である。

土坑80457 (515) 須恵器有蓋高坏の蓋か。口縁端部は欠損する。

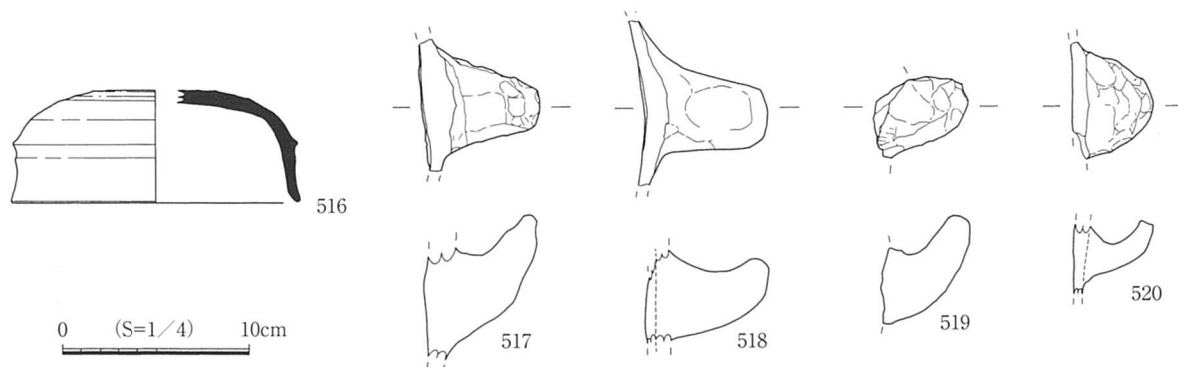
柱穴80320 (514) 須恵器坏である。口縁部の立ち上がりが低く、口径も小さい。焼成やや不良で底部のヘラケズリも粗く、7世紀初頭の所産であろう(田辺編年TK209~TK217)。

16. 第Ⅶ包含層出土遺物

516は須恵器坏蓋である。天井部と口縁部の境の稜ははっきりしているが、口縁端部がやや鈍いことから、6世紀初頭(田辺編年MT15)。517~520は土師器の把手である。



第90図 第Ⅶ遺構面出土遺物



第91図 第Ⅶ包含層出土遺物

17. 側溝出土遺物

瓦器 (521~525) 和泉型瓦器塚である。521~523は内面に密、外面にも粗いヘラミガキを施し、断面逆台形の高台がつく。12世紀前半に相当する (尾上編年Ⅱ期)。523は口縁部下半外面に、524は底部見込み部外面にヘラ記号がある。522は口径に対する器高が低く、高台をつける場所もやや内側に寄っており、特徴的であることから、丹波など別地域からの搬入品とも考えられる。

土師器 (526~530) 皿である。口縁部の形態より、12世紀の所産と思われる。529は口縁部を2段凹みナデし、端部をつまみあげる。530は10世紀初頭の塚か (平安京Ⅱ期中段階)。

土師質土器 (533) 鍋。受け口状の口縁部をなし、口縁端部は肥厚し面をもつ。在地産か。

国産陶器 (531・532・534) 531・532は古瀬戸である。531は尊式花瓶の口縁部で14世紀後半 (花瓶Ⅲ類・古瀬戸中期)、532は袴型香炉と呼ばれるもので、15世紀前半の所産である (古瀬戸編年後期Ⅲ期)。541は常滑焼大甕で、口縁部がN字状に屈曲する。14世紀の所産である。

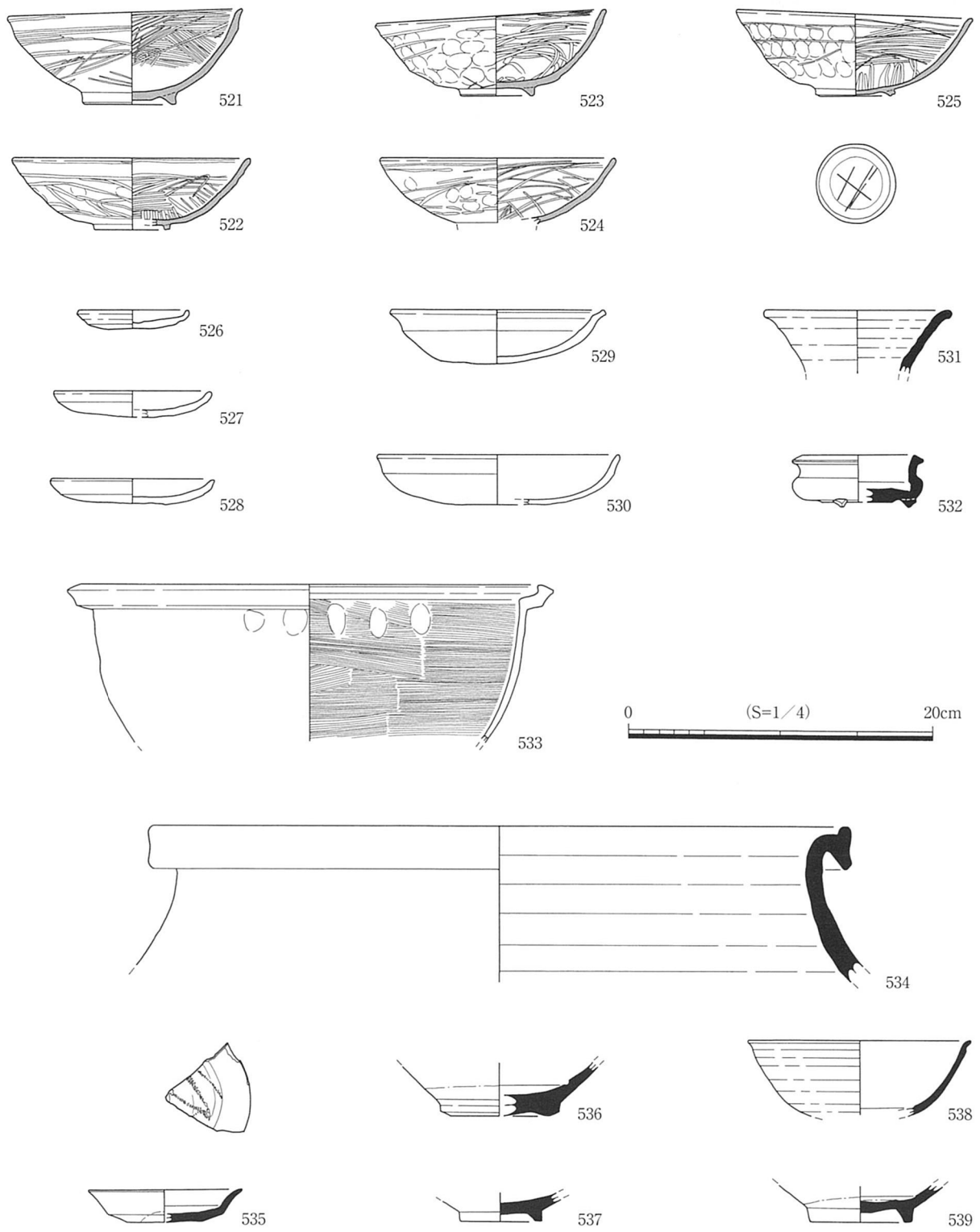
輸入磁器 (535~539) 535は青磁、536~539は白磁である。535は同安窯系青磁皿で、時期は12世紀に属する (山本分類ⅢI - 1 b類)。536は白磁碗で、丸みを帯びた体部で、口縁部は外反する。内面見込み部は段をもつ。537・538は碗底部で、539は内面見込み部の釉を蛇の目状に搔取る。

18. その他の土器

図化していないが、重要と思われる遺物である。写真図版で掲載した。

白磁 (巻頭図版4 - 630・631) 器壁が薄く黄白色の施釉 (山本分類碗Ⅱ類)。11世紀から12世紀前半。

製塩土器 (図版38 - 634・635) 製塩土器は8 D・9 Dトレンチで出土した。薄手で外面にタタキを施



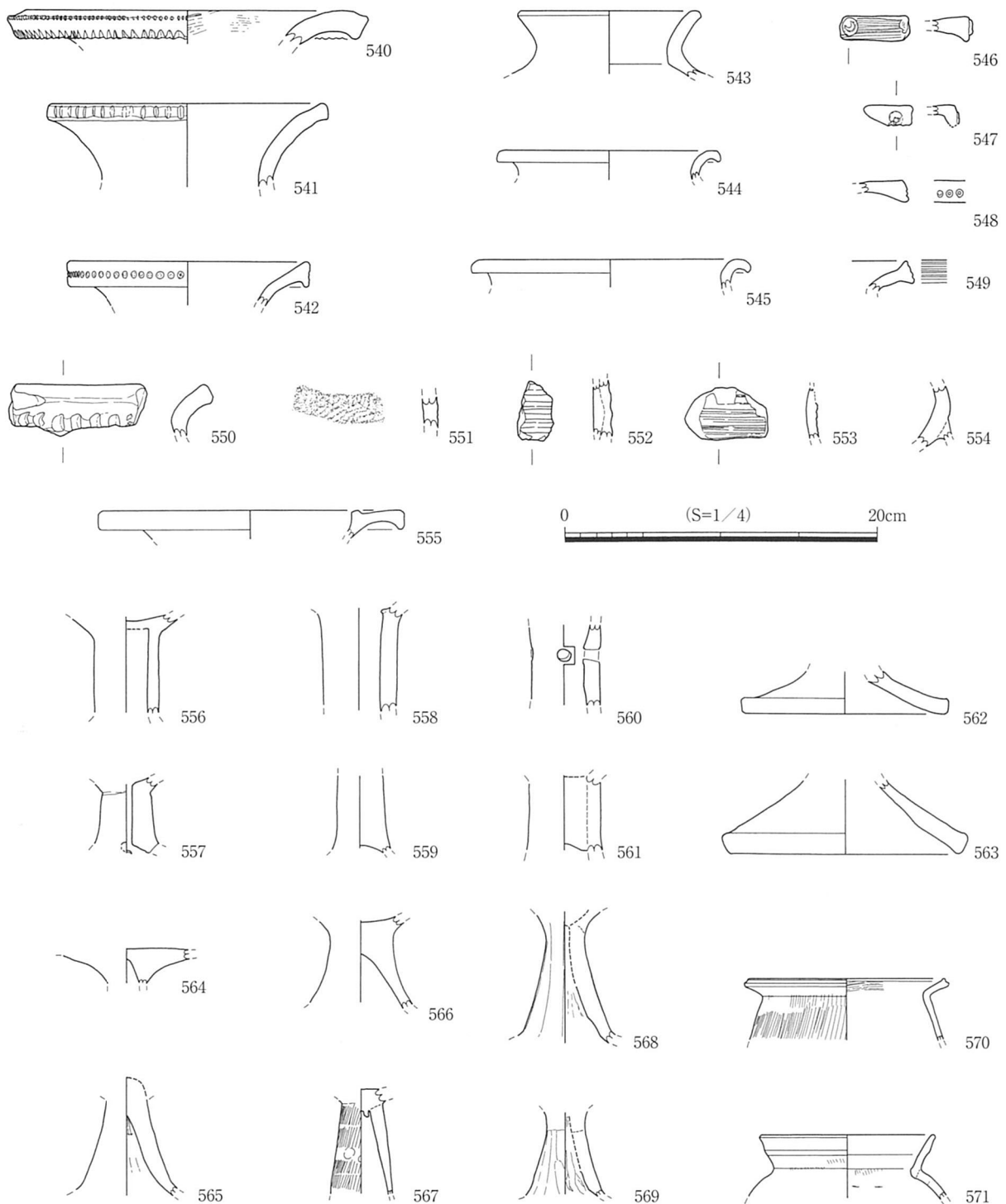
第92図 側溝出土遺物

した634は古墳時代、厚手で内面に布目痕が残る635は古代の所産であろう。

緑釉陶器（図版38-636）緑釉陶器は合計4点出土しており、いずれも京都産である。636は1 D トレンチ第IV-3 包含層から出土したもので、平高台がついており、9世紀末頃（平安京Ⅱ期古段階）に相当する。他の3点も同時期のものと思われる。

また、韓式系土器と思われる平底鉢細片が出土したが図化できなかった。

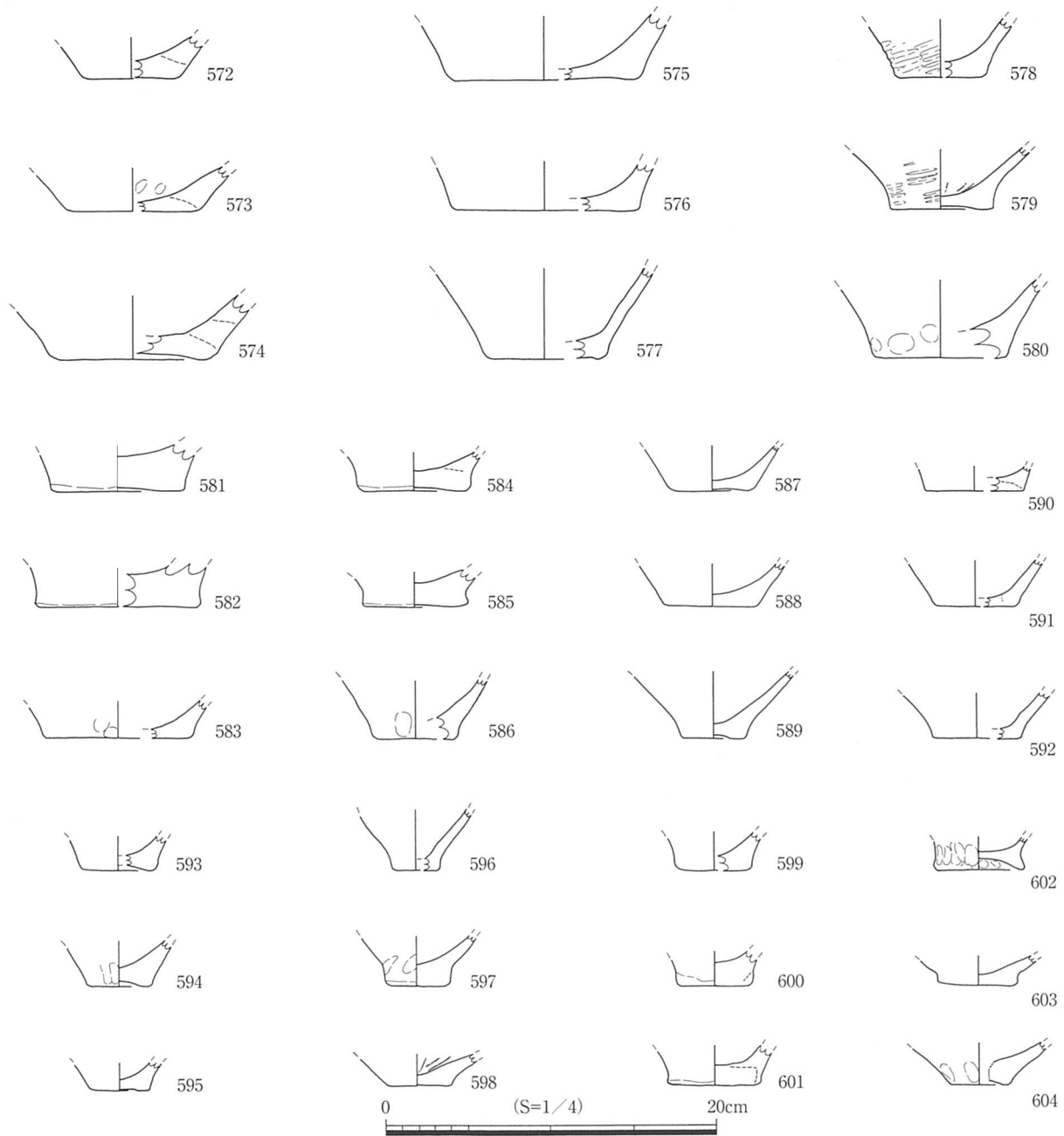
19. 弥生土器



第93図 弥生土器（1）

弥生土器はコンテナ2箱近く出土した。主に8Dトレンチ第Ⅶ遺構面から出土したが、遺構は検出できなかつた。出土地点に関係なく、実測可能なものすべてを実測・掲載した。壺・甕・高坏・甑がある。中期後半が主体をなすと考えられ、庄内式併行期から布留式と思われる甕・高坏も数点出土した。

壺（540～549）口縁部が多い。刻み目をもつもの（540・541）、円形浮文がつくもの（546・547）、竹管文（542・548）や凹線をめぐらすものがあり、中期後半から後期の所産であろう。544・545は口縁部が短く外反する。



第94図 弥生土器（2）

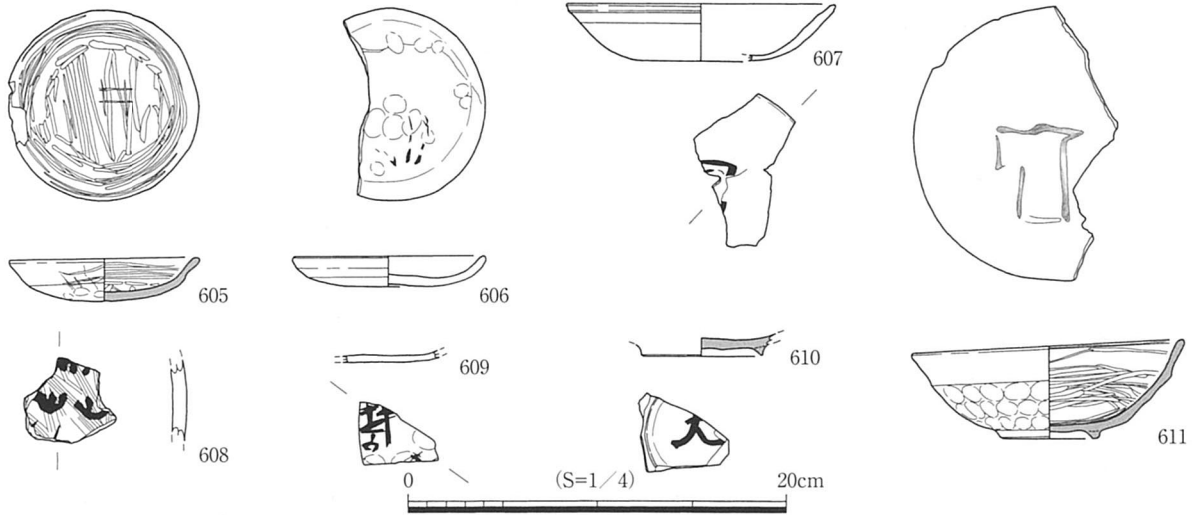
甕（550・570・571）550は頸部に指頭圧痕突帯文をめぐらせた甕で、中期後半。570は外面ハケメで、口縁端部をややつまみあげ、凹線文をめぐらす。西摂周辺からの搬入品であろう。中期後半。571は布留式の甕か。

体部片（551～554）551は矢羽状のスタンプ文がついた壺の体部である。赤褐色を呈し、胎土も石英など1mm以下の砂粒を含んでおり、他の出土遺物とは異なる。西摂、播磨からの搬入品で中期後半の所産であろう。552・553は凹線文を施す。554は手焙形土器あるいは近江系鉢の体部と思われる。

高坏（555～569）555は水平口縁をもつ高坏で、口縁端部を下方に少し拡張させる。中期後半。558は円筒形の脚柱部で生駒西麓産の搬入土器である。560は4方向に丸く穿孔する。557～561は中実の脚柱部で後期後半から末頃。562・563は脚裾部のみ残存し、端面をつくる。564～569は庄内式併行期から布留式期か。

底部（572～604）すべて甕・壺類の底部である。578・579は右上がりのタタキがみとめられたが、他の土器の表面については磨耗しており、調整は不明瞭である。604は甑である。602は鉢か。

20. 墨書土器



第95図 墨書土器（1）

墨書土器は8点確認した。なお、墨書の判読については水野正好氏にご教示いただいた。

605は溝100104から出土した。瓦器皿で内面に「井」の刻書がある。この瓦器皿は口縁部と見込み部の内面にヘラミガキを施すもので、12世紀後半か。口縁部外面下半にも「卍」のヘラ記号がある。

606は第Ⅳ-1 包含層から出土した12世紀後半の土師器皿、607は土師器坏Aで、文字は解読できなかった。溝80147出土。

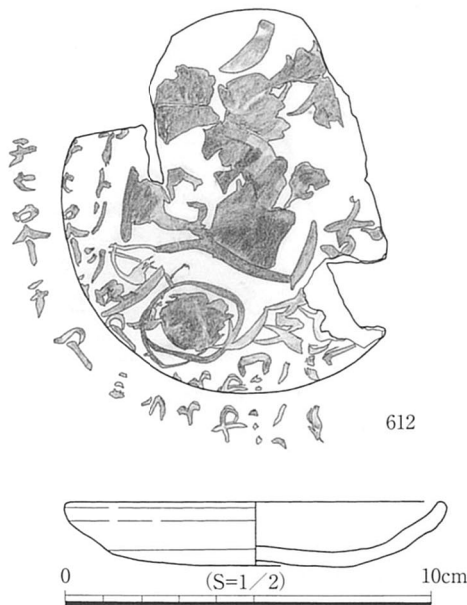
608はハケを施した土師器体部片に墨書がみられるが解読不明。側溝から出土。

609は溝80305から出土した。土師器皿あるいは坏の底部縁辺付近に「封」の墨書があり、「封」か。共伴遺物から10世紀前半から中頃の所産と考えられる。

610は13世紀の瓦器碗底部で「大」。第Ⅳ-1 包含層出土。

611は瓦器碗の見込み部内面に墨書がみとめられた。瓦器碗は和泉型で外面のヘラミガキは省略され、内面にやや密なヘラミガキを施し、しっかりした高台がつくことから12世紀後半の所産であろう。墨書は右袖と考える部分は無理があるが、襟とみられる部分の厚みや、左袖の表現が着物のようである。側溝出土。

612は605と同じ溝100104から出土した。土師器皿で、口縁部を2段凹みナデする12世紀中頃のものである。底部外面と底部縁辺に墨書があった。中央の2文字とそれを取り囲む字は墨で塗りつぶされており、中央の之繞と右下部分の「皮」がやっと読み取れた程度である。しかし中央の2文字は、上の「田」の輪郭、下の之繞から「鬼道〔通カ〕」と読み、周りの6文字も運筆の様子からすべて「皮」とした。古代・中世の「鬼」は第1画目のはらいを書かないため、「鬼」の上にある「ノ」は天



第96図 墨書土器（2）

地の方向を示すものか。また縁辺部に記された文字は「…日トリヲ〔シカ〕ロ／チヒロ个チ日〔アカ〕ツ〔イカ〕ラカヤツ〔イカ〕ハム□〔カカ〕…」と読み、まじないにまつわる短歌であろう。

今回出土した墨書土器のうち、605・609・611・612は、墨書の内容から祭祀的な意味をもつものと考えられる。当遺跡からは平安時代の人形代、鎌倉時代の「蘇民将来札」といった特筆すべき遺物もあるため、これらの墨書土器について、ここで簡単に触れておく。

609は、人形代出土遺構と同時期に流れていたとされる平安時代（10世紀前半から中頃）の溝から出土した。「封」にはものをとじこめる、結びの印などの意味があるが、実際に墨書土器でこの文字が書かれているものは少ない。一例として高槻市嶋上郡衙跡の井戸から出土した土師器杯を挙げておく。報告書の記載より10世紀初頭の土師器の底部内面に5行にわたって「中央（央）土公水神王」「西方土公水神王」「東方土公水神王」「南方土公水神王」「北方土公水神王」とあり、これを取り囲むように「封」が12字並べて墨書されていた。この土師器はさらに「天座大神王」「十二神王」と墨書された同一の法量の土師器と合口にしており、神々を封じ込めて井戸が枯れないように祈念する祭祀と考えられている¹⁾。

605は同じ12世紀前半の溝、612も出土地点からみて同じ遺構に含まれる可能性があり、この溝からは底部穿孔した土師器皿も出土していることから特異な性格をもつ溝であると考えられる。

まず605の「井」の刻書であるが、「井」は墨書が亀井北遺跡・水込遺跡で、刻書が錦織南遺跡で出土しているが、いずれも古代の所産で、瓦器に刻書する例は大阪府内ではみられない²⁾。なお「井」は道教における悪霊のはらいと願意成就の符号「井」の略号とする考えもある³⁾。

612は、水野氏のご教示によると「鬼の道切り」を意味するものと考えられる。延喜式では道饗祭として、4種類の動物の皮（猪・熊・鹿・牛）を道の辻などに置くことで、疫神がはいつてくるのを妨げようとするまつりが記載されている。悪神を封じこめようとしたのであろう。しかし、「鬼」を墨書する行為は、中世の呪符木簡などの例を除いてほとんどない⁴⁾。したがって、“まじなひ”の意味を復元できても、この墨書土器自体がもつ意味や、文字を墨で塗りつぶした行為の目的など、今後解明すべき点は多い。また、縁辺部にそって書かれている文字はこのまじないに関係する短歌と考えられるが、解読不可能であった。

611はこの墨書については、筆者がみたところ、瓦器碗の内面に着物と思われる墨書がある。この瓦器碗は、瓦器碗に墨書すること、内面に墨書すること、着物のように見えることといった点で特異であり、類例はみられない。この着物の表現は右袖の表現は十分ではないが、襟と考える部分がわずかに厚みをもって表現されており、着物に見える。このような表現は民俗例でみられるような紙製の人形代の表現にも似ているようである。このような絵を黒色の瓦器碗内面に墨書する意味を考えると興味深い。

以上、平安時代と鎌倉時代に、溝あるいはその周辺で墨書土器・木製品を用いた祭祀をおこなっていたことがうかがえる。しかし、出土した墨書土器は類例が少ないものばかりで、考古学的資料からこれらの意味を検討するには限界がある。なお、後章で文献学的・民俗学的な観点を踏まえ、木製品と合わせて玉櫛遺跡から出土した祭祀的遺物について一文を掲載した。別途参照していただきたい。

註

1 橋本久和『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』高槻市教育委員会 1981

2 駒井正明、陣内暢子、本間元樹、松田留美「資料編」『小阪合遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター 2000

3 平川 南「“古代人の死”と墨書土器」『国立歴史民族博物館研究報告』第68集 国立歴史民俗博物館 1996

4 山形県俵田遺跡では、4体の人物像と右図のような墨書がある8世紀の土師器甕が出土している。（『古代の祈り－祓いの顔－』奈良宮歴史博物館 1990より抜粋）

21. 銭貨・土製品・金属製品・石製品

銭貨（639～642）いずれも完形で裏文字はない。639は唐銭で開元通寶（初鑄621年）。第0包含層出土。640は皇朝銭で乾元大寶（初鑄958年）。第Ⅲ包含層出土。641は第Ⅱ遺構面土坑90032出土の北宋銭で皇宋通寶（初鑄1038年）。642は北宋銭で熙寧元寶（初鑄1068年）。第0包含層から出土した。

不明土製品（643～645）643は第Ⅵ-1包含層から出土し、奈良時代以前の所産か。きのこのような形状で中心を穿孔する。紡錘車の可能性もあるが、用途を明確にさせる痕跡はみられない。644は側溝から出土。五弁の花形で、5つの穿孔がある。蓮花の中実を模しているようにもみえ、密教系の仏具あるいは香炉の蓋と考えられるが、煤は付着していない。645は土錘か。第Ⅳ-3遺構面柱穴70020出土。

炉壁（646）自然流路30019から出土した。大きき約7.0×6.6cmで外面は剥離してしまっているが、厚さはもっとも厚いところで約3cm残存する。内面には黒色ガラス質が付着しているところと、スラグ質が付着しているところがある。黒色ガラス質付着部分には、ところどころに酸化鉄が付着しており、鉄を溶解したことがうかがえる。また、直径1～8mmの気泡がある。外面側は酸化しており、粉痕や小石がみとめられることから、混和材として木片などを利用していたか。鍛冶関連遺物は他に羽口片（図版38-637）と鉄滓（図版38-638）が出土した。

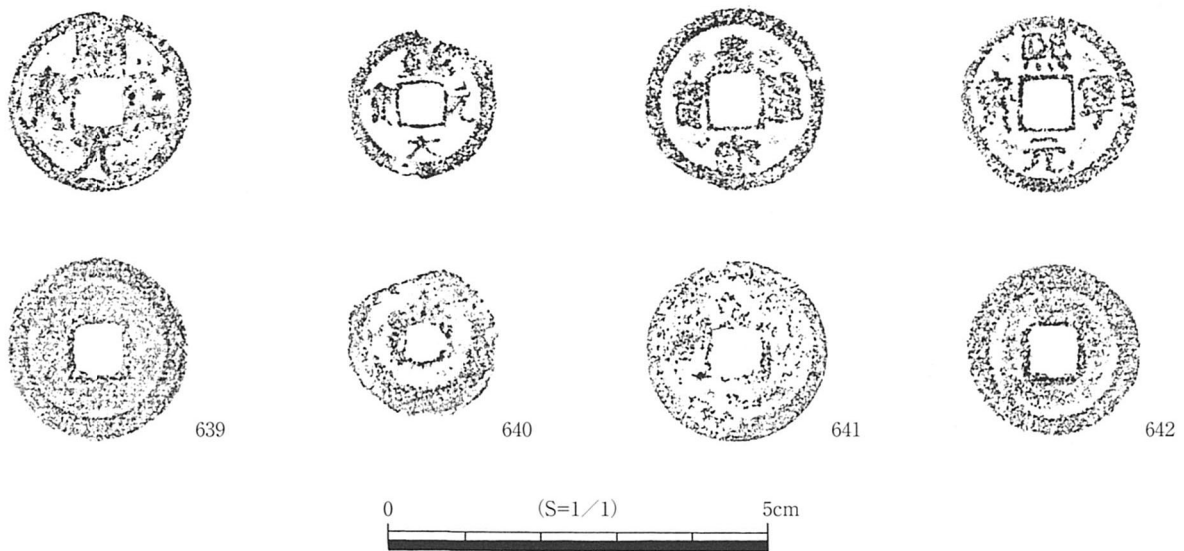
不明金属製品（647）半円状の青銅製品で断面菱形。中世の仏具である可能性がある。なお、蛍光X線分析の結果を後章につけた。第Ⅳ-1包含層出土。

金属製農具（648～650）648・649は鎌で第Ⅱ遺構面溝80147出土。622は持ち手の柄が残っており、金属製の留め具で留められていた。623は先のみが残存である。表面に木片がついていた痕跡がある。また先は鉤状になっている。624は馬鍬の先である。第Ⅳ-2包含層出土。

金属製武器（651）雁股鎌で第Ⅳ-3包含層出土。

石庖丁（652・653）652は粘板岩系のホルンフェルス製で、2つの穿孔は両面より開ける。柱穴40130出土。653は側溝から出土した。やや熱変成を受けた黒色粘板岩製で形態より石庖丁とした。

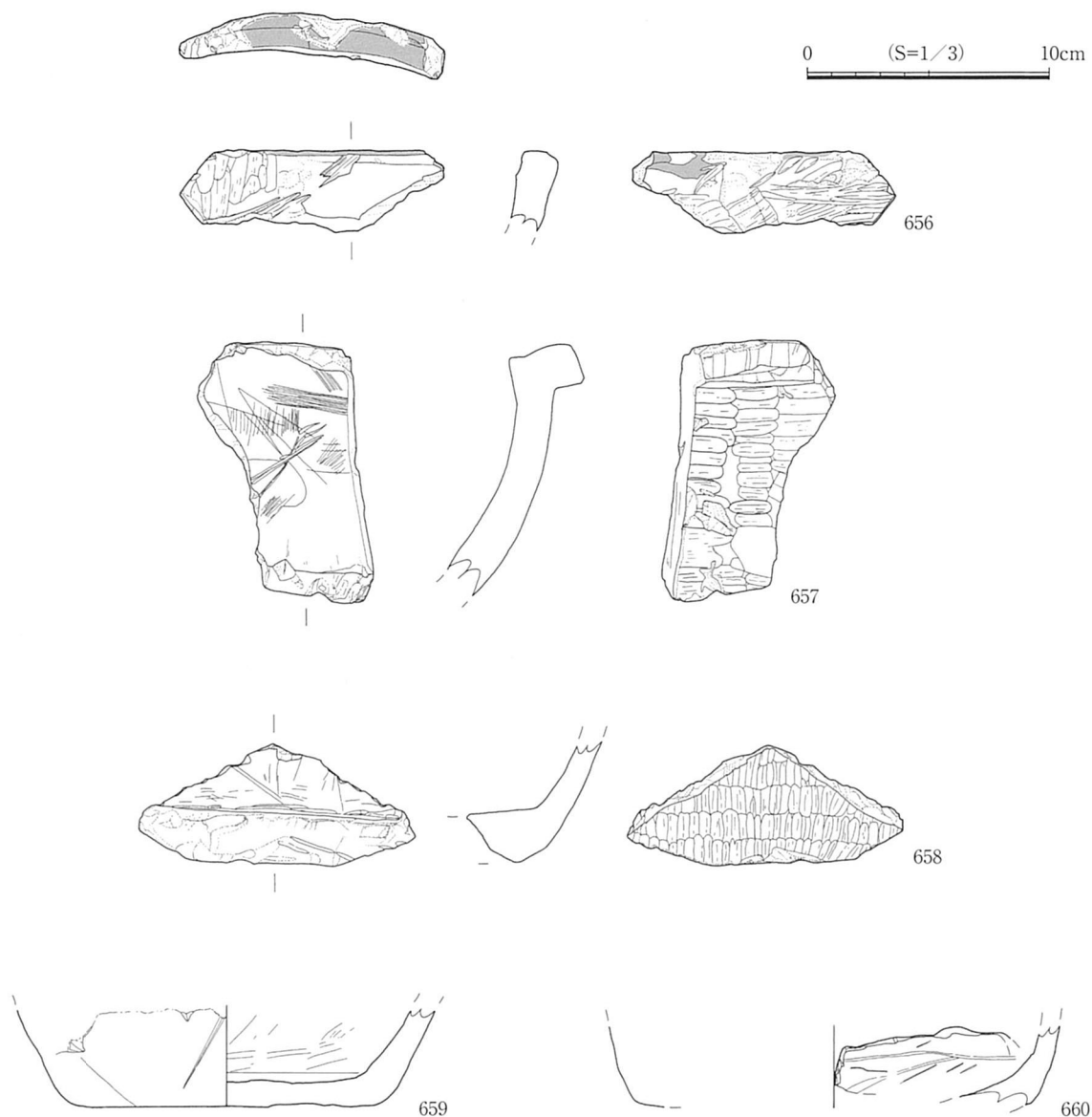
硯（654・655）654は第Ⅳ-3遺構面溝70023より出土。粘板岩製の方形硯で、海の周りに墨が付着する。12・13世紀以降にみられる形態である。655は第Ⅱ包含層出土。ホルンフェルス製（泥岩系）の四葉形石硯で、ほぼ完形である。13世紀前半。



第97図 銭貨



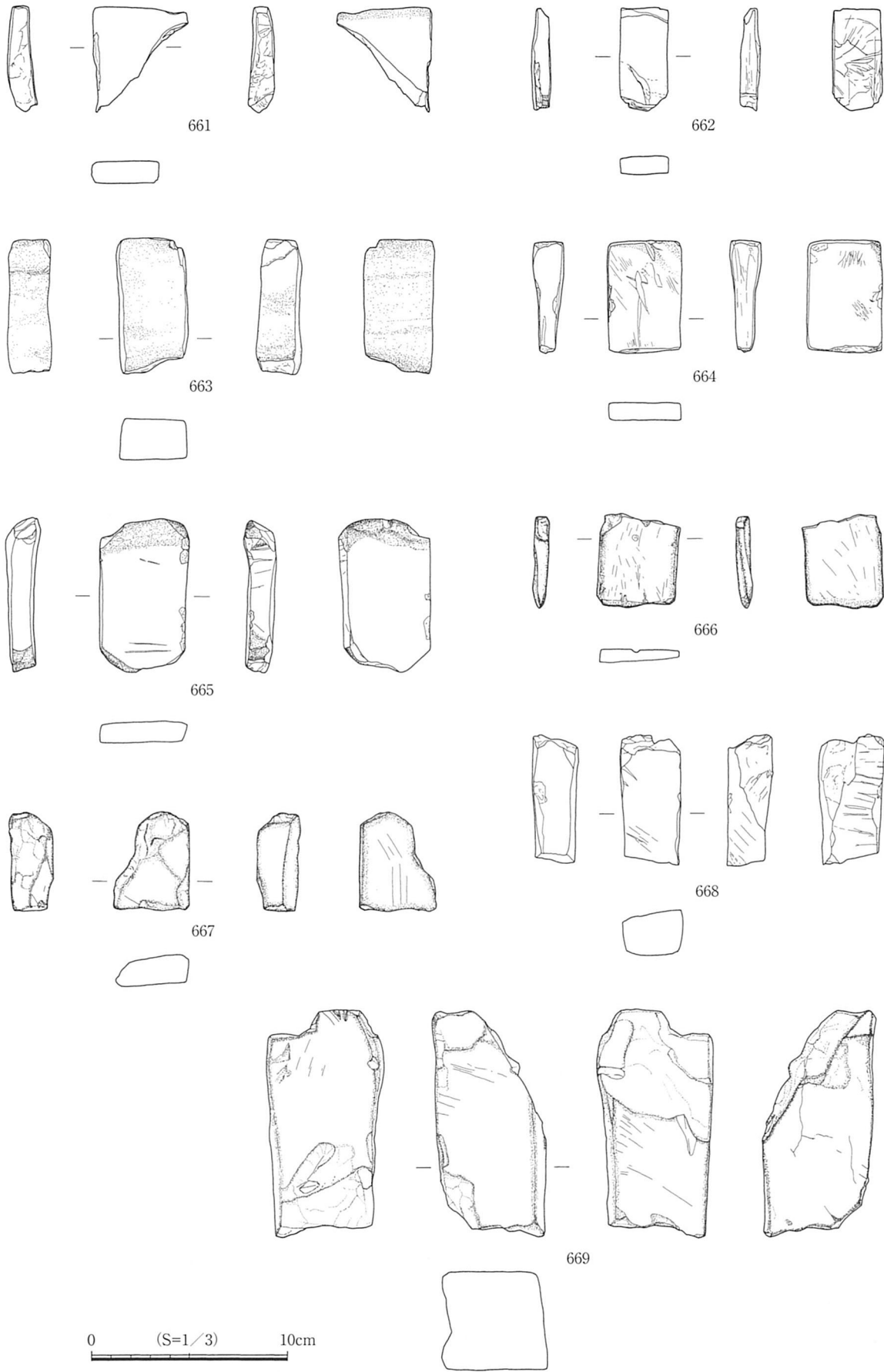
第98図 土製品・金属製品・石製品



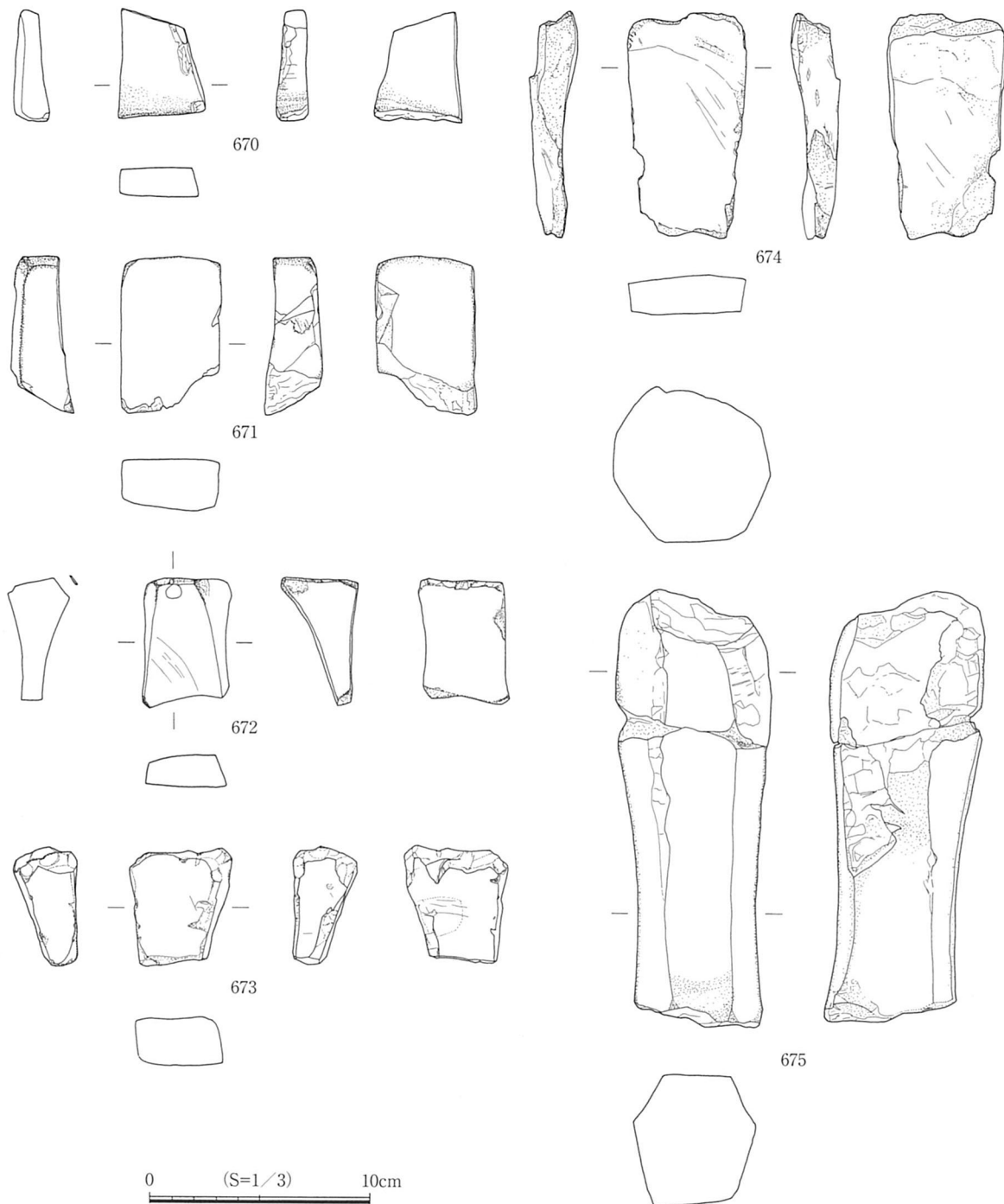
第99図 滑石製品

滑石製石鍋（656～660）滑石製石鍋は小破片も含め12点出土した。切込みや擦痕があり、石鍋から二次加工品を作る途中段階のものばかりである。656は口縁部分で上端には炭化物が付着。切断面を一部研磨し、内面には上下から斜め方向に切込みがはいる。外面は粗く削られており、鏝を取ったのであろう。上端には区画を示すような線が刻まれる。第Ⅱ包含層出土。657は体部で、口縁部は欠損する。垂直方向に切断され、断面研磨する。鏝は残存状況から瘤状であったのだろう。外面は一定の単位で横方向のケズリをする。第Ⅱ包含層出土。658は底部で、内面に切込みが数条みられる。外面には縦方向のケズリが施されている。第Ⅲ-1遺構面土坑90062出土。659も底部。外面に切込みの痕跡がみられる。体部上半はすでに欠損しているが、この断面に切込みが数本残存し、上半は切取られる。第Ⅱ包含層出土。660も底部で外面に炭化物が付着し、断面に切込み・研磨の痕跡がみられる。第Ⅳ-1包含層出土。

滑石製石鍋は完形品が粟生間谷遺跡で出土し、加工品は周辺の遺跡でも出土しており、滑石製品・加工品の流通を考える上で興味深い。また、前回調査では二次加工品である温石が数点出土したが、今回報告したものは加工段階のものばかりである。加工作業を復元する手がかりとなろう。

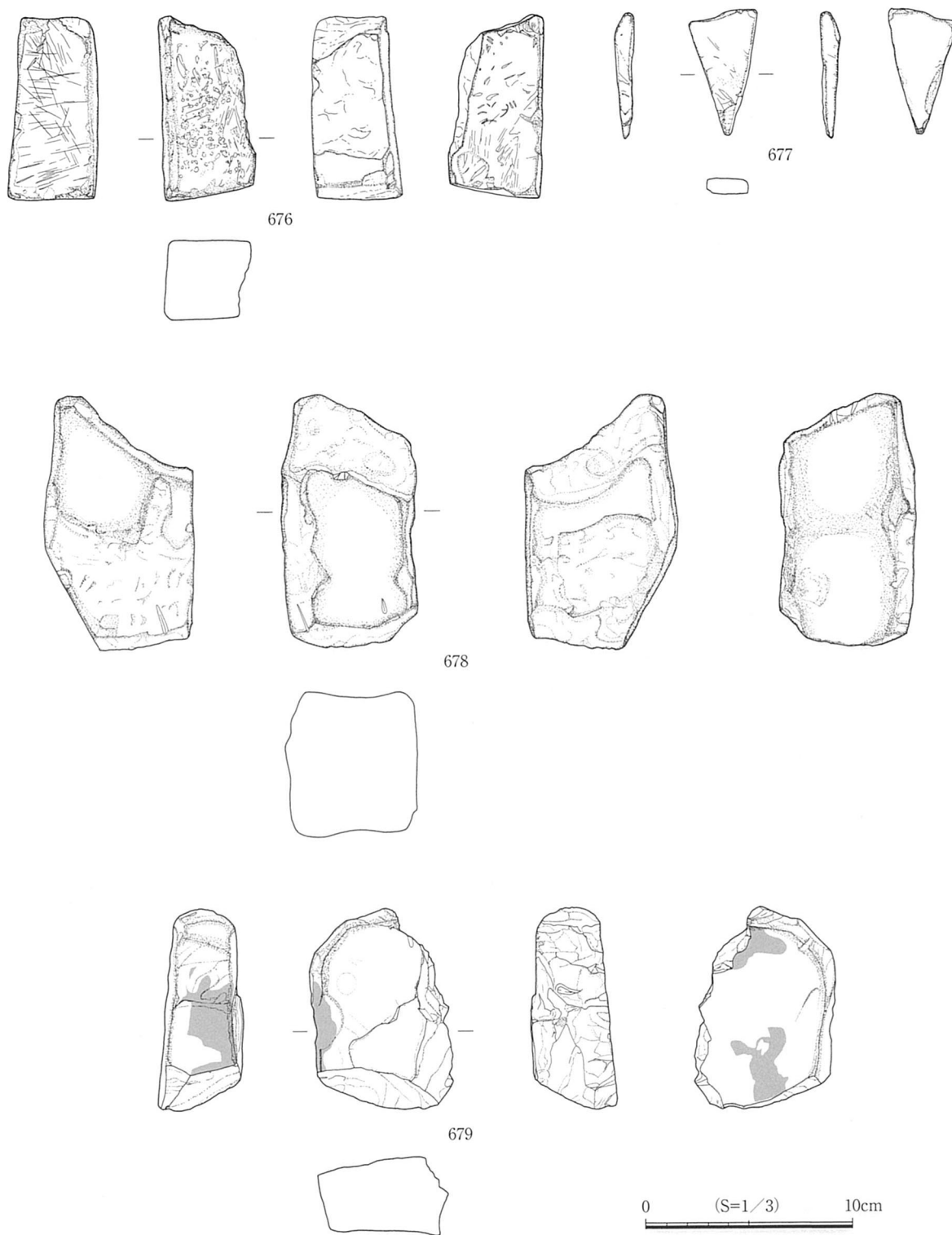


第100図 砥石 (1)



第101図 砥石（2）

砥石（661～678）22点出土した。661～675は熱水変質を受けた流紋岩質火山岩で、中砥。661・663・665・666・668・670・672は小口面以外4面とも使用する。661・663・665・670は角を利用しており、丸みを帯びる。666は穿孔途中の穴があり、672も穿孔があることから、ヒモを通して携帯していたのであろう。668の側面と666・673の角に切り傷があり、刃先を整えたのかもしれない。669は被熱が原因と思われるひび割れが生じる。675も流紋岩質系火山岩であるが、断面が六角形を呈しており、柱状節理の方向に割れたブロックを利用したものと考えられる。676は堆積岩系のホルンフェルス製で、青砥に類似。中砥として利用されたと考えられる。擦痕は1面のみにもみられる。流紋岩質の砥石よりも、表面



第102図 砥石（3）

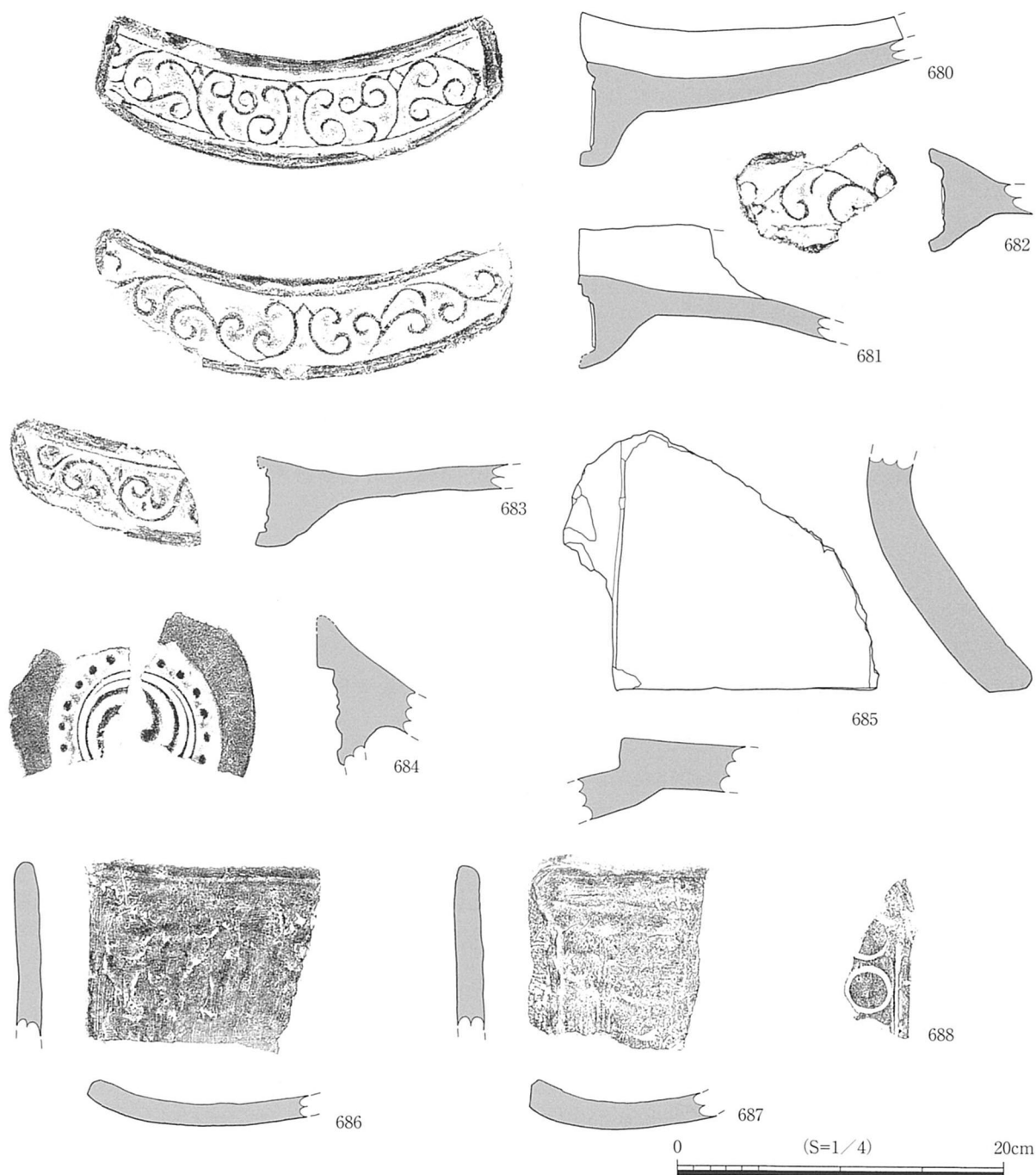
が非常になめらかである。被熱により割れたようで、断面などが変色している。677は粘板岩系の石材で、仕上げ砥か。678は砂岩製で、粗砥。679は被熱によって割れている。柱穴より出土し、根石か。

砥石は小形のものがあり、携帯して用いられたのであろう。675は丹後や山陰地方で取れる石材で、節理によって割れたものをそのまま加工せずに利用しており、流通方法などを考えるうえで興味深い資料である。出土地点より古代以前と中世以降のものに分けられたが、石材や形態差はみられなかった。

22. 瓦

今回の調査で出土した瓦は168点を数えるにすぎない。この中には明らかに近世瓦も含まれるであろうから、中世以前の瓦となるとさらに数は減少する。次に、この168点のトレンチ別出土点数を比較すると、1 Dトレンチ2点、2 Dトレンチ2点、3 Dトレンチ5点、4 D・5 Dトレンチ0点、6 Dトレンチ4点、7 Dトレンチ44点、8 Dトレンチ37点、9 Dトレンチ58点、10 Dトレンチ16点、となる。つまり瓦の出土地点は明らかに調査地東半、中でも7 D・9 Dトレンチに集中する。第103図に図示した瓦は残存状態の良好なものを選択したが、第Ⅲ遺構面自然流路30019出土の681を除くすべてが、調査地東半から出土したものである。

680は9 Dトレンチ第Ⅲ遺構面土坑90062から出土した均整唐草文軒平瓦である。中心飾りに背向する



第103図 瓦

「C」字を山形文で繋ぎ、唐草を左右に2回ずつ反転させる。本来圏線は四周していたであろうが、瓦当左右端を切り詰めたため、左右側縁の圏線はなくなり唐草が非対称に残る。瓦当右側縁に1箇所および下外区に3箇所の範傷がある。瓦当部を接合した部分には凹凸面とも強いヨコナデを施し、他の平瓦部分は縦方向のナデが残る。側縁は丸みをもたせた面取りをする。この1点のみ出土。681は3 Dトレンチ第Ⅲ遺構面自然流路30019上層から出土した均整唐草文軒平瓦。680同様中心飾りに背向する「C」字を山形文で繋ぎ、左右に唐草を2回反転させる。瓦当左右端を切り詰めており、右端には範傷がある。圏線が消失しており、唐草の形状も簡略化していることから、680より後出的要素が強い。平瓦部分には、凹面にネガティブな布目圧痕が、凸面にはポジティブな布目圧痕がそれぞれ付着する。前者は瓦当部成形時凸型台に被せてあった布が、後者は他の軒平瓦を重ねて置いた際に布目圧痕がついたのではないか。682は681と同範軒平瓦片。9 Dトレンチ第Ⅲ遺構面溝90144出土。他にもう1点出土。683は7 Dトレンチ第Ⅱ包含層から出土した均整唐草文軒平瓦片。中心飾りから派生した唐草が2回反転する部分の破片で、上外区にのみ圏線を施す。この1点のみ出土。いずれも須恵質焼成。

これら軒平瓦は、12世紀初頭国充制によって尊勝寺を建立する際に播磨系瓦屋から供給された製品。680は神出堂ノ前窯跡から出土する一方で、供給先である京都尊勝寺跡では下圏線を削り取った軒平瓦(232型式)とともに出土する。683は229 A型式と呼ばれるもので、左右端部および上圏線を削り取った製品(229 B型式)を、神出宮ノ裏窯跡・明石林崎三本松窯跡で生産していたことが確認されている。尊勝寺跡ではその2種とも出土する。681は231型式と呼ばれるもので、生産地を特定するにはいたっていないが、今回出土したようなほぼ完形品は初出という。

684は9 Dトレンチ第Ⅲ遺構面溝90144出土の鳥衾瓦片。瓦当部は内区に左卷三巴文を、圏線を挟んで外区に推定20個の珠文をめぐらせる。巴の尾は長く圏線に接しないが、巴の頭がやや肥大し外縁が低くて幅広であることから、先の軒平瓦に比べて時期は下り、室町時代の所産と考える。この1点のみ出土。瓦質に焼成。

685も9 Dトレンチ第Ⅲ遺構面溝90144から出土した雁振瓦片である。小破片のため時期を決めかねるが、684と同時期とみなしてもかまわない。瓦質に焼成。

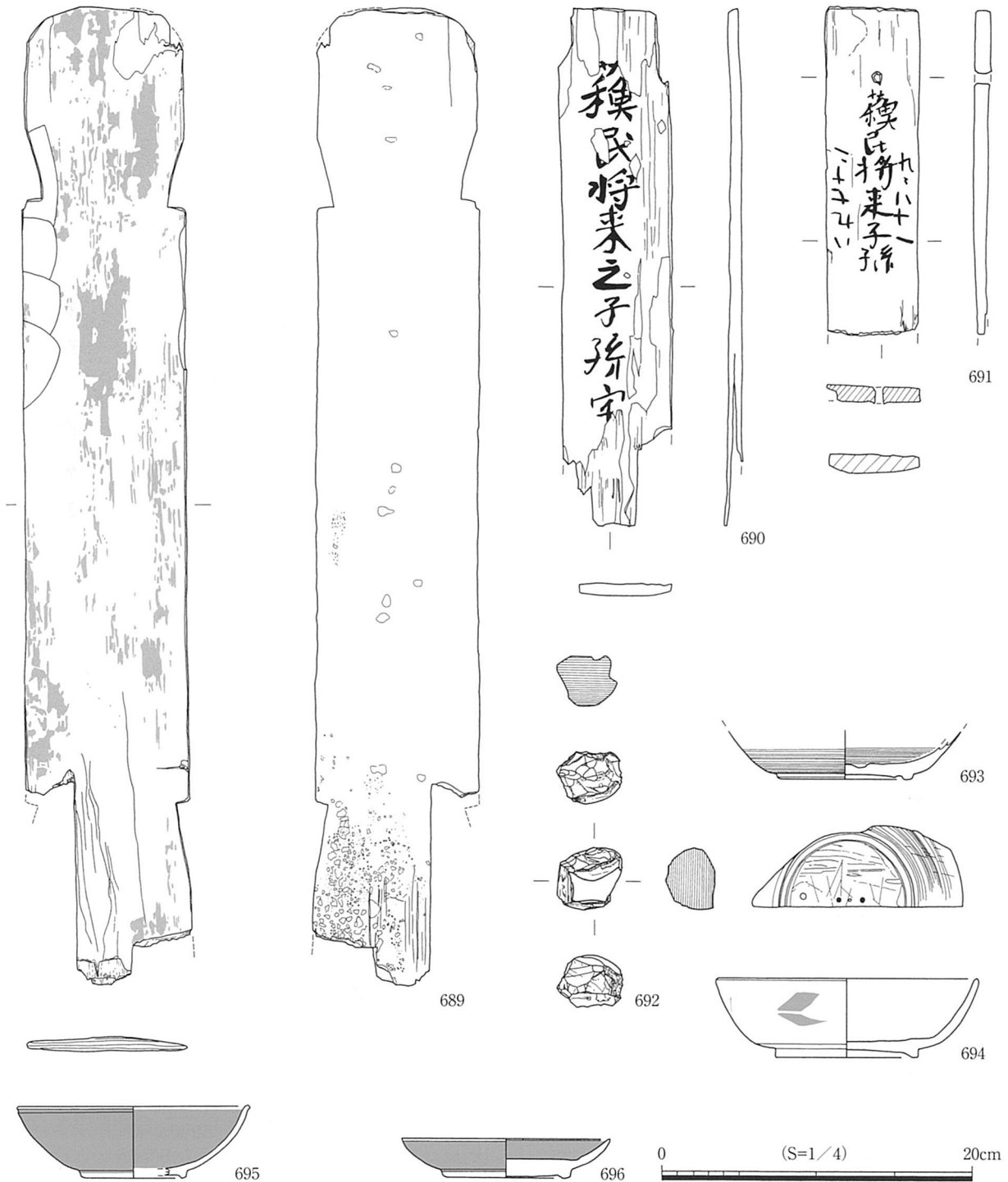
686・687は平瓦片である。686は9 Dトレンチ第Ⅲ遺構面土坑90062から出土したもので、凸面には成形時の叩き痕は一切なく比較的きれいにナデるが、粘土ヒモの継ぎ目跡が残る。凹面には横方向の凹凸とともに凸部分を中心に布目が付着する。狭端部は丸くナデ仕上げし、側縁はヘラケズリ。687は10 Dトレンチ第Ⅲ遺構面溝100041から出土したもので、686同様の調整痕が残るが、凹面に布目はない。ともに厚さ1.5cm前後と薄く、須恵質に焼成。

この2点の平瓦は、狭端部・側縁とも丸みをもたせて仕上げ、特に凹面側に粘土ヒモを巻き上げたかのような凹凸や粘土ヒモの継ぎ目のような痕跡が残るという播磨系瓦屋の特徴がある。686・687ともに凹型成形台に載せて側縁をヘラケズリし、粘土は凹面側にはみ出したままで放置する。ただ686は、布を敷いた凸型成形台に載せた際の布目が付着する。播磨系瓦屋の軒平瓦は、瓦当部裏面に溝を掘り込み平瓦を差し込んで、凹凸両面に粘土を補充するという技法で製作するので、軒平瓦製作工程で凹面に布目が付着することはない。それ以外の工程で凸型成形台にのせたのだろう。

688は3 Dトレンチ第Ⅲ遺構面自然流路30019から出土した鬼瓦の、外縁部分にめぐらされた珠文帯の一部分である。瓦質に焼成。

23. 木製品

689は1Dトレンチ第V遺構面溝10175の左岸肩部付近から出土した大形の人形代である。材質はヒノキ。残存長は63.0cmで下方を欠損する。頭部長12.5cm・頭部幅10.0cm・体部長50.5cm・体部幅10.4cmを測り、厚さは4mmである。顔などの墨書表現はみられない。A面には広範囲に黒色物質が付着し、全体に塗布されていた形跡を示す（網掛け部分）。肩部分の切り込みはややいかり肩を呈し、下方に腕もしくは腰部分のくびれがみられる。復元すると最小に見積もって80cm、最大に見積もれば1.5m前後になると思われ、「等身の人形」である。水辺の祭祀の一環で祓などに使われていた可能性が高い。時期は共伴する溝の遺物から10世紀前半から中頃のものであろう。



第104図 木製品 (1)

690は4 Dトレンチの第Ⅲ - 3 遺構面土坑40036から出土した呪符木簡（「蘇民将来」札）である。「蘇民将来之子孫宅」と墨書し、墨書部分は周囲の腐食から守られ浮き字状に残存する。下部欠損のため呪言が続く可能性がある。上端の形状は残存状況が悪く、左上方に切り込みと思しきくびれがみられるが、判断しかねる。共伴の瓦器から13世紀の所産と思われる。691は8 Dトレンチの第Ⅱ遺構面溝80147から出土した呪符木簡（「蘇民将来」札）である。「九々八十一」「蘇民将来子孫□」「八九七十二（逆字）」と3行にわたって墨書する。「蘇民将来子孫□」の上には径3 mm程度の釘孔があり、呪言を表にして打ちつけられていたであろう痕跡が残る。溝を人為的に埋めた際にもともに廃棄されたと考えられ、埋土からは多くの土器や木製品が出土した。これらの遺物から14世紀から15世紀の所産と思われる。

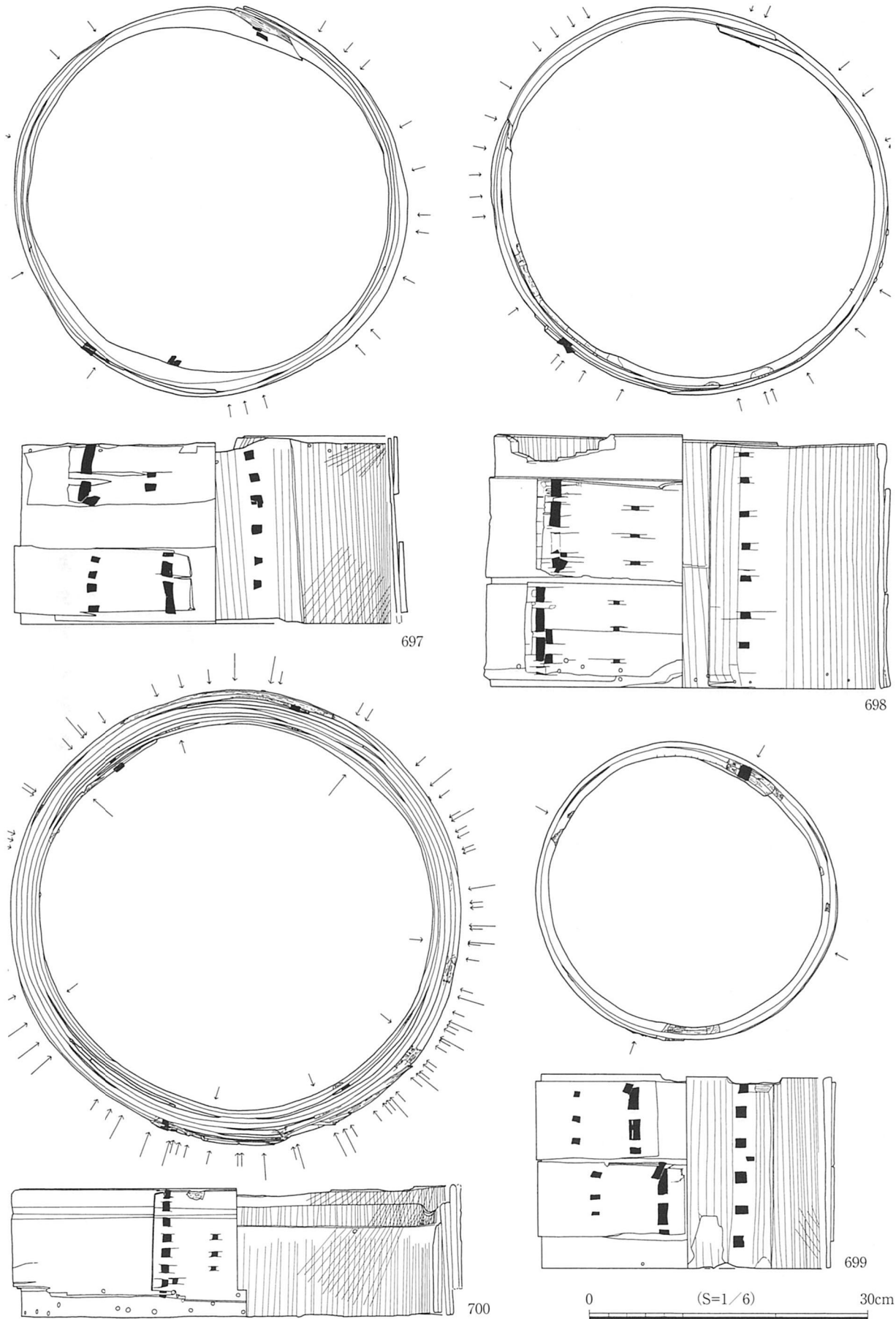
692は10 Dトレンチ第Ⅲ - 1 遺構面溝100104から出土した木球である。径4 cm程度の材を適当な長さに切断し、樹皮を捲り上端・下端を細かく加工し、球形に仕上げたもの。現在その2/3を欠損し本来の面を残さない。

693は8 Dトレンチ側溝から出土した木椀で口縁部を欠損する。底部内外面付近はロクロ挽きによる成形痕を残す。底部外面には、木釘が埋め込まれた貫通孔が2箇所（図中の黒丸部分）、その間に小さな非貫通孔が1箇所、高台付近に貫通孔が1箇所ある。これら貫通・非貫通孔の用途は不明。

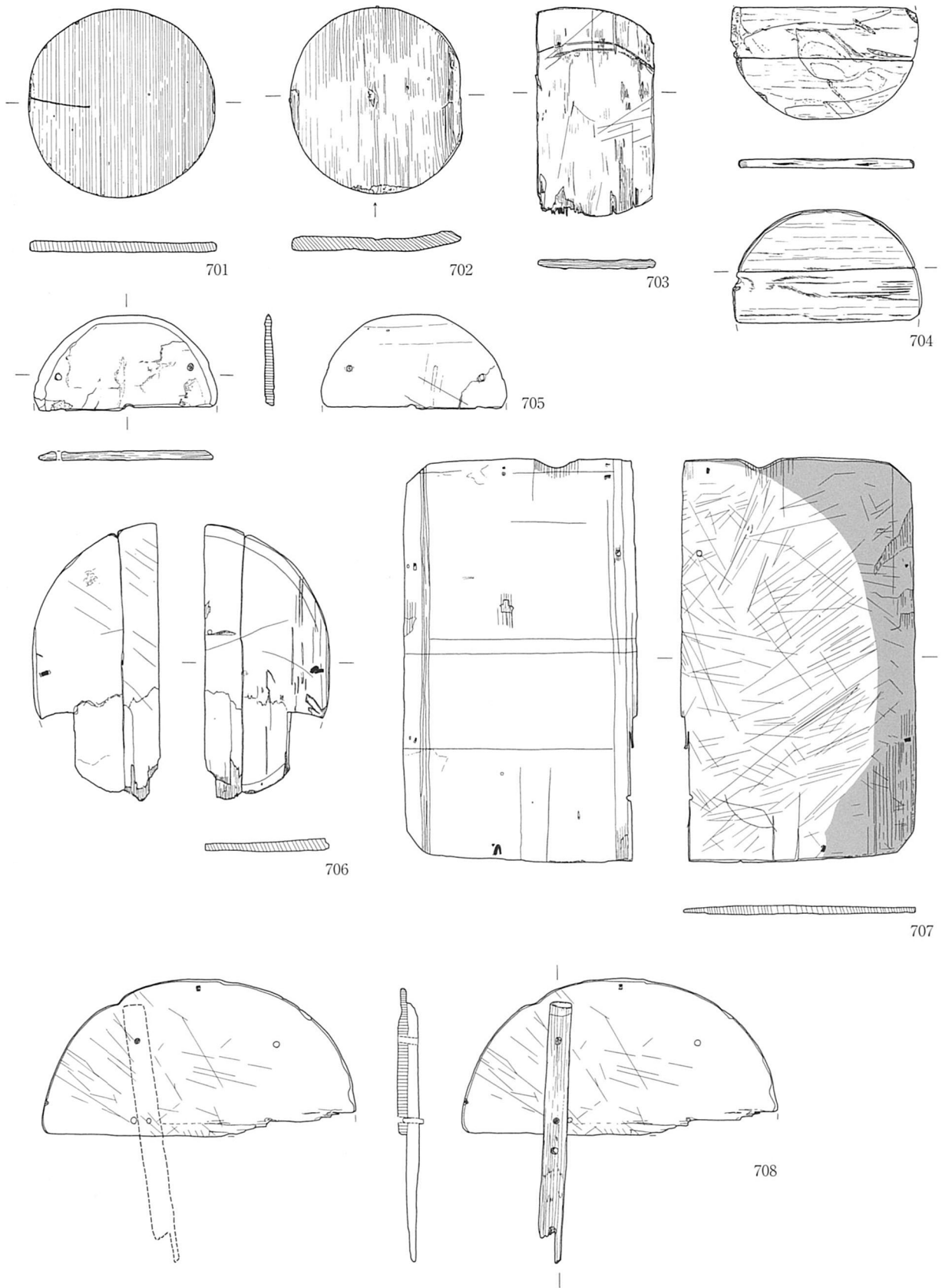
漆器椀は細片も含めると数個体分出土したが、図化可能な3点を提示した。694は3 Dトレンチ第Ⅲ - 1 遺構面自然流路30019から出土した。土圧のためやや変形する。高台部分を除く全面に黒漆を塗り、内外面に赤漆で葉を描く。695は8 Dトレンチ第Ⅱ遺構面溝80147から出土した漆器椀、696は8 Dトレンチ側溝から出土した漆器皿である。ともに口縁端部および高台端部にのみ黒漆を、その他の部分に赤漆を塗布する。共伴遺物から694は13世紀後半から14世紀前半、695は14世紀から15世紀の所産。

曲物は697~700の4点を図化した。平面図の矢印は釘孔の位置を示したが、700は大小2種類の釘孔があったので、それぞれを長短2種類の矢印で示した。このうち697~699は10 Dトレンチ西壁で検出した第Ⅲ - 1 遺構面井戸100103井筒として利用されたもので、上から697 ⇒ 698 ⇒ 699の順に積まれていた。いずれも帯を2段に巻く。よって最上段に積まれていた697は、上端付近の腐食が著しく、他の個体に比べて帯も含めて傷みが激しい。また図上で曲物上端に木釘孔を描いているように、この曲物のみ天地を逆にして据えてあった。700は7 Dトレンチ第Ⅲ - 1 遺構面で検出した井戸70034井筒である。この曲物は次に記すように、他に類例をみない特異な形態を呈する。まず直径49cmと大きいわりには、高さ14cmと低い。側板には、通常^{へぎいた}の側板を2枚重ねたものを図示した如く3重にする。重ねた側板の間にはごくまれに楔状の木片が挟まる。そのため通常の出土曲物のように脆くなく、非常に頑強である。底部には78箇所の釘孔（大：25本、小：53本）がある。

701~708は曲物の底板。701・702はともに径約13cmの底板で、柱に取った板材を素材とする。ともに8 Dトレンチ側溝出土。701の側面に釘孔はないが、702には1箇所釘孔が存在する（図中矢印部分）。703は10 Dトレンチ第Ⅲ - 1 遺構面溝100041出土の底板片。ブンマワシの跡らしき痕跡や刃物による傷跡が残る。704も同じく底板片であるが、本来1枚の板材だったものが折れたために、断面に楔状木製品を2箇所差し込んで補修する。8 Dトレンチ第Ⅱ遺構面溝80147出土。705は片面側の周囲を斜めに削り落とした底板片で、2箇所の釘孔（うち1箇所には木釘片残存）が残る。つまみを付けて、容器その他の蓋として転用したものであろうか。7 Dトレンチ第Ⅳ包含層出土。706は8 Dトレンチ側溝から出土したやや大形の底板片。側板を固定するための桜の樹皮が残る。外面には刃物による傷跡が、内面にはブンマワシによる跡が残る。707は8 Dトレンチ第Ⅱ遺構面溝80147出土の方形曲物の底板片。角を斜

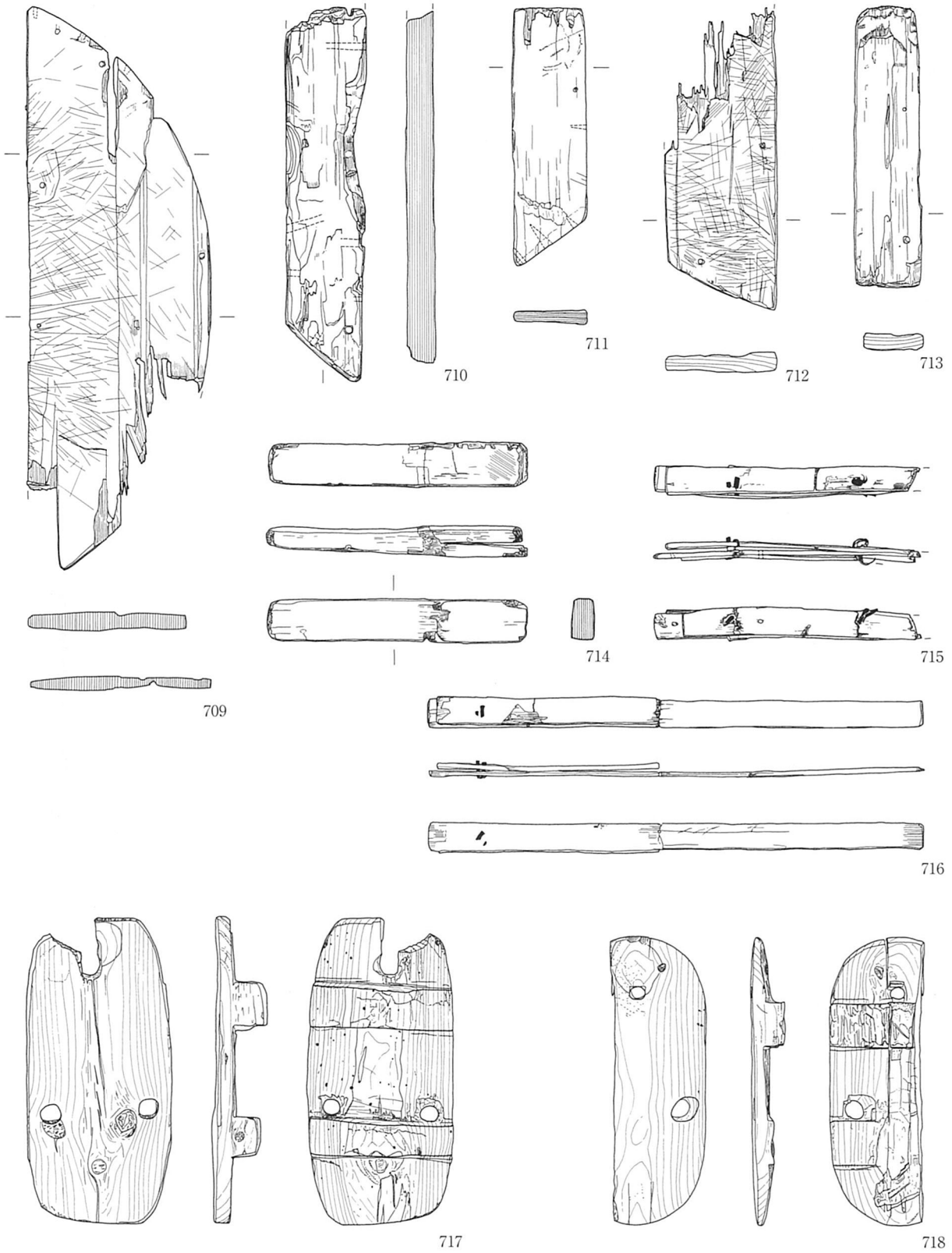


第105図 木製品 (2)



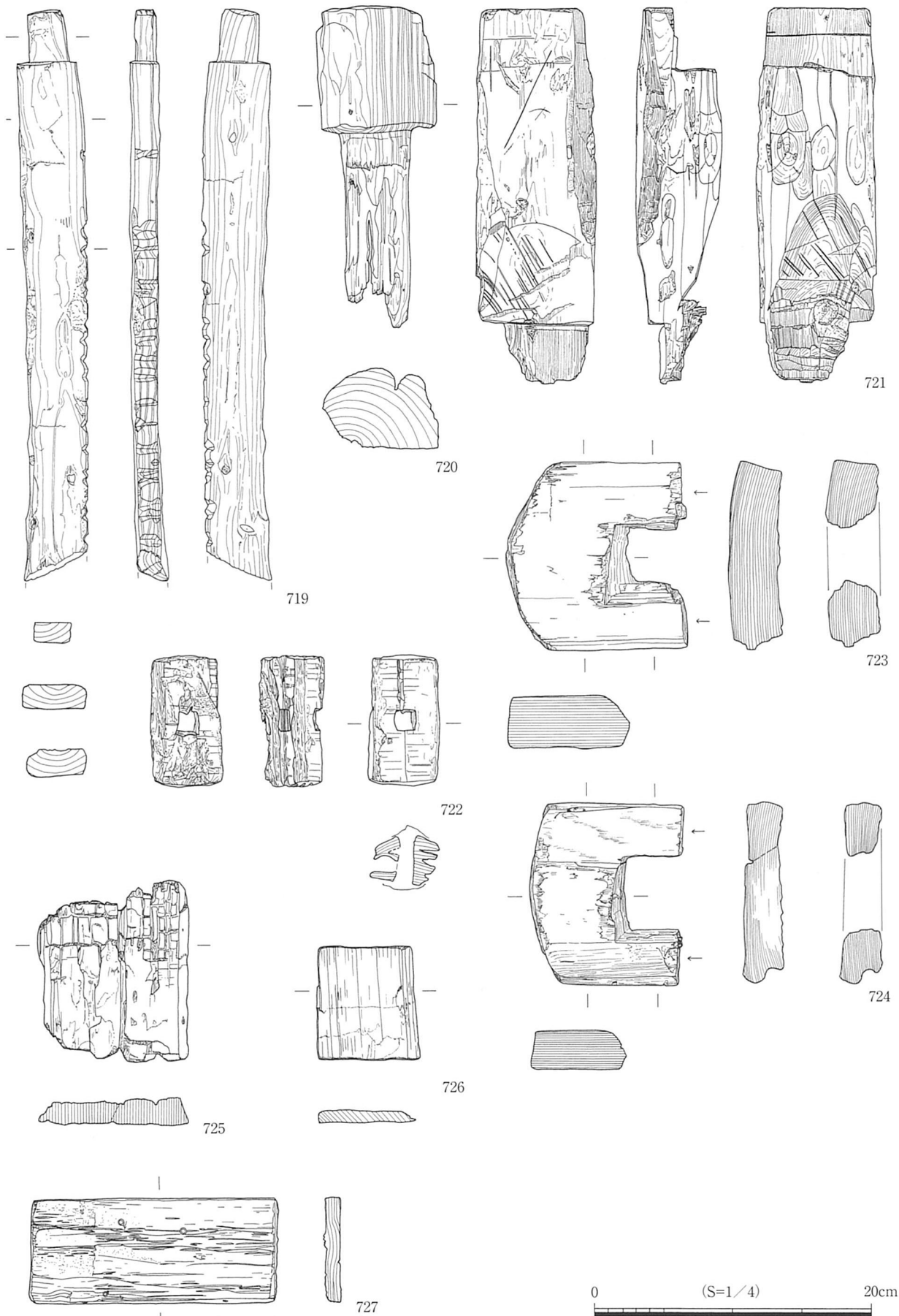
0 (S=1/4) 10cm

第106図 木製品(3)



0 (S=1/4) 20cm

第107図 木製品 (4)



第108図 木製品 (5)

めに切り落として丸みをもたせる。周囲には側板を固定するための孔が5箇所、うち3箇所には桜皮が残る。また欠損部付近に1箇所、欠損部にかかって1箇所の穿孔がある。補修用の孔か。内面はそうでもないが、外面には無数の刃物による傷跡があり、さらに半円形を呈した焦げ跡（図中網掛け部分）がみえる。曲物の底板としての機能を失った後、鍋・釜の蓋として転用されたい。708も側板を固定するための孔が残っていることから、本来は曲物の底板だったものがつまみを取り付けて他の容器の蓋に転用したもの。つまみは1箇所のみ残存。なお出土時つまみは右図のような状態であったが、器面には左図のような圧痕が明瞭に残る。凹凸面とも刃物による傷跡が残る。7 Dトレンチ第Ⅳ包含層出土。

709～712は大形の底板片。桶か何かの底板か。709は復原径63cmの底板片。周囲に3箇所、側面に2箇所、さらに破損面に沿って2箇所の釘孔がみえ、無数の刃物傷が残る。8 Dトレンチ第Ⅱ遺構面溝80147出土。710は厚さ2cmを測る厚手の底板片。破損したものか組合せ式かは不明であるが、断面には4箇所の釘孔を確認。断面の片側には抉ったような窪みがある。側面付近に釘孔あり。8 Dトレンチ側溝出土。711も710と同様断面に1箇所、側面に3箇所の釘孔あり。712には釘孔が2箇所あり、器面には無数の刃物傷を残す。8 Dトレンチ第Ⅱ遺構面溝80147出土。

713は長方形を呈した用途不明の板。片側の小口はすり減らしたように丸みをもつ。釘孔が1箇所残る。8 Dトレンチ側溝出土。

714は片側の小口から全体の1/3程度切り目をいれた木製品。用途不明。8 Dトレンチ第Ⅴ遺構面落込み80309出土。

715は3枚の幅1.8cm・厚さ3mmの板材を桜皮で2箇所固定したもの。716は2枚の板材を桜皮で1箇所固定したもの。ともに用途不明で、4 Dトレンチ第Ⅲ-3遺構面土坑40036出土。

717・718は下駄。ともに前孔はほぼ中央に、後孔は後歯より前に穿孔する。717は鼻緒部分の凹み具合からみて、左足用の下駄。後歯の消耗度が著しい。8 Dトレンチ第Ⅱ遺構面溝80147出土。718は8 Dトレンチ側溝から出土したもので、約1/2を欠損する。左足用。717と同様後歯の消耗が激しい。

719も溝80147出土の用途不明木製品。一方の端部を加工し、一側面に不規則な刻み目を施す。

720は9 Dトレンチ第Ⅲ-1遺構面土坑90062出土木製品。土坑北辺沿いに打設された杭の1本。建築部材の転用か。

721も同トレンチ第Ⅲ-1遺構面溝90144出土木製品。杭として先端を加工中、節のために加工をあきらめ、他に転用したと思しき製品。

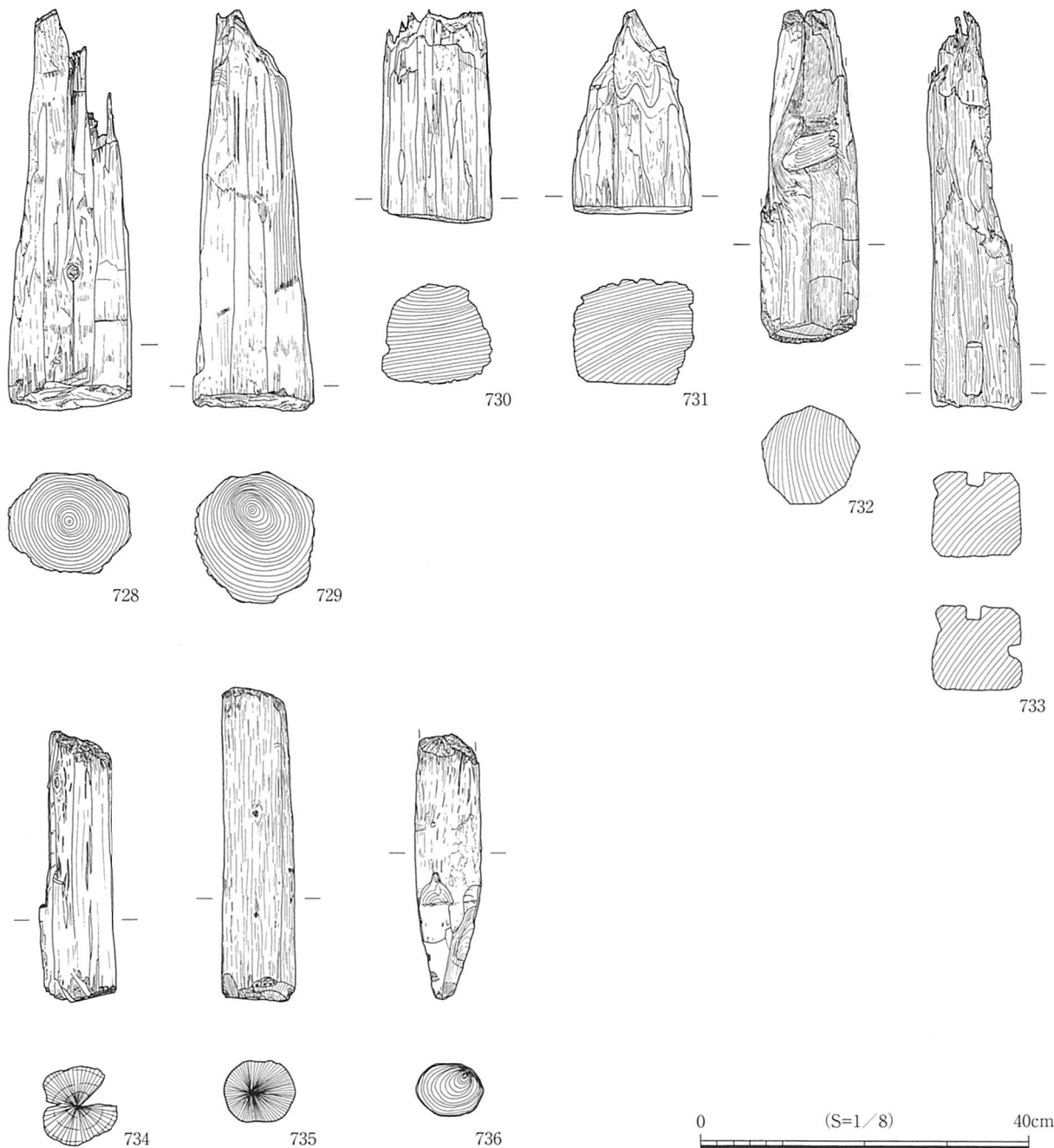
722は3 Dトレンチ第Ⅲ-1遺構面自然流路30019出土の木製品。中央に方形の穿孔がある。

723・724はともに10 Dトレンチ第Ⅳ包含層出土。2つが合わさった状態で出土したので当初は1個体かと思ったが、厚みや抉り部分の形状が異なり明らかに別個体である。前回調査においても類似品が多数出土している。今回の出土例は、①材の表裏から穴を削り抜いていること、②削り抜き部分の形状が一定しないこと、③図中矢印部分は鋭く切断されていることから判断すると、建築材の運搬の便を図るために縄掛用の穴を削り抜き、不要になれば切り落とす鼻縁であろう。

725は9 Dトレンチ第Ⅲ-1遺構面柱穴90071に、726は10 Dトレンチ第Ⅳ-1遺構面柱穴100089に、礎板として使用されていた板材。

727は7 Dトレンチ第Ⅲ-1遺構面溝70006出土板状木製品。釘孔は中央に3箇所、側面に1箇所ある。

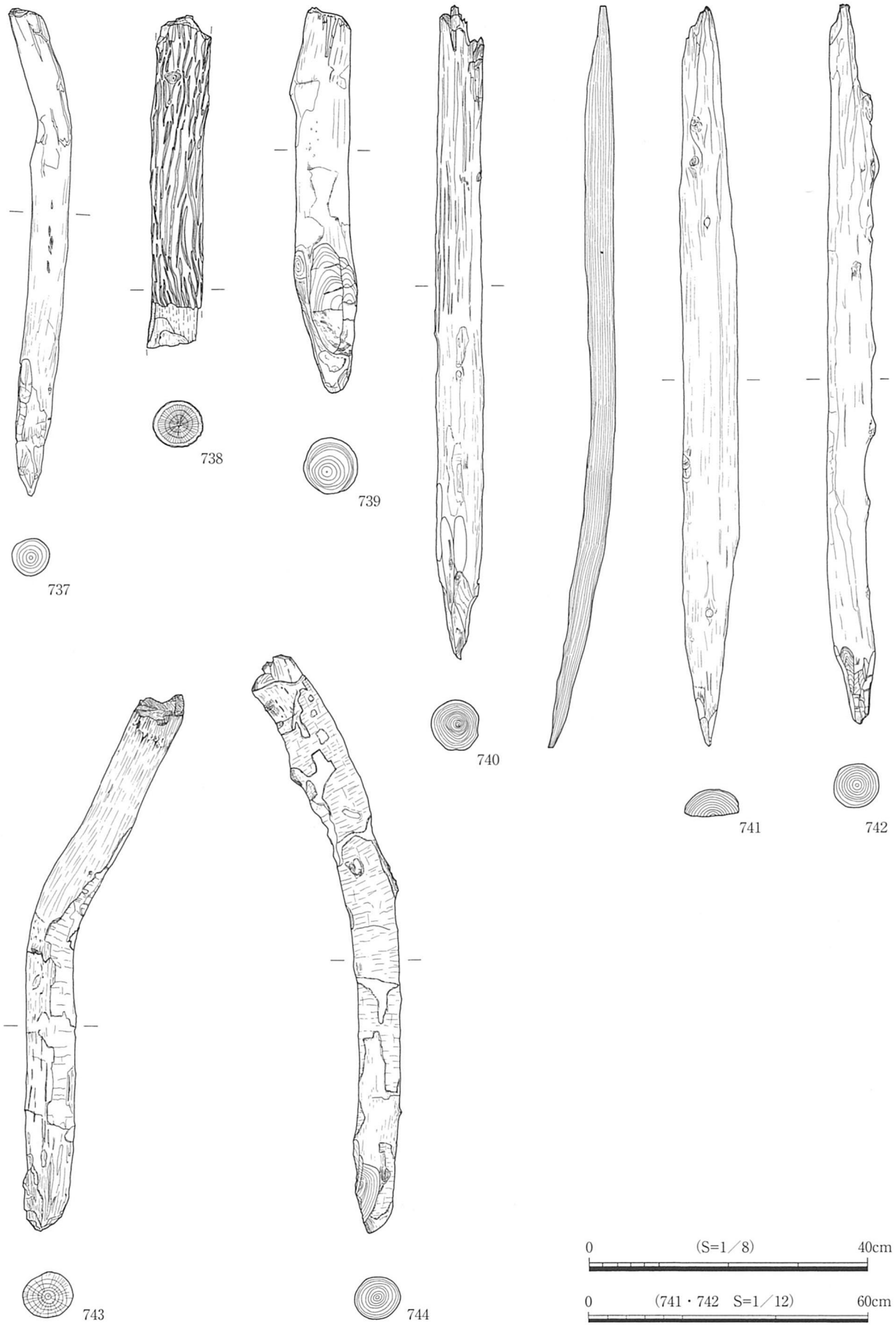
728～736は掘立柱建物・柱列出土の柱根。728は9 Dトレンチ第Ⅳ-3遺構面柱穴90178出土、729は同トレンチ第Ⅲ-1遺構面柱穴90070出土の柱根で、ともに材木を適当な太さに削り取ったもので、断



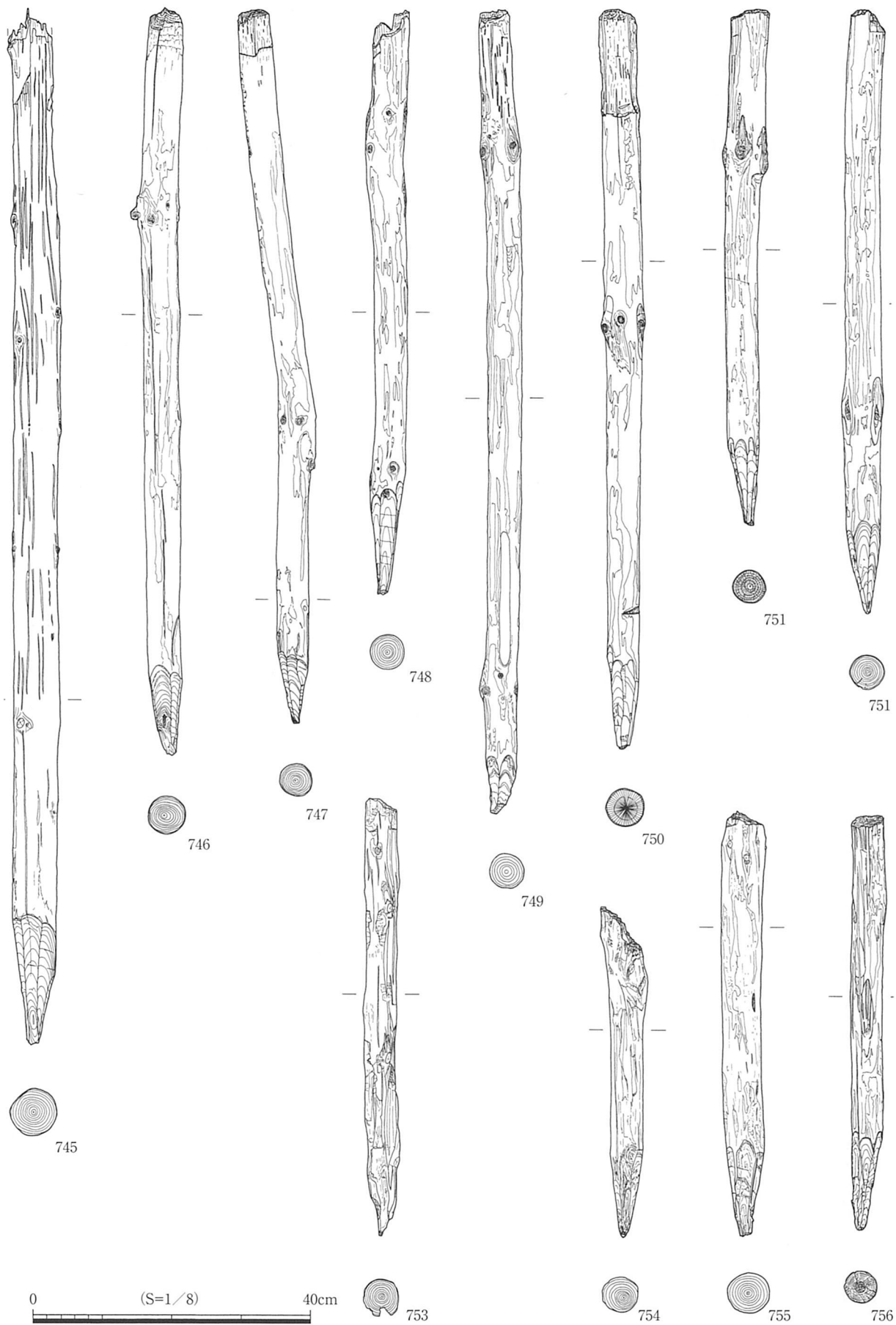
第109図 木製品(6)

面多角形。一方9 Dトレンチ第Ⅳ-1遺構面柱穴90176出土の730や柱穴90120出土の731は、みかん割りした素材を加工したもので、おおむね四角形を呈する。732は10Dトレンチ第Ⅲ-1遺構面柱穴100052出土柱根で、みかん割りした材を適度な太さに加工したもので、断面形は多角形である。733は建築部材を転用した柱材で、基部にホゾ孔が残る。同じく柱穴100079出土。続く3点は8 Dトレンチ第Ⅶ遺構面掘立柱建物80312を構成する柱穴から出土。鎌倉～室町時代の所産たる728～733に比べて著しく細い。734は柱穴80312、735は柱穴80317、736は柱穴80313出土。736は先端を尖らせ杭状を呈する。

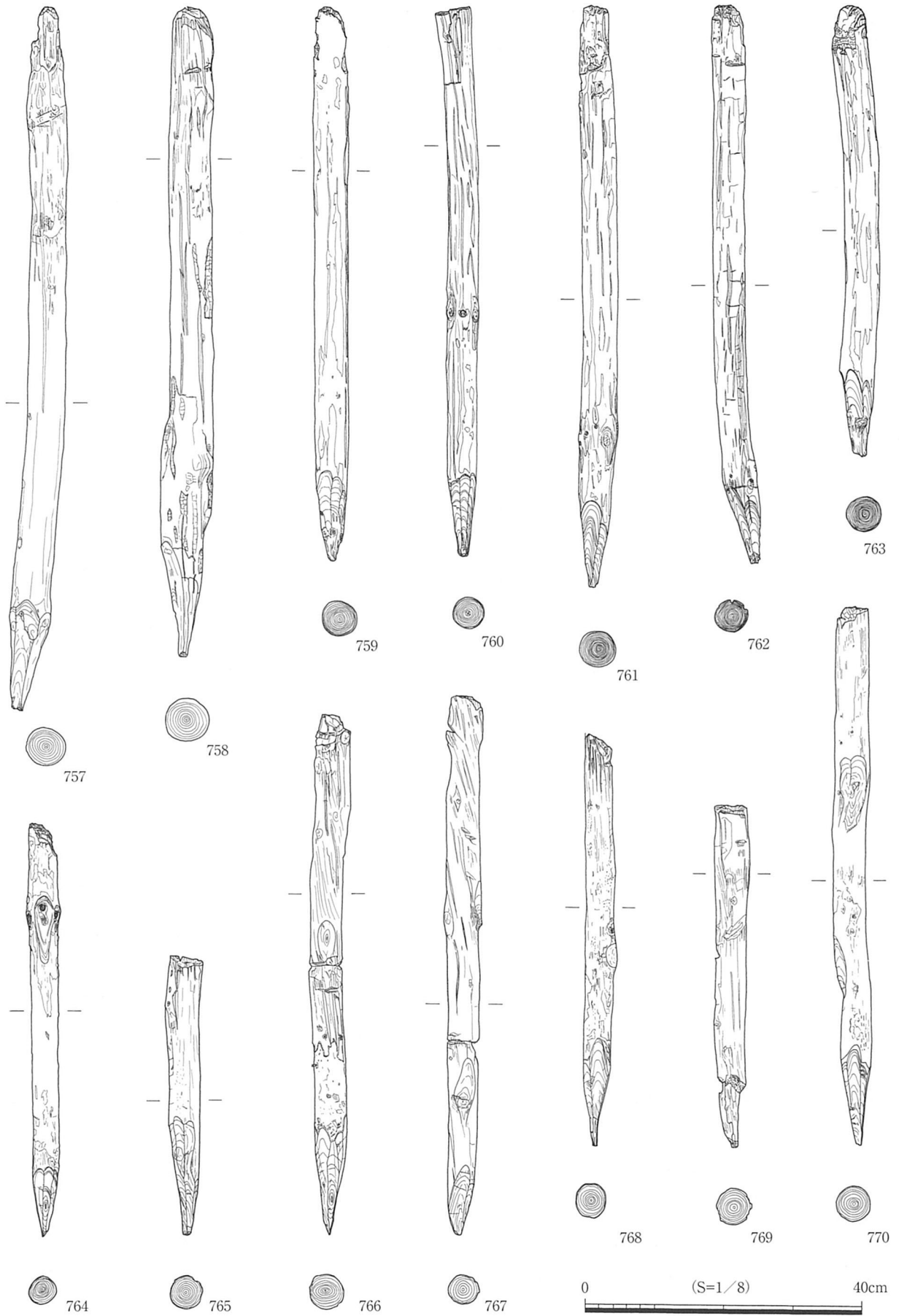
737～791は今回の調査で出土した木杭である。本来ならばすべてのデータを提示するところであるが、任意に抽出したものとどまった。737～744は3 Dトレンチ第Ⅱ遺構面溝30016で打設された木杭である。みかん割りした741以外は、すべて樹木の幹あるいは枝材の片側を尖らせる。ただし、尖らせた先端の形状は必ずしも一定しない。太さは特に長い741・742を除くと径5～8 cm程度である。745～778は



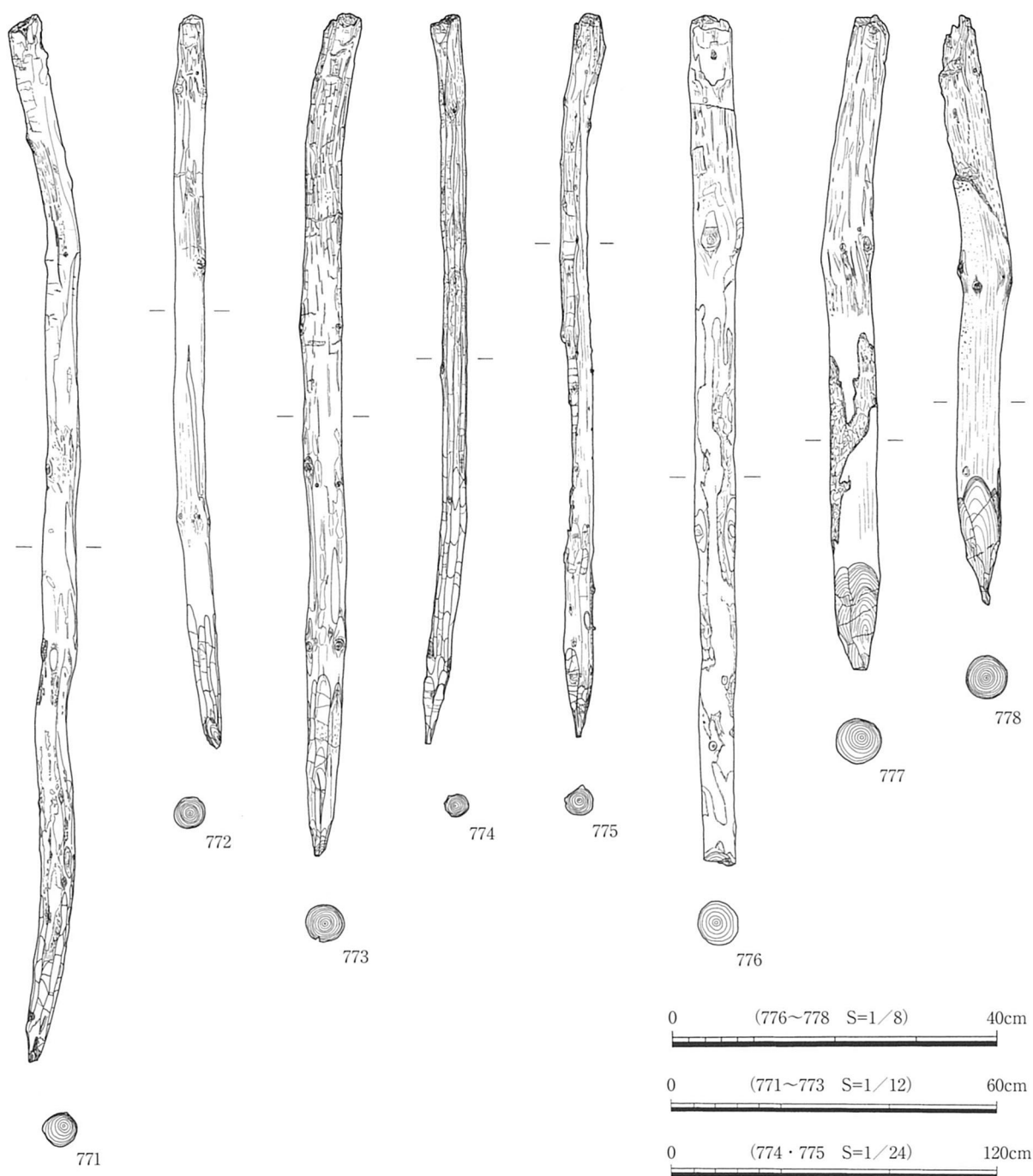
第110図 木製品 (7)



第111図 木製品 (8)

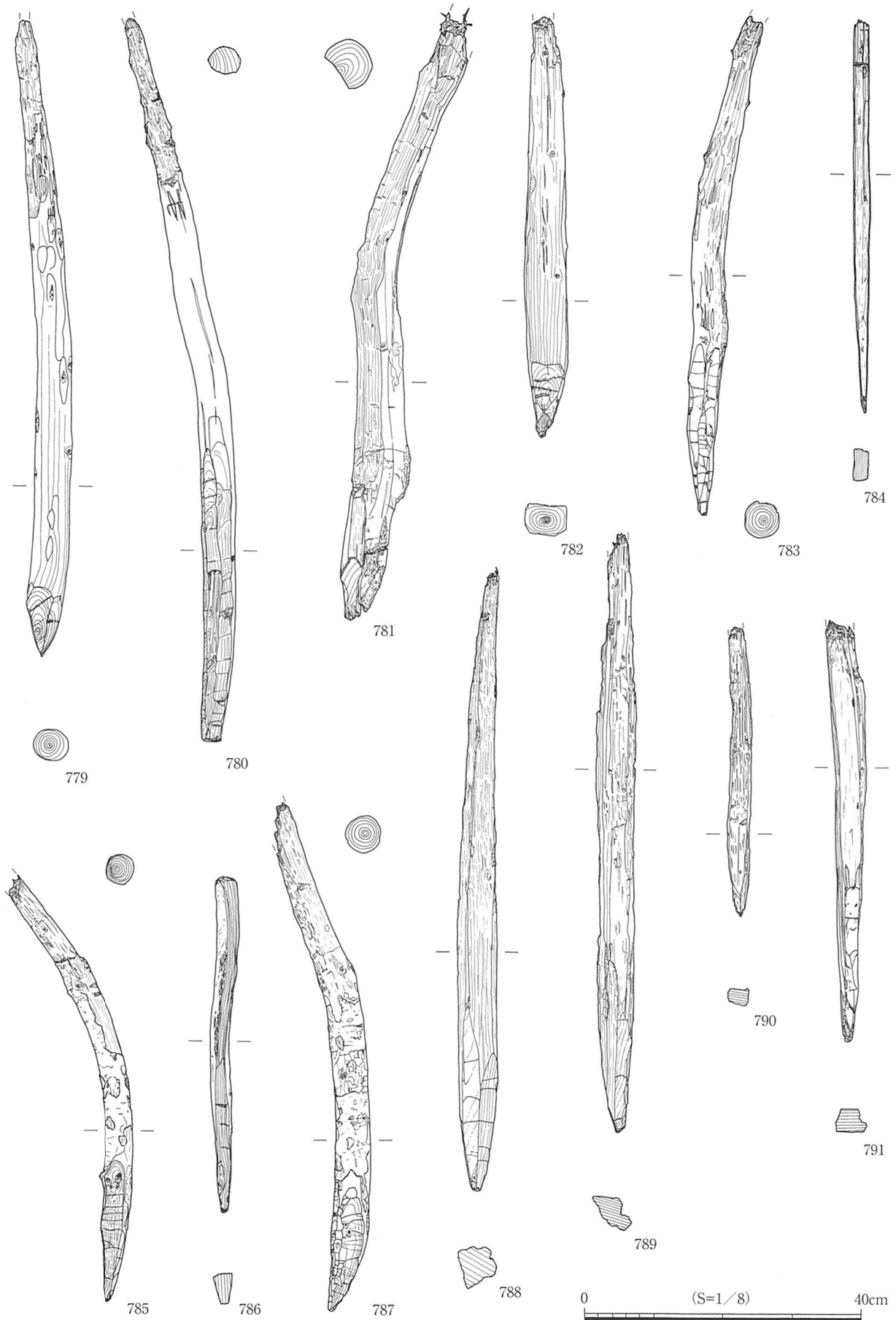


第112図 木製品 (9)



第113図 木製品 (10)

3 D・6 D トレンチ 第三 - 1 遺構面自然流路30019 検出杭。745~750は杭列 4、751~756は杭列 5、757~764は杭列 7、765~770は杭列 9、771は杭列 1、772・773は杭列 2、774・775は杭列 3、776~778は杭列 6 である。いずれの杭も比較的真っ直ぐな材を選んでいること、先端を一様に同程度尖らせること、さらに774・775を除く32本の太さはほぼ5~6 cmにおさまること、この3点が図化した34本に共通する特徴である。779は8 D トレンチ 第二 遺構面溝80143に、780・781は同溝80147に打設された木杭。材をそのまま利用したものやみかん割りしたもの、先端部の加工にも差異が著しい。782~784は9 D トレンチ 第三 - 1 遺構面土坑90062 打設杭。他の部材から転用したと思しき782・784などを含む。785~791は8 D トレンチ 第五 遺構面溝80305 打設杭。みかん割りのままで形状を整えない杭が目立ち、太さも3~6 cmと細めの杭を含む。



第114図 木製品 (11)

第Ⅳ章 分 析

第1節 緒 言

前章で詳しく触れたように、今回の調査では当初予想もしなかった古墳時代集落の検出、平安時代以降綿々と続く村落の実態などが明らかとなった。断片的ながらほぼ正方位を指向した畦畔の検出は、少なくとも平安時代以降一帯に条里制地割が施行され、耕地として利用されていたことを推測せしめた。と同時に頻繁に襲ったであろう洪水は、古墳時代から平安時代にいたるまでの比較的安定した景観を一変させたに違いない。その時々土地利用のあり方については、モノの詳細な分析を通してある程度追求することが可能であるが、当時の自然環境を復原するためには土壌分析に拠るのが最も一般的である。今回は、東西200m、南北120mという広大な範囲内に12箇所のトレンチを設定したが、うち6箇所を選んで花粉・珪藻・プラントオパール分析をおこなった。

今回、紙面の都合上2000年度調査時に1Cトレンチで実施した花粉・プラントオパール分析結果（パリーノ・サーヴェイ株式会社実施）を割愛したので、以下その成果を要約する。弥生時代以前の古植生はアカガシ亜属やシイノキ属などの暖温帯性広葉樹林が分布していたが、気候変化に伴い山地を中心に温帯針葉樹林が拡大していった。古墳時代後期以降植生干渉によるマツ属の二次林化とともに稲作がおこなわれたが、12世紀以降はソバ属の確認と生業に伴う植生破壊がさらに進展し、マツの二次林や植林が急速に拡大した。14世紀以降は、一帯が高燥化あるいは水田の様態が変化したという。

2001年度の調査で採集したサンプルは、株式会社パレオ・ラボに分析委託し、第2節に掲載する報告を得た。2000年度調査に比べて各層の年代観がより明確化・細分化したこと、サンプル採集地点がより広域化したことで、例えば12世紀代から14世紀代にかけて自然流路による植生の差がみられるなど、一定の成果が得られた。

今回の調査成果の一つとして古墳時代（5世紀後半から7世紀前半）集落の発見を挙げたが、ここから出土した当該期の須恵器は、一体どこで生産されたものであろうか。当時須恵器は、千里窯跡群と陶邑窯跡群のいずれかで生産されていたに違いない。この点を明らかにすべく、胎土分析によって両産地の須恵器を判別していた（株）第四紀地質研究所に、豊中市新免遺跡出土資料とともに分析委託した。新免遺跡は、千里窯跡群産の製品の選別・搬出入と強く関わったと考える遺跡である。資料提供くださった豊中市教育委員会に厚く御礼申し上げる。

自然流路には杭列が多数遺存した。その規則正しい配列は、第V遺構面で検出した10世紀代の溝に打ち込まれた杭とは異なり、原料の調達から杭の生産にいたるまで一貫した管理体制の存在を暗示させる。その解明のため杭の樹種鑑定を本センター山口誠治に依頼した。

今回出土した動物遺体はわずか7点。遺存状態も最悪であった。しかし大阪市立大学安部みき子氏によって、最大限のデータを引き出すことができた。中世動物相の実態解明に向けての一助としたい。

12世紀以降調査地東端は、軒瓦の出土にみられるように寺院が存在したようだ。瓦以外にも基壇状遺構や仏具かと思いき花形を呈した土製品などがみつかった。仏具の可能性のある半円形に残った不明金属製品の性格を探るべく、奈良大学西山要一氏のご好意により蛍光X線分析を実施した。その成果は小野がまとめた。

第2節 玉櫛遺跡の花粉・珪藻・プラントオパール分析

1. 堆積物中の珪藻化石群集

パレオ・ラボ 黒澤 一男

(1) はじめに

珪藻は種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。ここでは採取された試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

(2) 試料及び分析方法

分析試料には、玉櫛遺跡内の3 Dトレンチより25試料(1~25)、6 Dトレンチより3試料(1~3)、5 Dトレンチ第Ⅶ包含層より2試料、7 Dトレンチ西壁より5試料(4~7、9)、8 Dトレンチ南壁より6試料(1~6)、8 Dトレンチ東壁より5試料(5、8、10、12、13)、9 Dトレンチ南壁より3試料(2、4、6)の計49試料を用いて、以下の珪藻分析をおこなった。

試料を湿潤重量で約1.5 g程度取り出し、30%過酸化水素水を用いて有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、細粒のコロイドを除去する作業をおこないビーカーに残った残渣を回収した。回収した試料から適量を取り、マウントメディア(封入剤)で封入し、プレパラートを作成した。各プレパラートを光学顕微鏡下400~1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料はプレパラート全面について精査した。

(3) 珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉(1988)および安藤(1990)により設定された環境指標種群に基づいた。小杉(1988)は汽水~海水域における環境指標種群、安藤(1990)は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広域種として、海水種と汽水種は不明種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。

(4) 珪藻化石群集の特徴

全試料から検出された珪藻化石は海~汽水種が15分類群10属12種、淡水種が161分類群29属137種5亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、海水~汽水種が3種群、淡水種が広域種を含め7種群である。なお珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉(1988)および安藤(1990)により設定された環境指標種群に基づいた。また環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広域種として、海水種と汽水種は不明種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に珪藻群集の特徴とその堆積環境について地点別に述べる。

【3 Dトレンチ(第116図)】

堆積物1 g中の珪藻殻数は $1.21 \times 10^3 \sim 1.82 \times 10^3$ 個、完形殻の出現率は約26~75%となる。珪藻分帯は大きく6つに分帯される。

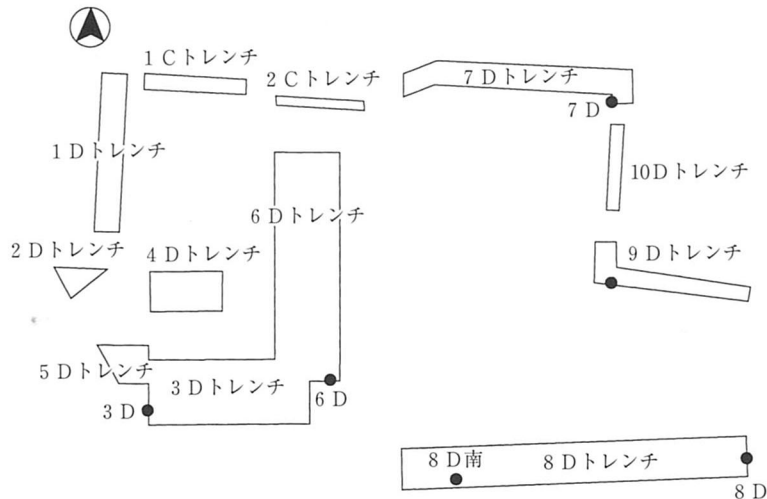
D I帯(試料番号23~25)：湖沼浮遊生指標種群の*Melosira granulata*、沼沢湿地付着生指標種群の*Eunotia praerupta* var. *bidens*、*Cymbella aspera*が特徴的に出現する。これらのことから水深の浅い

表1 各トレンチ花粉分帯対照表

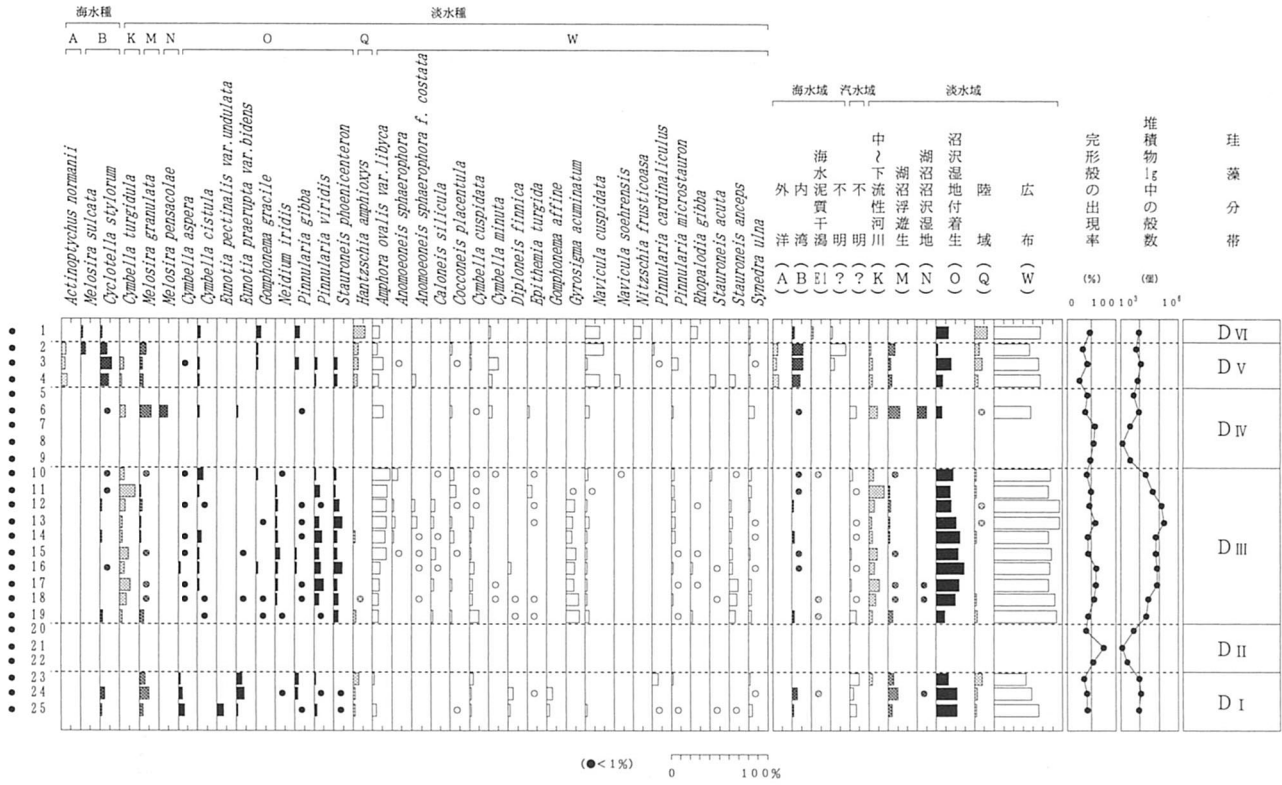
遺構面	3 D トレンチ		6 D トレンチ		7 D トレンチ		8 D トレンチ		9 D トレンチ		
	試料No.	分帯	試料No.	分帯	試料No.	分帯	試料No.	分帯	試料No.	分帯	
I	1										
II	2	IV									
	3										
	4										
	5										
III	6								1		
	7								2		
IV-1	8				4		5		3		
	9				5				4		
IV-2	10	III									
	11										
	12							8	II		
	13										
V	14										
	15				6						
VI	16				7		10				
	17										
VII	18	II			9	I					
	19		1				12				
	20		2				13				
VIII	21		3								
	22						8 D 南	I			
	23	I					1				
	24						2				
	25						3				
							4				
						5					
						6					

表2 各トレンチ珪藻分帯対照表

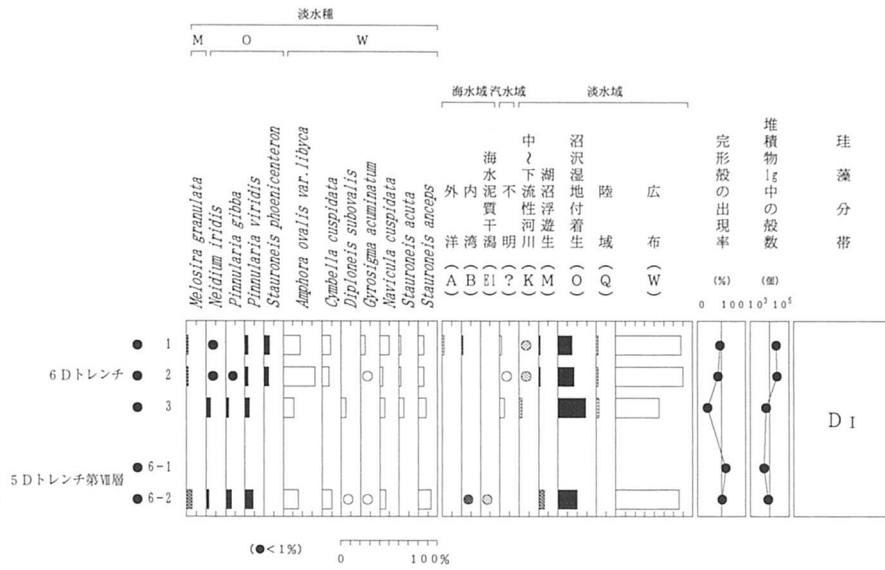
遺構面	3 D トレンチ		6 D トレンチ		7 D トレンチ		8 D トレンチ		9 D トレンチ		
	試料No.	分帯	試料No.	分帯	試料No.	分帯	試料No.	分帯	試料No.	分帯	
I	1	D VI : ジメジメした陸域									
II	2	D V : 内湾沿岸の沼沢湿地									
	3										
III	4	D IV : 水源のある湖沼内湾に近接									
	5								1	D II : ジメジメした陸域	
IV-1	6	D III : 河川に近接する沼沢湿地			4	D III : 沼沢湿地	5		2		
	7				5			3	D I : 沼沢地、湿地		
IV-2	8	D II : 湖沼									
	9										
	10										
	11										
V	12	D I : 河川の影響を受ける沼沢湿地									
	13										
VI	14	D II : 河川に近接する沼沢湿地									
	15										
VII	16	D III : 不明			6	D I : 河川の影響を受ける沼沢湿地	10	D II : 河川に近接、沼沢湿地			
	17				7						
VIII	18	D I : 不明			9		12				
	19						13				
	20										
VIII	21	D I : 水深の浅い湖沼もしくは沼沢湿地									
	22										
	23							8 D 南			
	24							1	D II : 河川の影響を受ける沼沢湿地		
	25							2			
								3			
						4					
						5	D I : 沼沢湿地				
						6					



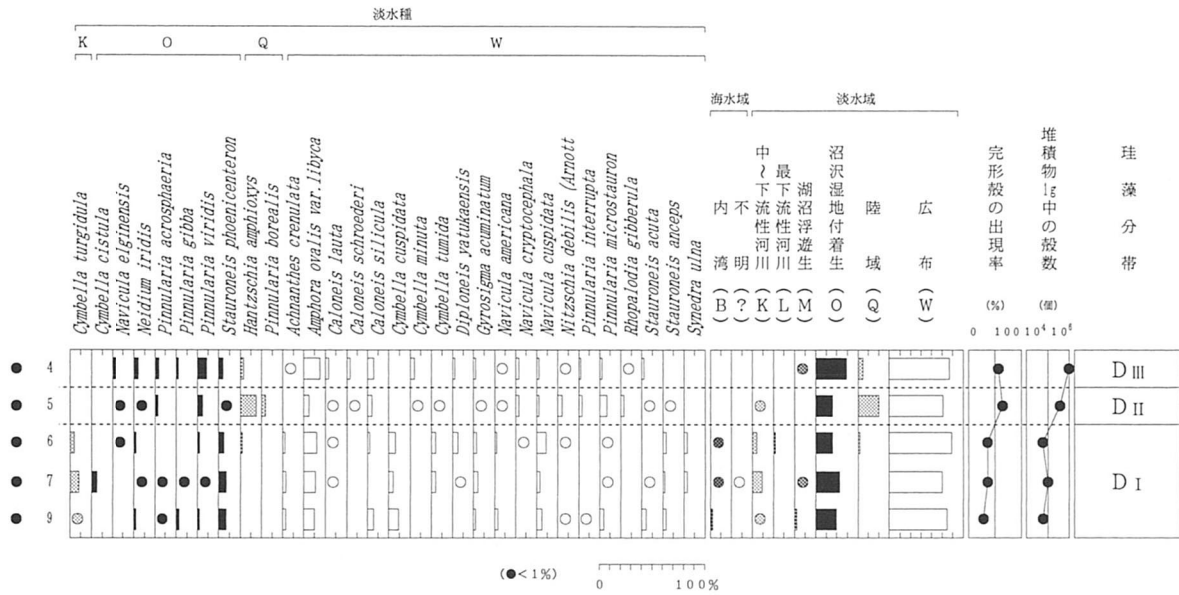
第115図 土壌サンプル採取地点図



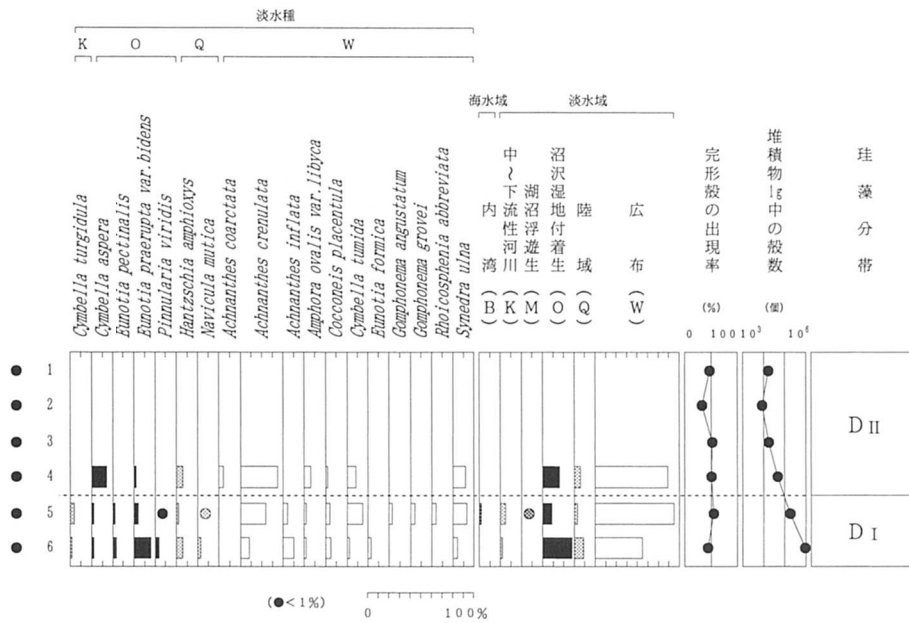
第116図 3Dトレンチ堆積物中の珪藻化石分布図



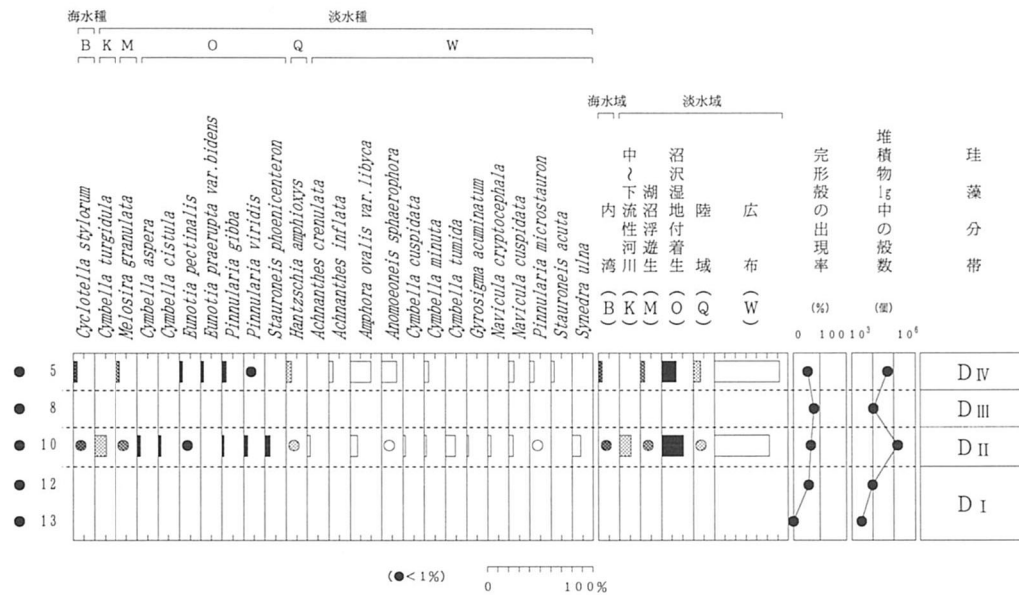
第117図 6Dトレンチおよび5Dトレンチ第Ⅶ包含層における堆積物中の珪藻化石分布図



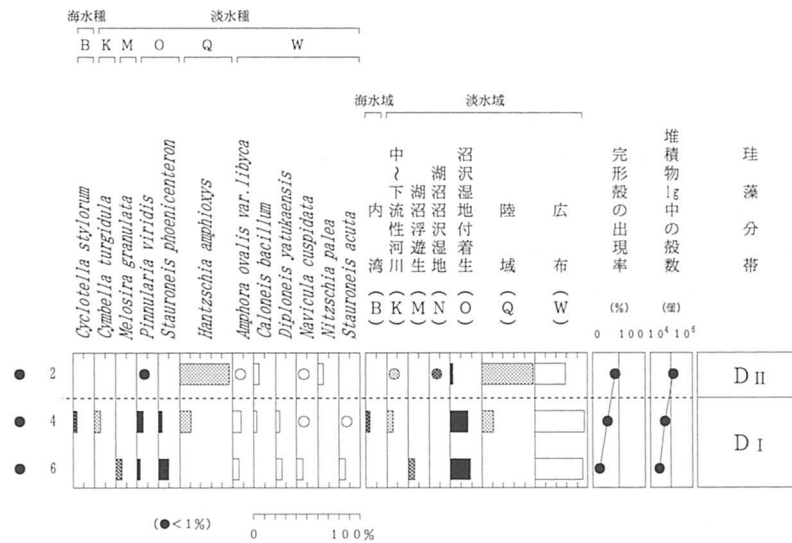
第118図 7Dトレンチ西壁における珪藻化石分布図



第119図 8Dトレンチ南壁における珪藻化石分布図



第120図 8Dトレンチ東壁における珪藻化石分布図



第121図 9Dトレンチ南壁における珪藻化石分布図

湖沼あるいは沼沢湿地環境であると推定される。

D II帯（試料番号20～22）：検出された珪藻殻数が非常に少ない。しかし少ないながらも湖沼浮遊生指標種群の*Melosira granulata*が出現する。これらのことから湖沼環境であると推定される。

D III帯（試料番号10～19）：中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*が特徴的に出現し、沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*、*Stauroneis phoenicenteron*などが随伴して産出する。これらのことから河川に近隣する沼沢湿地環境であると推定される。

D IV帯（試料番号5～9）：D II帯と同様に検出された珪藻殻数が非常に少ない。そのため明確な傾向は確認できないが、III帯で多産する沼沢湿地付着生指標種群があまり検出されず、湖沼浮遊生指標種群と内湾指標種群が検出されている。これらのことからIII帯より水深のある湖沼環境であり、内湾に近接していたと推定される。

D V帯（試料番号2～4）：内湾指標種群の*Cyclotella stylonum*が特徴的に出現し、湖沼浮遊生指標種群の*Melosira granulata*、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*、外洋指標種群の*Actinopterychus normanii*が随伴して産出する。これらのことから内湾沿岸の沼沢湿地環境であると推定される。

D VI帯（試料番号1）：陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が特徴的に出現する。これらのことからジメジメとした陸域環境であると推定される。

【5Dトレンチ第Ⅶ包含層（第117図）】

堆積物1g中の珪藻殻数は 5.07×10^3 個、 8.32×10^3 個と低い。完形殻の出現率は約51%、59%となる。これらの試料からは湖沼浮遊生指標種群の*Melosira granulata*、沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis*などが出現する。これらのことから湖沼環境あるいはやや水深のある沼沢湿地環境と推定される。

【6Dトレンチ（第117図）】

堆積物1g中の珪藻殻数は $6.58 \times 10^3 \sim 2.44 \times 10^4$ 個と低い。完形殻の出現率は約21～47%となる。これらの試料からは沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*などが比較的多く出現する。これらのこと

から沼沢湿地環境と推定される。

【7 D トレンチ西壁 (第118図)】

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は $6.0^4 \times 10^4 \sim 9.80 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は約29~65%となる。珪藻分帯は大きく3つに分帯される。

D I 帯 (試料番号 6、7、9) : *Stauroneis phoenicenteron*、*Pinnularia viridis*、*Neidium iridis*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に出現し、中~下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*が随伴して産出する。これらのことから河川の影響を受ける沼沢湿地環境であると推定される。

D II 帯 (試料番号 5) : 陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が特徴的に出現する。また*Pinnularia viridis*、*Pinnularia acrosphaeria*などの沼沢湿地付着生指標種群が随伴して産出する。これらのことからジメジメとした陸域環境から湿地環境であると推定される。

D III 帯 (試料番号 4) : *Pinnularia viridis*、*Stauroneis phoenicenteron*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に出現する。これらのことから沼沢湿地環境であると推定される。

【8 D トレンチ南壁 (第119図)】

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は $8.77 \times 10^3 \sim 9.22 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は約33~55%となる。珪藻分帯は大きく2つに分帯される。

D I 帯 (試料番号 5、6) : 沼沢湿地付着生指標種群の*Eunotia praeruputa* var. *bidens*、*Eunotia pectinalis*、中~下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*が出現する。これらのことから河川の影響を受ける沼沢湿地環境であると推定される。

D II 帯 (試料番号 1~4) : 検出された珪藻殻数が非常に少ない。しかし少ないながらも沼沢湿地付着生指標種群の*Cymbella aspera*が出現する。このことから沼沢湿地環境であると推定される。

【8 D トレンチ東壁 (第120図)】

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は $2.92 \times 10^3 \sim 1.49 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は約0~39%となる。珪藻分帯は大きく4つに分帯される。

D I 帯 (試料番号12、13) : 検出された珪藻殻数が非常に少ない。よって珪藻の堆積しづらい環境もしくは珪藻が生育できない環境であると考えられる。

D II 帯 (試料番号10) : 中~下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*が特徴的に出現し、*Pinnularia viridis*、*Stauroneis phoenicenteron*などの沼沢湿地付着生指標種群が随伴して産出する。これらのことから河川に近隣する沼沢湿地環境であると推定される。

D III 帯 (試料番号 8) : D I 帯と同様に検出された珪藻殻数が非常に少ない。そのため明確な傾向は確認できない。

D IV 帯 (試料番号 5) : 湖沼浮遊生指標種群の*Melosira granulata*、沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia gibba*、などが出現する。これらのことから湖沼環境であると推定される。

【9 D トレンチ南壁 (第121図)】

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は $2.74 \times 10^4 \sim 1.29 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は約13~43%となる。珪藻分帯は

大きく2つに分帯される。

D I 帯（試料番号4、6）：*Pinnularia viridis*、*Stauroneis phoenicenteron*などの沼沢湿地付着生指標種群が特徴的に出現する。これらのことから沼沢地あるいは湿地環境であると推定される。

D II 帯（試料番号2）：陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が特徴的に出現する。これらのことからジメジメとした陸域環境であると推定される。

（5）おわりに

玉櫛遺跡の堆積物中の珪藻化石を検討した結果、珪藻化石が少ないながらも堆積物の堆積環境を推定することができた。以下に遺構面の時代に基づき本遺跡における珪藻化石から推定される堆積環境をまとめる。

12世紀以前の堆積環境は、概ね湖沼あるいは沼沢湿地環境であったと考えられる。その中で12世紀から8～9世紀の間は河川の影響がある環境であった。

12世紀から14世紀の堆積環境は、東側（7 D トレンチ、9 D トレンチ）で陸域環境となり、西側（3 D トレンチ）では湖沼環境へと変化していった。

14世紀から14世紀末～15世紀の堆積環境（3 D トレンチ）は、沼沢湿地環境から陸域環境へと変化していった。

上記のように湖沼沼沢湿地環境から陸域環境への変化が認められ、その変化は本遺跡の東側が早く陸域環境となったと考えられる。

引用文献

安藤一男「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 p.73-88 1990

小杉正人「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 p.1-20 1988

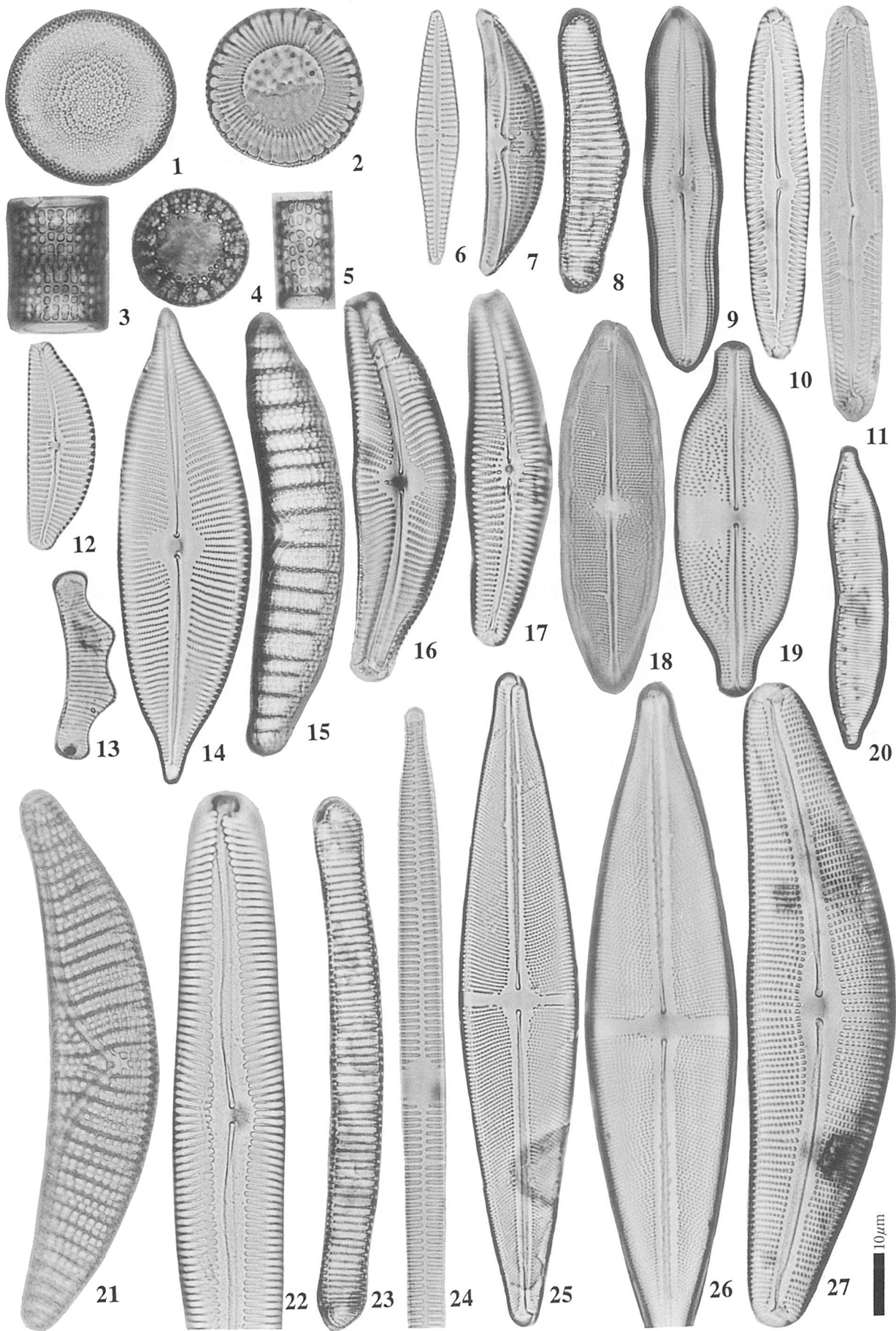


写真1 珪藻化石顕微鏡写真(1)

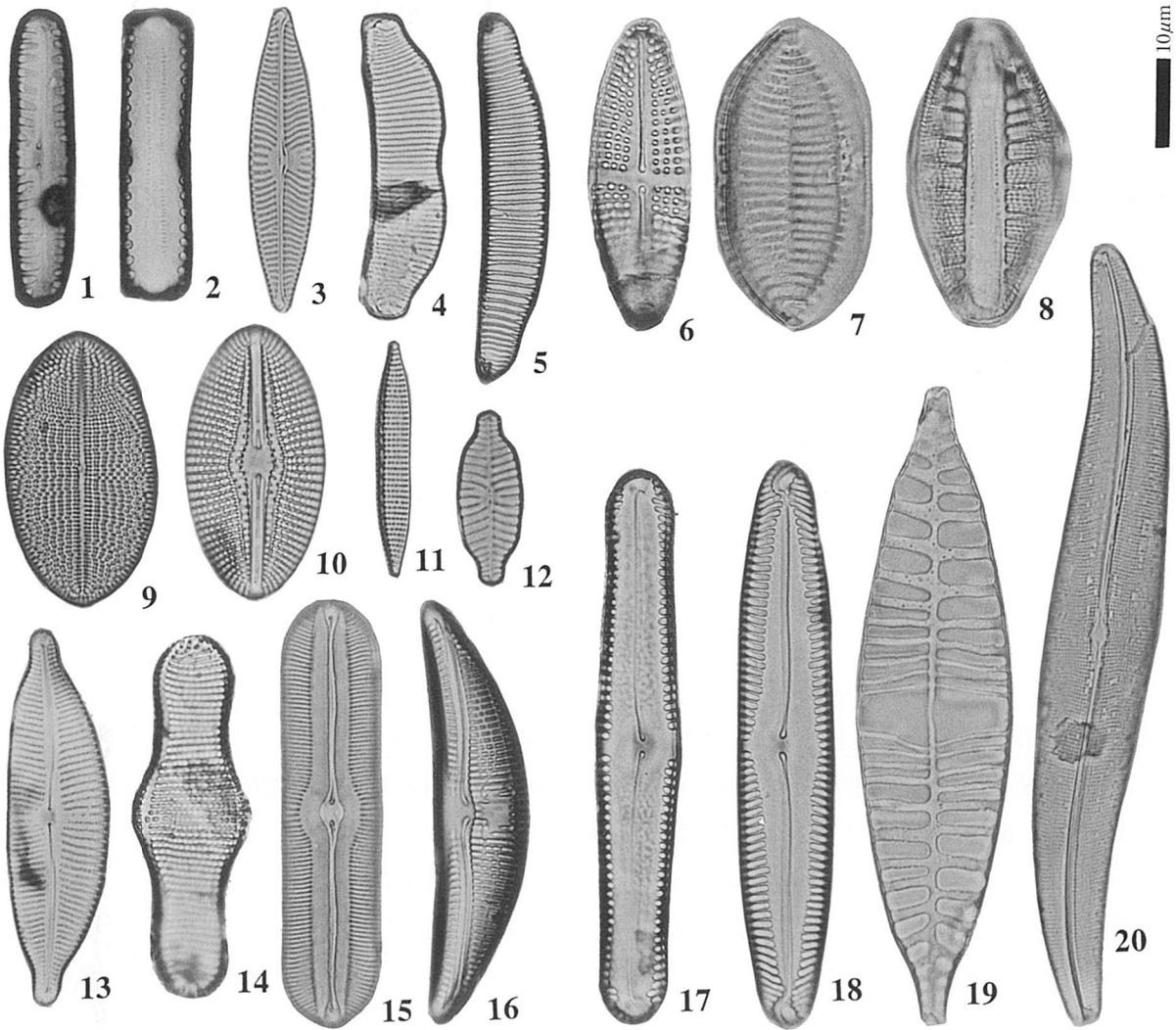


写真2 珪藻化石顕微鏡写真(2)

写真1

- 1 *Actinoptychus normanii* (6Dtr.1) 2 *Cyclotella stylorum* (3Dtr.2) 3 *Melosira granulata* (3Dtr.6)
 4 *Melosira granulata* (3Dtr.7) 5 *Melosira granulata* (3Dtr.14) 6 *Gomphonema gracire* (5Dtr.Ⅶ層-2)
 7 *Amphorav ovalis ver.libyca* (5D.Ⅶ層-2) 8 *Eunotia pectinalis var.undulata* (3Dtr.25)
 9 *Caloneis silicula* (3Dtr.16) 10 *Pinnularia viridis* (3Dtr.17) 11 *Pinnularia gibba* (3Dtr.16)
 12 *Cymbella turgidula* (3Dtr.17) 13 *Eunotia praerupta* (5Dtr.Ⅶ層-1) 14 *Cymbella cuspidate* (3Dtr.17) 15 *Epithemia adnata* (3Dtr.14)
 16 *Cymbella tumida* (3Dtr.13) 17 *Cymbella cystula* (3Dtr.13)
 18 *Neidium ampliatus* (3Dtr.12) 19 *Anomooneis sphaerophora f.costata* (5Dtr.Ⅶ層-2)
 20 *Hantzschia amphioxys* (3Dtr.18) 21 *Epithemia turgida* (3Dtr.14) 22 *Pinnularia viridis* (3Dtr.16)
 23 *Eunotia formica* (3Dtr.25) 24 *Synedra ulna* (6Dtr.1) 25 *Stauroneis acuta* (3Dtr.18)
 26 *Stauroneis acuta* (6Dtr.1) 27 *Cymbella aspera* (3Dtr.16)

写真2

- 1 *Pinnularia borealis* (7Dtr.5) 2 *Pinnularia borealis* (7Dtr.5) 3 *Navicula Cryptocephala* (7Dtr.4)
 4 *Eunotia praerupta var.bidens* (8Dtr.6) 5 *Eunotia pectinalis* (8Dtr.10)
 6 *Achnanthes crenulata* (8Dtr.10) 7 *Nitzschia debilis* (7Dtr.4) 8 *Rhopalodia gibberula* (7Dtr.5)
 9 *Cocconeis placentula* (8Dtr.6) 10 *Diploneis ovalis* (7Dtr.4) 11 *Nitzschia frustulum* (7Dtr.5)
 12 *Navicula elginensis* (7Dtr.5) 13 *Cymbella naviculiformis* (7D.9) 14 *Achnanthes inflata* (8D.6)
 15 *Navicula americana* (7Dtr.4) 16 *Amphora ovlis ver.libyca* (7Dtr.5)
 17 *Pinnularia acrosphaeria* (7Dtr.4) 18 *Pinnularia gibba* (7Dtr.4) 19 *Navicula cuspidata* (7Dtr.6)
 20 *Gomphonema acuminatum* (7Dtr.4)

2. 玉櫛遺跡の花粉化石群集

パレオ・ラボ 新山 雅広

(1) はじめに

玉櫛遺跡は、大阪府茨木市に所在する。ここでは、5世紀中頃～7世紀前半以降12世紀代にかけての植生変遷および栽培状況を推定する目的で花粉化石群集の検討を行った。

(2) 試料

花粉化石群集の検討は、3 D、5 D～9 Dの各トレンチより採取された合計49試料について行った。これら49試料は、珪藻化石、プラント・オパールも検出され、試料番号はそれぞれ対応する。時代については、第Ⅱ遺構面が14世紀末～15世紀初め、第Ⅲ遺構面が14世紀代、第Ⅳ-1・2・3遺構面が12世紀代、第Ⅴ遺構面が10世紀代、第Ⅵ遺構面が古代（8世紀～9世紀代?）、第Ⅶ遺構面が5世紀中頃～7世紀前半である。

(3) 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～3 gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

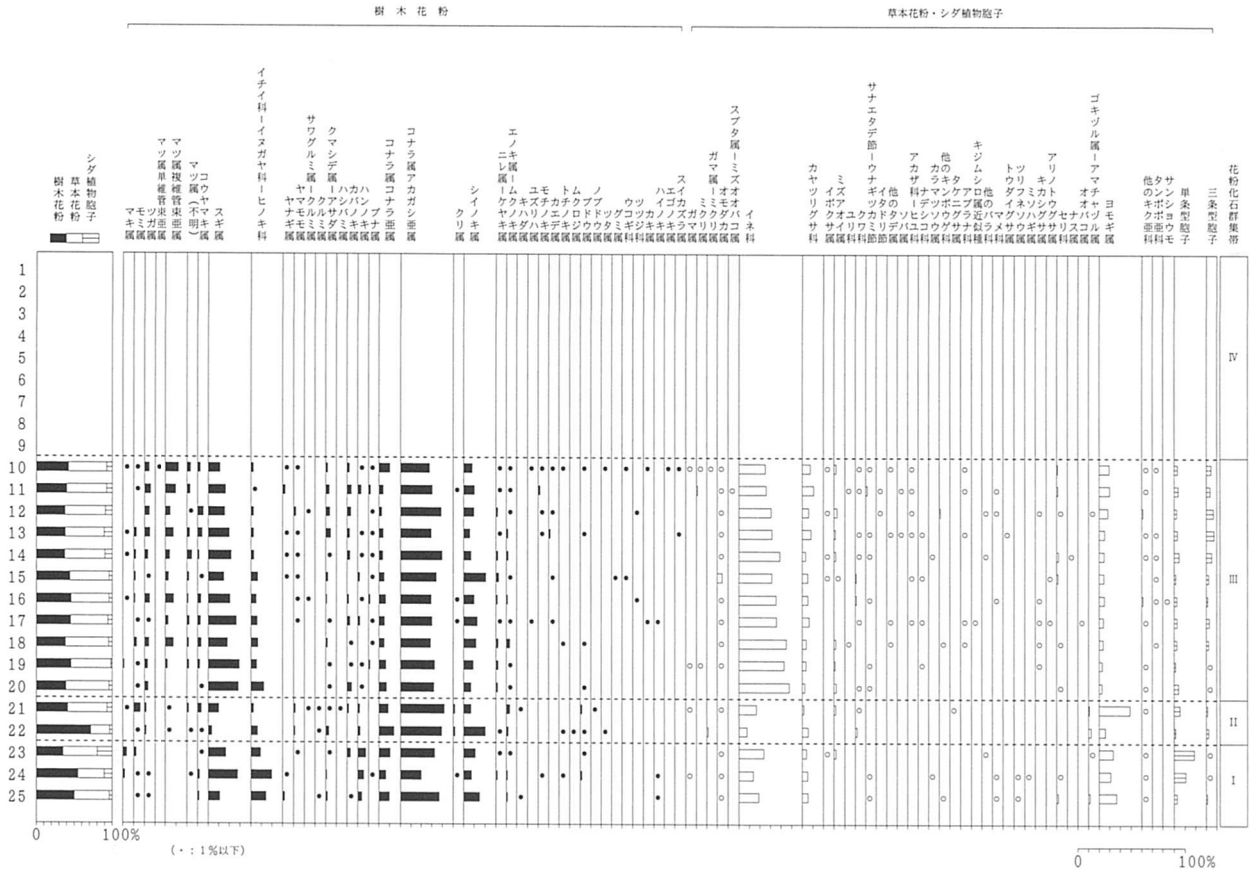
(4) 花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉48、草本花粉43、形態分類を含むシダ植物胞子3である。以下に、各トレンチごとに花粉化石群集の記載を示す。

[3 D トレンチの花粉化石群集]

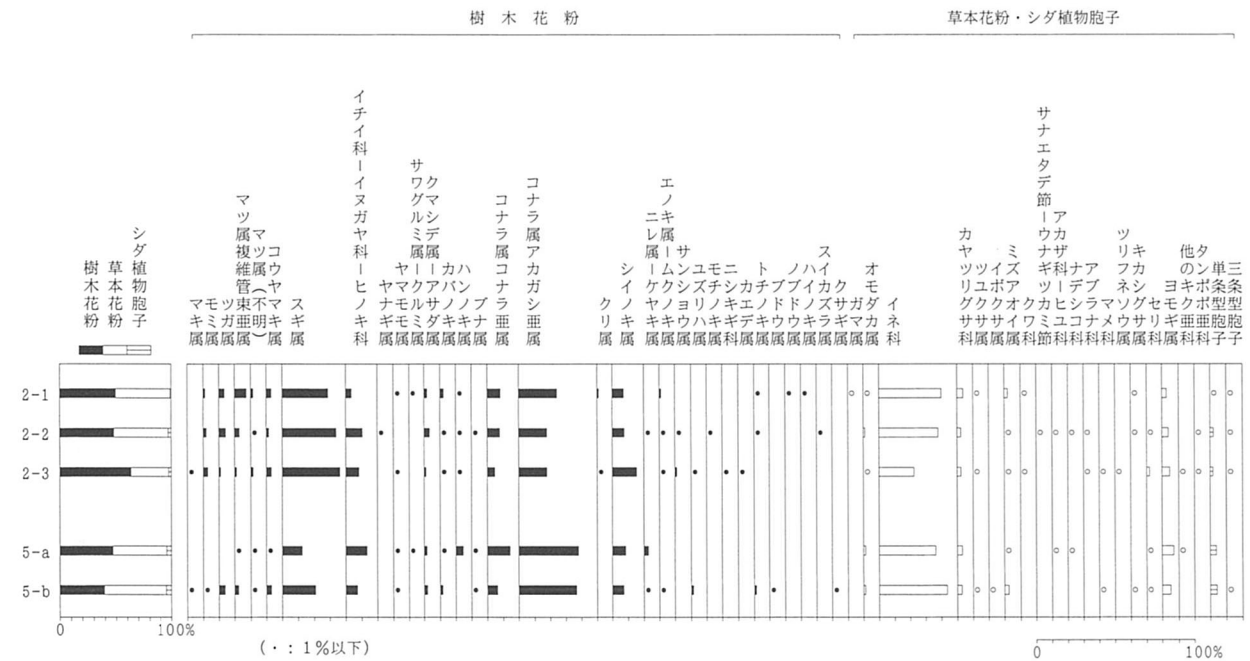
3 D トレンチの花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より4つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I 帯（試料23～25）：樹木花粉の占める割合は約35～55%とやや低率である。その中で、アカガシ亜属が約20～37%で概ね優占する傾向であり、次いでスギ属が約11～28%、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が約9～20%、シイノキ属とコナラ亜属が10%前後と比較的高率である。他に、ハンノキ属が4～7%程度であるが、本帯で相対的に高率である。また、ヤナギ属、ブドウ属、ハイノキ属などが1%以下～約2%で出現する。草本花粉では、イネ科とヨモギ属が10～20%程度で比較的高率であり、カヤツ



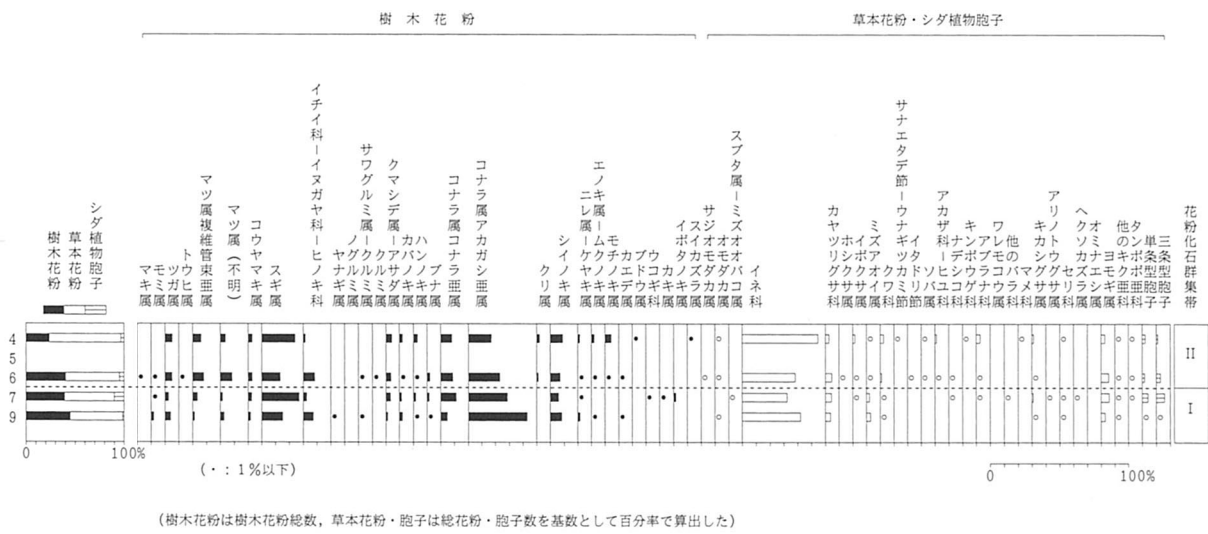
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

第122図 3 D トレンチの花粉化石分布図

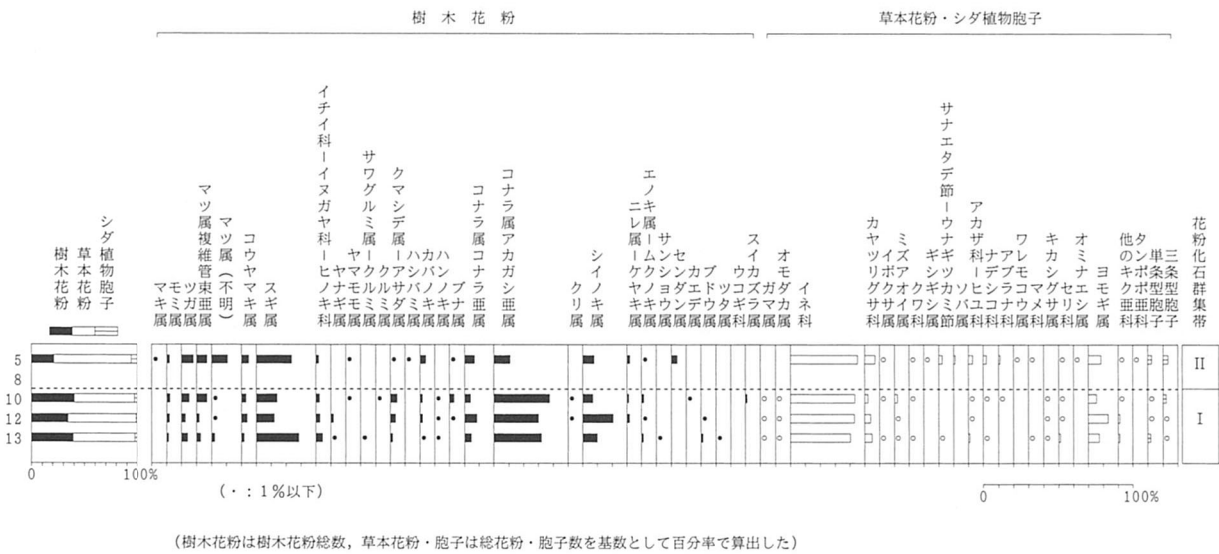


(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

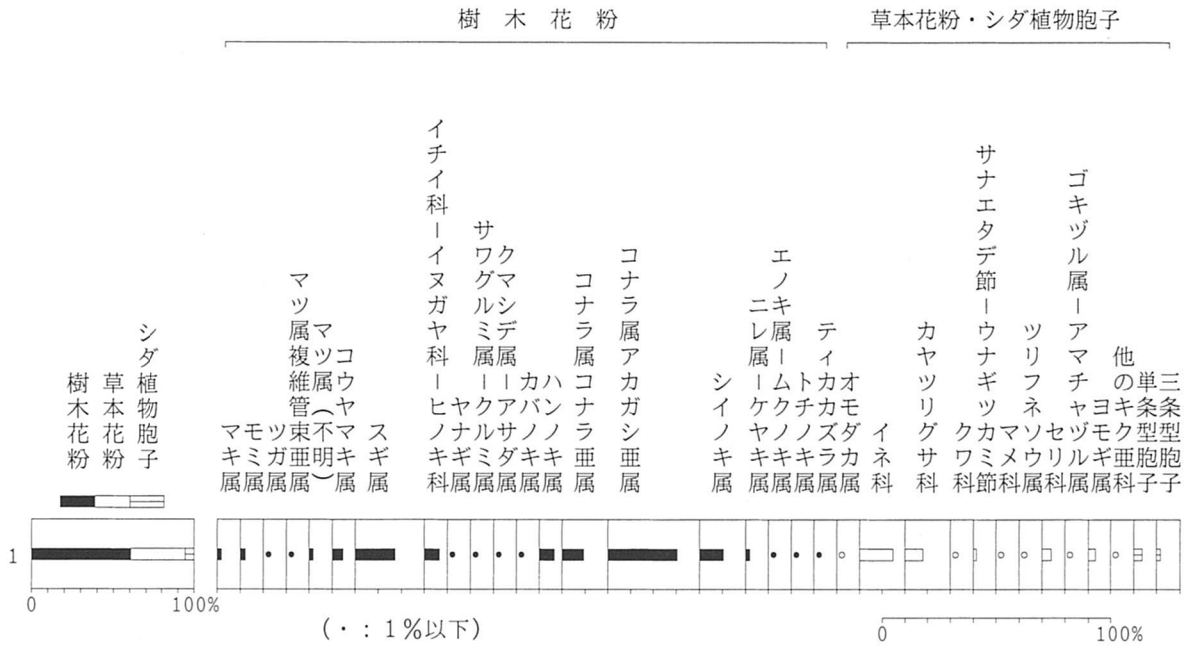
第123図 6 D トレンチの花粉化石分布図



第124図 7 D トレンチ西壁の花粉化石分布図

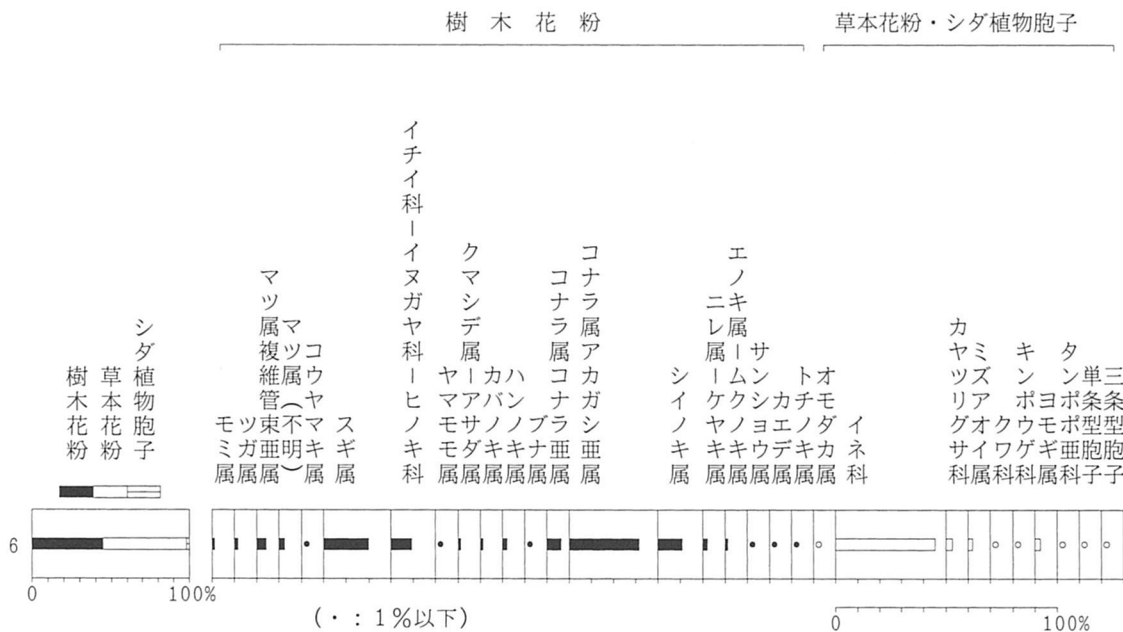


第125図 8 D トレンチ東壁の花粉化石分布図



(樹木花粉は樹木花粉総数, 草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

第126図 8 Dトレンチ南壁(試料1)の花粉化石分布図



(樹木花粉は樹木花粉総数, 草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

第127図 9 Dトレンチ南壁(試料6)の花粉化石分布図

リグサ科（約4～5%）もやや目立つ。他に、1%以下の低率であるが、オモダカ属、他のキク亜科が連続して出現し、ガマ属、イボクサ属、ミズアオイ属、カラマツソウ属、ツリフネソウ属、ミソハギ属、セリ科、ゴキヅル属－アマチャヅル属なども低率で一部試料から出現する。シダ植物胞子は、単条型胞子が比較的高率であり、上部の試料23では約19%に達する。

Ⅱ帯（試料21、22）：樹木花粉の占める割合は下部の試料22では約72%であるが、上部の試料21では約41%とやや低率である。その中で、依然としてアカガシ亜属が40%前後で優占し、シイノキ属（約7～21%）、コナラ亜属（約9～14%）も比較的高率であるが、スギ属（約4～10%）、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（約3～6%）が大幅に減少する。また、相対的に目立ったハンノキ属も約2%と減少する。他に、1%以下～約4%と高率ではないが、ヤマモモ属、クルミ属、クリ属、ブドウ属などが安定して出現する。また、マツ属複維管束亜属も1%以下で出現を開始する。草本花粉ではイネ科（約8～16%）、ヨモギ属が比較的高率であり、ヨモギ属は上部の試料21で約29%と突出する。他に、カヤツリグサ科（約1～6%）、ゴキヅル属－アマチャヅル属（約1～3%）が若干目立ち、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、クワ科、タケニグサ属などが低率で出現する。

Ⅲ帯（試料10～20）：樹木花粉の占める割合は40%前後とやや低率な傾向である。その中で、依然としてアカガシ亜属が約28～40%で優占する。次いで、スギ属が急増し、約11～29%であるが、上位に向かって徐々に減少する傾向である。他に、シイノキ属（約6～21%）は凹凸があるが、依然として比較的高率である。イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（1%以下～約12%）は再び増加するが、上位に向かって減少し、上位では低率である。コナラ亜属は下位帯に比べ、減少するが、約3～10%とやや目立つ。マツ属複維管束亜属は凹凸があるが、比較的目的立つようになり、最上位では約12%とアカガシ亜属に次いで高率である。その他では、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などがさほど高率ではないが、連続して出現し、ヤナギ属、ヤマモモ属、モチノキ属、カエデ属なども上部で安定した出現傾向を示す。草本花粉では、イネ科が急増し、約25～48%を占める。カヤツリグサ科、ヨモギ属もやや目立つが、ヨモギ属は下位帯に比べ、減少する。他に、オモダカ属、ミズアオイ属、クワ科、キカシグサ属、セリ科、他のキク亜科、タンポポ亜科などが低率ではあるが、概ね連続して出現する。また、上部ではイボクサ属、ソバ属なども低率で出現する。

Ⅳ帯（試料1～9）：花粉化石を殆どないし全く産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。樹木花粉は、試料3でニレ属－ケヤキ属、試料9でアカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ属が僅かに産出した。草本花粉は、試料5～9でイネ科が僅かに産出し、試料8ではカヤツリグサ科、試料9ではヨモギ属も僅かに産出した。なお、本帯の試料は、試料1～4（1層）がやや砂質であるが、概ねシルトないし粘土質シルトであり、砂分が卓越しているわけではなかった。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、花粉化石が殆ど産出しないことから、試料とした堆積物は水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。なお、堆積環境の詳細については、珪藻分析の結果を参照されたい。

[5 D トレンチの花粉化石群集]

樹木花粉の占める割合は、約39～47%とやや低率である。その中で、アカガシ亜属が40%弱で優占し、スギ属（約13～21%）、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ亜属、シイノキ属（いずれも10%前後）が比較的高率である。草本花粉では、イネ科が40%前後と高率であり、ヨモギ属（約5～7%）も

やや目立つ。他に、オモダカ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、セリ科などが1%以下～約3%で出現する。

[6 Dトレンチの花粉化石群集]

樹木花粉の占める割合は、約48～63%である。その中でスギ属が30%前後で優占し、次いでアカガシ亜属が20%前後と高率である。他に、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科（約5～10%）、コナラ亜属（約5～8%）、シイノキ属（約7～15%）が比較的高率である。また、ツガ属、マツ属複維管束亜属などもやや目立ち、ヤマモモ属、サンショウ属、トチノキ属なども低率で出現する。草本花粉では、イネ科が約22～40%と高率であり、オモダカ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属が連続して出現する。

[7 Dトレンチ西壁（5試料）の花粉化石群集]

7 Dトレンチ西壁の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より2つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯（試料7、9）：樹木花粉の占める割合は、約40～45%である。その中で、アカガシ亜属が約29～43%と最も高率であり、次いでスギ属が約15～27%と高率である。他では、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科（約3～7%）、コナラ亜属（約5～11%）、シイノキ属（約6～8%）が比較的高率である。草本花粉では、イネ科が約32～42%と高率であり、カヤツリグサ科（約4%）、ミズアオイ属（約2～3%）、ヨモギ属（約3～6%）がやや目立つ。他では、オモダカ属、スブタ属-ミズオオバコ属、イボクサ属、キカシグサ属、アリノトウグサ属などが概ね1%以下の低率で出現する。

II帯（試料4～6）：樹木花粉の占める割合は、約24～40%である。アカガシ亜属は、20%前後と依然として多産する傾向であるが、I帯に比べて減少し、上位の試料4ではスギ属が約24%とアカガシ亜属を上回る。また、マツ属複維管束亜属（約6～8%）が増加し、マツ属（不明）を含めると、約10～17%に達する。他では、コナラ亜属、シイノキ属などが10%弱と比較的高率である。草本花粉では、依然としてイネ科が高率であり、上位の試料4では約55%に達する。また、カヤツリグサ科、ヨモギ属（各約3～5%）が若干目立ち、上位の試料4ではクワ科（約2%）、アブラナ科（約3%）などもやや目立つ。他では、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ソバ属、キカシグサ属などが概ね1%以下で出現する。

[8 Dトレンチ東壁（5試料）の花粉化石群集]

8 Dトレンチ東壁の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より2つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯（試料10、12、13）：樹木花粉の占める割合は、40%程度とやや低率である。その中で、アカガシ亜属が約30～38%と最も高率で出現する。次いで、スギ属が約12～29%と高率な傾向であり、下位の試料13では特に高率である。他では、コナラ亜属（約4～8%）、シイノキ属（約7～21%）が比較的高率であり、シイノキ属は試料12でやや突出する。草本花粉では、イネ科が40%程度と高率であり、ヨモギ属も約5～13%と比較的高率である。他では、カヤツリグサ科（約2～5%）がやや目立ち、ガマ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などが概ね1%未満の低率で出現する。

II帯（試料5、8）：樹木花粉の占める割合は、約24%と低率である。その中で、スギ属が約24%と最も高率である。次いで、アカガシ亜属（約11%）、ツガ属、シイノキ属（各約8%）が比較的高率であり、マツ属複維管束亜属もマツ属（不明）を含めると約18%に達する。他では、センダン属が約4%

とやや目立つ。草本花粉では、イネ科が約45%と最も高率であり、ヨモギ属とカヤツリグサ科も10%弱と比較的高率である。他では、サナエタデ節-ウナギツカミ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科が約2~3%、イボクサ属、ギシギシ属、ソバ属、アブラナ科、ワレモコウ属などが概ね1%以下の低率で出現する。

[8 Dトレンチ南壁 (6 試料) の花粉化石群集]

試料1以外は、十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。試料1は、樹木花粉の占める割合は約61%である。その中で、アカガシ亜属が約30%と最も高率である。次いで、スギ属 (約17%)、シイノキ属、コナラ亜属 (各約10%) の順に高率である。他では、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ハンノキ属 (各約7%) が比較的目的立つ。草本花粉では、イネ科が約15%と最も高率であり、次いでカヤツリグサ科が約8%で出現する。他では、セリ科 (約4%)、ヨモギ属 (約3%) がやや目立ち、オモダカ属、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ツリフネソウ属、ゴキヅル属-アマチャヅル属などが概ね1%以下で出現する。なお、試料2~6は、概ね粘性の高い粘土であり、水付き堆積物と予想した試料であったが、花粉化石を殆ど産出しなかった。花粉化石は、水成堆積物であれば、良好に保存されるが、花粉化石を殆ど産出しないことから、試料とした堆積物は、水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。堆積環境の詳細については、珪藻分析の結果を参照されたい。

[9 Dトレンチ南壁 (3 試料) の花粉化石群集]

試料6以外は、十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。試料6は、樹木花粉の占める割合は約45%である。その中で、アカガシ亜属が約32%と最も高率であり、次いでスギ属 (約20%)、シイノキ属 (約11%)、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 (約9%) の順に高率である。他では、コナラ亜属 (約6%)、マツ属複維管束亜属 (約4%) がやや目立つ。草本花粉では、イネ科が約45%と高率である。他では、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属が約2~3%で若干目立ち、オモダカ属、クワ科などが1%未満で出現する。

(5) 考察

a. 5世紀中頃~7世紀前半 (第Ⅶ遺構面) の古植生 (3 Dトレンチ-I・II帯、5 Dトレンチ、6 Dトレンチ-試料3、8 Dトレンチ南-試料1)

アカガシ亜属を主体にシイノキ属、ヤマモモ属などをまじえた照葉樹林が優勢であったと予想される。また、針葉樹ではスギ属を主体にイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が比較的多くみられ、落葉広葉樹ではコナラ亜属が主要な要素であったであろう。針葉樹のスギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、3 Dトレンチ-I帯、5 Dトレンチ、6 Dトレンチ-試料3、8 Dトレンチ南-試料1では、比較的高率であり、特に6 Dトレンチ-試料3では、スギ属がアカガシ亜属を上回る出現率である。一方、3 Dトレンチ-II帯では、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の出現率は、さほど高率とは言えない。このような差異は、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が周辺山地からの飛来花粉であり、堆積域での集積の差異が反映されたものである可能性が考えられる。また、5世紀中頃~7世紀前半の範囲内での細かな時期差が反映されたものである可能性も考えられる。

付近の堆積環境については、いずれのトレンチ試料もガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などの湿地性ないし抽水植物が出現することから、水位の低い湿地ないし水溜りといった環境の存在が予想される。このような環境には、ツユクサ属、イボクサ属、ツリフネソウ属、ミソハギ属、ゴキ

ヅル属-アマチャヅル属などの湿地性草本も生育していたであろう。また、3 Dトレンチでは、ヨモギ属、シダ植物胞子が比較的高率であることから、付近に幾分乾き気味の場所も広がっており、タケニグサ属が生育するような荒地のような場所もみられたであろう。なお、5 Dトレンチについては、イネ科が高率であり、先述した抽水植物でいわゆる水田雑草が随伴することから、水田が存在していた可能性も考えられる。

b. 古代（8世紀～9世紀代？、第VI遺構面）～12世紀代（第IV遺構面）の古植生（3 Dトレンチ-III帯、6 Dトレンチ-試料1・2、7 Dトレンチ西壁、8 Dトレンチ東壁、9 Dトレンチ南壁-試料6）

5世紀中頃～7世紀前半の古植生と大きくは変わらないようである。引き続き、照葉樹林が優勢であり、針葉樹では、スギ属が主要な要素であった。しかし、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、減少してさほど目立たなくなったようである。針葉樹のスギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科に関しては、3 DトレンチのIII帯をみると、第V遺構面（10世紀代：試料16・17）、第VI遺構面（8～9世紀代？：試料18～20）試料では、比較的高率であるが、上位に向かって徐々に減少する傾向がある。他トレンチ試料でも第V、第VI遺構面試料は、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、比較的高率である（7 Dトレンチ西壁-I帯、8 Dトレンチ東壁-I帯、9 Dトレンチ南壁-試料6）。このことから、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、8～10世紀代には、依然として比較的多くみられたが、その後、徐々に減少していったのであろう。しかし、スギ属に関しては、第IV-1遺構面（12世紀代：7 Dトレンチ西壁-試料4、8 Dトレンチ東壁-試料5）試料で高率であり、アカガシ亜属は大幅に減少する。従って、12世紀代に入ってしばらくしてから（後半頃か）、再び、スギ属は増加し、逆にアカガシ亜属は大きく減少したと予想される。また、この頃には、5世紀中頃～7世紀前半にはあまりみられなかったマツ属複雑管束亜属も比較的多くみられるようになったと思われ、8 Dトレンチ（東壁）付近にセンダン属が生育していたであろうことも注目される。

付近の堆積環境については、いずれのトレンチ試料においてもイネ科が高率であり、いわゆる水田雑草が随伴することから、水田ないし、水田に類似した水位の低い湿地・水溜りといった環境の存在が予想される。第VII遺構面試料と比べてイネ科が大幅に増加することを考慮すれば、水田が存在していた可能性が高いであろう。従って、花粉化石群集のみからみた場合、水田の開始時期は、古代（8～9世紀代？）であり、5 Dトレンチ付近に関しては、5世紀中頃～7世紀前半にまで遡る可能性があると予想される。その他の栽培状況については、カキ属が3 Dトレンチの試料10（第V遺構面）および試料17（第IV-1遺構面）、7 Dトレンチ西壁の試料7（第V遺構面）で、ソバ属が3 Dトレンチの試料13（第IV-2遺構面）以降、7 Dトレンチ西壁の試料6（第IV-3遺構面）、8 Dトレンチ東の試料5（第IV-1遺構面）で出現する。このことから、10世紀代に入ってカキノキが栽培されていた可能性が考えられ、12世紀代に入ってソバ栽培が開始されたものと予想される。

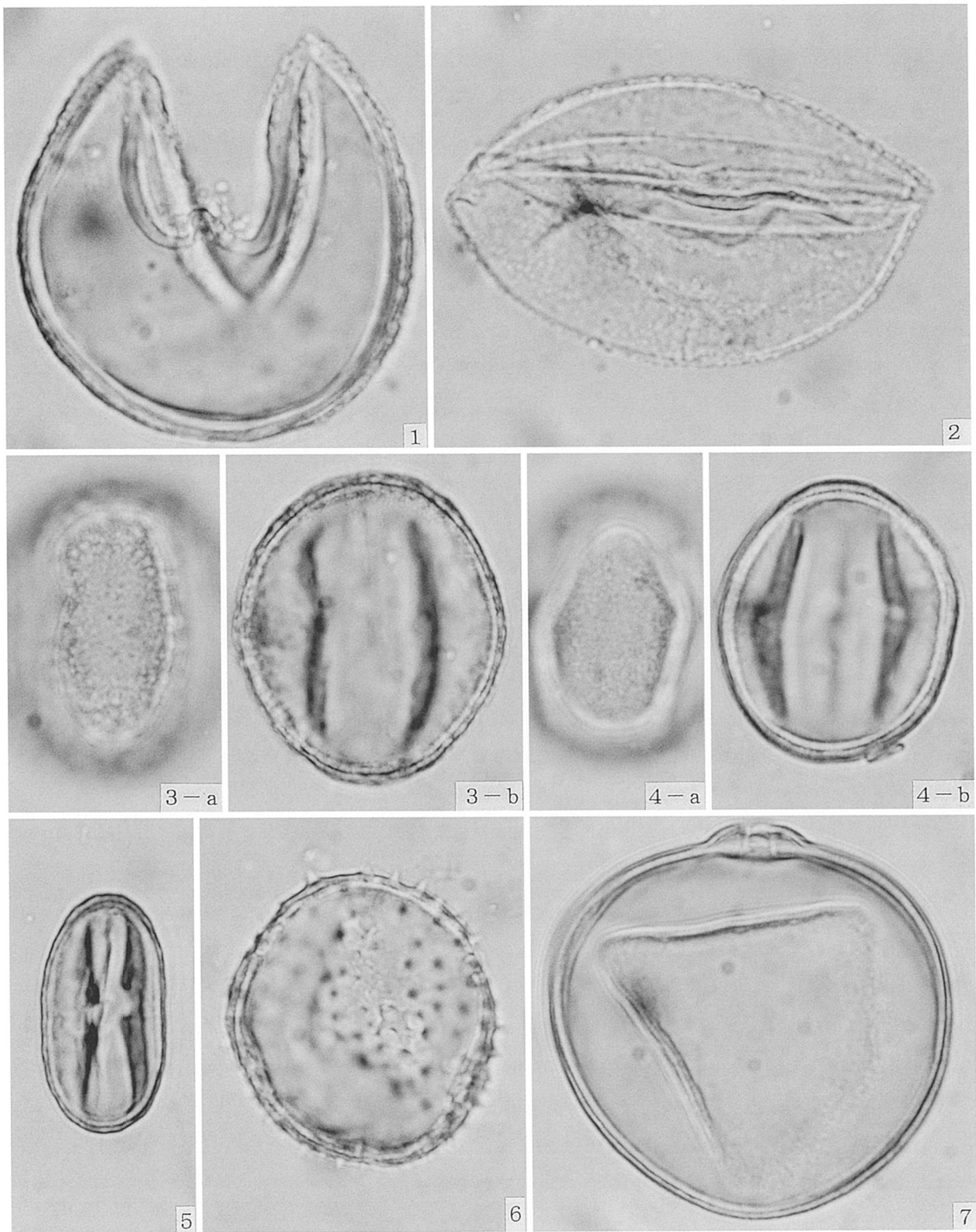


写真3 産出した花粉化石(1)

- 1 スギ属 3D-19, PAL.MN 1718
- 2 イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科, 3D-24, PAL. MN 1723
- 3 コナラ属コナラ亜属, 3D-23, PAL. MN 1722
- 4 コナラ属アカガシ亜属, 3D-19, PAL. MN 1719
- 5 シイノキ属, 3D-15, PAL. MN 1720
- 6 オモダカ属, 3D-15, PAL. MN 1721
- 7 イネ科, 3D-19, PAL. MN 1716

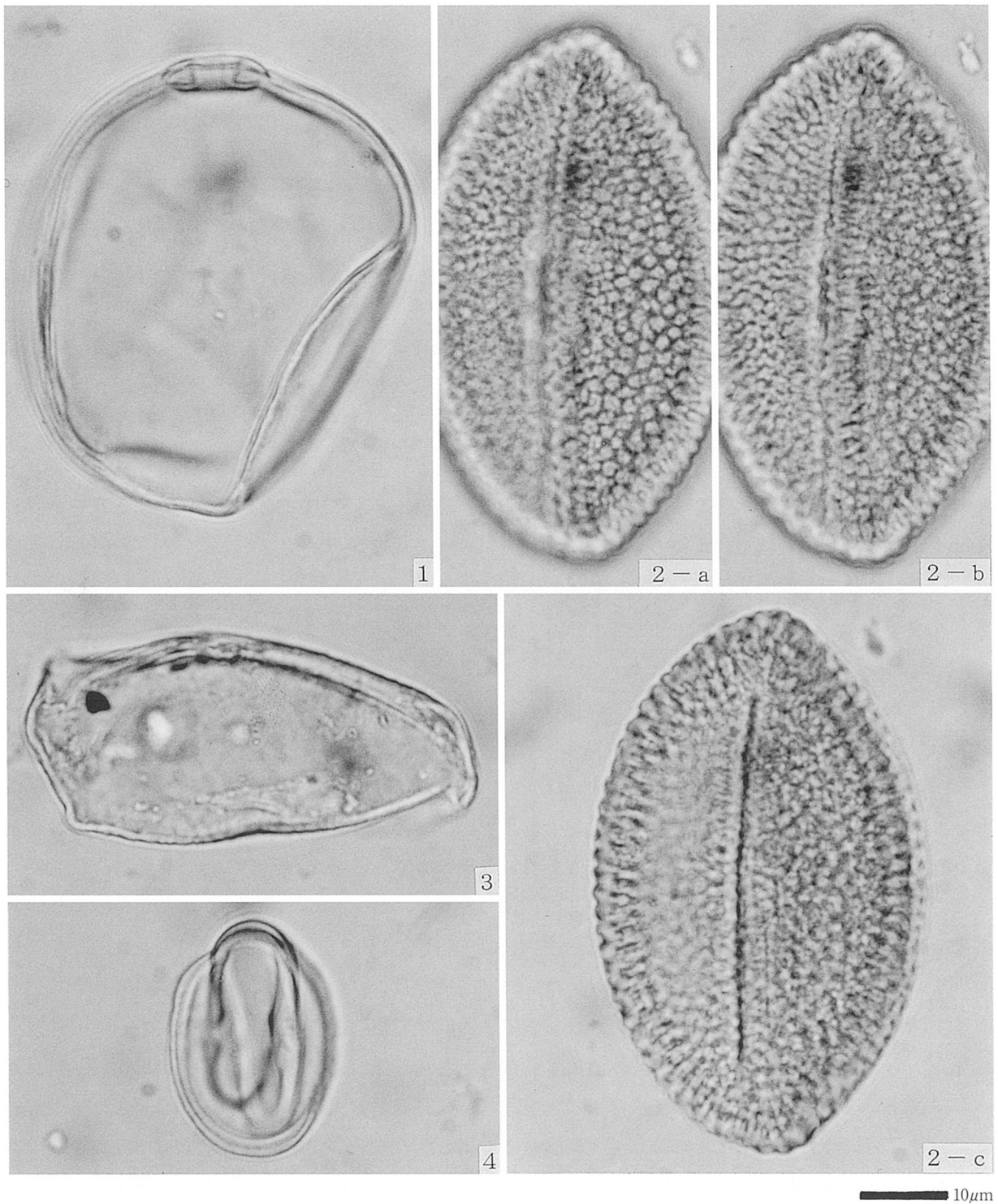


写真4 産出した花粉化石(2)

1 イネ科、7D-4、PAL. MN 1768

2 ツバ属、8D東-5、PAL. MN 1774

3 ミズアオイ属、9D-6、PAL. MN 1777

4 キカシグサ属、7D-4、PAL. MN 1769

3. 植物珪酸体分析

パレオ・ラボ 鈴木 茂

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。この珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたものを植物珪酸体と言い、機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などが知られている。以下には玉籾遺跡より採取された土壌試料について植物珪酸体分析を行い、得られた機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体から稲作の有無を中心に遺跡周辺のイネ科植物について検討した。

(1) 試料と分析方法

分析用試料は3 D、5 D～9 Dトレンチより採取された49試料で、これらの土相記載については層序の節を参照して頂きたい。植物珪酸体分析はこれら49試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1 g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02 gのガラスビーズ（直径約40 μ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により微細粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。

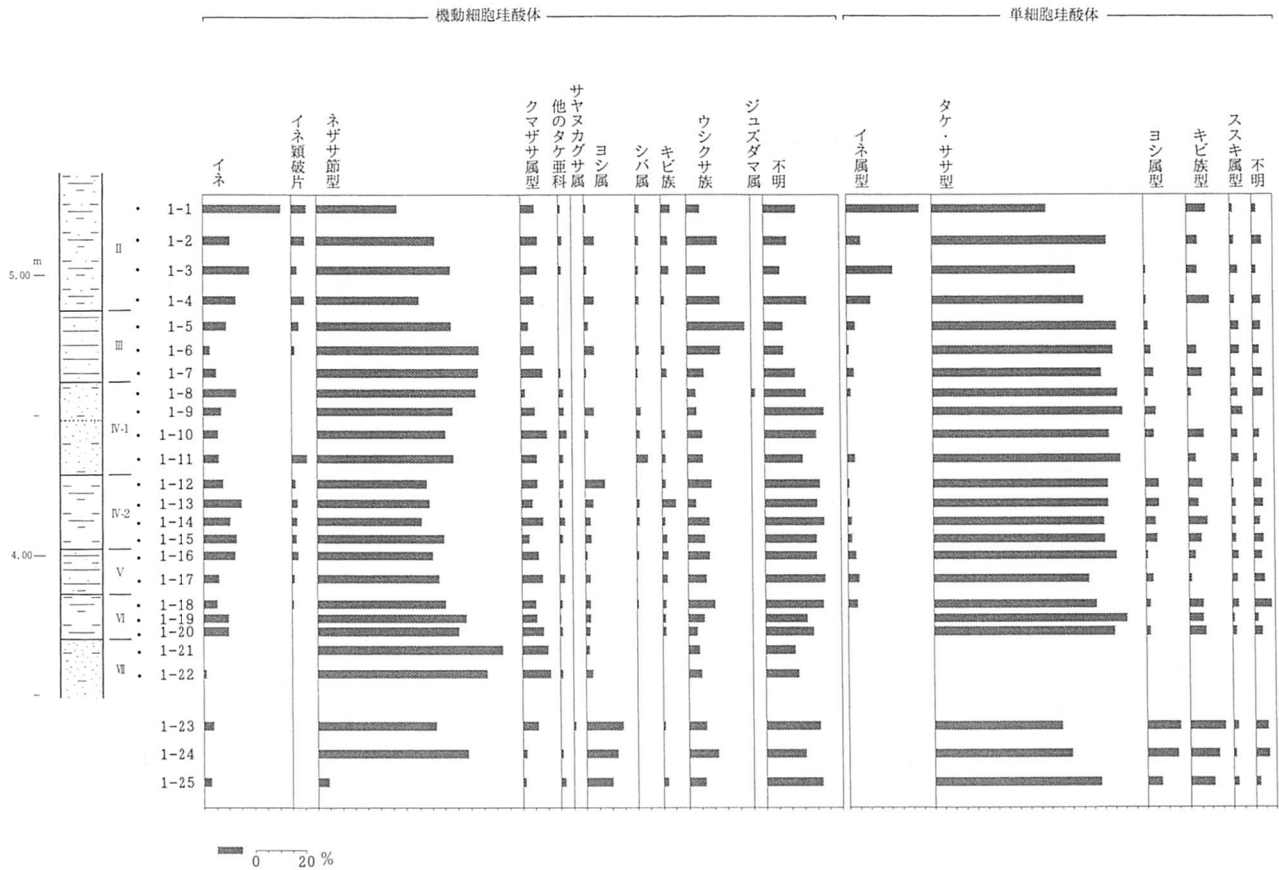
(2) 分析結果

3 D～6 Dトレンチの30試料については作成されたプレパラート全面について検鏡して同定・計数された各植物の植物珪酸体個数を求め、それらの分布を第128図（3 Dトレンチ）、第130図（6 Dトレンチ）、第129図（5 Dトレンチ）に示したが、1-21、1-22については得られた単細胞珪酸体個数が少なかったため図にすることをひかえた。なおこれらの図は機動細胞珪酸体についてはそれらの総数を基数とした百分率で、単細胞珪酸体についてもそれらの総数を基数とした百分率で示してある。

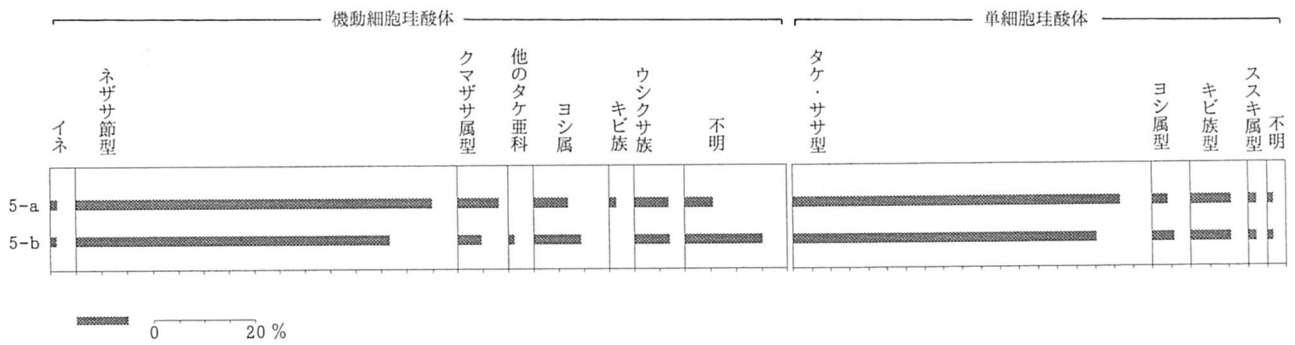
また同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1 g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め、それらの分布を第131図（3 Dトレンチ）、第132図（5 Dトレンチ）、第133図（6 Dトレンチ）、第134図（7 Dトレンチ）、第135図（8 Dトレンチ東壁）、第136図（8 Dトレンチ南壁）、第137図（9 Dトレンチ）に示した。なおイネ類破片も便宜的に機動細胞珪酸体の方に入れ図示した。以下に示す各分類群の植物珪酸体個数は試料1 g当りの検出個数である。

単細胞珪酸体：多くの試料よりイネ属型が検出され、3 Dトレンチ西壁の最上部では30%を越えている。一方下部試料からは得られておらず、同層準と推測される5 Dトレンチ第Ⅶ包含層試料からも検出されていない。最も多く検出されているのはタケ・ササ型で、おおむね80%前後と高い出現率を示している。また3 Dトレンチ西壁試料をみると上部において出現率が減少する傾向が認められる。ヨシ属型は3 Dトレンチ南壁試料でやや高い出現率20%前後を示している。大半の試料から得られているキビ族型も同試料で多く得られており、5 Dトレンチ試料でもやや高い出現率を示している。ススキ属型も多くの試料より産出しているが、その出現率は3%前後とあまり高くは無い。

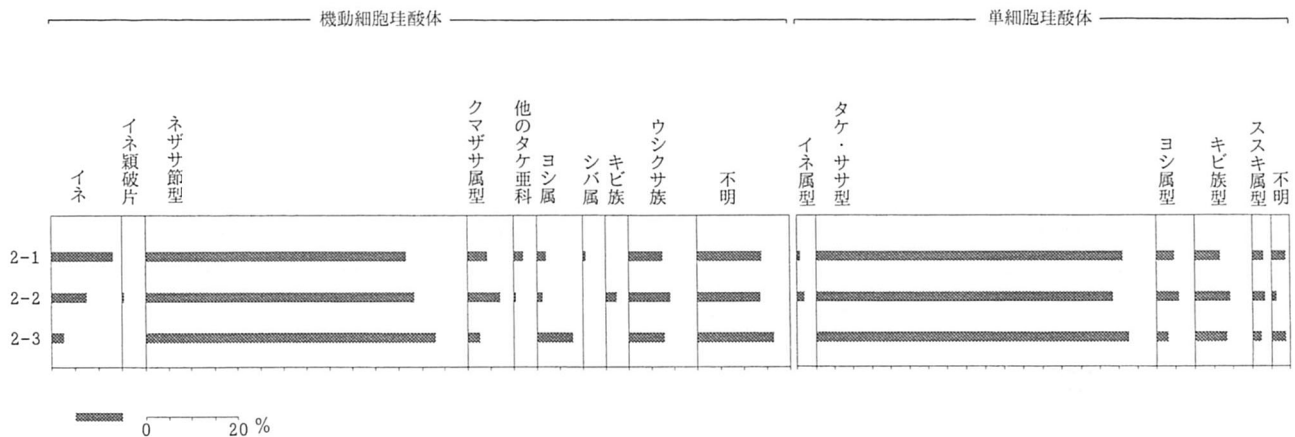
機動細胞珪酸体：検鏡の結果、3 Dトレンチの2試料（1-21、1-24）と8 Dトレンチ南壁の6試料を除く41試料よりイネが検出されている。出現率としては単細胞珪酸体と同様に3 Dトレンチ西壁の最上部試料が最も高く30%を越えている。また傾向としては第Ⅳ-2包含層～第Ⅵ包含層の下部でやや



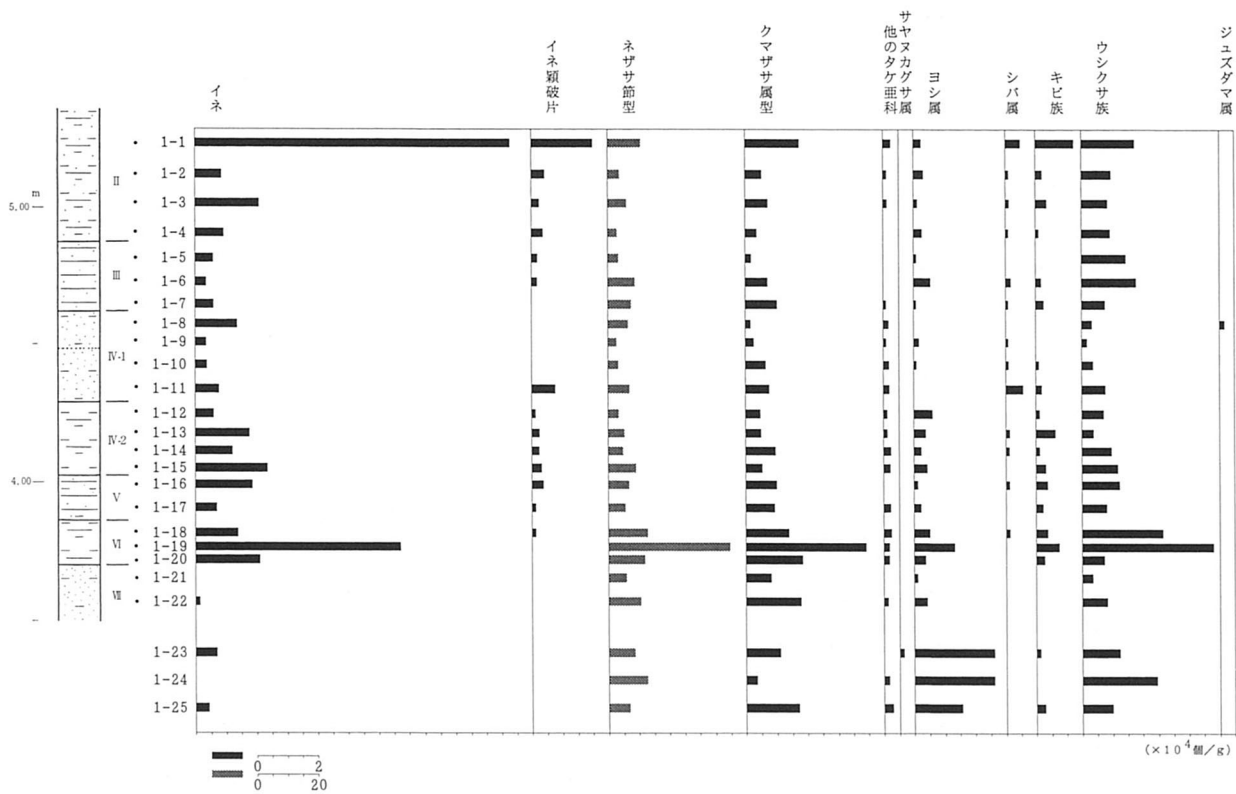
第128図 3 Dトレンチの植物珪酸体分布図



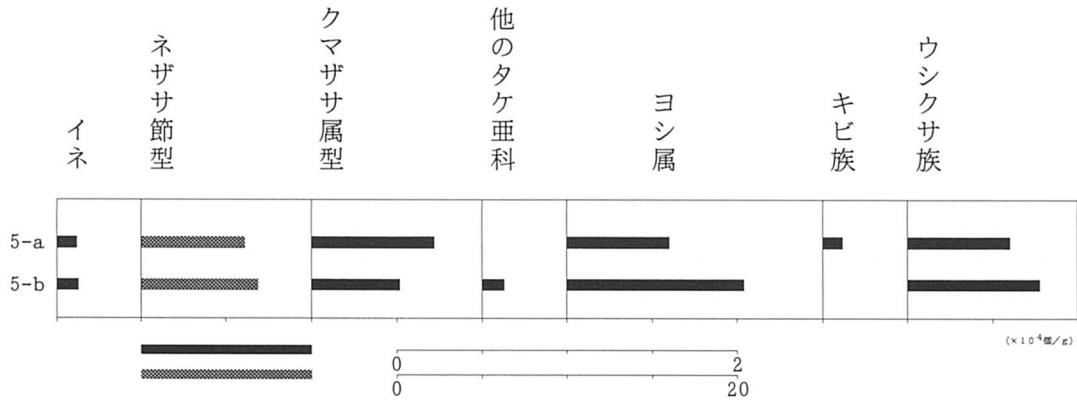
第129図 5 Dトレンチの植物珪酸体分布図



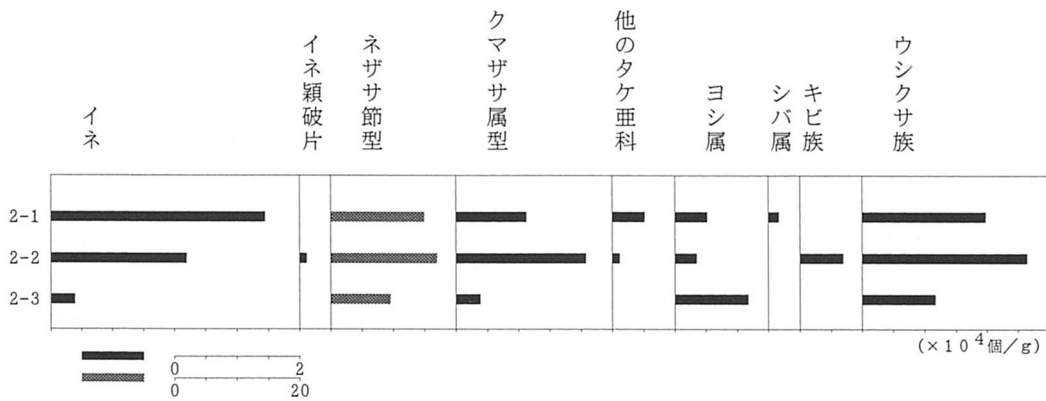
第130図 6 Dトレンチの植物珪酸体分布図



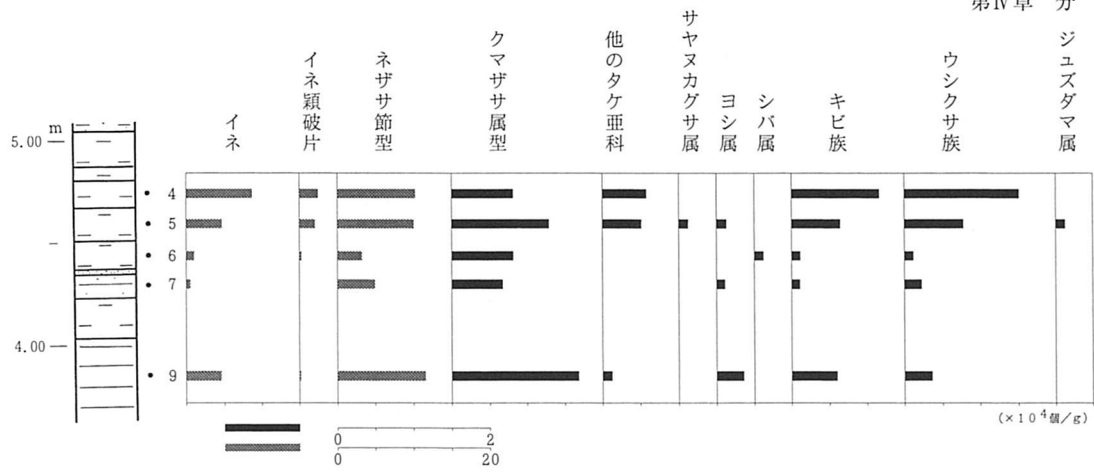
131図 3 D トレンチの機動細胞珪酸体分布図



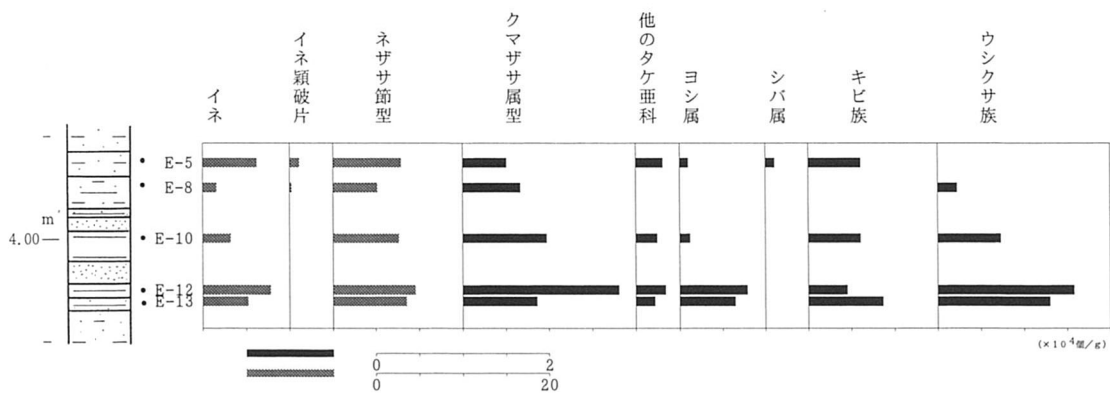
第132図 5 D トレンチの機動細胞珪酸体分布図



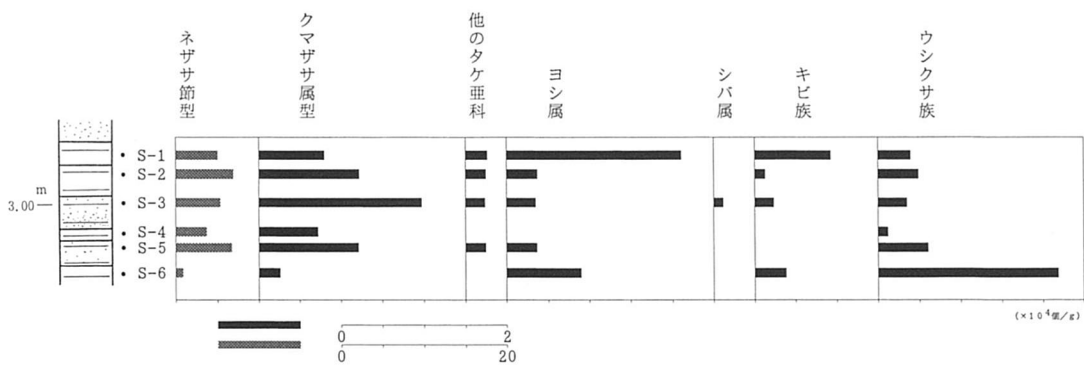
第133図 6 D トレンチの機動細胞珪酸体分布図



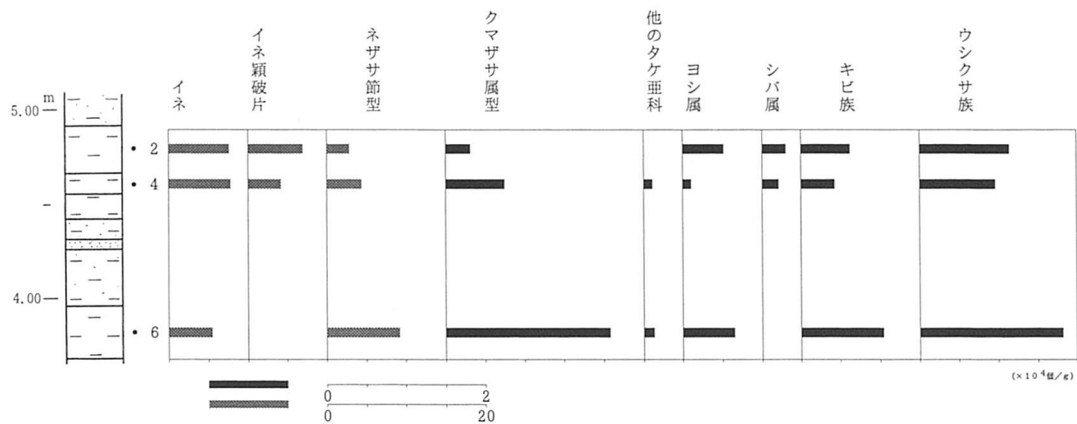
第134図 7 Dトレンチの機動細胞珪酸体分布図



第135図 8 Dトレンチ東壁の機動細胞珪酸体分布図



第136図 8 Dトレンチ南壁の機動細胞珪酸体分布図



第137図 9 Dトレンチの機動細胞珪酸体分布図

高い出現率を示し、上位の2層でやや減少するが、第Ⅱ-1包含層において急増している。個数としては最上部の1-1が最も多く100,000個を越え、下部の1-19でも約67,000個と非常に高い検出個数を示している。また最下部試料においても1-23では約7,000個とやや多く得られており、1-22では1,400個、1-25からは4,300個得られている。その他6D~9Dの各トレンチ試料からも多数のイネが検出されており、5Dトレンチ試料では若干観察されている。なおイネモミの部分に形成される珪酸体の破片も9Dトレンチからは多数が観察され、3Dトレンチ西壁や7Dトレンチ、8Dトレンチ東壁の多くの試料からも検出されている。

イネ以外について、ネザサ節型が最も多く検出されており、個数的には下部で100,000個前後と多い傾向がみられ、1-19では約400,000個と非常に高い数値を示している。次いで多いウシクサ族はネザサ節型と同様の産出傾向がみられ、やはり1-19で43,000個と最も高い出現個数を示している。クマザサ属型も下部試料の多くで10,000個を越えており、やはり1-19で最も高い数値を示している。ヨシ属は下部で若干多くなる傾向がみられ、やはり1-19で高い検出個数を示している。また3Dや8Dトレンチの南壁試料では20,000個前後と非常に多く、5Dトレンチ試料でも10,000個前後とヨシ属としては高い数値を示している。キビ族はイネと同じような産出傾向を示し、最上部と下部の第Ⅳ-2包含層~第Ⅵ包含層でやや高い出現率を示している。その他シバ属やサヤヌカグサ属、ジュズダマ属などが観察されている。

(3) 稲作について

上記したように多くの試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出されている。この検出個数について藤原(1984)は以下のような研究成果を示している。すなわち福岡市の板付北遺跡ではイネの機動細胞珪酸体が試料1g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とがよく対応する結果が得られている(藤原 1984)。よって近年ではイネの機動細胞珪酸体を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われており、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。

3Dトレンチ西壁：14世紀代(第Ⅲ遺構面)から14世紀末~15世紀初(第Ⅱ遺構面)の試料1-1~1-4においては少ない試料でも約9,000個であり稲作が行われていた可能性は高いと判断されよう。なおこの稲作は後述するが水田雑草と考えられる分類群が花粉分析で検出されていることから水田稲作と推察される。

12世紀代(第Ⅳ-1遺構面)から14世紀代(第Ⅲ遺構面)の試料1-5~1-7では5,000個前後であり、水田稲作が行われていた可能性は高いように検出個数からは判断される。しかしながら花粉化石はほとんど得られず(花粉分析の節参照)、珪藻分析からは水深のある水域の存在が推測されている(珪藻分析の節参照)。よって少なくとも3Dトレンチ近辺における稲作については難しい環境であったと推察され、イネの植物珪酸体は周辺の比較的安定したところで行われていたであろう稲作地よりもたらされた可能性の方が高いように思われる。このようにこの時期の稲作については発掘状況などを含め多方面から検討することにより判断されるのが望ましいと考える。

12世紀代(第Ⅳ-1遺構面から第Ⅳ-2遺構面)の試料1-8~1-11も上記土試料と同様であるが、堆積相は砂が多く(河川の影響?)、珪藻分析から河川の影響も考えられることから、稲作についてはさらに難しい環境であったと考えられる。よって先と同様に周辺の稲作地よりイネの植物珪酸体はまた

らされているように思われる。

5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）から12世紀代（第Ⅳ-2遺構面）の試料1-12～1-20ではイネが多産しており、稲作が行われていた可能性は高いと判断されよう。

縄文時代晩期から5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）の試料1-21、1-22では若干のイネが検出されているのみであり、検出個数からは稲作の可能性は低いと判断されよう。しかしながら同層準と考えられている試料1-23や1-25から5,000個前後のイネが検出されており、少なくとも周辺部を含めこの時期玉櫛遺跡においては稲作が一部において営まれていたのではないかと思われる。同試料の花粉分析結果をみると、イネ科花粉はそれほど高い出現率ではないものの水田雑草を含む分類群であるオモダカ属が連続して検出されており、水田稲作の存在を示唆していることも考えられる。また同じ第Ⅶ包含層の5Dトレンチ試料からはわずかなイネが検出されているのみであるが、同試料の花粉分析においてはイネ科が多産しており、先のおモダカ属に加え同じ水田雑草を含む分類群であるミズアオイ属も多く検出されている。試料1-23～1-25堆積期は年代測定結果（ $2,590 \pm 80$ yrsBP）から時代としては縄文時代晩期と考えられる。よって玉櫛遺跡においては縄文時代晩期と比較的早い時期より水田稲作が行われていた可能性がある。しかしながらイネの検出個数は低めであり、試料1-24ではまったく得られないなど変動が大きいことからこの稲作についてはさらに十分検討して判断されるのが良いように思われる。

5Dトレンチ：縄文時代晩期から5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）の試料5-a、-bからは上記したようにわずかなイネが検出されたのみである。

6Dトレンチ：5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）から8～9世紀（第Ⅵ遺構面）の試料2-1、2-2ではイネが多産しており、この時期水田稲作が行われていた可能性は高いと判断されよう。また縄文時代晩期から5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）の試料2-3においては5,000個に達していないもののこれに近い数値を示しており、花粉分析において水田雑草と考えられる分類群も得られていることから、水田稲作が行われていた可能性はあるように思われる。しかしながら5,000個に達していないことから発掘状況などをふまえ総合的に判断されることが望まれる。

7Dトレンチ西壁：分析を行った各試料から多くのイネが検出されており、8～9世紀（第Ⅵ遺構面）以前から12世紀代（第Ⅳ-1遺構面）において稲作が行われていた可能性は高いと判断される。

8Dトレンチ東壁：分析を行った試料からすべて10,000個以上と多量のイネが検出されており、5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）から12世紀代（第Ⅳ-1遺構面）において稲作が行われていた可能性は高いと判断される。

8Dトレンチ南壁：分析を行った5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）以前の試料からイネは検出されず、少なくとも本地点のこの時期における稲作の可能性は低いと判断されよう。

9Dトレンチ：分析を行った各試料から多量のイネが検出されており、8～9世紀（第Ⅵ遺構面）から12世紀代（第Ⅳ-1遺構面）において稲作が行われていた可能性は高いと判断される。

以上のように玉櫛遺跡においては縄文時代晩期頃から5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）の頃より水田稲作が行われるようになったと考えられ、水域の影響をうけた時期には一部地域に限られた可能性はあるものの縄文時代晩期以降ほぼ連続して水田稲作が営まれていたと推察されよう。

(4) イネ科植物の変遷

3 Dトレンチ試料の結果を基に玉櫛遺跡におけるイネ科植物の変遷について記す。

年代測定結果から縄文時代晩期頃と考えられる時期から5世紀中頃～7世紀前半(第Ⅶ遺構面)の玉櫛遺跡では先に記したように一部において水田稲作が行われていた可能性がある。この時期ヨシ属(ヨシ、ツルヨシなど)が多産しており、珪藻分析から推測されている沼沢湿地にヨシ属が多く生育していたのであろう。また水田稲作が行われていたとすると、ヨシ属などが群落をみせている湿地を切り開き一部で営まれるようになったのであろう。また湿地周辺の丘陵部や微高地上には照葉樹林や針葉樹林が成立しており(花粉分析参照)、こうした森林の林縁部や空き地など日のあたる開けたところにネザサ節型のササ類(ケネザサ、ゴキダケなど)やウシクサ族(ススキ、チガヤなど)などが生育し、ケネザサーススキ群集といったような草地を一部に形成していたとみられる。なおケネザサは現在の関西の山麓や丘陵地に最も普通にみられるササである(北村・村田 1984)。

5世紀中頃～7世紀前半(第Ⅶ遺構面)から8～9世紀(第Ⅵ遺構面)には水域の影響も小さくなり、12世紀代(第Ⅳ-2遺構面)にかけて玉櫛遺跡の水田稲作は発展期を迎えた。これにより湿地に広く分布していたヨシ属は水田内や周辺水路などに生育地を狭められた。またこの水田内には他にタイヌビエなどのキビ族も雑草として生育していたと考えられ、花粉分析からオモダカ属やミズアオイ属といった水田雑草類も多くみられたであろう。さらに水田周辺の畦道などにノシバといったシバ属も生育するようになった。

この時期の遺跡周辺丘陵部や微高地上には照葉樹林やスギ林が成立しており、これらの林縁部や空き地には依然としてネザサ節型のササ類やウシクサ族が成育し、先に記したようなケネザサーススキ群集といったような草地が形成されていたとみられる。

12世紀代(第Ⅳ-1遺構面)から14世紀代(第Ⅲ遺構面)にかけて再び水域の影響が強まり、水田稲作も多少ともその影響をうけたものと推測される。しかしながら14世紀末～15世紀初(第Ⅱ遺構面)には土地は安定するようになり、水田稲作は再び発展期を迎えるようになった。

引用文献

藤原宏志「プラント・オパール分析法とその応用-先史時代の水田址探査-」『考古学ジャーナル』227 p.2-7 1984

北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑 木本編〔Ⅱ〕』保育社 545p 1984

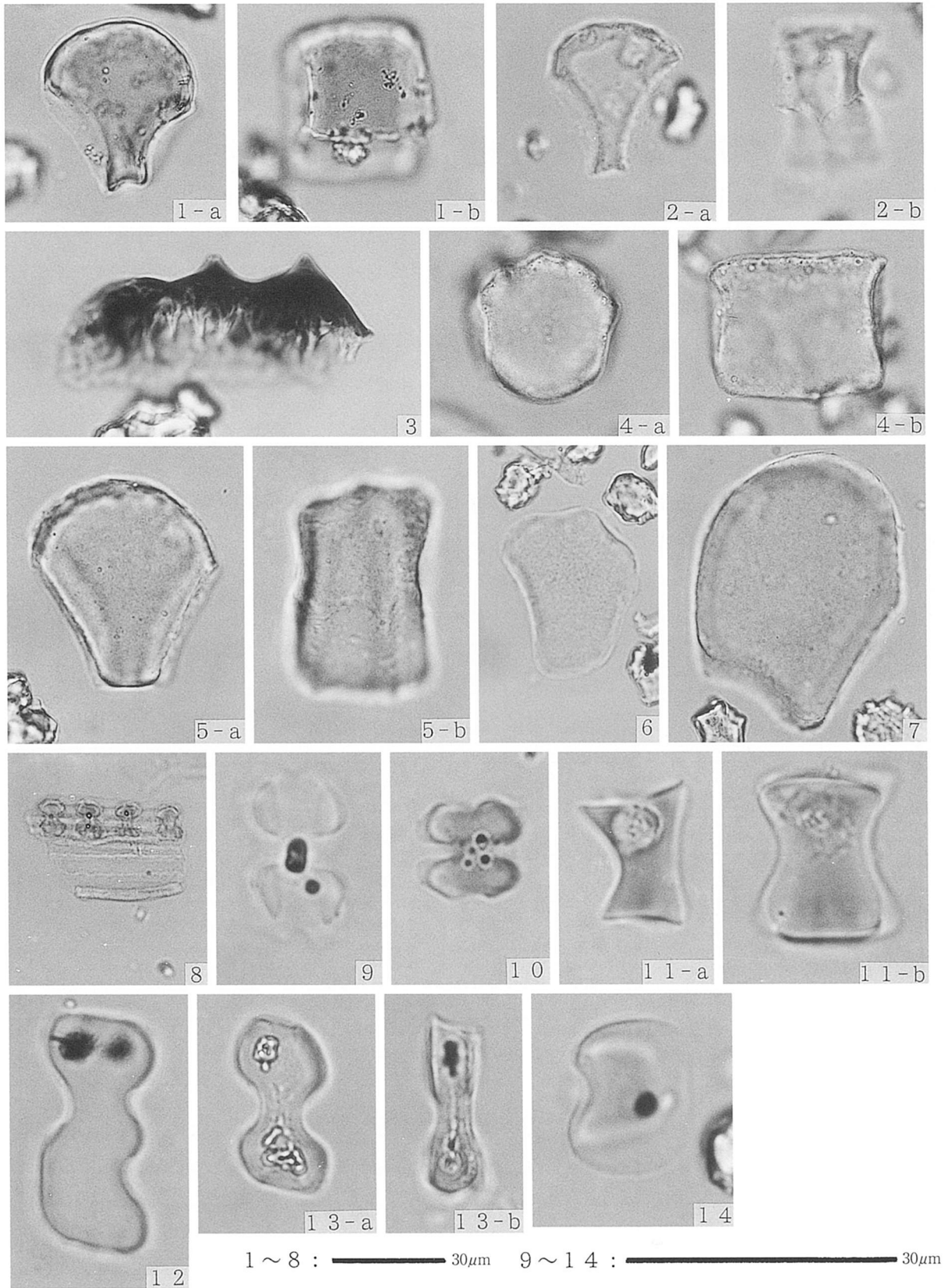


写真5 3Dトレンチの植物珪酸体

- 1、2イネ機動細胞珪酸体 (a:断面 b:側面) 1:1-9 2:1-25
 3イネ穎部破片 1-11 4キビ族機動細胞珪酸体 (a:断面 b:側面) 1-10
 5ネザサ節型機動細胞珪酸体 (a:断面 b:側面) 1-19
 6ウシクサ族機動細胞珪酸体 (断面) 1-19 7ヨシ属機動細胞珪酸体 (断面) 1-23
 8~10イネ属型単細胞珪酸体 8:1-11 9、10:1-1
 11タケ・ササ型単細胞珪酸体 1-16 12キビ族型単細胞珪酸体 1-24
 13スキ属型単細胞珪酸体 1-3 14ヨシ属型単細胞珪酸体 1-24

4. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ 山形 秀樹

(1) 試料と方法

試料は、3 Dトレンチ南壁から採取した有機質土1点、3 Dトレンチから出土した木片1点、6 Dトレンチから出土した木片4点、6 Dトレンチから採取した有機質土4点の併せて10点である。なお、有機質土試料については、125 μ mのフルイを用いて湿式篩い分けを行ない、フルイを通過したものだけを用いた。木片試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去した。有機質土試料は、酸処理を施して不純物を除去した。これら前処理された試料をアセチレンに調整した後、ガス比例計数管 (GPC) にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した (3 Dトレンチ木片を除くサンプル採取箇所については第6図を参照)。

(2) 結果

表3に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値-25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

表3 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP \pm 1 σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-1514 (GPC)	有機質土 3 D Tr 南壁 土層サンプル	-26.4	2590 \pm 80	cal BC 795	cal BC 830 - 755 (43.6%) cal BC 695 - 540 (56.4%)
PLD-1515 (GPC)	木片 3 D Tr	-26.1	2380 \pm 80	cal BC 405	cal BC 760 - 685 (25.2%) cal BC 545 - 380 (68.7%)
PLD-1516 (GPC)	木片 6 D Tr No. 1	-29.1	2740 \pm 70	cal BC 895	cal BC 940 - 820 (91.3%)
PLD-1517 (GPC)	木片 6 D Tr No. 2	-25.7	3160 \pm 80	cal BC 1430	cal BC 1520 - 1375 (90.9%)
PLD-1518 (GPC)	木片 6 D Tr No. 3	-28.4	2890 \pm 100	cal BC 1050	cal BC 1210 - 970 (88.4%)
PLD-1519 (GPC)	木片 6 D Tr No. 4	-28.0	2810 \pm 70	cal BC 970 cal BC 960 cal BC 935	cal BC 1040 - 895 (83.3%) cal BC 880 - 840 (16.7%)
PLD-1520 (GPC)	有機質土 6 D Tr No. 5	-26.2	2740 \pm 80	cal BC 895 cal BC 875 cal BC 860 cal BC 850 cal BC 845	cal BC 940 - 810 (90.8%)
PLD-1521 (GPC)	有機質土 6 D Tr No. 6	-25.9	2810 \pm 90	cal BC 970 cal BC 960 cal BC 935	cal BC 1050 - 835 (100%)
PLD-1522 (GPC)	有機質土 6 D Tr No. 7	-26.2	3640 \pm 90	cal BC 2025 cal BC 1995 cal BC 1980	cal BC 2135 - 2075 (25.0%) cal BC 2070 - 1890 (75.0%)
PLD-1523 (GPC)	有機質土 6 D Tr No. 8	-25.8	3520 \pm 90	cal BC 1880 cal BC 1840 cal BC 1830 cal BC 1785	cal BC 1945 - 1740 (97.1%)

5. 玉櫛遺跡の古環境変遷

パレオ・ラボ 鈴木 茂

これまで珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析について述べてきたが、ここではそれらをまとめる形で玉櫛遺跡の古環境変遷について記す。

年代測定結果より縄文時代晩期と推測される頃から5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）の玉櫛遺跡では湖沼あるいは沼沢湿地環境であったと考えられ、こうした環境のもと一部において水田稲作が行われていた可能性が推察される。しかしながらこの時期は水域の影響が強く、営まれていたとしても水田稲作は安定してなかったと思われる。またヨシ属（ヨシ、ツルヨシなど）が多産しており、この沼沢湿地にヨシ属が多く生育していたのであろう。なお水田稲作が行われていたとすると、ヨシ属が群落を形成していた湿地を切り開き一部で営まれるようになったことが推察される。

この時期の沼沢湿地周辺丘陵部や微高地上にはアカガシ亜属を主体にシイノキ属、ヤマモモ属などを交えた照葉樹林やスギ属を主体にイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）といった針葉樹林が成立していた。またコナラ亜属などの落葉広葉樹類もこれら森林に交じるように生育していた。さらにこうした森林の林縁部や空き地など日のあたる開けたところにネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）やウシクサ族（ススキ、チガヤなど）などが生育し、ケネザサ－ススキ群集といったような草地を一部に形成していたとみられる。なおケネザサは現在の関西の山麓や丘陵地に最も普通にみられるササである（北村・村田 1984）。

5世紀中頃～7世紀前半（第Ⅶ遺構面）から8～9世紀（第Ⅵ遺構面）頃の遺跡周辺低地部は水域の影響も小さくなり、水田稲作が定着していったと推測される。これにより湿地に広く分布していたヨシ属は水田内や周辺水路などに生育地を狭められた。この水田内にはオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、キビ族（タイヌビエなど）などが水田雑草として生育していたと考えられ、水田周辺の畦道などにはノシバといったシバ属も生育するようになった。また一部湿地にはヨシ属やガマ属、ツユクサ属、イボクサ属、ツリフネソウ属、ミソハギ属、ゴキヅル属－アマチャヅル属などの湿地性草本も生育していたであろう。

この時期の遺跡周辺丘陵部や微高地上には照葉樹林やスギ林が成立しており、これらの林縁部や空き地には依然としてネザサ節型のササ類やウシクサ族が成育し、加えてヨモギ属やシダ植物もみられ、タケニグサ属が生育するような荒地のような所の存在も推測される。

8世紀～9世紀（第Ⅵ遺構面）から12世紀代（第Ⅳ遺構面）の遺跡周辺低地部は一部地域（3Dや7Dトレンチなど）では河川の影響がみられるものの湿地環境の広がりが予想され、12世紀代（第Ⅳ－2遺構面）にかけて玉櫛遺跡の水田稲作は発展期を迎えた。この水田内や周囲には上記したような雑草類が生育していた。また稲作の他、玉櫛遺跡では10世紀代に入ってカキノキが栽培されていた可能性が考えられ、12世紀代に入ってソバの栽培も開始されたものと予想される。

この頃の遺跡周辺丘陵部や微高地上には引き続き照葉樹林やスギ属の林が広く成立していたが、ヒノキ類は縮小した。その後照葉樹林の主要素であるアカガシ亜属に減少傾向がみられ、代わってマツ属複

維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が比較的多くみられるようになった。こうした現象の一要因として、水田稲作の発展にともない材質の堅いアカガシ亜属が鋤鍬などの農具に多く利用され、アカガシ亜属の林が破壊されたことが考えられる。千葉県茂原市の国府積遺跡では鋤鍬にアカガシ亜属を用いるという強い指向性が示されており（能城・鈴木 1993）、玉櫛遺跡においても同様であったと推察される。この破壊されたアカガシ亜属の林の跡地にニヨウマツ類が侵入し、アカマツ林といったような二次林が形成された。またこれらの林縁部や空き地には引き続きネザサ節型のササ類やウシクサ族が成育し草地が形成されていた。

12世紀代（第Ⅳ-1遺構面）から14世紀代（第Ⅲ遺構面）の遺跡周辺低地部は西側（3Dトレンチ）で湖沼環境がみられるなど水域の影響が強まり、水田稲作は多少ともその影響をうけたことが推測される。この時期の植生については花粉化石がほとんど得られず言及することはできないが、少なくとも水田内にはキビ族が、畦道などにはシバ属が、周辺林縁部にはネザサ節型のササ類やウシクサ族が成育していたであろう。

14世紀代（第Ⅲ遺構面）から14世紀末～15世紀初（第Ⅱ遺構面）の遺跡周辺低地部は水の影響が弱まり、再び水田稲作は発展期をむかえるようになった。なお植生については先の時代と同様である。

引用文献

北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑 木本編〔Ⅱ〕』保育社 p.545 1984

能城修一・鈴木三男「国府積遺跡から出土した木製品の樹種」『財団法人長生郡市文化財センター調査報告 第15集 国府積遺跡群』財団法人長生郡市文化財センター p.285-306 1993

第3節 古墳時代須恵器のX線回折試験および化学分析試験

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は表4 胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15KV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は表4 胎土性状表に示す通りである。

表4 右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

第138図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mont}/(\text{Mont}+\text{Mica}+\text{Hb}) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1～4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第138図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイアグラム

第139図に示すように菱形ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の内、

a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mont}/\text{Mont}+\text{Ch} \times 100$ と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第139図に示すとおりである。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法 (10元素全体で100%になる) で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$, $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$, $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 分析結果

3-1 X線回折試験結果

3-1-1 タイプ分類

表4胎土性状表には玉櫛遺跡 (その4) 出土土器10個と対比試料として新免遺跡出土土器5個の15個が記載してある。表3に示すように土器胎土はAタイプだけが検出された。

Aタイプ: Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

須恵器は高温で焼成されているために鉱物が分解し、ガラスに変質している。そのため、4成分が検出されない。

玉櫛-7と新免-14はともに生焼けで、本来の鉱物組成として4成分が検出されない。

3-1-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのこの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第142図Qt-Pl図に示すように、玉櫛遺跡と新免遺跡の土器はQtの強度が低い領域から高い領域にかけてQt-小、Qt-中、Qt-大の3領域に分布する。(SiO₂-Al₂O₃の相関から土器胎

土は SiO_2 が低い領域のタイプ-Iと SiO_2 が高い領域のタイプ-II、“その他”に分類されており、その分類にしたがって一部を記述する。)

Q t - 小：Q t が1200~2500、P l が60~90の領域にあり、タイプ-IIの土器が集中する。

Q t - 中：Q t が2600~3600、P l が70~90の領域にあり、タイプ-Iと“その他”が共存する。

Q t - 大：新免-14の土器はQ t が4300と大きく、他の土器とは明らかに異質である。

4 化学分析結果

表5 化学分析表に示すように、玉櫛遺跡（その4）出土土器10個と対比試料として新免遺跡出土土器5個の15個が記載してある。

分析結果に基づいて第143図 SiO_2 - Al_2O_3 図、第144図 Fe_2O_3 - MgO 図、第145図 K_2O - CaO 図、第146図 TiO_2 - MnO 図を作成した。

4-1 SiO_2 - Al_2O_3 の相関について

第143図 SiO_2 - Al_2O_3 図に示すように SiO_2 が低い領域から高い領域に向けてタイプ-Iとタイプ-II、“その他”に分類された。

タイプ-I： SiO_2 が60~65%、 Al_2O_3 が24~30%の領域にあり、玉櫛-6と7が該当し、Q t - 大の新免-14が混在する。

タイプ-II： SiO_2 が66~69%、 Al_2O_3 が18~23%の領域にあり、玉櫛遺跡と新免遺跡の土器が共存する。

“その他”：新免-15の土器は SiO_2 と Al_2O_3 がともに小さく、玉櫛-4は Al_2O_3 が小さく、玉櫛-5の甕は SiO_2 が大きく、異質である。

4-2 Fe_2O_3 - MgO の相関について

第144図 Fe_2O_3 - MgO 図に示すように、タイプ-Iとタイプ-IIは Fe_2O_3 が5~7%の領域で共存するが、 Fe_2O_3 が6%以上の領域には新免遺跡の土器が分布し、 Fe_2O_3 が5~6%の領域には玉櫛遺跡の土器が分布し、明らかに差があることがわかる。この差は玉櫛遺跡と新免遺跡は近い関係にありながら、微妙に粘土採掘位置が異なるのではないかと推察される。玉櫛-5は Fe_2O_3 が4.38%と小さく、玉櫛-4と新免-15は Fe_2O_3 が8.6~8.8%と大きく、この3個は異質である。

4-3 K_2O - CaO の相関について

第145図 K_2O - CaO 図に示すように、 K_2O が2.1~2.9%、 CaO が0.08~0.25%の領域にはタイプ-IIの土器が集中する。この領域の外には、玉櫛-1、4、6、8、新免-14、15が分散して分布する。

この中で新免-14はQ t - 大、玉櫛-4と新免-15は Fe_2O_3 が大で異質であり、玉櫛-8は K_2O が4.2%と大きく、異質である。玉櫛-1は CaO が0.1%ほどタイプ-IIの領域より高いが、他の酸化物との関連からタイプ-IIに属するものと判断される。玉櫛-6も同様に、タイプ-Iに近いものと判断される。

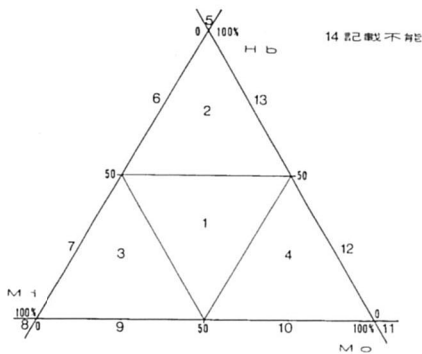
4-4 TiO_2 - MnO の相関について

第146図 TiO_2 - MnO 図に示すように、 TiO_2 が0.8~1.1%、 MnO が0~0.3%の領域にはタイプ-IIの土器が共存し、玉櫛-5、8、新免-14、15の4個と玉櫛-7はタイプ-IIの領域の外に分散して分布する。

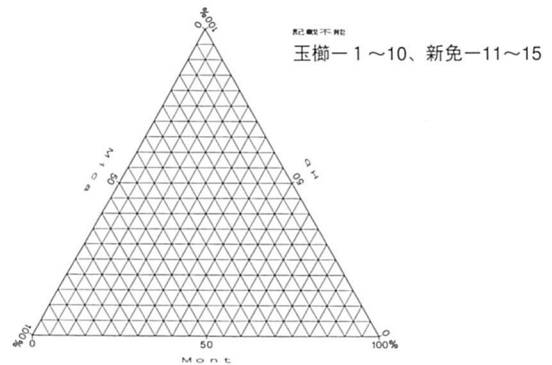
5 まとめ

玉櫛遺跡と新免遺跡出土土器の分析結果に基づいて表6 組成分類表を作成した。

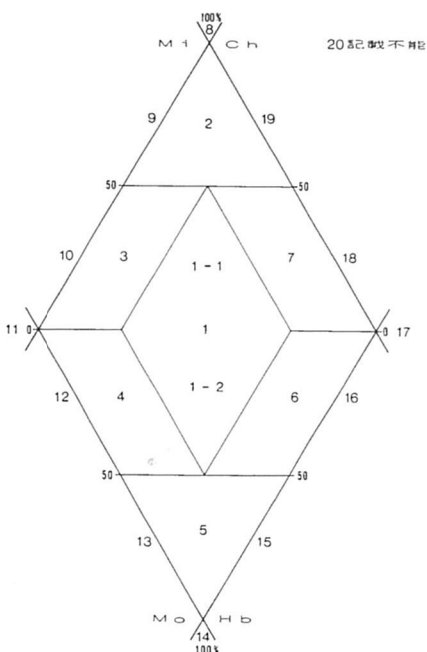
- 1) タイプ-Iの玉櫛-6と7は坯身で組成的に近い。
- 2) タイプ-IIは玉櫛-1、2、3、9と新免-11、12、13の7個の土器で、組成的には近い。しかし、近い関係にありながら玉櫛遺跡の土器と新免遺跡の土器では微妙に Fe_2O_3 の領域が異なり、近傍の関係にあるのではなかろうか。
- 3) タイプ-IIの玉櫛-10の坯蓋は粘土の組成はタイプ-IIであるがQt-中の領域にあり、タイプ-IIの中では異質である。
- 4) 玉櫛-4は Fe_2O_3 -大、 Al_2O_3 -低で異質である。
- 5) 玉櫛-5の甕は SiO_2 -大、 Fe_2O_3 -小で異質である。
- 6) 玉櫛-8は $K_2O \cdot TiO_2$ -大で異質である。
- 7) 新免-14は $K_2O \cdot TiO_2$ -小で、Qt-大で異質である。
- 8) 新免-15は SiO_2 -小、 Fe_2O_3 -大で異質である。



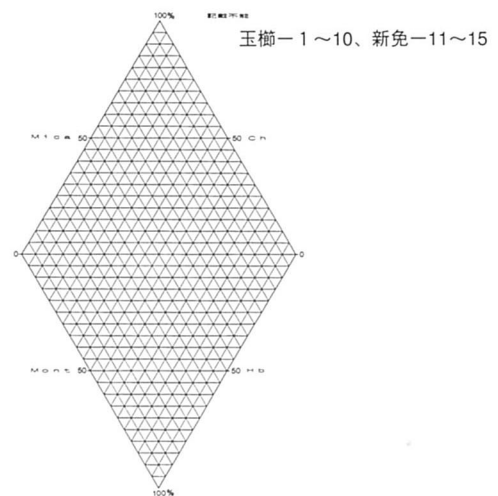
第138図 三角ダイアグラム位置分類図



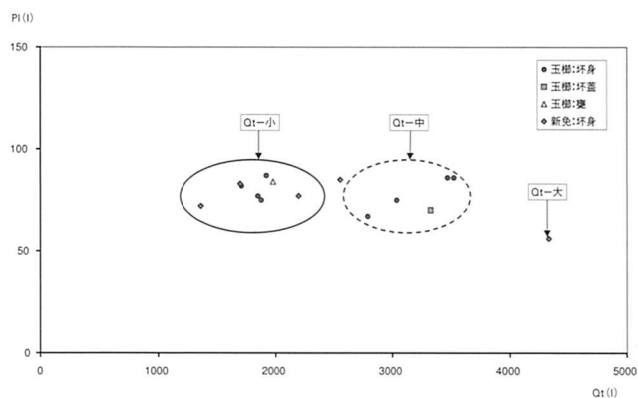
第140図 Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム



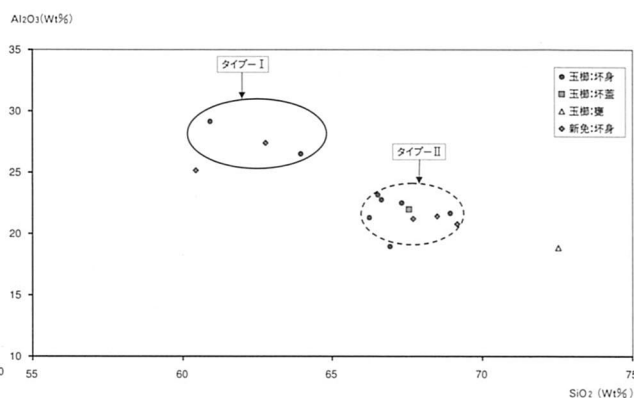
第139図 菱形ダイアグラム位置分類図



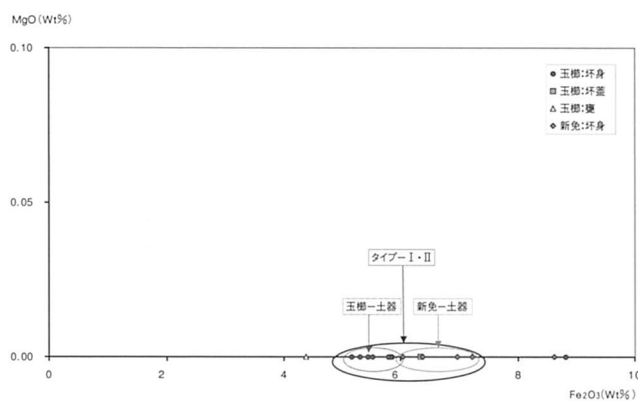
第141図 Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイアグラム



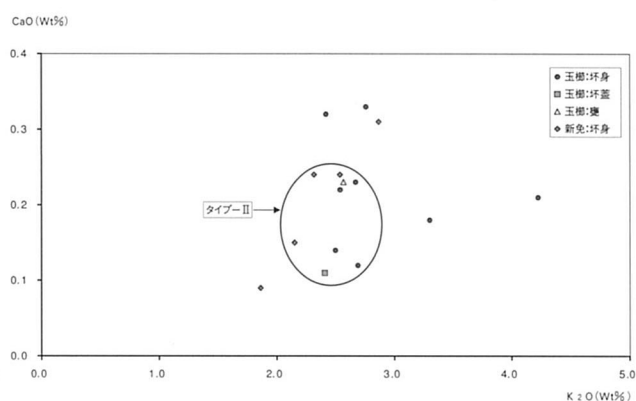
第142図 Qt-P I 図



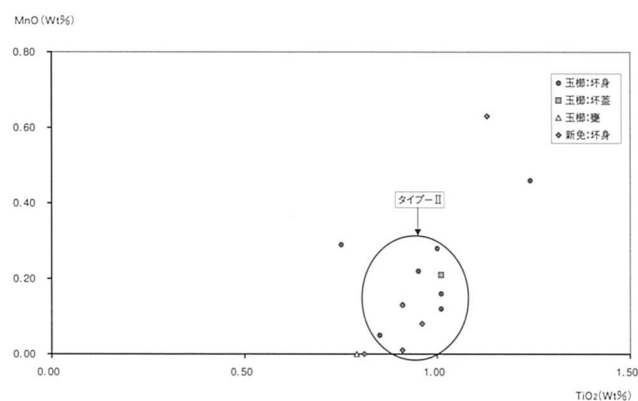
第143図 SiO₂-Al₂O₃ 図



第144図 Fe₂O₃-MgO 図



第145図 K₂O-CaO 図



第146図 TiO₂-MnO 図

表 4 胎土性状表

試料 No	出土遺構	タイプ 分類	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														備 考		
			Mo-M+Hb	Mo-Ch,M+Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Cnst	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	器 種	器 形	時期
玉櫛-1	4D・VII面・土坑40105	A	14	20					1877	75	456	158					147	須恵器	坏身	5CL	
玉櫛-2	4D・VII面・土坑40105	A	14	20					1920	87	539	209	93				190	須恵器	坏身	5CL	
玉櫛-3	4D・VII面・土坑40105	A	14	20					1849	77	609	190					159	須恵器	坏身	5CL	
玉櫛-4	4D・VII面・土坑40105	A	14	20					3526	86	281	104					90	須恵器	坏身	5CL	
玉櫛-5	4D・VII面・土坑40105	A	14	20					1978	84	799	222					174	須恵器	坏身	5CL	
玉櫛-6	4D・VII面・土坑40105	A	14	20					2788	67	201	138	170				137	須恵器	坏身	5CL	
玉櫛-7	4D・VII面・土坑40105	A	14	20					3473	86						122		須恵器	坏身一焼成不良	5CL	
玉櫛-8	4D・VII面・土坑40105	A	14	20					3036	75	185	146					132	須恵器	坏身	5CL	
玉櫛-9	6D・VI層	A	14	20					1710	82	458	184					212	須恵器	坏身	5CL	
玉櫛-10	6D・VI層	A	14	20					3325	70	239	153					138	須恵器	坏蓋	5CL	
新免-11	(19次)SD-4	A	14	20					1360	72	1285	259					226	須恵器	坏身	5CL	
新免-12	(19次)SD-4	A	14	20					2198	77	843	164					142	須恵器	坏身	5CL	
新免-13	(19次)SD-4	A	14	20					1700	83	1205	184					176	須恵器	坏身	5CL	
新免-14	(19次)SD-4	A	14	20					4332	56								須恵器	坏身一生焼け	5CL	
新免-15	(19次)SD-4	A	14	20					2555	85	134	94					80	須恵器	坏身	5CL	

Mont: モンモリロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 (Ch:Fe 一次反射, Ch:Mg 二次反射) Qt: 石英 Pl: 斜長石 Cnst: クリストバライト
Mullite: ムライト K-fels: カリ長石 Halloy: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 普通輝石 Py: 紫輝石

表 5 化学分析表

試料番号	出土遺構	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	NiO	Total	器 種	器 形	時期
玉櫛-1	4D・VII面・土坑40105	0.39	0.00	23.17	66.52	2.76	0.33	0.95	0.22	5.44	0.22	100.00	須恵器	坏身	5CL
玉櫛-2	4D・VII面・土坑40105	0.33	0.00	22.78	66.64	2.54	0.22	0.91	0.13	5.85	0.61	100.01	須恵器	坏身	5CL
玉櫛-3	4D・VII面・土坑40105	0.24	0.00	22.52	67.31	2.69	0.12	1.00	0.28	5.83	0.00	99.99	須恵器	坏身	5CL
玉櫛-4	4D・VII面・土坑40105	0.56	0.00	18.96	66.93	3.30	0.18	1.01	0.16	8.81	0.10	100.01	須恵器	坏身	5CL
玉櫛-5	4D・VII面・土坑40105	0.63	0.00	18.84	72.56	2.57	0.23	0.79	0.00	4.38	0.00	100.00	須恵器	坏身	5CL
玉櫛-6	4D・VII面・土坑40105	0.32	0.00	29.15	60.91	2.42	0.32	1.01	0.12	5.52	0.22	99.99	須恵器	坏身	5CL
玉櫛-7	4D・VII面・土坑40105	0.22	0.00	26.51	63.94	2.67	0.23	0.75	0.29	5.30	0.09	100.00	須恵器	坏身一焼成不良	5CL
玉櫛-8	4D・VII面・土坑40105	0.51	0.00	21.31	66.24	4.23	0.21	1.24	0.46	5.79	0.00	99.99	須恵器	坏身	5CL
玉櫛-9	6D・VI層	0.39	0.00	21.68	68.94	2.50	0.14	0.85	0.05	5.16	0.30	100.01	須恵器	坏身	5CL
玉櫛-10	6D・VI層	0.39	0.00	21.98	67.55	2.41	0.11	1.01	0.21	6.34	0.00	100.00	須恵器	坏蓋	5CL
新免-11	(19次)SD-4	0.43	0.00	21.20	67.69	2.15	0.15	0.91	0.13	7.22	0.12	100.00	須恵器	坏身	5CL
新免-12	(19次)SD-4	0.34	0.00	21.42	68.50	2.54	0.24	0.91	0.01	6.04	0.00	100.00	須恵器	坏身	5CL
新免-13	(19次)SD-4	0.08	0.00	20.78	69.17	2.32	0.24	0.96	0.08	6.37	0.00	100.00	須恵器	坏身	5CL
新免-14	(19次)SD-4	0.10	0.00	27.40	62.77	1.86	0.09	0.81	0.00	6.97	0.00	100.00	須恵器	坏身一生焼け	5CL
新免-15	(19次)SD-4	0.59	0.00	25.15	60.44	2.87	0.31	1.13	0.63	8.62	0.27	100.01	須恵器	坏身	5CL
												0.00			

表 6 組成分類表

試料番号	出土遺構	器 形	Q t : 分類
タイプ I			
玉櫛-6	4D・VII面・土坑40105	坏身	Q t : 中
玉櫛-7	4D・VII面・土坑40105	坏身一焼成不良	Q t : 中
タイプ II			
玉櫛-1	4D・VII面・土坑40105	坏身	Q t : 小
玉櫛-2	4D・VII面・土坑40105	坏身	Q t : 小
玉櫛-3	4D・VII面・土坑40105	坏身	Q t : 小
玉櫛-9	6D・VI層	坏身	Q t : 小
新免-11	(19次)SD-4	坏身	Q t : 小
新免-12	(19次)SD-4	坏身	Q t : 小
新免-13	(19次)SD-4	坏身	Q t : 小
タイプ II			
玉櫛-10	6D・VI層	坏蓋	Q t : 中
Fe2O3-大、Al2O3-低			
玉櫛-4	4D・VII面・土坑40105	坏身	Q t : 中
SiO2-大、Fe2O3-小			
玉櫛-5	4D・VII面・土坑40105	甕	Q t : 中
K2O・TiO2-大			
玉櫛-8	4D・VII面・土坑40105	坏身	Q t : 中
K2O・TiO2-小			
新免-14	(19次)SD-4	坏身一生焼け	Q t : 大
SiO2-小、Fe2O3-大			
新免-15	(19次)SD-4	坏身	Q t : 中

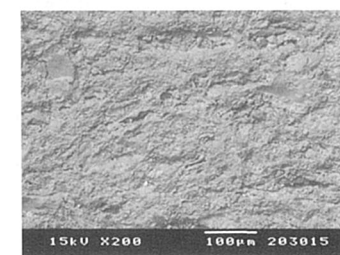
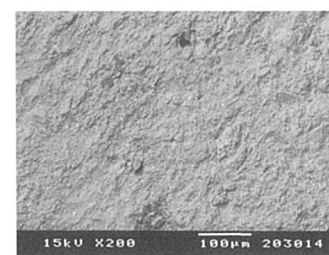
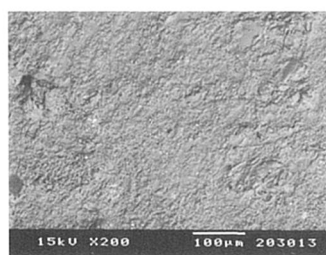
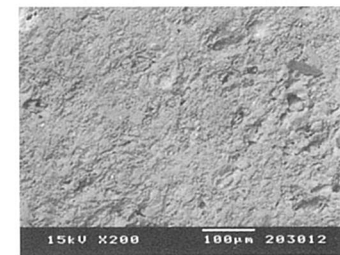
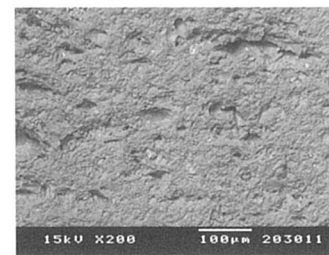
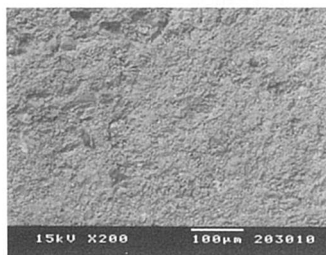
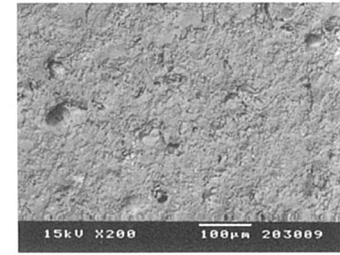
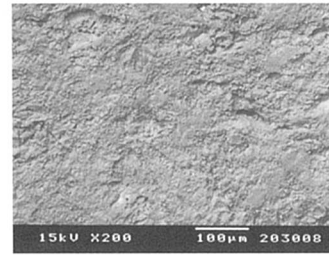
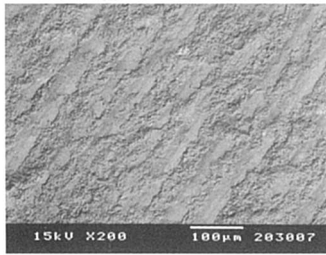
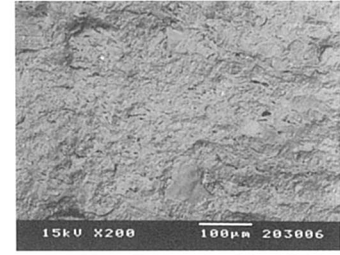
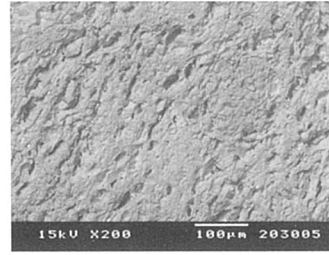
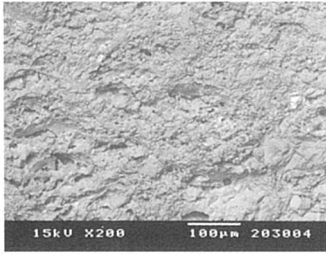
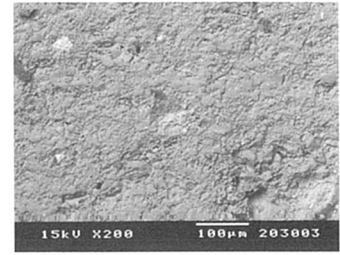
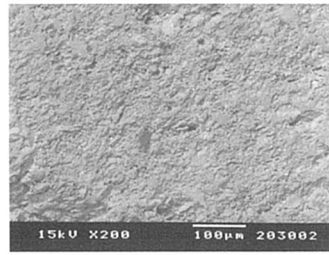
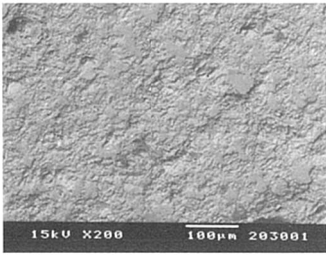


写真6 須恵器断面電子顕微鏡写真

第4節 玉櫛遺跡（その4） 樹種鑑定結果

山口 誠治

1. はじめに

玉櫛遺跡出土の木製品の樹種について報告する。出土した木製品の全体を把握することは、古代人が使用していた樹種を知ることと同時に、古代の環境を知る上でも大切なことである。今回出土した木製品は、土木工事や治水事業の一端を知る木製遺物であり、その器種は堰を構築した杭類である。

2. 樹種鑑定結果について

鑑定方法としては、木製品の木口・柀目・板目方向の徒手切片を作製して生物顕微鏡により観察し、樹種の識別を行った。また、杭類の年輪を調べるために木製遺物の輪切り試料から年輪数を数得た。その結果については以下の一覧表（表7、8）に示す。

表7 樹種鑑定一覧表（1）

試料名	掲載No.	Tr.	遺構面	遺構名	樹種名	試料名	掲載No.	Tr.	遺構面	遺構名	樹種名
杭1	737	3D	II-1	溝30016	ヤナギ属	杭32	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	
杭2	741	3D	II-1	溝30016	ヒノキ	杭33	8D	II-1	溝80143	コナラ亜属	
杭3	738	3D	II-1	溝30016	コナラ亜属	杭34	8D	II-1	溝80143	スギ	
杭4	743	3D	II-1	溝30016	アカガシ亜属	杭35	8D	II-1	溝80143	スギ	
杭5	742	3D	II-1	溝30016	ヒノキ	杭36	8D	II-1	溝80143	コナラ亜属	
杭6	744	3D	II-1	溝30016	ケヤキ	杭37	8D	II-1	落込み80145	コナラ亜属	
杭7	739	3D	II-1	溝30016	ケヤキ	杭38	8D	II-1	落込み80145	コナラ亜属	
杭8	740	3D	II-1	溝30016	スギ	杭39	8D	II-1	落込み80145	コナラ亜属	
流木	3D	II-1	溝30016	ブナ科	杭列1-1	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
柱根	4D	II-1	柱穴40015	コナラ亜属	杭列1-2	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
柱根	8D	II-1	柱穴80030	ヤナギ属	杭列1-3	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
柱根	8D	II-1	柱穴80033	コナラ亜属	杭列1-4	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭1	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列1-5	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭2	781	8D	II-1	溝80147	クリ	杭列1-6	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属	
杭3	780	8D	II-1	溝80147	スギ	杭列1-7	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ	
杭4	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列1-8	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭5	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列1-9	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭6	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列1-10	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭7	779	8D	II-1	溝80143	スギ	杭列1-11	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ	
杭8	8D	II-1	溝80143	サカキ	杭列1-12	771	3D	III-1	自然流路30019	アカマツ	
杭9	8D	II-1	溝80143	アカマツ	杭列1-13	3D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭10	8D	II-1	溝80143	サカキ	杭列1-14	3D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
	8D	II-1	落込み80145	マツ科	杭列1-15	3D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭11	8D	II-1	落込み80145	コナラ亜属	杭列2-1	772	3D	III-1	自然流路30019	アカマツ	
杭12	8D	II-1	落込み80145	ヤナギ属	杭列2-2	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭13	8D	II-1	落込み80145	ヤナギ属	杭列2-3	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭14	8D	II-1	落込み80145	コナラ亜属	杭列2-4	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭15	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列2-5	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭16	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列2-6	773	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ	
杭18	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列2-7	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭19	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列2-8	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭20	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列2-9	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭21	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列2-10	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭22	719	8D	II-1	溝80147	スギ	杭列2-11	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属	
杭23	8D	II-1	溝80147	アカマツ	杭列3-1	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭24	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列3-2	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭25	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列3-3	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		
杭26	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列3-4	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭27	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列3-5	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭28	8D	II-1	溝80147	ヤブツバキ	杭列3-6	774	6D	III-1	自然流路30019	ヒノキ	
杭29	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列3-7	775	6D	III-1	自然流路30019	ヒノキ	
杭30	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列3-10	6D	III-1	自然流路30019	コナラ亜属		
杭31	8D	II-1	溝80147	コナラ亜属	杭列3-11	6D	III-1	自然流路30019	アカマツ		

表8 樹種鑑定一覧表(2)

試料名	掲載No.	Tr.	遺構面	遺構名	樹種名	試料名	掲載No.	Tr.	遺構面	遺構名	樹種名
杭列4-1	745	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	柱根	728	9D	Ⅳ-3	柱穴90178	スギ
杭列4-2	746	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭1	785	8D	V	溝80305	アカマツ
杭列4-3	747	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭2	786	8D	V	溝80305	スギ
杭列4-4	748	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭3	789	8D	V	溝80305	スギ
杭列4-5	749	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭4	787	8D	V	溝80305	アカマツ
杭列4-6	750	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭5	788	8D	V	溝80305	スギ
杭列5-1	753	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	サカキ	杭6	790	8D	V	溝80305	スギ
杭列5-2	754	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭7	791	8D	V	溝80305	スギ
杭列5-3	755	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭8	8D	V	溝80305	スギ	
杭列5-4	751	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭9	8D	V	溝80305	スギ	
杭列5-5	752	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭10	8D	V	溝80305	スギ	
杭列5-6	756	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭11	8D	V	溝80305	アカガシ亜属	
杭列6-1	776	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭12	8D	V	溝80305	ヤブツバキ	
杭列6-2	777	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭13	8D	V	溝80305	スギ	
杭列6-3	778	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭14	8D	V	溝80305	スギ	
杭列7-1	757	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭15	8D	V	溝80305	スギ	
杭列7-2	758	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	サカキ	杭16	8D	V	溝80305	スギ	
杭列7-3	759	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭17	8D	V	溝80305	スギ	
杭列7-4	760	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭18	8D	V	溝80305	スギ	
杭列7-5	761	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭19	8D	V	溝80305	スギ	
杭列7-6	762	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭20	8D	V	溝80305	スギ	
杭列7-7	763	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭21	8D	V	溝80305	スギ	
杭列7-8	764	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭22	8D	V	溝80305	スギ	
杭列8-1	6D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭23	8D	V	溝80305	スギ		
杭列8-2	6D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭24	8D	V	溝80305	スギ		
杭列8-3	6D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭25	8D	V	溝80305	スギ		
杭列8-4	6D	Ⅲ-1	自然流路30019	モミ	杭26	8D	V	溝80305	アカマツ		
杭列9-1	765	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭27	8D	V	溝80305	スギ	
杭列9-2	766	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭28	8D	V	溝80305	スギ	
杭列9-3	768	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭29	8D	V	溝80305	スギ	
杭列9-4	767	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭30	8D	V	溝80305	スギ	
杭列9-5	769	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭31	8D	V	溝80305	スギ	
杭列9-7	770	3D	Ⅲ-1	自然流路30019	スギ	杭32	8D	V	溝80305	スギ	
	6D	Ⅲ-1	自然流路30019	アカマツ	杭33	8D	V	溝80305	スギ		
杭2	782	9D	Ⅲ-1	土坑90062	スギ	杭34	8D	V	溝80305	スギ	
杭5	783	9D	Ⅲ-1	土坑90062	スギ	杭35	8D	V	溝80305	スギ	
杭6	784	9D	Ⅲ-1	土坑90062	スギ	杭36	8D	V	溝80305	スギ	
杭11	720	9D	Ⅲ-1	土坑90062	ヒノキ	杭37	8D	V	溝80305	スギ	
柱根	729	9D	Ⅲ-1	柱穴90070	スギ	杭38	8D	V	溝80305	スギ	
柱根	10D	Ⅲ-1	柱穴100036	コナラ亜属	杭39	8D	V	溝80305	スギ		
柱根	732	10D	Ⅲ-1	柱穴100052	スギ	杭1	9D	V	溝90209	マツ科	
柱根	10D	Ⅲ-1	柱穴100073	サカキ	杭2	9D	V	溝90209	マツ科		
柱根	10D	Ⅲ-1	柱穴100076	スギ	杭3	9D	V	溝90209	マツ科		
柱根	10D	Ⅲ-1	柱穴100085	トチノキ	杭4	9D	V	溝90209	ムクノキ		
柱根	4D	Ⅲ-3	柱穴40047	スギ	杭5	9D	V	溝90209	スギ		
柱根	4D	Ⅲ-3	柱穴40053	スギ	杭6	9D	V	溝90209	グリ		
柱根	4D	Ⅲ-3	柱穴40056	スギ	杭7	9D	V	溝90209	マツ科		
柱根	4D	Ⅲ-3	柱穴40059	コナラ亜属	杭8	9D	V	溝90209	ヒノキ		
柱根	7D	Ⅳ-1	柱穴70016	ヤマグワ	杭9	9D	V	溝90209	スギ		
柱根	731	9D	Ⅳ-1	柱穴90120	スギ	杭10	9D	V	溝90209	スギ	
柱根	9D	Ⅳ-1	柱穴90125	カヤ	杭11	9D	V	溝90209	スギ		
柱根	733	10D	Ⅳ-1	柱穴100079	スギ	杭12	9D	V	溝90209	スギ	
柱根	10D	Ⅳ-1	柱穴100111	サカキ	流木	3D	Ⅶ	溝30099	スギ		
	7D	Ⅳ-1	層	ヤマグワ	柱根	734	8D	Ⅶ	柱穴80312	アカガシ亜属	
柱根	9D	Ⅳ-3	柱穴90166	ヤマグワ	柱根	736	8D	Ⅶ	柱穴80313	サカキ	
柱根	9D	Ⅳ-3	柱穴90170	トチノキ	柱根	8D	Ⅶ	柱穴80316	アカガシ亜属		
柱根	730	9D	Ⅳ-3	柱穴90176	スギ	柱根	735	8D	Ⅶ	柱穴80317	アカガシ亜属

[鑑定した樹種の組織的特徴について]

スギ (学名: *Cryptomeria japonica*) 78点

鑑定したスギの顕微鏡的構成要素は、仮道管と放射組織だけの簡単な構造で、樹脂細胞も樹脂道も現れない。放射組織は板目方向に1細胞幅の単列、柎目方向に1~10細胞高以下で、放射柔細胞の分野壁孔が典型的なスギ型であった。

ヒノキ (学名: *Chamaecyparis obtusa*) 5点

鑑定したヒノキは、仮道管、柔細胞と放射組織からなり、樹脂道はなく有縁壁孔はほとんどが単列であり、分野壁孔はヒノキ型壁孔であることを確認した。

マツ科 (学名: *Pinaceae*) 5点

マツ科は、仮道管、垂直・水平両樹脂道と放射組織からなり、分野壁孔は窓状壁孔でありアカマツとははっきりと確認でなかったのでマツ科とした。

アカマツ (学名: *Pinus densiflora*) 42点

アカマツは仮道管、樹脂道と放射組織からなり、放射仮道管の内壁は内腔に向かって鋸歯状に突出し二葉松の特徴を示していた。分野壁孔は窓状であった。

モミ (学名: *Abies firma*) 1点

モミは仮道管と放射組織だけからなり、黒褐色の樹脂を含んだ樹脂細胞を確認した。分野壁孔はスギ型であった。

カヤ (学名: *Torreya nucifera*) 1点

カヤは仮道管と放射組織からなり、特徴としては仮道管の壁で有縁壁孔とらせん肥厚を確認した。分野壁孔はヒノキ型であった。

コナラ亜属 (学名: *Quercus serrata*) 42点

コナラ亜属はクヌギほど大きい道管ではないが、年輪界に沿って1~3列並ぶような環孔材で、小道管は火炎状に並んでおり、柾目面での放射組織は単列放射組織と典型的な広放射組織であることを確認した。

アカガシ亜属 (学名: *Quercus sp.*) 5点

アカガシ亜属は木口面で道管が放射状になる放射孔材であり、柾目面では単穿孔の平伏細胞(同性)で構成されている放射組織を観察して、板目面で単列放射組織と複合放射組織を認めることで判断した。

クリ (学名: *Castanea crenata*) 2点

クリは道管が年輪界に沿って存在し、小道管が単独あるいは2~3個集まって火炎状に配列する環孔材で、柾目面の道管は単穿孔で放射組織は同性平伏細胞からなっていることも確認し、板目面の放射組織は単列であって均等に分布していた。

ヤブツバキ (学名: *Camellia japonica*) 10点

ヤブツバキは道管、繊維状仮道管、柔組織と放射組織からなり、道管は単独で2~4個接続したものが木口面にはほぼ一様に散布した散孔材で、放射組織は接線方向に1~4細胞幅、軸方向に5~20細胞高の単列で異性の多列をなし直立細胞及び平伏細胞から成り立っていることを確認した。

サカキ (学名: *Cleyera japonica*) 7点

サカキは道管、繊維状仮道管、真正木繊維、柔組織と放射組織からなり、道管孔は単独で接線方向または斜方向に2~3個接続し、その外形は多角形を呈しており、放射組織は接線方向に1細胞幅あった。軸方向には1~45細胞高で異性の平伏細胞と直立または方形細胞層が混在していることを確認した。

ブナ類 (学名: *Fagus sp.*) 1点

鑑定したブナ類は、道管、真正木繊維、柔組織と放射組織で、その分布は散孔材を呈していたが、環孔材的な傾向で、放射組織は1細胞幅の単列放射組織から15~20細胞幅の広放射組織が混在していることを確認した。

トチノキ (学名: *Aesculus turbinata*) 1点

トチノキは、道管、真正木繊維、柔組織と放射組織でその分布は散孔材を呈しており、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。年輪の終わりに1~3細胞のターミナル柔組織を確認した。

ヤマグワ (学名: *Morus bombycis*) 3点

ヤマグワは、道管、真正木繊維、柔組織と放射組織で、その分布は環孔材を呈しており、縦に連なる道管要素の間は単穿孔で内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は接線方向に1～7細胞幅で異性の直立細胞と平伏からなることを確認した。

ムクノキ (学名: *Aphananthe aspera*) 1点

ムクノキは、道管、真正木繊維、柔組織と放射組織からなり、一般的には環孔材であるが道管が1層、2層とまばらになるため散孔材と見える。放射組織は狭いものが主であったが、広いものもわずかに混じる。また、放射組織は異性で平伏細胞と直立細胞を確認した。

ヤナギ属 (学名: *Salix* sp.) 4点

ヤナギ属は、道管、真正木繊維、柔組織と放射組織からなり、道管は単独または放射方向に2個以上が接続する散孔材である。柔組織は放射方向に1～2層のターミナル状であり、接線方向で放射組織が1細胞幅の異性細胞を確認した。

ケヤキ (学名: *Zelkova serrata*) 2点

ケヤキは、道管、真正木繊維、柔組織と放射組織からなり、大きな道管が年輪界に沿って1層から2層並ぶ環孔材である。特に大きな道管のまわりや小さい道管が帯状や団塊状に接続している。柔組織は大きな道管と小さい道管群を囲む周囲柔組織からなる。放射組織は接線方向に1～8細胞幅の異性で平伏細胞を確認した。

3. まとめ

玉櫛遺跡調査で出土した木製品の樹種は鑑定した樹種の33%がスギの木であり、建築部材の二次的使用であると考えられる。遺跡地域の植生を反映している材としては、コナラ亜属21%、アカマツ21%ではないかと考えている。このことから、近くに落葉広葉樹林と常緑針葉樹が存在したのだと想像でき、これらの樹種を利用して堰の杭類を作製したと考えられる。

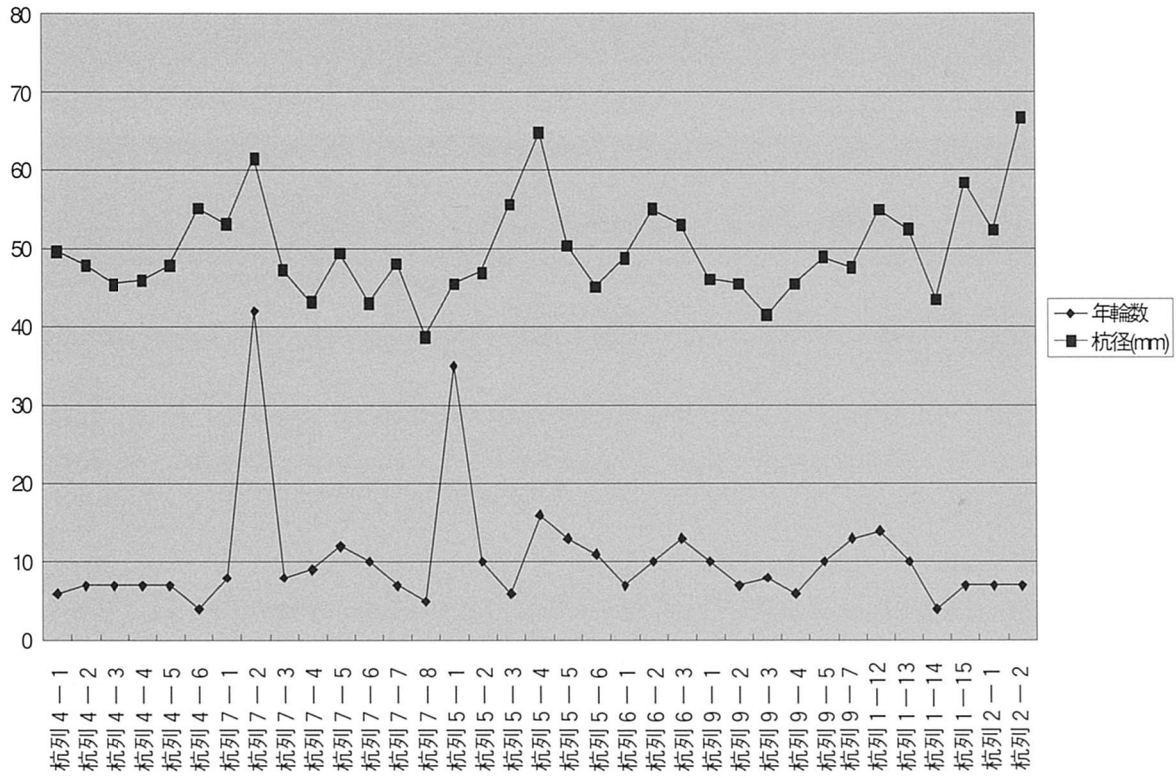
なお、杭類は代表的な土木材料であり木材の占める割合も多い。土木材料として使われる樹種の傾向を知るためにも樹種鑑定は大変役に立つと考えている。杭材の使用樹種を整理してみるとスギ35%、コナラ類21%、アカマツ21%、ヤブツバキ5%、ヒノキ3%、サカキ3%、マツ科、ヤマグワ、ヤナギ属、アカガシ亜属がそれぞれ2%、残りトチノキ、ブナ類、ムクノキ、カヤ、クリ、モミ、ケヤキは1%台と少なくなる。全国の土木材の樹種を調べて見ると、スギ、ヒノキ、マツ、カヤ、モミの針葉樹が多く、広葉樹で最も多いのはシイ類、クリ、カシ類、コナラ類、ヤナギ類が多い方である。全国的にも杭類に使用する樹種は、木製品に比べて多種多様であることが指摘されている。

以上の点から、遺跡周辺の森や林から使用できる樹種は手当たり次第に利用していたのかと考えていたが、年輪数や杭の径を調べてみるとほぼ十年前後の木材を選択的に伐採したことが判ってきた。杭の径にしても40～70mmの間の木を使用している(第147図参照)。なお、花粉分析の結果なども加味して見ると、今回の鑑定でマツが多量存在する傾向は人間活動による二次林の増加を示唆している。

参考文献

- 高地謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣出版 1988
大井次郎・北川政夫『新日本植物誌 顕花編』 至文堂 1983

3Trの杭年輪数と径について



第147図 3Dトレンチ杭類の年輪数と杭径について

第5節 玉櫛遺跡出土動物遺体について

大阪市立大学大学院医学研究科 安部 みき子

茨木市に位置する玉櫛遺跡の鎌倉時代の層から出土した動物遺体は保存状態が悪く、ウシとウマの臼歯4点と長骨3点である。出土したウマの臼歯で同定できた上顎第3大臼歯には咬耗がみられ成体であるが、ウシの下顎第3大臼歯は咬耗が見られず若い個体である。長骨はウマの第3中手骨の近位端が同定できた以外、種や部位の特定はできなかった。

表9 出土動物遺体一覧表

Tr.	層位	遺構面	遺構名	種	出土部位	備考
3D	第I層			ウマ	右 上顎第3大臼歯	咬頭の咬耗あり
8D		第II-1遺構面	溝80102最下層	ウマ	右 第3中手骨 近位部外側	
3D		第III-1遺構面	自然流路30019下層	ウマ	臼歯	
3D		第III-1遺構面	自然流路30019下層	ウシ	右 下顎第3大臼歯	咬頭の摩耗なし 未萌出?
6D		第III-1遺構面	自然流路30019下層	不明	臼歯片	
7D		第III-1遺構面	溝70001	ウシorウマ	長骨片	
8D	第VI層			不明		

第6節 9Dトレンチ第IV-1包含層出土不明金属製品の蛍光X線分析結果について

小野 亜由美

1. はじめに

9Dトレンチ第IV-1包含層から出土した不明金属製品(647)は一見銅製釧と考えられた。しかし、周辺から弥生・古墳時代の遺物の出土が少ないこと、この金属製品が出土した層からは、12世紀から13世紀の遺物が出土しており、この遺物が中世に属する可能性が高いため、蛍光X線分析をおこない、成分比からこの金属製品について検討をおこなった。

2. 分析の方法

蛍光X線分析とは非破壊で遺物の科学分析をおこなえるものであり、産地同定などに利用される。今回、奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室で西山要一教授の指導のもとで分析をおこなった。使用した分析装置は「エダックスジャパン イーグルXXLNR蛍光X線分析装置」で、直径0.1mmの範囲、X線の照射時間は1箇所につき200秒、与えた電圧電流は20V、700Aである。表面と錆を落とした地金部分を3箇所ずつ、合計6箇所について定成分分析と定量分析を行なった。定量分析は埋没時に付着したと考えられる土中の成分—Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、P(リン)、Ti(チタン)、Fe(鉄)の値と、装置のターゲットの成分であるクロム(Cr)の値を省いた数値である。

3. 分析結果

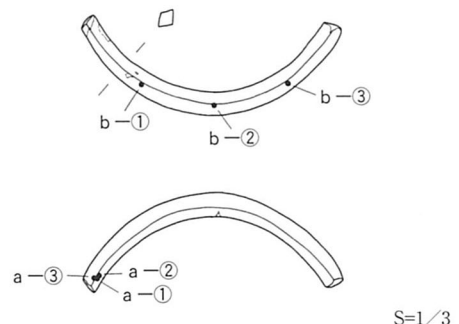
錆を落とした地金部分を計測した結果を第149図に示す。他の2つの地点の結果を含めると、銅が約61~66%、錫が約23~27%、鉛が約11~12%の質量比をもつことがわかった。

なお、錆の付着部分と地金部分とで分析の結果に大きく違いが出た。第150図をみても分かるように、錆の上からX線を照射すると、Sn(錫)の値が多くなってしまった。これは錫が表面に出やすいため、遺物に含まれていた錫が長い歳月を経て表面に出てしまったためである。

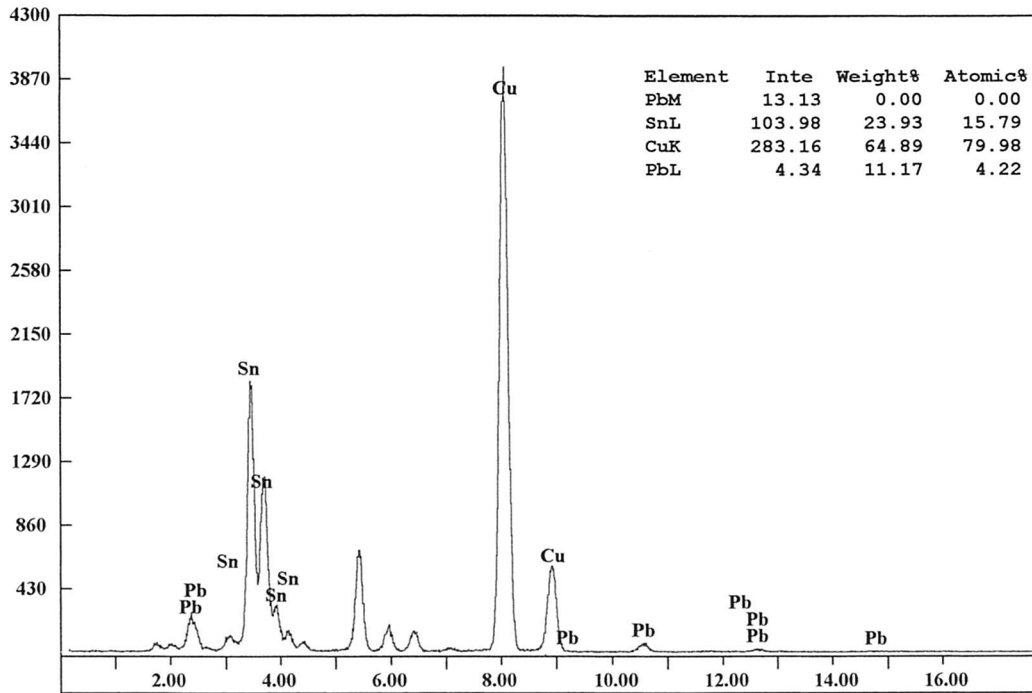
4. まとめ

西山教授によると、弥生時代の銅鐸などは、個体差はあるものの銅80~90%・錫12~15%・鉛10%未満というのが一般的で、今回の金属品の結果とは当てはまらない。また中国製銅製品とも割合が異なっており、この金属製品が古代以前のものである可能性は低く、また亜鉛が含まれていないことから近世以降の製品とも考えがたいとのコメントをいただいた。

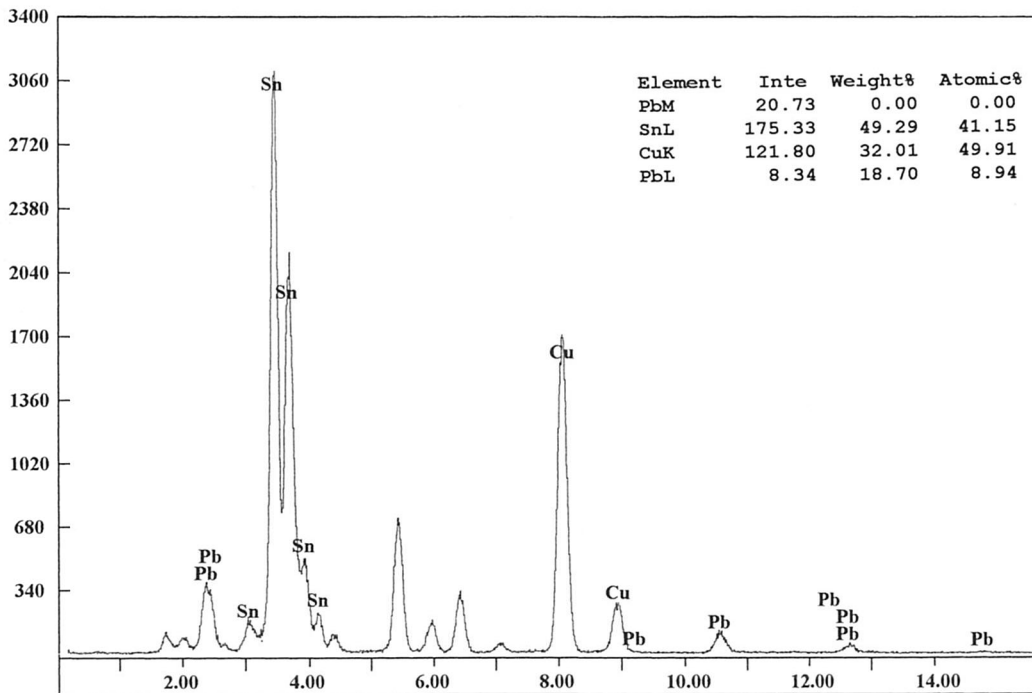
今回の調査では尊勝寺創建時の瓦とともに、輪花塼や、白磁・青白磁の合子が出土し、また蓮実を模したような土製品(香炉の蓋あるいは仏具の一種か)など、仏教関係と思われる遺物が出土しており、周辺に寺院に類する施設があったことは想像に難くない。したがって、この輪状の青銅製品も当時の仏具のひとつと考えられないだろうか。ここで可能性のひとつとして仏具をひとつ提示しておきたい。



第148図 9Dトレンチ出土不明金属製品



第149図 a-①定成・定量分析結果



第150図 b-①定成・定量分析結果

それは僧が持つ錫杖である。この杖頭部はハート形に大鑲を作るものが多く、その左右に数個の遊鑲をつける。平安・鎌倉時代の錫杖はこの部分が断面菱形で環状を呈しており、今回の出土品と酷似する。類例は多くないが、同様のデータが今後増加することを期待する。

参考文献

鈴木規夫『日本の美術12 供養具と僧具』至文堂1989

第V章 考 察

第1節 緒 言

今回は、調査地点が12箇所に細分されたこともあり、整理当初はどの程度まとまった成果を得ることができるか、関係者一同半信半疑であった。しかし数ヶ月におよぶ整理作業を通じて、おぼろげながら調査地の様子がみえ始めてきた。本章では、関係者を中心に調査成果から生じた問題に考察を加えた。

阪田氏は、航空写真・地形図や発掘成果をもとに、玉櫛遺跡における10世紀から14世紀の流路変遷を検討した。さらに一帯に良好に遺存する条里地割の起源に触れ、8世紀代に遡る可能性を指摘した。これは、5世紀淀川南岸に築堤された茨田堤による淀川北岸一帯の内水氾濫状態と、8世紀行基らによる大規模な排水工事によって一帯が可耕地へと変化したという氏の仮説と密接に関わる。

井上は、7 Dトレンチで採取した流路堆積物の分析を担当したが、試料採取地点の断面図を詳細に検討することにより、自然流路30019が東から西へ側方移動したことを明らかにした。その時期は、出土遺物から12世紀から14世紀を想定するが、さらに遡る可能性もある。また井上は、今回のような河川を伴う景観復原には考古学のみならず堆積学研究との協同研究の重要性を強調する。

山元は、第IV章第2節に掲載した須恵器胎土分析の発案者である。この分析で得られた成果は、北摂地域における6世紀代の須恵器生産－供給体制の一端を明らかにする上で、重要な意味をもつ。

今回の整理作業で小野は、土器を中心とした遺物整理を担当した。まず6 D・8 Dトレンチで出土した須恵器細片の実測作業を通じて、その形態的特徴を見出した。さらに楠葉型・和泉型瓦器塊や共伴する他の中世土器を検討し、土器から中世玉櫛遺跡の特質を指摘した。

続いて小野は出土遺物の平面分布に注目した。トレンチの制約上、明瞭な遺構を確認できなかったためである。この中で特に注目したいのは、微細な弥生土器片と古代土器の出土傾向である。前者は隣接する東奈良遺跡との関連を、後者は未知の古代集落の存在を指摘することができた。中世以降の遺物分布は、ほぼ1世紀単位での集落変遷を明らかにした。

鈴木は、今回の調査で出土した2種類の祭祀遺物に注目した。一つは木製人形代。先に府下の人形代の集成を通して玉櫛遺跡出土人形代の評価を試みたが、共伴土器の年代観がやや遡ったため、再検討をおこなったのである。もう一つは「鬼道」墨書土器。主として文献史料の検討から、これを「鬼の道切り」に関わるものと推定する。

中野氏には、呪符木簡（「蘇民将来」札）についての検討を願った。60数点にのぼる蘇民札の出土事例から、13世紀以降墨書内容が複雑化していくこと、いくつかの使用方法があり、札の効力がなくなれば水辺に廃棄して浄化を図ったことを明らかにした。さらに玉櫛遺跡出土の蘇民札は、茨木神社をはじめとする牛頭天王社が作成・頒布し、在地陰陽師がこれに加担したことを推定する。

鈴木は最後に、文献史料に登場する「玉櫛」庄が摂津玉櫛庄であることをより詳細に検討するとともに、9 Dトレンチ周辺で検出した仏教関連資料が、かつて存在したといわれる淨楽寺に関わるものと推定した。さらに茨木市域の中世集落が大きく5地区に大別でき、瓦器塊の様相から平野部南部に地域的特性が表れているとした。

第2節 玉櫛遺跡周辺における河道の変化と条里水田の開発

大阪府教育委員会 阪田 育功

1. はじめに

玉櫛遺跡では、東西200m、南北120mに及ぶ範囲に第1図のように調査区を設けて、現地表下約3mまで、部分的には4.5mまで発掘調査を実施した。この結果、元茨木川の旧流路を検出したほか、幾つもの自然流路やこれによる堆積が検出されて、河川流路の変遷の状況が局部的ではあるが明らかになってきた。この節では河川流路の変遷を地形環境の変化と関連づけて検討し、あわせて条里水田の開発の様相を検討してみたい。

2. 玉櫛遺跡周辺の地割と河川流路の痕跡

本文中で述べられたとおり、玉櫛遺跡では何回かの堆積環境の変化があったことが認められた。この変化は玉櫛遺跡周辺の沖積低地の形成過程そのものを示しており、これには元茨木川や安威川などの河川流路の位置とその変化が大きく作用していると思われる。

まず地形図や航空写真などから、元茨木川や安威川の流路を抽出してみることからはじめよう。第151図は昭和36年大阪府作成3000分の1地形図をベースマップに、昭和23年米軍撮影航空写真・明治18年陸地測量部作成2万分の1地形図などから判読できる地割や水路などを補足して作成した地割図である。第Ⅱ章第1節「遺跡を取り巻く環境」の項で、詳細な1m等高線図（第2図）が提示され地形の概要について記述されているので、これとあわせて地割などから読みとれる茨木川・安威川の旧流路を抽出して、その変遷を考えてみたい（第151図）。

（1）茨木川と安威川の合流

勝尾寺川は茨木市中河原で佐保川を合わせ、南東に流れている。両河川の合流地点（ア）から、茨木市田中（イ）で安威川と合流するまでを茨木川と呼んでいるが、この合流は、昭和12年の工事によるもので、それ以前の茨木川は、田中からほぼ南に流下していた。現在の通称「桜通り」がこの茨木川の旧流路に当たり元茨木川と呼ばれている。本稿でも、このルートを元茨木川と呼称する。

茨木川と合流する安威川は、合流点付近でさかんに蛇行した痕跡を残している。安威川にかかる太田橋（ウ）より下流においても直線的に改修される以前の旧流路以外に、富田台地の西縁辺を削るように流れた痕跡（エーオ）や、茨木川につながるような流路痕跡の池が認められる（第151図）。同様に茨木川も安威川との合流点付近で蛇行を繰り返しているところをみると、茨木川と安威川は、昭和12年の合流工事以前にも両河川の水量の変化に伴って主要な流路が変化し、田中付近で合流・分流を繰り返していたと考えられる。第152図の鉄道をはさんだ二つの池付近の小字は「伊串」である。水際の祭祀に使われる「斎串」の変化である可能性が高く、この部分が河道であったことを示している。

（2）旧茨木川

元茨木川と安威川が合流する田中より下流では、二川の流路の中間に幅100m以上の流路痕跡が読みとれる（カーキ）。キより下流では現地表に痕跡をとどめていないが、内瀬集落で6m等高線が南に張り出し、更にその南400m付近では5m等高線が南に張り出している（第2図参照）。

これらのことからこの流路はかなり大規模で長期的な流路であったと推定される。（カ）より上流で

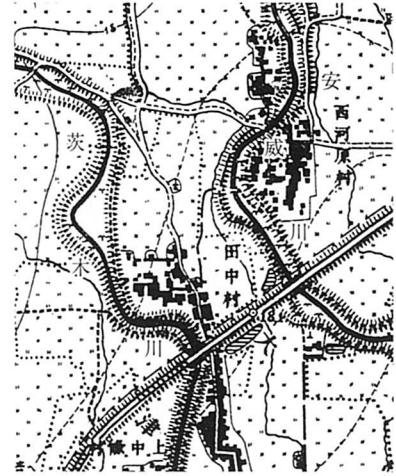


第151図 玉櫛遺跡周辺の地割と河川流路

も流路痕跡は明瞭ではないが、明治18年地形図では流路西側に位置する水路が、安威川の西に添う戸伏集落（ク）から出ていると表示されている。規模や等高線の張り出しからみても、単なる安威川の流れではなく本流のひとつであったと考えられる。この流路を旧茨木川と呼称することにしたい。

（3）元茨木川

元茨木川流路（ケーコ）は、等高線に平行を保ちつつ流下する流路形状からみて、人工的河川である可能性が高いと思われる。元茨木川が昭和12年廃川時の流路に固定される以前にも、幾条かの分流あるいは旧流路をもっていたことは、現地表に残された流路痕跡からも明らかである。



第152図 安威川と茨木川の合流

今回の玉櫛遺跡の発掘調査で検出された自然流路30019（以下、本節では「自然流路」を省略し30019と表記する）が、元茨木川から派生した流路（の一部）であることは、地割からも推測される。発掘調査で検出した30019の流路痕跡を地表面でたどってみよう。府営住宅建設以前には調査で検出した30019の西岸部分にそって水路があったことが、昭和23年米軍撮影の航空写真から読みとれる。現在でも調査区北東部に接してわずかに残った水田の西端にこの水路が維持されている。この水路が30019を踏襲することは間違いない。航空写真では、この水路は3Dトレンチ南西約50mで方向を変えて南東方向に向かい、真砂村（サ）から嶋村（シ）へのびている。上流へたどってみると、水尾集落の東側を北にのびて集落の北側を北西にたどることができる。水尾集落は、30019の上流部の自然堤防上に立地しているといえる。さらに上流部をみると、茨木城が築かれた旧茨木村集落（ス）は、田中村から連続する自然堤防上に占地していることがわかる。

これら大きな分流（あるいはかつての本流）が廃川となって、昭和12年までの流路が維持されて用水路として機能してきた。より西側の高い位置に、できるだけ等高線に平行に、人為的に流路が固定された結果、近世にいたっても地盤の低い東岸に破堤を繰り返すことになったと考えられる。

（4）安威川

現在の安威川は、茨木川を合わせ、玉櫛遺跡の東約1.5kmを、東に弧状に張り出しながら南に流下している。野々宮村付近で南西に方向を変えて、神崎川に合流している。

現安威川のすぐ東に接して発掘調査を行った溝昨遺跡（セ）では、古墳時代初頭ごろから現安威川からの分流とみられる流路や自然堤防状の微高地が形成されている。このことから考えて、古墳時代には安威川がほぼこの位置に流路をもっていたと思われる。

（5）旧安威川

鮎川集落から北西方向に延びる流路痕跡（ソータ）が認められる。この流路は総持寺集落の立地する富田台地の南西端を浸食するように流れた（チーツ）安威川の旧流路であると思われる。埋没した時期などは不明であるが、現地表の流路痕跡の残り方からみて、かなり古い時期に本流から切り離されたようである。

3. 元茨木川の流路形成時期の検討

元茨木川の流路形成の時期を検討するためには、発掘調査で検出されている30019をはじめとした流

路の調査成果を総合し、これらの流路やこれに続くと思われる自然堤防が元茨木川の分流なのか、これとは別の連続した旧流路であるのかをまず検討しておかなければならない。前者の場合、少なくとも分流部分より上流では元茨木川の流路がすでに形成されていたことになる。一方、連続した流路であった場合には、元茨木川に先行する別の流路であった可能性が考えられるからである。もちろん、この場合も二つのルートが併存した可能性を排除しない。

(1) 自然流路30019

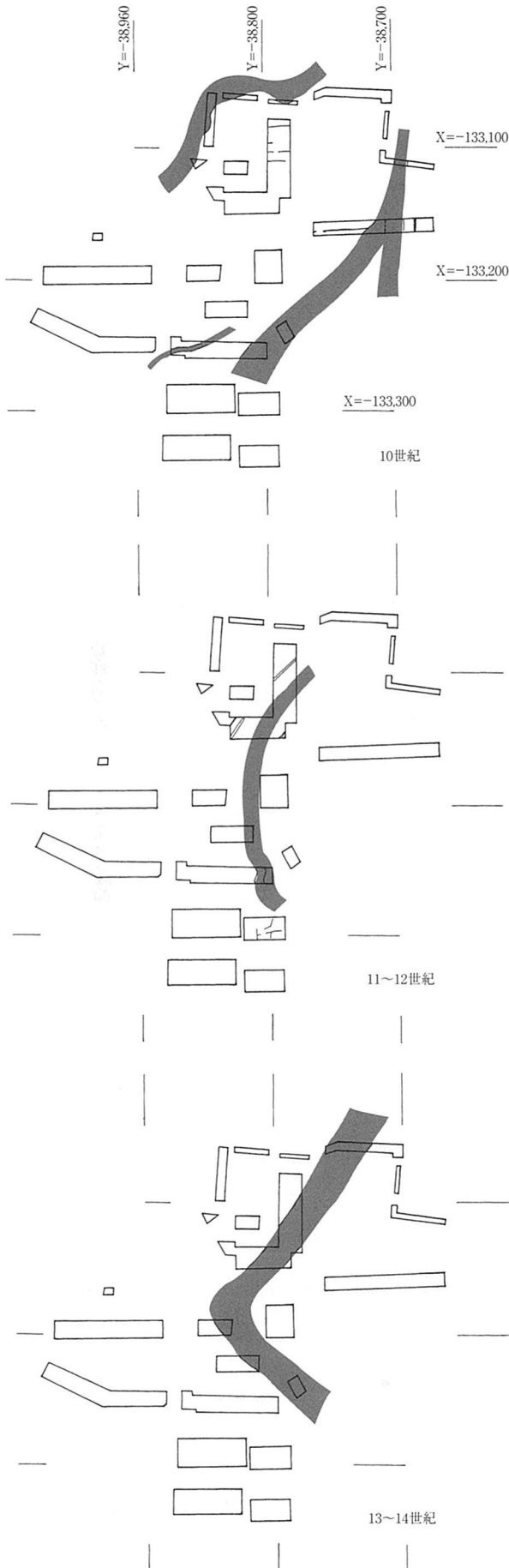
今回の発掘調査の結果、30019はおそらく11世紀後半には流れ始め、14世紀初頭には確実に埋没することが明らかになった。まずこの流路の下流をたどってみよう。

大阪府教育委員会が1992年度に発掘調査した玉櫛遺跡E・F・Gトレンチは、自然流路30019が検出された3Dトレンチの南50mから100mに位置するが、この調査においては、時期の異なる2条の流路が検出されている。10～12世紀中頃の遺物を出土するEトレンチの南北方向の流路（流路Aと仮称）と、これを切って13世紀前半～14世紀前半の遺物を出す流路（流路Bと仮称）が北北西から南南東に流れていたことがF・Gトレンチで確認されている²⁾。时期的に見れば、流路Bが30019に続く可能性が高い。流路Bの下流は真砂村・嶋村に続く河川痕跡に対応するものと考えられる。ただ、30019が南南西方向に流れ、一方流路Bが南東方向に流れるので、二つの流路が連続するものであるかどうかは、検討を要する。昭和23年米軍撮影航空写真では、30019の位置にそって残されている水路が、流路Bを踏襲した水路に続き、真砂村から嶋村に延びていることがみえる。30019から流路Bのライン上の耕地区画は、周辺の条里水田のような長地型地割がみられず、一坪の中でも細かく区切られており、この状態が水路に沿って連続している。一方、流路Bの北西部の元茨木川との間には地割からは流路痕跡はよみとれない。

埋没時期からみても、30019の流末は流路B以外に考えられず、これに連続することは間違いない。すな



第153図 調査区と周辺の地割（昭和23年撮影）



第154図 10世紀から14世紀の河川流路

わち、30019はF・Gトレンチ付近で流路Bにつながり、南東におおきく方向を変えて流下したと考えられる。

次に、30019の上流をたどってみよう。30019の西岸近い位置に残された現代の水路は、30019が後世に至っても用水路の機能を維持してきたことを物語っている。この水路は、調査区北東に接する水田の西を通り、水尾集落にそって北西に続いている。もし、30019を踏襲したと思われるこの流路が元茨木川からの分流であるとすれば、方向からみて茨木高校付近（テ）からの分岐が想定される。

大阪府教育委員会が実施した府立茨木高校建替えに伴う新庄遺跡の発掘調査においては、この位置に中世の流路は検出されておらず、南北方向の坪境溝が連続することが確認されている。12世紀ごろの4-b遺構面では元茨木川の東岸に堤防が検出されており、堤防の西に元茨木川流路の一部が検出されている。この破堤による堆積で4-b遺構面が埋没しているが、この破堤によって新たな流路が形成されてはおらず、堆積した砂層を攪拌して再び耕作土が形成されている²⁾。したがって、30019の上流は元茨木川のルートとは別に新庄遺跡の東方に求めなければならず、30019の上流は茨木城の占地する自然堤防（ス）に連続すると考えざるを得ない。

以上の検討から、30019は元茨木川とは別の連続した流路であって、11世紀後半から14世紀初頭までの流路であったと考えられる。

(2) 10世紀ごろの流路

幾条かの流路が検出されているが、主要な流路は今回調査区の東寄りであったようである。

9Dトレンチ中央部から、8Dトレンチ東よりに10世紀に埋没する流路が検出されている。8Dトレンチでは不明瞭ながら流路の切り合いが認められ、南南西方向の流路が先行するようである。調査区内では比較的規模の大きな流路であって、杭で流路を固定しようとしていることから長期的な流路であることがわかる。この流路堆積物が

12世紀の遺構面の基盤層となる。

これに続くと思われるのが大阪府教育委員会1992年調査のEトレンチ西側河道・南側河道である。西側河道はほぼ東西方向、規模の大きな南側河道は東北東－西南西方向で、この河道には方向を異にする杭列が3列以上検出されていることも共通している。平安時代の水田と同時に機能し、この流路から洪水堆積がこの水田を覆っている。

1D・2Dトレンチで検出した溝10175・溝20037はこの河道からの分流にあたると思われる。この流路は1Dトレンチではほぼ南北方向をとっているが2Dトレンチで西に蛇行する。溝10175の上流部は、流路方向と層位、時期から見て1Cトレンチ溝1014・2Cトレンチ溝2022に連続すると考えられるので、1Dトレンチ北部で西向きから南向きに大きく蛇行していたと考えられる。

(3) 元茨木川

先に述べたように茨木高校建替えに伴う新庄遺跡の発掘調査で検出された元茨木川は、12世紀には流路をもっていたが(4-b面)、下層の10世紀頃の遺構面(4-c面)では、流路位置に掘立柱建物群が検出されて、この建物群は標高の高い西側(元茨木川流路位置)に広がっていると推定されている。従って10世紀には元茨木川はこの位置を流れていなかった可能性が高い。また、10世紀ごろの遺構面の様相は、調査区東部に主要な流路を形成していたことを推測させるものであり、元茨木川が現位置に流路を持っていたことを示す証拠は認められない。

1995年度に大阪府教育委員会が実施した下水管渠工事に伴う東奈良遺跡の発掘調査においては、元茨木川流路のすぐ西に接する地点(95区)で、南北方向の14世紀頃の流路とその溢流堆積の灰白色砂層を検出している³⁾。

これらのことを総合して考えれば、10世紀以前には元茨木川は流路をもっておらず、10世紀から12世紀の間にこのルートを流れ始めたと考えられる。

4. 旧茨木川の流路形成と埋没

安威川と元茨木川に挟まれた低地を流れていた旧茨木川は、現地形に残す流路痕跡のありかたを玉櫛遺跡の14世紀初頭に埋没する30019の痕跡と比べても、かなり古い時期に、おそらく12～14世紀の間に元茨木川が流路をもった時に、本流から切断され埋没した可能性が高いと思われるが、これを直接証明できる資料をもたない。

今回の玉櫛遺跡の発掘調査で検出された調査区の北東からの堆積は、旧茨木川の流路からの供給である可能性が考えられる。北東部の調査区において、北東方向からの堆積が顕著であったのは、10世紀から12世紀までである。この結果、調査区の北東部が高い微地形を形成するようになり、寺院関連の遺構や、居住域が形成される。この堆積が旧茨木川からのものであれば、この上面に遺構が形成される12世紀には遅くともこの河川が埋没したと考えてよいと思われる。

5. 玉櫛遺跡における堆積状況の変化と条里水田の開発

玉櫛遺跡周辺は第151・153図に示したように、条里地割が良好に遺存していた。過去の発掘調査によっても、平安時代(10世紀頃)には条里地割に合致する畦畔が検出され、条里型水田が展開していたことが確認されている。

ここでは、玉櫛遺跡の今回の調査によって検出された水田を検討し、条里水田の初現とその展開につ

いて検討する。検討する遺構面と層序は古墳時代中後期の遺構が検出された第Ⅶ遺構面とそれを覆う第Ⅵ・Ⅴ包含層である。

(1) 第Ⅶ遺構面の形成

第Ⅶ層は調査区全域に堆積する、厚さ40cm程度のシルト混じり粗砂層で、上面は土壌化しているものの、下層には葉理（ラミナ）がみられる。

上面は古墳時代中期から後期の遺構面を形成している。6 Dトレンチで5世紀後半（居住域である可能性のある遺構）、8 Dトレンチ東端では7世紀初頭の掘立柱建物が検出されている。居住関連の遺構が検出され、遺物が多く出土した3 D・6 Dトレンチが最も高くT.P.3.8m程度。北北東から西南西方向に尾根状に高い部分がのびる。北西の1 Dトレンチや北東部の7 Dトレンチで低く、T.P.3.4m程度である。

8 Dトレンチ東寄りの下層確認調査では、東西方向では西に下がり、南北方向では南に下がる葉理（ラミナ）が観察された。従って、この層はおおよそ北東方向から運搬されて堆積したと思われる。今回調査区の南西に位置する大阪府教育委員会による調査や、先に（財）大阪府文化財センターが実施した調査においても第Ⅶ包含層に相当すると考えられる層があって、広い範囲にわたって大きな高低差なく堆積していることが特徴である。

また、（財）大阪府文化財センター1995年度3 A区第9遺構面溝1928から弥生時代中期の水差形土器が出土している。このことを考えあわせると、この上面は弥生時代中期以来長期にわたって乾燥し安定した環境が維持されていたと考えられる⁴⁾。

(2) 第Ⅶ遺構面の埋没と粘土層の形成

第Ⅵ・Ⅴ包含層は、厚さ20～70cm以上の粘土層である。古墳時代中期から後期までは居住可能地であった第Ⅶ包含層の上面が、一転して厚く粘土が堆積する湿地環境となる。第Ⅵ包含層は第Ⅶ包含層に混じる粗砂を一部削平して攪拌している。

粗砂の混じる第Ⅵ包含層の上面では、東西方向の畦畔（6 Dトレンチ第Ⅵ遺構面）や南北方向の溝（3 Dトレンチ第Ⅵ遺構面）が検出されており、この層が当地における条里水田の初現を示すものといえる。

花粉分析結果に拠れば、この層（3 Dトレンチ試料20）から上層でイネ科花粉が急増し、植物珪酸体分析でもこの層（3 Dトレンチ試料19）がイネ珪酸体の検出量のピークを示している。周辺に比べて標高の高い3 D・6 Dトレンチ付近で畦畔が確認されたことをみると、条里施行当初は、広い湿地の中で地盤の高い部分（相対的に水位の低い部分）を限定的に耕作していたものと思われる。

第Ⅵ包含層の堆積時期の上限は、下層の第Ⅶ包含層上面で検出した最新の遺構の時期から7世紀前半である。また層中出土の遺物は、すべて須恵器・土師器（古代）であって、黒色土器は含まない。遺物出土量の多かった8 Dトレンチ第Ⅵ包含層では、須恵器約3000片のうち、時期のわかるものでは8世紀のものが最新、土師器は約2100片で最新のものが古代（8世紀頃）である。

これらのことから、第Ⅵ包含層の堆積＝耕作時期の下限は8世紀に求めてよいと考えられる。すなわち、この地域における条里地割の初現が8世紀代に遡ることが確実となった。

(3) 堆積環境変化の要因

6世紀以後の粘土層の堆積は、居住適地であった乾燥地が湖沼湿地に変化したことを示している。言い換えればこの地域の水位が上昇した結果といえる。この水位の上昇は、地形環境の変化などにより排

水が困難になって内水が停滞した結果と考えられる。8世紀には、この湿地に堆積した粘土を基盤層として水田が開発され条里地割が施行されるが、このためには耕作可能となるような、ある程度の水位の低下が必要であったと思われる。条里地割にそった畦畔が検出されたところが、周辺より数十cm高い部分であることは、排水の改善が不十分で耕地の開発が部分的なものに止まっていたことを示すようである。10世紀には、遺跡全体にわたって耕地化されるほど排水が改善されて水位が下がり、可耕地が拡大したといえる。

この一連の変化は、淀川の流路の固定とそれに伴う内水の氾濫、排水工事による水位の低下という大規模な土木工事による環境の変化の結果であると推測する。筆者は、先に淀川下流域の地形から、淀川左岸の築堤とその影響による右岸の内水氾濫、排水のための工事に関して、仮説を提示した。すなわち、古墳時代中期（5世紀ごろ）には淀川の現河道付近の南岸に茨田堤が築造され、この結果、北岸一帯の河川は吹田砂堆と天満砂堆に阻まれて出口を失い、内水氾濫状態を起こすことになった。8世紀中頃、行基らによって北摂からの諸河川の出口を塞いでいた吹田砂堆が切り開かれ（『行基年譜』天平十三年記「次田堀川」）排水の改善が図られ、8世紀末には本格的な排水工事が律令国家によって計画実行され、淀川に平行な排水河川を掘削し、排水を三国川（神崎川）に通した（『続日本紀』延暦4年記事）結果、遺跡周辺でも全面的な水田開発が可能となったと考えた⁵⁾。

玉櫛遺跡における古墳時代遺構面の水没、8世紀の水田開発と条里の施行、10世紀ごろの水田の全面的な開発の過程は、大体においてこの変化と符合するものであると考えられる。

註

- 1 藤田道子「自然河川の調査」『玉櫛遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会 1993
- 2 『新庄遺跡 府立茨木高等学校建替に伴う発掘調査概要』大阪府教育委員会 1996
調査担当の松岡良憲氏・杉本清美氏のご教示による
- 3 『東奈良Ⅲ・郡遺跡発掘調査概要 安威川流域下水道茨木箕面幹線（二）水管渠工事に伴う発掘調査』大阪府教育委員会1996
- 4 『玉櫛遺跡 大阪府営茨木玉櫛住宅建て替に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター 1998 p.89
- 5 阪田育功「淀川下流域における地形と河川流路の変遷 1m等高線図からの基礎的考察」『大阪文化財論集Ⅱ』（財）大阪府文化財センター 2002

第3節 玉櫛遺跡（その4）で検出された流路堆積物の検討

井上 智博

1. はじめに

2001年度末に、玉櫛遺跡（その4）で検出された流路堆積物の試料3点について、粒度分析をおこなって欲しいとの依頼を現場担当者からいただいた。調査が終了した後であったため現場を観察できなかったが、現場での記載を補完するデータを作ればよい、と単純に考えて分析をおこなった。しかし、現場で作成された断面図を見たところ、これらの試料のみでは流路堆積物の特徴を示すことができないことが判明した。そこで本稿では、今回現場で得られたデータの検討を通じて、発掘調査データにもとづく景観変遷復原に必要な観点について若干の私見を述べ、当遺跡の流路堆積物に関する問題点を整理したい。

2. 検討の方法

今回は現場で断面観察できなかったが、7 Dトレンチ南壁の断面を撮影した写真が複数存在しており、それらをつなぎ合わせると断面全体の状況が観察可能であったため、それらの写真と断面図をつき合わせて検討を進めた（第155図・写真7～10）。ただし、筆者は地質学に関しては初歩的知識しか持ち合わせておらず、低湿地遺跡研究会における流路堆積物を対象にした討議を通じて得た知識や、堆積構造に関する概説（公文・立石編，1998、フリッツ・ムーア〔原田訳〕，1999、八木下，2001など）を参考にして検討した。地質学的知識が少ない点は今回の検討における問題のひとつであるが、現地調査・整理作業に地質学研究者が関わっていない以上、現在の筆者の知識で最善を尽くすことが重要であると考えた。日本の考古学調査において流路堆積物を詳細に検討した事例は多くないが、外国では流路や氾濫原の堆積環境変遷の分析に焦点をあてた概説書も出版されており（Brown，1997など）、今後は堆積物の観察・分析方法に関する基礎的検討が必要である。

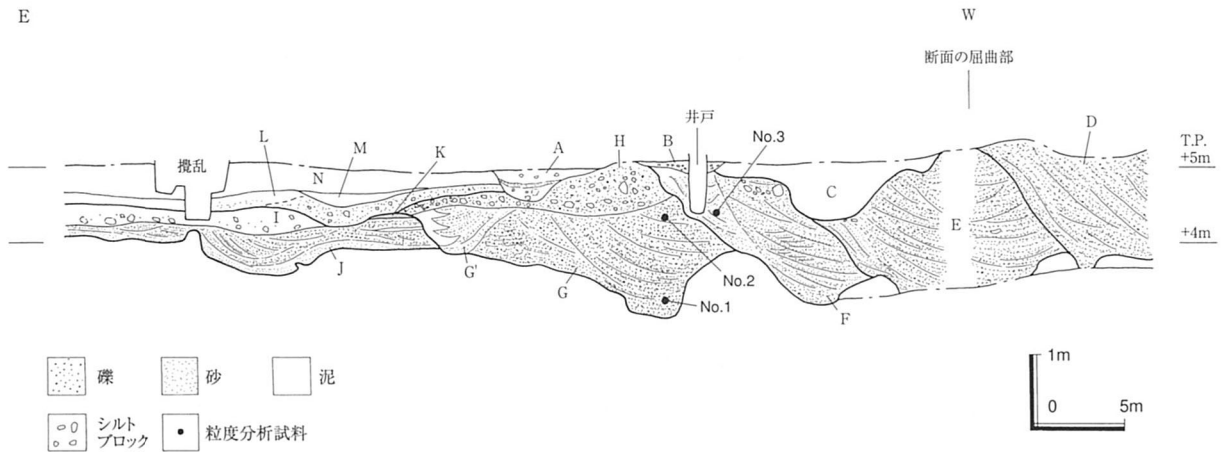
粒度分析に関しては、まず試料を乾燥させ、乾燥重量を計測した後、 -2ϕ （4 mm）から 4ϕ （1/16 mm）までの各サイズの試験篩を重ねて水洗した。今回分析に使用した乾燥重量は、1試料につき450～500gである。水洗後、各篩に残った砂礫は、乾燥させてそれぞれ重量を計測した。篩で回収できるのは、細かいほうでは極細砂までであり、それ以下の泥の重量は乾燥重量から各篩に残った砂礫の重量の和を引いて計算した。また、今回は中礫（pebbles）も多く含まれていたため、 ϕ スケールに合わせて細分して表示することにした。ただし、今回使用した篩は4 mmまでのものであり、それ以上の粒子に関しては、長軸の長さをひとつづつ計測してサイズごとに分類し、重量を計測した。このようにして得られた重量のデータを百分率に換算し、粒径組成を図示した（第156図）。

3. 断面の検討

断面図と写真をもとに作成したのが、第155図の断面図である。説明の都合上、各層準にアルファベットを付した。以下、これにもとづいて、写真から推定した堆積過程について説明したい。

まず、断面に示した堆積層の下には泥質堆積物が存在しており、その上面で水田遺構が検出された。この水田遺構を埋積した堆積物が、Jの砂層である。この砂層は、調査担当者によって、10世紀中葉以

前に堆積した可能性が考えられている。最下部は粒径の細かい砂で、その上は斜交層理が認められる砂であり、上方粗粒化していた。上方粗粒化（逆級化）は氾濫堆積物の特徴のひとつであり（伊勢屋・増田，1988）、この砂が河川の氾濫によってもたらされた可能性を示している。この砂の供給方向については明確ではないが、この断面の南東に位置する調査区（9 D トレンチ）から、10世紀代の流路が検出されており、そこから供給された可能性も考えられる。またJの上には、有機物を多く含んだ古土壌と思われるKが存在する。この断面では、後述するH・I段階の人為的擾乱によって一部しか残存していないが、この断面の東端から南方向にのびる断面では、これに対比されるものが厚く残存していた。な



第155図 玉櫛遺跡 7 D トレンチ断面模式図

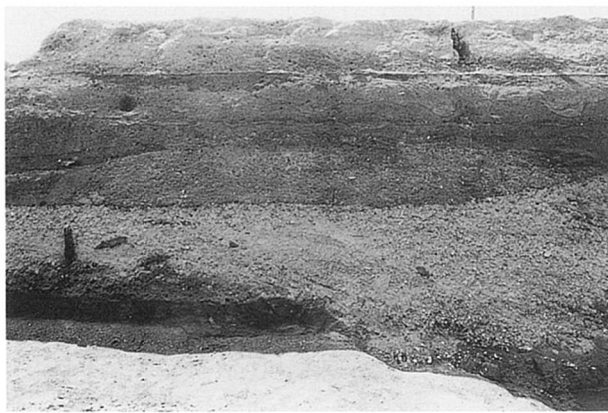


写真7 堆積層H・G

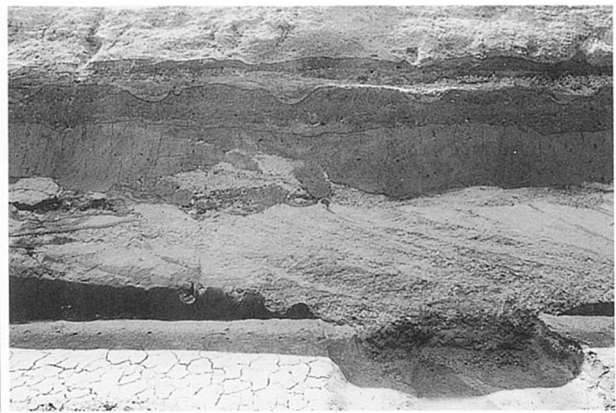


写真8 堆積層C・F



写真9 堆積層C・E



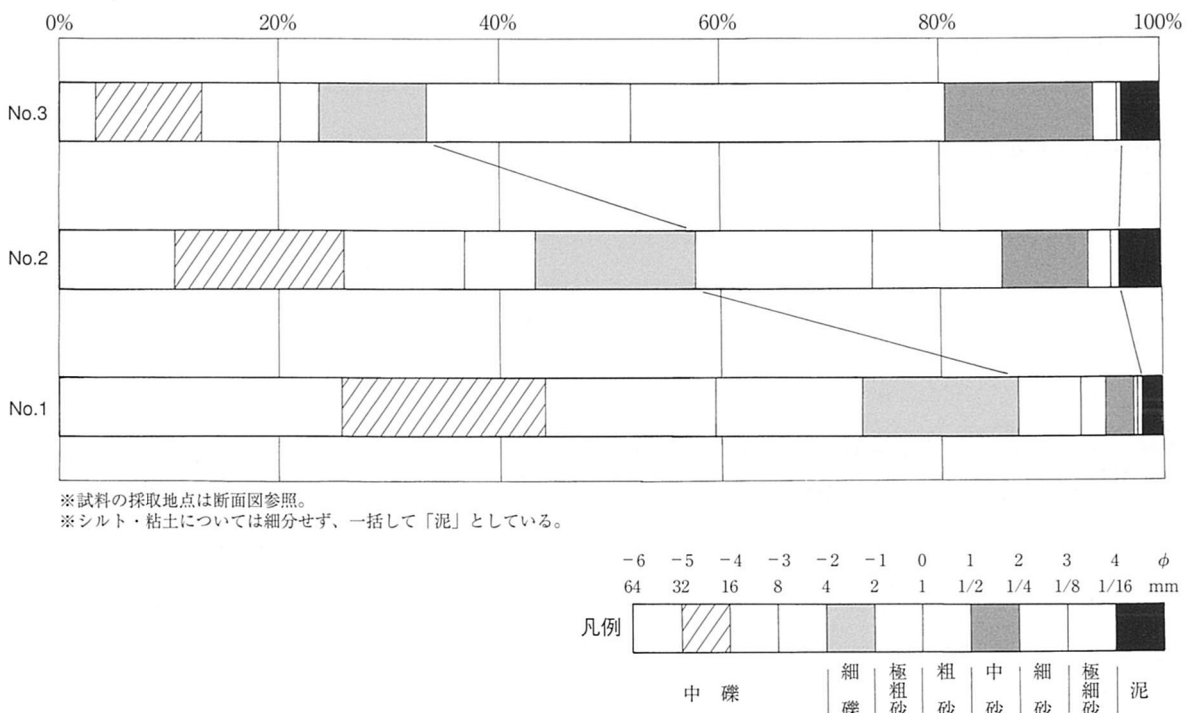
写真10 堆積層D

お、Kの時期については、出土遺物から12世紀に年代の1点を持つと推定されている。

その西で認められたGは、下の泥層を侵食して形成された流路の堆積物である。その中央部は礫が主体であり、弱い斜交層理が観察できる。また、その西側においては、最下部は礫を主体としており、葉理は不明瞭であるが、それより上は礫や砂からなり、トラフ型斜交層理が認められる。ちなみに、粒度分析試料No.1はGの最下部、No.2は上部から採取されたものである（第156図）。No.1は80%以上が礫によって構成され、 $-6 \sim -5 \phi$ の極粗粒の中礫（very coarse pebbles）が全体の20%以上をしめており、きわめて粗粒な堆積物といえる。またNo.2は、 $-6 \sim -3 \phi$ と $-2 \sim 1 \phi$ のサイズのもの、それぞれ40%前後を占めているのが特徴である。なお、Gの東端（G'）は砂と泥からなり、斜交層理が認められる。この部分については、流路が砂礫により埋積された後、水が引いていく過程で形成された流路で、短期間のうちに埋没したものと考えられる。Gの流路はKの上面段階に存在していた可能性が高い。この推定は、6Dトレンチにおいて12世紀代の溝が流路と同じ向きにのびていることを参考にして、流路が12世紀代には存在していたと考えられていることとも整合する。

また、HはGの直上に存在し、盛り上がって堆積していた。この層は、泥とGに起源する砂礫がブロック状に混じり合った堆積物であり、Gとの境界はきわめて明瞭である。なお、層相からみて、この層準は東側のIに連続すると思われる。Gには泥はほとんど含まれていないため、Hに含まれる泥のブロックがGに起源するとは考えにくい。この部分が後述するFの流路の河岸にあたることも考慮すると、人為的に泥を運搬してきて砂礫と混ぜ、河岸に高まりをつくったとも考えられる。

次に堆積したのが、Fである。トラフ型斜交層理が明瞭に認められる流路堆積物である。その西側は礫を主体とするが、東端には砂や泥を主体とする部分が認められ、その部分から粒度分析試料No.3が採取された（第156図）。No.3で最も多いのは粗砂（ $0 \sim 1 \phi$ ）で30%近く含まれており、極粗砂～中砂（ $-1 \sim 2 \phi$ ）が全体の60%を占める。



第156図 粒度分析結果

次に堆積したのがEである。この層準に関しては、調査段階ではFと一体のものとして認識されていた。しかし、境界は砂礫同士が接するものの、Fの斜交層理を切っており（写真9）、その境界が下層の泥層を侵食した落ち込みと対応することからみても、別の流路堆積物として分離すべきである。全体として礫を主体とするようであるが、東端の上部には砂を主体とする部分が存在する。

次に堆積したのがDである。これについてもEと同様、Fと一体のものと考えられていたが、これについてもEの斜交層理を切っている（写真10）ため、別の流路堆積物と考えられる。

これらの流路堆積物については、出土遺物から13世紀後半～14世紀初め頃と推定されているが、Gの堆積からさほど間を置かずにF段階の流路が形成されたと考えられることから、12世紀から14世紀初め頃まで、この地点に流路が存在していたと理解すべきであろう。

なお、調査段階ではCについても細分されていなかったが、落ち込みが泥で充填されており、最終段階に形成され、泥で埋積された放棄流路である可能性も考え、ここでは細分して図示した。

また、この断面の東端から南へ向かってのびる断面をみると、この断面のすぐ南（断面のすぐ奥）に東西方向の溝が存在しており、地層のつながりがわかりにくくなっていた。L・M・Nについては、この溝と関連する堆積物の可能性があり、周辺の層序との関係は残された写真だけでは明確にできない。Aについては、中位に砂層を挟むが、それも含めて泥のブロックが多く含まれるようであり、人為的な遺構の可能性もある。さらに、Bも人為的な遺構であるが、これはCを切っており、流路埋没後のものと考えられる。

4. まとめと今後の展望

以上のように、この調査区ではG→F→E→D→Cという流路堆積物の切り合い関係が認められた。この地点では、流路が西に向かって側方移動¹⁾していった過程が復原できそうである。なお、Dの西半分は調査区外にあたるため、調査区外にさらに別の流路堆積物が存在したかどうかについては不明とせざるを得ない。流路の時期については、前述したように、周辺調査区の遺構との関係や出土遺物から12世紀～14世紀初め頃と推定されるが、J（10世紀中葉以前）が堆積した後に形成されたKには一定の時期幅を考慮する必要があるが、流路の形成が若干遡る可能性も考慮すべきである。1時期の流路幅は片方の河岸が残っていないため不明確であるが、おおむね20m弱と推定される。流路堆積物は盛り上がるように堆積しており、流路変遷の過程で規模の大きな微高地が形成された。その微地形は近年まで地表面に影響を与えていたようで、今回は詳述しないが、1947年米軍撮影の空中写真の実体視すると流路の痕跡が判読できる。さらに、畦畔・道・水路などはその微地形に合わせてつくられており、中世後期以降の土地利用に大きな影響を与えたこともわかる。こうした微地形変化と土地利用の関係を遺跡形成過程の中に位置づけることは、当遺跡の景観変遷を復原する上で重要な課題である。また、今回の成果は、空中写真判読で確認できる微地形の中に、中世に形成されたものが含まれることを示しているが、その他にも様々な時期に形成されたものが含まれていると予想される。表層微地形を利用して遺跡の立地環境を考える場合は、堆積物の検討によってその形成時期や成因を明らかにする必要がある。

このような流路変遷過程は、他の部分でも認められると思われる。ただし、新しい段階の侵食によって古い段階の堆積物が失われたり、変遷過程で流路の位置が若干変化した部分もあると予想される。例えば、6Dトレンチでは、ここで検討した流路の続きが検出されている。この地点では流路変遷が把握されていないが、流路底面の形状からみて、複数時期の流路堆積物を一括して掘削した可能性が高い。

さらに、府教委E～Gトレンチで検出されたもの（藤田編，1993）も、ここで検討した流路の続きであると思われる。この地点では、南北方向のもの（11世紀中葉～12世紀中葉）と北西－南東方向のもの（13世紀前半～14世紀前半）の2段階にまとめられている。断面図・写真は概報に掲載されていないが、「粒径が4 cm前後の小石が集中して巨大なレンズ状堆積となっている部分」が存在し、流路底面で「砂利のえぐり込みが何箇所もみられ」たとする記述からみて、再検討すればこの地点でも流路の変遷過程が復原できる可能性が高い。

また、6 Dトレンチでは、流路内から杭出しなどの水流を制御するための施設（水制）が検出されている。これは流路に対する人間の働きかけを示す重要な資料である。こうした遺構と流路堆積物との関係は、遺構と河床形態・流路形状との関係や遺構の機能を推定するための重要な情報となる。筆者は、弥生時代の井堰と流路堆積物との関係の検討を試みたことがある（井上，2002）が、こうした問題の検討は考古学のみでは限界があり、堆積学の研究者と共同で現場を検討したほうがよいと考えている。当遺跡の場合、流路の動態と水制の関係は、今後検討すべき重要な課題である。また、水制の歴史をまとめた研究はいくつか存在する（山本，1996など）が、その中では近世以前の状況についてはほとんど記述されていない。これは史料がほとんどないためであるが、考古学側の関心が低いことも一因であろう。水制に関する考古資料はいくつか知られており、こうした資料を詳しく検討することで、この分野にも一定の貢献ができる可能性がある。

今回得られたデータによって、玉櫛遺跡において中世前期に流路が位置を移動しながら存続したことが明らかになった。さらに、周辺の調査区の成果によって同時期の集落や水田の位置も推定可能であり、この時期の景観が明らかになりつつあるといえる。しかし、各調査区の遺構平面図をつなぎ合わせ、出土遺物によって遺構の時期区分をおこなうといった操作だけでは、堆積環境の変化・地形形成過程と人間活動との関係を明らかにすることはできず、遺構配置の変遷のみが景観変遷と思われてしまいかねない。景観変遷復原のためには、遺跡の層序を確立し、層序形成過程の中に遺構・遺物を位置づけていく必要がある。中世の集落・水田などはそれ以前の堆積によって形成された微地形に合わせて立地していたことが予想されるし、流路変遷の過程で形成された微地形に対する人間の対応についても、痕跡が残されている可能性がある。花粉分析のデータも、地層を主軸に据えたデータ整理の中で有効に利用することができる。中世～近世に関してはマツ属花粉の増加などの特徴が指摘されており、植生変遷とその背景にある人間活動についての議論が可能である。「社会－自然複合」（松田・藤城，2000）としての景観変遷を明らかにすることは、今後の発掘調査の重要な課題のひとつであろう。

なお今回、粒度分析もおこなったが、流路変遷過程を十分に把握した上で試料採取されたとはいえないため、この流路における粒径組成の変化を明確にできなかった。今回のように側方移動した流路の場合、垂直方向で試料採取するよりも、堆積単位に合わせて横方向に採取していったほうがよかったように思われる。発掘調査における地層の認識方法に関しては様々な問題があるが、今後は地質学研究者を交えて現地で検討をおこなうことが必要であろう。それは、単に他分野の知識を利用することではなく、発掘調査の視点や方法を見直すことにつながると思われる。

以上、7 Dトレンチの流路堆積物に関して筆者の考えを述べたが、それは調査所見と一部整合しない部分がある。筆者の考えは、調査所見に対する反証可能性を示したものにすぎない。この流路のデータを用いて玉櫛遺跡周辺の景観復原をおこなう際には、保管されている写真・実測図などの原データも含めて再検討し、筆者の推測に対して反駁されることを望みたい。知識の成長にはこうした作業の繰り返

しが必要不可欠であり（ポパー，1998）、議論を喚起するきっかけになれば、本稿の目的は達せられたことになる。

註

- 1 流路の側方移動については、チョーレー・シャム・サグデン（大内訳）（1995）などを参照。

引用文献

- 伊勢屋ふじ子・増田富士雄（1988）「“逆グレーディング構造”：自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造」『堆積学会報』22/23，堆積学会，pp.108-116.
- 井上智博（2002）「弥生時代の井堰に関する予察」『池島・福万寺遺跡2』，（財）大阪府文化財センター，pp.527-532.
- 公文富士夫・立石雅昭編（1998）『新版 砕屑物の研究法』地学双書29，地学団体研究会，pp.1-29.
- チョーレー,R.J.・シャム,S.A.・サグデン,D.E.（大内俊二訳）（1995）『現代地形学』，古今書院，pp.397-403.
- 藤田道子編（1993）『玉櫛遺跡発掘調査概要・I』，大阪府教育委員会，pp.73-78.
- ウィリアム,J.フリッツ・ジョニー,N.ムーア（原田憲一訳）（1999）『層序学と堆積学の基礎』，愛智出版，pp.191-213.
- ポパー,K.R.（ポパー哲学研究会訳）（1998）『フレームワークの神話－科学と合理性の擁護－』，未來社，366p.
- 松田順一郎・藤城 泰（2000）『鬼虎川遺跡第42次発掘調査報告』，（財）東大阪市文化財協会，pp.20-23.
- 八木下見司（2001）『岩相解析および堆積構造』，古今書院，pp.1-54.
- 山本見一（1996）『日本の水制』，山海堂，447p.
- Brown,A.G.（1997）*Alluvial geoarchaeology : Floodplain archaeology and environmental change*. Cambridge University Press. 377p.

第4節 玉櫛遺跡出土須恵器の生産地について

山元 建

玉櫛遺跡から出土した須恵器はどこで生産されたものであろうか。

府下のみならず、近畿地方全体に視野を広げても古墳時代の大規模な須恵器生産地は、大阪府南部の「陶邑」窯跡群と同北部の千里窯跡群に限られるわけであるから、その大半がいずれかで生産されたという程度のことはおおよそ察しがつく。

問題はその先である。

「陶邑」、千里産のみならず、古墳時代の須恵器は、その器形あるいは変遷の斉一性の強さゆえ、それ以上の生産地の追究はなかなかむずかしい。玉櫛遺跡出土の須恵器についても事情は変わらない。

ただ方法が全くないわけではない。

第一にあげられるのは須恵器の器種、あるいは形態的特徴からその生産地を追究する、いわば純粋に考古学的方法である。斉一性が強いとはいえ、「陶邑」と千里の両窯跡群ではその生産される須恵器の器種、細部の形態、あるいは調整手法などに若干の差があり¹⁾、一部の要素では各窯跡群内部の差異も指摘されている²⁾。それらを手がかりに生産地を追究するわけである。しかし残念ながら今回出土した須恵器にはそれら生産地の「個性」を如実に示す資料に恵まれていない。

第二に胎土の肉眼観察から産地を追究する方法がある。一般的にいて千里で生産された須恵器は「陶邑」のそれに比して長石を多く含み、またあたかも鉛筆で軽く印を付けたような黒色物質の微細な「斑点」がその表面に散見されるという特徴を有している³⁾。今回の調査で出土した須恵器も概ね同様の特徴を有しており、その生産地が千里にあることを示唆している。

さらに第三の方法としては化学的な胎土分析手法があげられよう。井上巖氏の分析によって、現在「陶邑」と千里の須恵器はいくつかの指標で差異が認められることが明らかになっている。さらには「陶邑」内部の狭山池周辺窯の須恵器と、千里内部の緑丘窯（2-27号窯）の須恵器は、各窯跡群の他の須恵器と識別できることが判明しており、かなり詳しく生産地を絞り込むことも可能になりつつある⁴⁾。今回の調査で出土した玉櫛遺跡の須恵器も同様の分析を行った。詳細な分析方法については本書IV章あるいは既刊の諸文献に譲るが、結論だけ述べるならば、それらは千里産としてもなんら矛盾しない分析結果を得ることができたといえる。

今回、化学分析を行うにあたっては千里吹田地区の資料のバックデータが不十分であること、あるいは分析資料の時期が偏ることなどうまれる点が多かったわけではない。ただ第二の方法からの推定結果をも加味するならば、玉櫛遺跡出土の須恵器の大半が千里産であることはまず間違いのないところであろう。

さらに、今回は豊中市新免遺跡の須恵器についても分析を行なうこととなり、千里、玉櫛の須恵器と同様の分析結果を得た。新免遺跡は、古墳時期中期末から後期初頭にかけて、千里桜井谷地区で焼成された須恵器の選別、搬入と強く関わった遺跡と考えられている⁵⁾。したがって今回の分析結果はそのことをより積極的に裏付けるのみならず、玉櫛の当該期の須恵器が桜井谷地区で焼成された後、新免で選別される過程を経た上で搬入された可能性をも浮かび上がらせることとなった。ここに須恵器の生産から消費に至る諸点が線で結ばれる。

また玉櫛遺跡において出土した須恵器の示す時期は千里の操業期（TK23～TK217）とほぼ重なる⁶⁾。このことはいわば「地元」の生産地からの製品の供給が集落での消費と直結していたことを示唆すると考えてもあながち誤りではあるまい。

以上のように今回は専ら化学分析の結果を通じて、玉櫛遺跡出土須恵器の生産地、あるいはその搬入に至る経路を考察してみた。ただし府下における古墳時代の須恵器といった、比較的普遍的な考古資料の生産から消費へと至る過程を追究するような場合、ある地域全体の集落動向と結んで考察することが殆ど不可欠である。その点からいうならば本稿は予察以上の意味を持たない。「点と線」から「面」へ、研究が進展する結節点となることを秘かに期待するばかりである。

註

- 1 木下 亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷2-17窯跡—府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告—』少路窯跡遺跡調査団 1982
『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会 1992
- 2 宮本康治「堂山3号墳出土陶棺の位置付けとその系譜」『堂山古墳群』大阪府教育委員会 1994
江浦 洋「陶邑窯跡群周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡 分析考察編』（財）大阪文化財センター 1995
菱田哲郎「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』39-3 1992
- 3 三宮昌弘 合田幸美 松宮昌樹「まとめ」『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡・蛍池南地区・蛍池西遺跡 1993-1996年度発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター 1997
- 4 井上 巖「蛍池東・蛍池遺跡出土土器胎土分析」『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書』（財）大阪文化財センター 1994
同「日置荘遺跡関連須恵器胎土分析」『日置荘遺跡 分析考察編』（財）大阪文化財センター 1995
同「蛍池南地区他出土土器胎土分析」『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡・蛍池南地区・蛍池西遺跡 1993-1996年度発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター 1997
- 5 拙稿「須恵器生産の始まりと集落」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3』（財）大阪府埋蔵文化財協会 1995
同「住吉宮の前遺跡出土の須恵器について」『住吉宮の前遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター 2001
- 6 単発的な観を拭えない初期須恵器と、7世紀前葉以降の窯を除く。
拙稿「大阪層群と須恵器生産」『研究調査報告』第3集 （財）大阪府文化財センター 2002

第5節 玉櫛遺跡（その3・4）出土土器の検討

小野 亜由美

1. はじめに

本調査では多くの遺物が出土し、特に古墳時代の須恵器や古代末から中世の遺物がまとまっている。本稿は、玉櫛遺跡で出土した土器を概観することで、集落内で出土する土器の問題点を整理し、当遺跡を含む摂津地域の土器様相の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 古墳時代の遺物

当遺跡ではすでに杭列や溝など古墳時代の遺構が報告されており、今回の調査で初めて集落の存在を確認できた。検出されたのは、6Dトレンチの柵状遺構や8Dトレンチの掘立柱建物で、出土遺物から5世紀末から7世紀前半にわたって集落が営まれたことがわかった。出土遺物は本文掲載分を含め、コンテナ3、4箱分あり、あまり摩耗していない甕片が多数出土していることから、居住域に近いことがうかがえる。

完形あるいは復元が可能な資料が少ないため、時期が判別しやすい須恵器坏の口縁部片をもとに検討をおこなった。なお、対象とした破片は須恵器が特に多く出土した6D・8Dトレンチ出土分である。

2-1 口縁端部の検討

坏蓋口縁部の円弧の長さが2.5cm以上残存するものをすべて抽出・図化したところ、合計165点（坏84点、坏蓋81点）になった。意図的に破片を選択したわけではないため、遺跡内で使われた須恵器を反映しているものと考えられる。坏の口縁部の形態を以下のように分類した。なお、立ち上り部の高さとは、受部から口縁端部までの垂直方向の高さを示す。

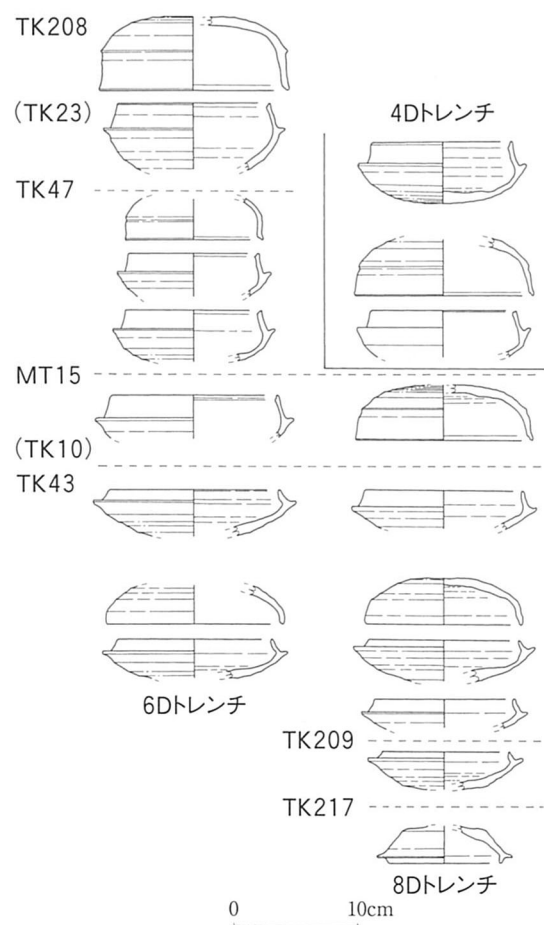
[a形態] 立ち上がり部の高さが2cm以上あり、端部内面に内傾あるいは凹線状の面をなすもの。立ち上り部にやや強い回転ナデを施し、器壁が薄く、端部が内傾する面をなすものをa-1、a-1に比べ全体に鈍い感じがするものをa-2とする。

[b形態] 立ち上がり部の高さが1.5~2cmで、端部に内傾する面をもつもの。

[c形態] 口縁部が内傾し、端部は丸く収めるもの。立ち上り部の高さが1.5cm前後のものをc-1、1cm前後のものをc-2とする。

[d形態] c形態がさらに退化し、立ち上り部の断面が二等辺三角形形状となったもの。

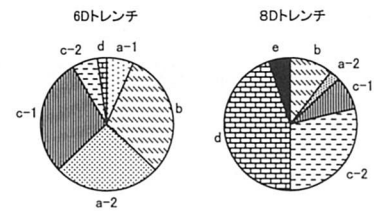
[e形態] 立ち上り部と受け部の長さがほとんど変わら



第157図 玉櫛遺跡出土の古墳時代須恵器

ないもの。坏蓋の逆転する可能性があるもの。

a、b形態は、端部の特徴からTK208～MT15段階に相当し、b形態は若干立ち上り部が低いことから、法量が縮小するTK23・47段階に相当すると思われる。a-1は立ち上り部が高く、a-2に比べて精緻なつくりをしていることから、b形態に先行し、a-2は立ち上り部が高いが、b形態と類似しており、b形態に続くだろう。a-1はTK208段階に、a-2はMT15段階に相当するといえよう。



第158図 トレンチ別口縁部形態の数量比

c、d形態は、端部の特徴からTK10～TK209段階に相当すると思われる。これらは立ち上がり部が低くなるにつれて、端部が退化しており、c-1、c-2、dの順で変化するといえる。そしてeの段階で、法量が最小となり身と蓋の見分けがつかないようになる。

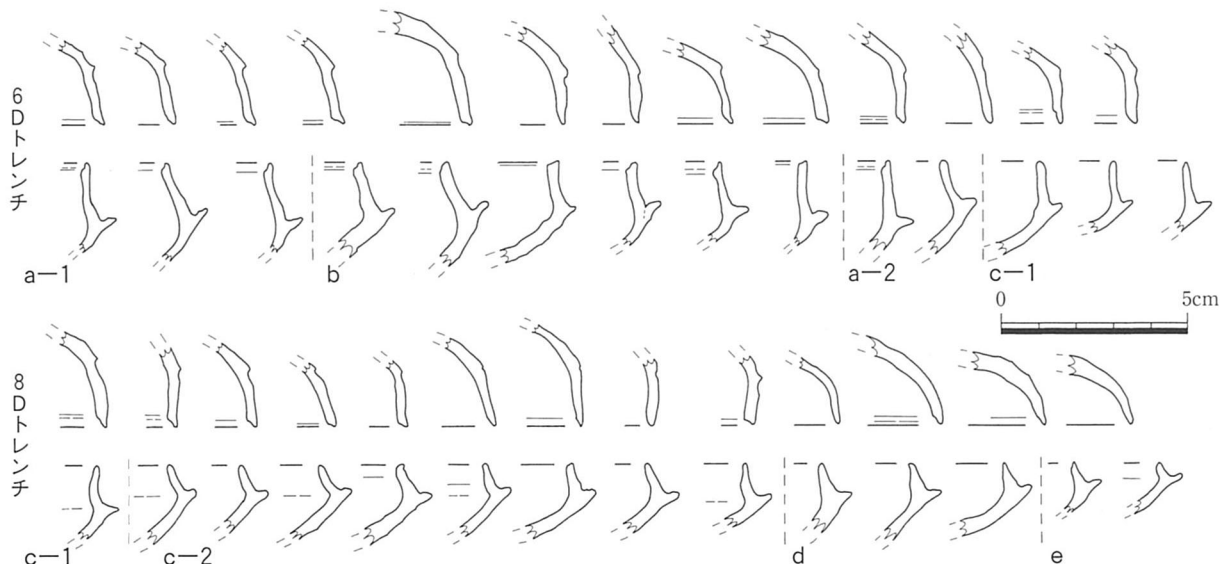
以上から、a-1 (TK208) → b (TK23, 47) → a-2 (MT15) → c-1 (TK10) → c-2 (MT85) → d (TK43, 209) → e (TK217) にそれぞれ相当すると思われる。

6Dトレンチから出土した坏の破片は、b～c-1形態が最も多く、8Dトレンチ出土の坏身はc-2～d形態が大半を占める(第158図)。また、本文中に掲載した坏をトレンチ別に並び替えると、第157図のようになり、破片で示した時期とほぼ一致する。したがって、トレンチによって出土する坏には時期差があり、6Dトレンチが8Dトレンチに比べて古く、6DトレンチはTK208～TK10段階に、8DトレンチではMT85～TK217段階にかけて集落が営まれたことがいえるだろう。

一方、蓋は個体差があり、坏でおこなったような分類ができなかった。また、8Dトレンチ出土の蓋は、いまだに天井部と口縁部の境となる稜線が多く残っており、坏と蓋の型式が対応していない。これは、8Dトレンチの時期を裏付けるのに矛盾を生じることになる。蓋も実測できるものをすべて抽出しており、数量的にも坏の破片数とほぼ同じであるため、坏と同時期である可能性が高い。このことから、当遺跡で見られる蓋は、坏に比べて、古い要素を残す傾向が強かったといえないだろうか。

実際にTK10並行期の吹田53号窯出土須恵器は、坏蓋の個体差があり、蓋に比べて坏の装飾の退化が進んでいることが指摘されている。蓋は稜線の有無で異なる型式が設定されているが、この吹田53号窯から出土した蓋をみるかぎり、新旧の型式をもつ蓋が同時に製作された時期が存在している。

8Dトレンチ出土須恵器も、同じような状況下であったことがうかがえ、時期的にも並行していると



第159図 口縁部形態分類

いえよう。さらにそのような観点から坏をみると、口縁部の形態差が型式の変化を表しているものの、型式の差が直接時期差に結びつくのではないと考えられないだろうか。したがって今回須恵器が出土したトレンチでは、それぞれ前後の段階を含むが、6 D トレンチではMT15～TK10段階、8 D トレンチでは、TK43～TK209段階が主体となる須恵器を使用するふたつの異なる集落があったと思われる。

2-2 小結

坏蓋の口縁形態に着目した結果、6 D・8 D トレンチ出土須恵器における型式差が明らかとなり、今回の調査で発見された集落に時期差があることがわかった。これらの時期は陶邑編年から、6 D トレンチは5世紀末～6世紀前半に、8 D トレンチは6世紀後半～7世紀前半という年代が与えられる。ただし、この型式差が実際の時期差を示しているのかという課題が残されており、時期差が少なければ、これらの集落が併存していた可能性もありうる。

また、今回は破片資料を対象としたため、今後は口径を含めた検討が必要であろう。

本遺跡出土須恵器は、全体的なプロポーションの鈍さや、胎土に黒色粒を含む特徴から、吹田・豊中市域に所在する千里窯跡群で製作された可能性が高い。また、新旧の型式が同時にみられるTK10段階以降は、千里窯跡群の盛行期であり、窯・工人の増加に伴い多少の形態差がみられる時期と考えられよう。生産地あるいは消費地でみられる形態差を、そのまま型式差や時期差と結びつけられるか否か、8 D トレンチ出土の坏蓋の様相から問題を提起したが、これを立証するためには、生産窯の詳細なデータと、須恵器の供給体制を明らかにしていくことが必要であろう¹⁾。

3. 古代～中世の土器

中世の遺物は、土師器皿や瓦器碗が多く、11世紀中頃から14世紀前半まで連続して出土した。ここでは、当遺跡より出土した瓦器碗の変遷を中心に、中世遺物をまとめてみたい。また、10世紀代の良好な資料が出土しており、中世玉櫛集落の発端となる意味づけからも、検討をおこなう。

3-1 瓦器碗以前

2 C トレンチ第V遺構面溝2022から出土した土師器皿は、いわゆる「て」字口縁皿と呼称される京都系土師皿である。法量は口径約12cm・器高約1.5cmにはほそろっており、内面のハケメや黒斑がみられる特徴から同時に生産された可能性が高い。同様の皿は、10世紀後半に比定されているが、口径の大きさや、内面のハケメなど古い様相がみられることから若干遡る可能性があると考えられる。近辺では箕面市粟生間谷遺跡で、口径約10cmの「て」字口縁皿が10世紀後半に比定されていることから、当遺跡出土の皿が先行すると考えられ、平安京Ⅲ期古段階（10世紀前半）に相当しよう。ほかにも同一遺構面から内面黒色化した黒色土器A類碗や、東美濃産灰釉陶器片・京都産緑釉陶器片が出土した。灰釉陶器は黒笹90窯式（9世紀後半）に併行²⁾し、緑釉陶器は平安京Ⅱ期古段階（9世紀末頃）の所産である。

以上から、第V遺構面で出土した遺物は10世紀前半から中頃に相当³⁾し、さらに同時期に施釉土器が搬入されていることは、平安京との関係があったことを示唆するものといえよう。

3-2 瓦器碗の検討

玉櫛遺跡で出土した瓦器碗を法量をもとに大きく4区分し、さらに調整等の変化から小区分を設けた。
・I段階—第IV—2、3遺構面出土遺物（橋本編年I—2、3期・尾上編年I期）
[I—1段階] 第IV—2、3遺構面で出土したタイプである。すでに楠葉型、和泉型のふたつのタイプがそろっている。いずれも法量は口径15cm以上器高5cm以上あり、やや深い碗型を呈し、高台も高い。

楠葉型瓦器壙は器壁は厚く、口縁端部に沈線をめぐらす。内外面のヘラミガキは密で、外面には分割性をもつヘラミガキ、内面見込み部に連結輪状文などの暗文を施す。高台はやや高さをもつ断面逆台形。底部外面見込み部にヘラ記号をもつものもある。和泉型瓦器壙は器壁やや厚い。内外面ともヘラミガキは密で外面のヘラミガキは分割する。ヘラミガキは細く、楠葉型に似ており、高台は断面方形。当遺跡では、内外面とも黒色焼成する黒色土器B類が細片でしか出土しておらず、出土地点は瓦器壙の分布と一致しない。したがって黒色土器B類と混在する期間はなかったと考えられるだろう。

[I-2段階] 法量は口径15cm・器高5cm以上で、やや深い椀型を呈する。和泉型と楠葉型がそろそろ。和泉型瓦器壙はやや太いヘラミガキを短い単位で隙間なく埋めるもの、乱方向ヘラミガキのものがある。楠葉型は図化できたものが少なかったが、内外面に密なヘラミガキを施している。

・II段階—第IV-1遺構面と7Dトレンチ第IV-1包含層出土遺物（橋本編年II期・尾上編年II期）

[II-1段階] 和泉型、楠葉型そろそろ。口径15cm前後・器高5cm前後。外面ヘラミガキが粗雑になってくる。楠葉型はヘラミガキを口縁部上半部のみ施されたり、省略するものが出てくる。内面のヘラミガキは隙間がみられるようになり、見込み部に連結輪状暗文や平行線状暗文などが施される。高台はしっかりしたもので、ハの字状に開くものがよくみられる。また、新たに和泉型の器形で、調整は楠葉型に似た細くて丁寧なヘラミガキを施す壙が現れる。瓦器壙出現期のバラエティーのひとつともとれるが、I段階ですでに、定型化した瓦器壙が出土していることから、I段階の瓦器壙の影響を受けて当遺跡周辺で生産された、折衷型ともいべき形態が、玉櫛遺跡周辺で出現する可能性を提示したい。

[II-2段階] 和泉型、楠葉型そろそろ。法量・内面の調整は変化しない。外面のヘラミガキは口縁部上半部分にしかなされない。先述した折衷型は顕著なものはみられないが、これは形態がより和泉型に近づいていったものと考えられ、以後の和泉型瓦器壙に影響していると思われる。楠葉型は外面ヘラミガキ省略されるものが多い。この段階で楠葉型瓦器壙と顕著にわかるものが姿を消す。

・III段階—第III-2、3遺構面と第III-1遺構面の一部の出土遺物（尾上編年III～IV-1期）

[III-1段階] 口径13.5～14.0cm・器高3.5～4.0cm。和泉型瓦器壙が主流となる。口径の縮小化が始まり、高台も退化し、断面三角形のものが多い。内面のヘラミガキは粗雑になり、乱方向のものや渦巻き状に施すものなど、個体差がある。

[III-2段階] 前段階と同様に和泉型瓦器壙が主流である。高台は粘土ヒモを丸くしてつけただけのもの、あるいはつけないものがある。調整はヘラミガキ調整が暗文化し、口縁部に渦巻状、見込み部に平行線状の暗文を施す。個体差は少ない。

・IV段階—第III-1遺構面と第II遺構面の一部の出土遺物（尾上編年IV-2、3期）

[IV-1段階] 口径12cm・器高3cm前後となる。高台は省略されている。内面のヘラミガキは渦巻き状暗文のみが多い。個体差は少ない。

[IV-2段階] さらに口径が縮小し、10cm前後となる。今回の調査ではほとんど出土していないが、府調査や、前回の調査で出土している。

出土した瓦器壙の特徴を以下のようにまとめる。

I段階は当遺跡における瓦器壙の初現期である。黒色土器B類壙とは共伴しておらず、定型化された和泉型・楠葉型の両方の瓦器壙が流入している。底部にヘラ記号をもつものが多い。II段階には和泉型・楠葉型瓦器壙が両存する。和泉型・楠葉型瓦器壙とともに折衷型ともいべき瓦器壙が登場する。これは和泉型・楠葉型瓦器壙の影響を受けて、当遺跡周辺で製作された可能性があり、この地域でII段

階以後にみられる和泉型瓦器碗にも影響を与えたものと考えられる。この時期に京都系土師皿と若干異なる土師器皿も出現していることから、新しい供給元ができた可能性もある。楠葉型瓦器碗は図化できた資料が少ないが、外面ヘラミガキを施さなくなる段階まで一定量出土している。Ⅱ-2段階に折衷型は和泉型に融合されるように変化したと思われる。和泉型瓦器碗は調整などの個体差が多い。

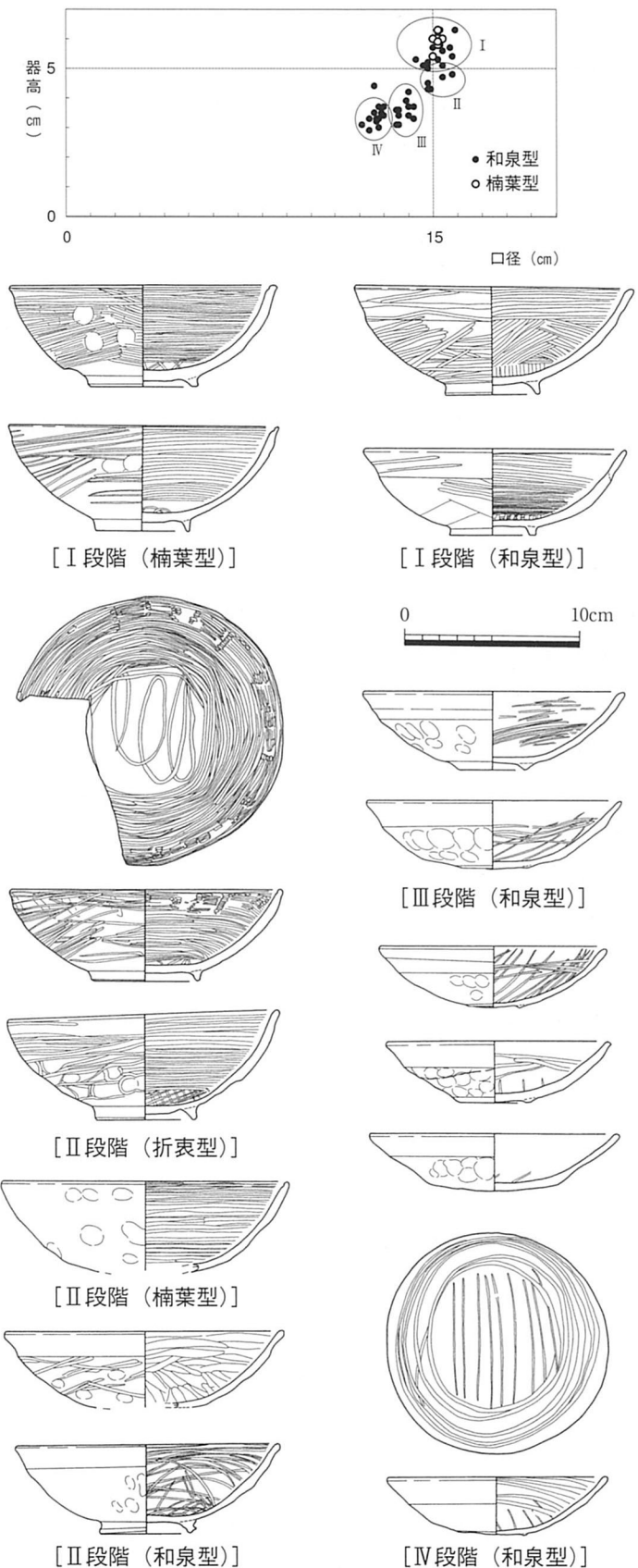
Ⅲ段階は当遺跡で出土する瓦器碗の画期といえよう。それは、橋本編年Ⅲ期以降の楠葉型瓦器碗が和泉型とは明確に区別がつかなくなり、和泉型が主流になる段階である。破片では内面のヘラミガキが細く施されるものはいくつかみられた。したがって、楠葉型の影響を受けているようなものは残っていると思われる。和泉型瓦器碗はⅢ-2段階以降個体差がみられなくなり、商品として大量生産された瓦器碗が流入したことを示唆する。

Ⅳ段階の瓦器碗は法量が縮小し、瓦器碗の消滅期を迎えるが、当遺跡では法量が最小となる瓦器碗の出土量が少なく、この時期には集落の中心が移動したと考えられよう。

観察できたことをいくつか挙げておく。当遺跡でも、Ⅰ段階とした楠葉型瓦器碗で、外面見込み部にヘラ記号をもつものが数点、また和泉型瓦器碗でも、外面口縁部下半に傷のようなヘラ記号があった。また、粘土の継ぎ目がはっきりと分かるものがあり、これらは底部から斜め方向に接合痕がのびる。粘土ひもの端と思われる太くなった部分そのまま残っている碗や、胎土に長さ1cmを超える石が混入している碗など、粗雑なつくりをした瓦器碗はⅢ段階ころのものに多くみられた。

3-3 他の中世遺物との対比

瓦器碗の変遷に合わせて、土師器皿や羽釜などの対比を行なう。整理段階では平安京編年にのっとったが、これは遺物がいわゆる京都系土師器皿とほぼ同じ形態、変遷を持っているからである。



第160図 玉櫛遺跡出土瓦器碗

本来ならば、一括資料を取り上げるべきであるが、今回は溝のように時期幅を持つ遺構からの遺物が多い。また、土坑出土遺物でも出土した遺物に時期幅がみられる点を断っておく。

瓦器塚の変遷を軸にして、他の中世遺物との比較を行なう。

[瓦器塚出現以前] 10世紀前半～中頃

(土師器皿) 平安京Ⅲ期。先述したように「て」字口縁皿が見られる。

(羽釜) 土師質の羽釜が出土している。口縁の高さが低く、端部は水平な面をもつ。鏝は断面方形。

(搬入土器) 京都産緑釉陶器がわずかと、東美濃産の灰釉陶器がみられる。

[瓦器塚Ⅰ段階] 11世紀中頃～後半

(土師器皿) 平安京Ⅳ期新段階。厚手「て」字口縁皿で口径10cm前後である。12世紀初頭まで残るか。

(羽釜) 良好な遺物なし

(搬入土器) 山本分類椀Ⅱ類などの白磁がこの時期から搬入されていると思われる。

[瓦器塚Ⅱ段階] 11世紀末～12世紀後半

(土師器皿) 平安京Ⅳ期～Ⅴ期段階。厚手「て」字口縁皿が若干残るとともに、口縁部2段凹みナデの皿が登場。口縁端部はわずかに外反する。皿小が口径10～11cm、皿大が口径15～16cmである。また、京都系土師皿以外で、口縁部と底部の境のない平たい椀型を呈する皿がある。口径は9～10cm、口縁部ヨコナデし、わずかに外反していたり、幅は狭いが面取り状のものが認められる。在地で生産されたものか。また、回転台土師器皿もこの時期のものと思われるが、数点を数えるのみである。

(羽釜) 瓦質三足釜が登場する。

(搬入土器) 東播系須恵器では、12世紀中頃までの底部に糸切り痕が残る塚が10数点と、12世紀後半には鉢の流入がみられるが、13世紀以降はほとんどみられない。白磁・青磁・青白磁で12世紀所産のものがみられ、碗・皿・四耳壺が流入していた。輸入陶磁器も多く出土しており、青磁では龍泉窯系、同安窯系のものが確認できた。白磁も多い。

[瓦器塚Ⅲ段階] 13世紀前半から後半

(土師器皿) 平安京Ⅵ期。口径8～9cmで口縁部1段凹みナデ。口縁端部にもナデする。

(羽釜) 瓦質三足釜が一般的か。

(搬入土器) この時期から、さまざまな土器が搬入される。中国製陶器が入ってきていることが注目される。第Ⅱ包含層で出土した黄釉鉄絵盤は博多から京都・奈良など、出土地点が限定されており、どのようなルートで玉櫛に搬入されたものか注目される。他にも褐色釉の壺や甕の破片が出土している。国産陶器では備前焼摺鉢、常滑焼大甕、古瀬戸ではおろし皿や、平塚など、日常雑器が多い。一方東播系須恵器はこの時期のものが少ない。

[瓦器塚Ⅳ段階] 13世紀末から14世紀前半

(土師器皿) 平安京Ⅶ期。皿小は口径8cm前後。底部から口縁部の立ち上りが明確になり、この部分の器壁が薄くなっているものもある。口縁端部は丸く収める。口径11cm前後の皿大は、口縁部の立ち上りが明瞭で端部内面にナデを施す。

(羽釜) 口縁部の高さが高くなり、口縁部外面に凹線をめぐらす。端部外面にもヨコナデを施し外傾する面をもつ。体部外面は通常ユビオサエであるが、横方向のケズリを施したのものがあり、河内などでよくみられる釜の影響を受けたものか。内面のハケメの単位が非常に細かい。

(搬入土器) 備前・常滑焼など国産陶器がみられる。

[瓦器壙消滅以降] 14世紀後半から15世紀

(土師器皿) 平安京Ⅷ期。当該期に相当する皿はほとんど出土していない。

(搬入土器) 備前焼、常滑焼、瀬戸美濃焼、奈良火鉢と呼ばれる瓦質深鉢や、香炉が出土した。また、15世紀以降と思われる輸入磁器の破片が数点確認できた。

3-4 小結

玉櫛遺跡で土器の出土量が増えるのは11世紀後半からであるが、この時期には皿や壙、甕などの日常的な雑器類が多い。11世紀末あるいは12世紀頃から輸入陶磁器が入ってきたと考えられる。瓦器壙の全体的な出土状況からも分かるように、12世紀後半の遺物が若干減る。瓦器壙と土師器皿の解釈の問題もあるが、当時の景観をかながみても、自然流路30019が固定し、調査区北東にあると考えられる集落域がずれるため、この時期の遺物が減ったと推察される。

13世紀を境に出土する土器が多様になり、大きな画期がみとめられる。この理由の一つに商品流通が盛んになる背景が考えられる。国産陶磁器をはじめ、さまざまな土器が割合はやい段階から流入しており、中世集落としての玉櫛遺跡の性格を特徴つけるものとなるだろう。

4. まとめ

出土遺物の羅列に終わってしまったが、今回出土した土器の全体的な流れを追うことができた。

古墳時代の須恵器は、細片を詳細にみたことで、トレンチによって時期差があることが判明した。また、坏と坏蓋で型式の矛盾がみられたが、これが生産地の特徴を示すものであるのかどうかについて、生産地出土資料をもとに詳細な検討が必要であろう。

古代末より京都系土師器や緑釉陶器が存在することは、本遺跡と平安京との接点がこの時期から始まっていることを示唆するものでないだろうか。そして中世以降に玉櫛遺跡は大きく発展し、比較的早い段階からさまざまな土器が搬入されている。これは当地の居住者がある程度強い権力を持っていたこと、淀川水系に近いという立地条件を兼ね備えていたといえるだろう。

註

- 1 吹田53号窯では、ふたつの型式をもつ須恵器が同時に製作されていた期間が、数年以内にとどまないと報告されている。また、豊中市域の桜井谷窯跡群でなされた編年では、当該期はⅡ型式3段階にあたり、前段階から引き続いて窯跡群の盛期期とあることから、この時期の窯数が多くバラエティーに富んだ坏蓋が製作された時期であったと思われる。
- 2 東美濃産灰釉陶器が平安京に流入し始めるのは平安京Ⅱ期中～新段階でⅢ期にはさらに増加する（小森1993）。
- 3 10世紀前半の遺物がそろそろ高槻市嶋上郡衙では、同様の土師器皿に10世紀後半の年代が与えられている。しかし、10世紀前半の土師器坏で内面ハケメを施したのがあり、当遺跡で出土した「て」字状口縁皿はこのような影響を受けたものと考えたい。

参考文献

藤原 学「吹田53号須恵器窯跡」『平成元年度埋蔵文化財発掘調査概報』吹田市教育委員会 1990

木下 亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷古窯跡群2-17窯跡-府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告-』少路窯跡遺跡調査団 1982

その他にも活用したが、本文第Ⅲ章第2節と重複するので割愛させていただいた。

第6節 玉櫛遺跡の集落変遷について—出土遺物の分布より

小野 亜由美

1. はじめに

玉櫛遺跡調査（その4）では出土した遺物をすべて5mメッシュで取り上げ、各地点ごとに出土遺物をカウントする作業を行なった。破片でも残存状況次第で大まかな時期がわかるものがあり、それら不掲載遺物を含め、出土地点とその量の分布から集落¹⁾の変遷を追うことは可能であると考えられた。ここでは出土遺物の分布状況をまとめ、通史的な玉櫛遺跡の集落変遷を追ってみたい。

なお、遺物の分布は調査時の地区割を利用し、遺物を器種ごとに分け、時期の判別しやすい須恵器・瓦器塊は1世紀ごとの項目を設けて数えた。時期の判別が困難な破片はそれぞれ時期不明の項目を作った。本稿で示す分布図は弥生土器・須恵器（古墳時代）・黒色土器・瓦器塊・陶磁器で、瓦器塊は時期不明のものは提示しない。

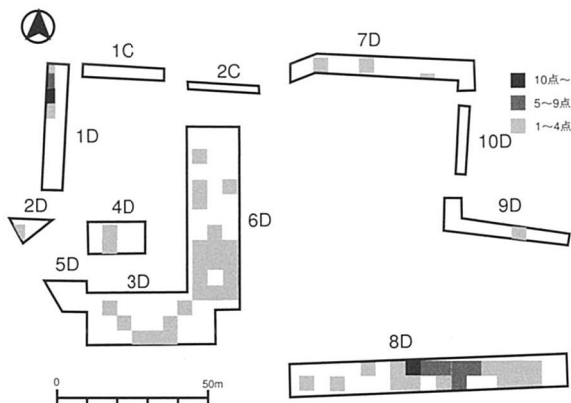
2. 遺物の分布状況

[弥生・古墳時代]

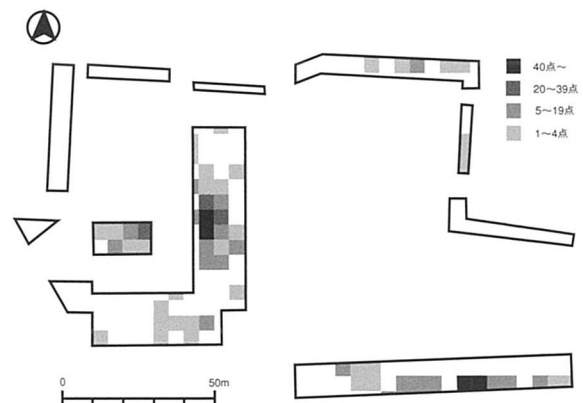
弥生土器の破片は約80点ある。弥生時代の遺構は検出されなかったが、1D・6D・8Dトレンチから出土した（第161図）。1D・6Dトレンチ出土土器は、多くが自然流路・溝から出土したために著しく摩滅しており、遊離したものと思われるが、8Dトレンチ出土土器は、大半が第Ⅶ遺構面検出遺構・第Ⅵ包含層出土で、原位置を保っていると考えられる。8Dトレンチ第Ⅶ遺構面では古墳時代後半の遺構が確認されており、当時はこの周辺が微高地で弥生時代から集落があったと考えられる。

本遺跡では、1995年度調査で中期の弥生土器が出土している。したがって、今回の調査区以南で中期以降の集落が営まれたといえよう²⁾。茨木市内では、本遺跡から約1km西に広がる東奈良遺跡のⅣ様式以降の発展を受け、新庄遺跡や中条小学校遺跡など新しい集落が出現している。本遺跡でも同様に集落が出現したのであろう。また、矢羽状スタンプ文のある土器片を積極的に評価すれば、淀川に近いという立地条件をいかし他地域との交流があったとも思われる。今後周辺の調査が進むことを期待したい。

古墳時代は8Dトレンチで掘立柱建物が2棟と、4D・6Dトレンチで柵状遺構や溝を検出し、今回初めて本遺跡で古墳時代の集落を示す遺構が確認できた。遺物の分布は、4D・6D・8Dトレンチで



第161図 弥生土器の分布状況



第162図 須恵器の分布状況

多く、6Dトレンチでは竈片が多数出土しており、居住域に近いことがうかがえる。前節で述べたように、出土須恵器より4D・6Dトレンチでは5世紀後半から6世紀前半まで、8Dトレンチではやや遅れて6世紀後半から7世紀前半という時期差がみられた。これは、集落の移動を示すと考えられる。ただし、その際に二つの集落が一時的に並存した可能性は否定できない。

現地形では標高は調査区東半は低く、西半が低い。しかし近世までは東半の方が高かったようである。弥生・古墳時代はいくつかの微高地が形成されており、集落が営まれていたのだろう。また、須恵器は千里古窯産の可能性が高いが、一方で生駒西麓産胎土の竈や紀伊産の製塩土器が出土しており、古墳時代においても、引き続き水運を利用した交易の広さがうかがえる。

[奈良・平安時代]

飛鳥・奈良時代の遺物はほとんど確認できず、須恵器も数点確認した程度である。しかし、製塩土器と、明らかに古代と思われる瓦片が出土しており、寺院関係の施設が周辺に存在していたかもしれない。

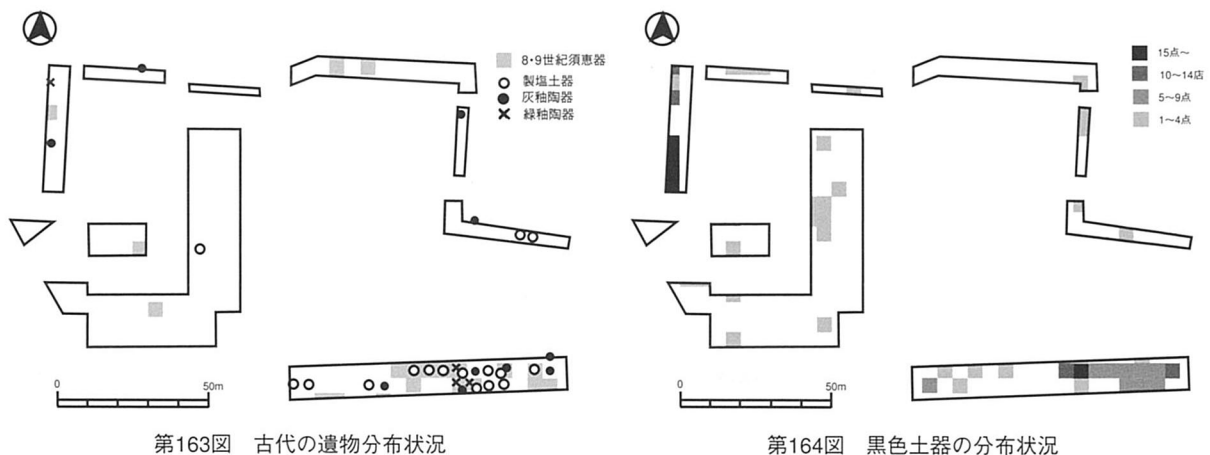
明確に遺構があらわれるのは10世紀前半からである。黒色土器A類塊や「て」字口縁をもつ土師器皿皿が2C・1D・8Dトレンチから出土した(第164図)。また緑釉陶器や灰釉陶器片も出土しており、平安京との結びつきがうかがえる。この時期の遺構面は第V遺構面にあたり、上記以外のトレンチでは畦畔など生産域をうかがわせる遺構を確認した。遺物は、溝80305や溝10175から多く出土し、ここからは祭祀に関連する人形代や「封」墨書土器が見つかった。当時は、道の辻や集落の縁辺で祭祀を執り行ったり、祭祀に用いたものを、溝に流す行為がよくみられる。したがって、これらの溝が集落の縁辺を意味し、居住域が調査区外(1Dトレンチ北側、8Dトレンチ東側)にあり、平安時代前半には調査範囲内のほとんどが生産地として利用されていたと思われる。

その後、11世紀中頃までの時期を示す黒色土器B類塊の破片は、細片を確認したのみで集落の存在はみとめられない。標高がやや高い北方に移ったのではないだろうか。

[平安時代末～鎌倉時代前半]

11世紀後半以降に玉櫛集落は大きく発展する。遺物の分布状況は瓦器塊の数量で示し、瓦器塊の時期で大きく2つに分けた³⁾。第165図は11～12世紀代、第166図は13～14世紀初頭までの分布状況を示す。

11世紀中頃～後半の遺物は遺構は第IV-2・3遺構面で溝・土坑が検出された。3D・8D・9Dトレンチの溝やピットから橋本・尾上編年I期の楠葉型・和泉型瓦器塊が出土している。その後、12世紀前半までの瓦器塊が7Dトレンチで集中することから、集落の中心は調査区北東側にあったと考えられる。特に7Dトレンチ東端の第IV-I包含層からは瓦器塊のほかに瓦器皿・土師器皿や土師質鍋など日



第163図 古代の遺物分布状況

第164図 黒色土器の分布状況

常的な土器がまとまって出土しており、多量の遺物が使用・投棄されたようである。また、8 Dトレンチでは遺構出土のものは少ないが、第Ⅳ-2 包含層中で土師器・瓦器ともに多く出土していることから、この周辺にも居住域が想定できる。

ところで楠葉型瓦器塚の外面ヘラミガキの粗密の差を利用して、11世紀後半から13世紀初頭までの集落の変遷を示した(第167図)。この結果、12世紀前半頃までは調査区北東側に集中していた瓦器塚が、12世紀後半から13世紀初頭にはほとんどなくなっており、集落は調査区東側の4 Dトレンチに移動したようである。3 Dトレンチでは、11世紀後半に一度瓦器塚が登場していることから、このあたりでも、比較的短期間で小規模な居住域の存在が想定できるかもしれない。

一方で調査区西側は様相が異なり、遺物の多くは自然流路30019(以下、流路)・溝から出土した。12世紀前半は、北から流れていた流路が、調査区の東から西(6 Dトレンチ)に向かって流路を移動させる時期である。つまり、調査区の中央付近に緩やかなS字状の流路があり、12世紀に流路の位置に落ち着き、埋没する14世紀初めまで、調査区を中央で二分していた。12世紀後半に姿を消したようにみえる調査区北東の集落は、遺物は断続的に出土しているため、流路の移動の影響を受けて、調査区外に位置をずらしながら存続していたと考えられる。そして、小規模な居住域が周辺に点在していたのであろう。以後、調査区北東の集落が発展し、中核的な存在となっていく。

[鎌倉時代]

13世紀前後からの玉櫛集落の発展は、遺物の出土状況から看取される。これは、瓦器塚・土師器以外の遺物の多様な状況が示すだろう。輸入陶磁器類は、11世紀後半から入ってきており、12世紀以降増加する。青白磁の四耳壺や龍泉窯・同安窯系の青磁などは12世紀後半に入ったものであろう。また博多や京都・奈良以外ではほとんど出土しない、福建省産黄釉鉄絵盤は注目される。この盤は、13世紀初頭の所産と思われ、他の輸入陶器も同じような時期に搬入されたのだろう。これらの破片は調査区北東に分布することから、この場所が集落の中心をなしていたといえよう。

ところで、この玉櫛集落の中核である調査区北東からは、尊勝寺と同範の瓦当や、蓮実を模したような土製品、錫杖の一部と思われる環状青銅製品などが出土しており、寺院に関連する施設があった可能性が高い。特に瓦当は12世紀初頭に生産されたものであるが、この瓦を含む土坑90062出土遺物は12~13世紀末頃までとやや時期幅がある。この時間幅は集落が機能していた時間を示し、この土坑が埋没した時点で、この施設を中心とする集落が衰退したことがうかがえる。

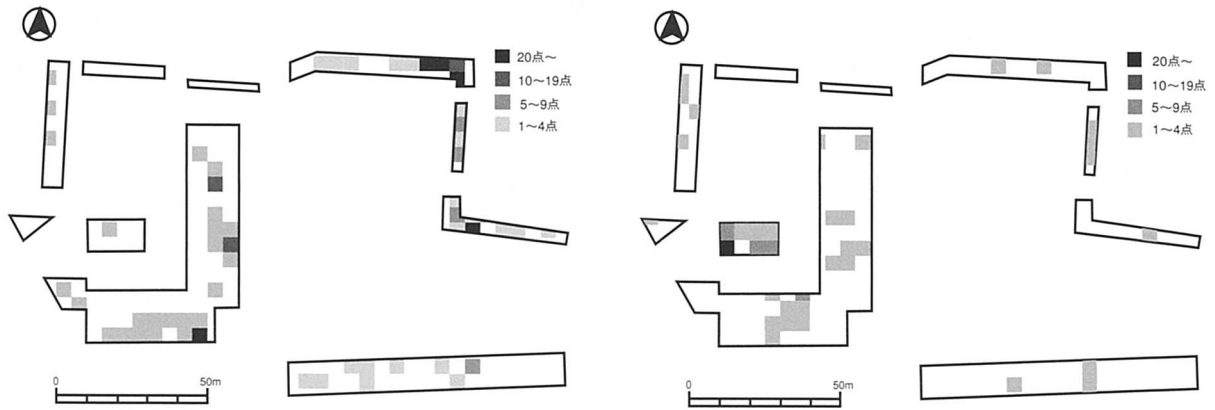
また、7 Dトレンチ断面や土坑90062では炭混じりの埋土が確認され、周辺で火災があった可能性が



第165図 瓦器塚(Ⅰ・Ⅱ段階)の分布状況



第166図 瓦器塚(Ⅲ・Ⅳ段階)の分布状況



第167図 楠葉型瓦器塚の変遷

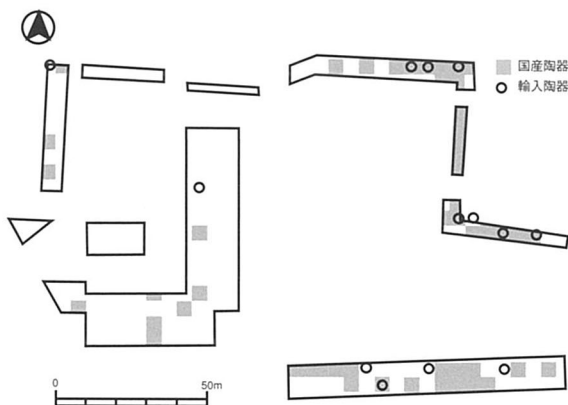
ある。二次焼成を受けた遺物もあり、この火災が集落の存続になんらかの影響を与えたのかもしれない。

今回の調査で出土した、中世土器に対する輸入陶磁器の割合は約1.3%と、数値的には北摂地域内の他の中世集落と大差ない。したがって、本遺跡における中世遺物の出土状況は、寺院の存在と、平安京の権力者と結びつきがあったという、支配者層の特異さを示すと考えられ、遺物は多様でも、港湾のような交易の中心的性格を導き出すことはできないであろう。そして、流路の埋没と同時にこの集落は衰退し、集落構造の画期を迎えることとなる。

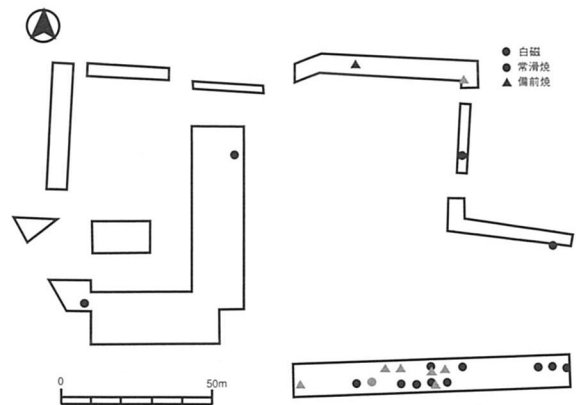
[室町時代]

14世紀の初頭までに流路をはじめ、調査区北東で検出された遺構が埋没し、集落の様相が変化する。この時期の瓦器塚は、本遺跡でみられる最終段階の瓦器塚（尾上IV-2期）で、13世紀代の遺物を含めて第166図の分布図に示した。主に流路、土坑90032、土坑100001、土坑90062など、第Ⅲ-1遺構面の遺構から出土した。図化できなかつたが7Dトレンチの中心のあたりも第Ⅱ包含層からまとまって出土しており、集落が拡大したことがうかがえよう。しかし、14世紀前半の流路の埋没と時期を同じくして、集落はほぼ衰退したようである。

流路の埋没後、古瀬戸や備前焼など国産陶器類や磁器がみられ、14～15世紀に再び集落が営まれるようになった（第169図）。特に8Dトレンチで溝から国産陶器・輸入磁器が出土した。このトレンチでは東西方向に流れる溝80143と南北方向に流れる溝80102・80147（80015）によって一辺約36mの方形区画が想定できる。これは区画溝をめぐらした屋敷へ、居住形態が変化したことを示す。出土遺物は13～15世紀までを示すが、他の13・14世紀の遺構に比べ瓦器塚の出土量が少なく、14世紀末頃以降の国産陶器



第168図 中世陶器の分布状況



第169図 14世紀以降の陶磁器分布状況

など、多様な遺物が多く見受けられることから、区画溝として機能していたのは14世紀後半以降と考えられる⁴⁾。また、出土遺物の分布がトレンチ東半から西半に移動している。したがって、この時期には、集落が移動するとともに居住形態が変化しており、前回調査区と合わせて考えると、この時期に区画溝をもつ屋敷が点在する景観が想定できよう。

3. まとめにかえて

以上、出土遺物の分布状況から、玉櫛遺跡内の集落変遷を追ってみた。分布状況の変化が、遺構の検出状況や地形の変化とほぼ一致し、本遺跡の通史的な復元を浮き彫りにできたと思う。

弥生・古墳時代の集落の存在は、今回初めて明確にすることができた。弥生時代の拠点集落解体前後の集落構造の変化については近年活発に論議されており、本遺跡でも、近接する東奈良遺跡との関連が課題となるだろう。今後、資料の増加が望まれる。古墳時代の集落についても、出土須恵器を利用して時期差を明確にできたが、集落の移動あるいは並存を含め、遺構に即した論議が必要であろう。

古代以降の集落様相は、地形の変遷と集落の変化が、遺物の分布からもつかむことができた。11世紀以降に発展する玉櫛集落が、流路が遺跡を二分する時期には流路をはさんで集落が存在しており、これらは規模に差があることがわかった。ところが、流路の埋没とともに居住形態が変化し、区画溝をもつ屋敷の成立によってひとつの画期を迎える。背景として社会的な要因が考えられるだろう。

本稿では出土資料を直に扱った本調査範囲内という限られた空間の検討しか行なえなかった。したがって、集落の面的な広がりについては推論を重ねる結果となったことも否めない。今後の周辺の調査が進むことと、過去の調査結果を踏まえた検討が必要であろう。

註

- 1 集落の用語について、本論では人間の生活域を「集落」とし、生産域と分離してして考える。また集落の中でイエなど居住空間が想定できる場所を「居住域」とし、集落を構成する要素のひとつとする。
- 2 1995年度調査の担当者によると、弥生土器が出土したのは3 A トレンチにほぼ限られていたという。
- 3 大まかには、外面にヘラミガキを施す段階（Ⅰ・Ⅱ）と省略する段階（Ⅲ・Ⅳ）で分類した。Ⅲ・Ⅳ段階は楠葉型瓦器塊がほとんどみられなくなり、商品としての瓦器塊が流通した時期としてとらえられ、13世紀以降と考える。Ⅰ～Ⅳ段階の詳細な区分については前節（第Ⅴ章第5節）を参考にされたい。
- 4 1995年度調査でも、屋敷地を規定する溝が検出されており、これは一辺が約20mである。溝からは14世紀前半の遺物が出土しており、14世紀前半から、区画溝をもつ屋敷が出現したと考えられる。

参考文献

- 奥井哲秀「環濠集落東奈良」大阪の弥生遺跡検討会－東奈良遺跡の検討－発表レジュメ 2002
- 川瀬貴子・木村健明『玉櫛遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター 1998
- 橋本久和「北摂出土の中国製陶磁器について」『摂河泉文化資料』第29・30号 摂河泉文庫 1982
- 濱野俊一「東奈良の調査成果」大阪弥生遺跡検討会－東奈良遺跡の検討－会発表レジュメ 2002
- 三木弘「東奈良遺跡北部の様相」大阪弥生遺跡検討会－東奈良遺跡の検討－発表レジュメ 2002
- 宮崎康雄「淀川北岸の弥生集落－三島地域を中心に－」『みずほ』第32号 大和弥生文化の会 2000
- 森田克行「摂津の弥生時代と遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸』河内地域史弥生編 大阪経済法科大学出版部 1995

第7節 玉櫛遺跡出土の呪術的遺物と「まじなひ」

鈴木 雅美

1. はじめに

今回の調査の注目すべき成果として、平安中期から中世の民衆レベルでの精神生活を反映するであろう呪術的遺物の出土がある。大形人形代、蘇民将来札、呪術的色彩の強い墨書土器などがそれで、いずれも“招福・除災”の意味あいを強くもったものである。ここでは大形人形代や「鬼道〔通_カ〕」墨書土器に限って、どこまで言及できるか不明ではあるが、やや視点を変え、文献史学や民俗学の知見を少々考慮して幾つかの点について触れてみたい。そのため大雑把な話になるかもしれないがその点はご了承願いたい。なお蘇民将来札については次節で扱う。

2. 大形人形代の再検討

木製人形代の全国出土状況は約120遺跡、約4000例に上る¹⁾。その7割は兵庫県袴狭遺跡群からの出土で、その殆どは但馬国府関連のものである。大阪府下出土の木製人形代は19遺跡34地点46例（内大形品は6例）である。以前に「人形に関する覚書－玉櫛遺跡出土の大形人形を巡っての予察－」²⁾で府下出土の人形集成を行い、僅かではあるが玉櫛遺跡出土の大形人形代について出土状況及び出土時期の社会的背景、A面付着黑色物質の可能性から考え得る大形人形代の祭祀形態についての検討などを試みたが、今回はそれを受けての話となる。集成データについてはその後、追加・修正分がみられるので改めて一覧表を載せておく（表10）。

また、前稿において大形人形代のA面付着の黑色物質が漆の可能性を示唆したが、奈良文化財研究所による分析の結果、漆ではないことが判明した。これによって前稿での漆の場合の可能性からくる検討は、根本からの見直しを余儀なくされた。しかしその黑色物質が何であるのかは未だ不明であり、引き続き黑色物質の解明を奈良文化財研究所に依頼している。また人形代に何のために塗っていたのかなど幾つかの興味深い点はあるが、これらは改めて結果が出てからの課題としたい。

なお、前稿では当初人形代をはじめ溝10175関連の遺物の時期を10世紀中葉～後半としていたが、脱稿後、整理段階での土器の検討で10世紀前半～中頃へと繰り上がった。そのため、校正時に人形代の時期のみを慌てて修正した経緯がある。その結果、前稿で「末法の世への過渡期」と位置付けた時代背景は、末法の世に入る1056年までに100年近く開くこととなり、玉櫛遺跡出土の人形代を検討する上でその時代背景にやや無理が生じることとなった。

しかしながら、10世紀前半～中頃という時代は怨霊思想からくる御霊信仰が社会全体に定着しはじめた頃である。当初、貴族の政権争いの結果生じた怨霊は国と貴族、民衆が各々別個に対処してきた。だが、医療体制の完備していない時代において蔓延する疫病などが生み出す切実さや不安は、その時代の流れの中で、怨霊にその一因を求めさせた。つまり都市民（貴族・民衆）が混交してこれを御霊会で祀る事で、彼等の抱える不安事象全てを払拭しようと試みたのではないかと思われる。したがって、前稿の「末法の世への過渡期」の部分を除けば、基本的考え方には大過ないものと考えたい。また、人形代の単独祭祀に関しても、このような時代背景の中で個人的な祓を求める傾向が強くなってきたのは必然的な流れであり、10世紀前半～中頃も10世紀後半段階とそう相違ないものとする。

表10 大阪府下人形集成一覧表

遺跡名	調査次数or調査年	所在地	出土祭祀遺構	出土祭祀遺物	時期	調査主体	文献	備考
大森可遺跡		高槻市浦堂	A区 溝6	人形4枚	奈良	高槻市教育委員会	木器集成図録 近畿古代篇 1984	人形:何れも正面形、内3枚墨書顔面有
嶋上郡街跡	17-P,18-M地区	高槻市清福寺町855-1・2・3他2筆	井戸1	人形	14C前半	高槻市教育委員会	嶋上郡街発掘調査概要・4 1980	人形:側面全身
溝津遺跡	その1 1B区	茨木市学園町 (大阪体育大学(浪商学園)跡地)	木器集中部	こけし形柱状製品(人形)	古墳	(財)大阪府文化財センター	溝津遺跡(その1・2) 2000	7層出土。こけし形:ヒノキ材 報告書では「人形」と有るが、「風物」か?
溝津遺跡	その2 2A区	茨木市学園町 (大阪体育大学(浪商学園)跡地)	穴2013	こけし形柱状製品(人形)	古墳	(財)大阪府文化財センター	溝津遺跡(その1・2) 2000	こけし形:サカキ材 報告書に「人形」と有るが、「呪術を目的とする人形とは別の部材だった可能性」有。「風物」か?
玉櫛遺跡	その4 1D1F1	茨木市玉櫛2丁目地内	溝10175	大形人形	10C前半~中頃	(財)大阪府文化財センター	玉櫛遺跡Ⅱ 2003(本書)	人形:ヒノキ材、片面に黒色物質付着 茨木市初出
大坂城跡	その6	大阪市中央区大手前3丁目		人形		(財)大阪府文化財センター	難波宮跡北西の発掘調査 2000	人形:側面形、マリオネット式、ヒノキ材
森の宮遺跡	MR94-8	大阪市中央区森の宮中央1丁目	SD505	人形、舟形	中世末	(財)大阪府文化財協会	森の宮遺跡Ⅱ 1996	6層出土 舟形:スギ材 人形:側面形、ヒノキ材 7C後半~末の溝SD701の上段に位置。水正16(1519)年跡木橋下層から出土。但しSD701に伴う可能性有。人形:正面形、ヒノキ材 舟形:スギ材
森の宮遺跡	(大阪市中央体育館跡地)	大阪市中央区森の宮	池状の水溜	人形2枚	7C中	(財)大阪府文化財協会	難波宮址の研究 第十一 2000	2枚のうち1枚は正面形、もう1枚は側面形で木簡を庇用。頭部に木釘5本を打ち込む。木簡の墨書は人形の頭部からみて逆字
住友鋼吹所跡	DE91-1	大阪市中央区島之内1丁目	SD801	舟形木製品、番巾、人形、馬(鳥)形木製品、棒状加工品(形代を卵形ぬく前の粗加工した枝材)	7C中	(財)大阪府文化財協会	住友鋼吹所跡発掘調査報告 1998	(下層の調査)
加美遺跡	KM95-14	大阪市平野区加美6丁目	溝	人形、舟形、絵馬、墨書人面土器、ミニチュア甕	8C後半	(財)大阪府文化財協会	葬火 64号	注:祭祀遺物は一部KM00-5のものを含む可能性有
加美遺跡	KM00-5	大阪市平野区加美6丁目	溝	大形人形	8C後半	(財)大阪府文化財協会	整理中・未報告	KM95-14に北接、同一流路から出土。顔を描く(都城出土のものに類似)
長原遺跡		大阪市平野区長吉6区4丁目	SD401	大形人形	10C末~11C	(財)大阪府文化財協会	葬火 88号 (長原遺跡東部地区発掘調査報告VI 2003)	顔を描く
長原遺跡	NG96-41	大阪市平野区長吉長原		人形?		(財)大阪府文化財協会	長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ 2000	NG7a層出土。報告書第Ⅳ章遺構・遺物の検討p.154に文中表記
讃良郡桑里遺跡		寝屋川市高宮	溝27	人形5枚、絵馬2枚、墨書人面土器	8C後半	(財)大阪府文化財センター	平成14年度(財)大阪府文化財センター現地説明会 小路・高宮・讃良郡桑里 2002	
普賢寺遺跡		門真市垣内町・幸福町		人形		門真市教育委員会	普賢寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ 1991	
御領遺跡	B地区	大東市御領1丁目	SK-205	人形	中世(13C?)	大東市教育委員会	御領遺跡 1999	人形:スギ材?
水走遺跡	2次 NO.5トレンチ	東大阪市吉田船場・水走地内	堤防内	人形3枚、ミニチュア土器、卒塔婆	11C	(財)東大阪市文化財協会	水走遺跡第2次・鬼虎川第20次発掘調査報告	人形:正面形、内1体は鳥帽子着用
水走遺跡	3次 NO.4ピット			人形	鎌倉(13C)			14層出土。材はヒノキ、正面全身形
水走遺跡	3次 NO.6ピット	東大阪市水走地内	落ち込み	人形3枚、刀形木製品、卒塔婆	平安末~鎌倉(12C)	(財)東大阪市文化財協会	水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告 1997	落ち込み13層土面 人形:正面全身形(内2体は片足脚部、残りの1体のみ顔面墨書)
水走遺跡	4次	東大阪市水走川中地内	溝14	人形	平安末~鎌倉初期(12C)	(財)東大阪市文化財協会	水走遺跡第4次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告 2000	14層出土。材はネズコ、側面形(鳥帽子と後髪を表現)
西ノ辻遺跡	22次	東大阪市西ノ辻	SR11	小形仿製鏡、人形、ミニチュア高杯	奈良(平城Ⅱ~Ⅲ)	(財)東大阪市文化財協会	西ノ辻遺跡22次発掘調査報告書 1995	人形:スギ材、手は無し 鏡:平城式丸蓋大器出土品と同范、祭祀用規格
安堂遺跡		柏原市安堂	土坑6	人形2枚	奈良	柏原市教育委員会	安堂遺跡 1986年度 1987	人形:何れもヒノキ材 偏平な正面全身形、顔面墨書有
志紀遺跡	その6 6C区	八尾市志紀町西1・2丁目	川68中央部高まり部分西側	人形	弥生中期or7C?	(財)大阪府文化財センター	志紀遺跡(その2・3・5・6) 2002	弥生の川から出土するも形態的には7C後半の様相
中田遺跡	NT91-1	八尾市北5丁目地内	SD205	人形	12C~13C後半	(財)八尾市文化財調査研究会	中田遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告49 1995	人形:側面全身、頭部に被り物表現、八尾市内初例
西大井遺跡	92-1	藤井寺市西大井2丁目地内		郷、大形人形、ミニチュア壺、ミニチュア高杯	平安~鎌倉	大阪府教育委員会	西大井遺跡発掘調査概要 1992年度・92-1区の調査、1994	第2層出土(ミニチュアは粗砂層)
西大井遺跡	3次	藤井寺市西大井2丁目地内		墨書人面土器、銭貨、ミニチュア土製品、大形人形	平安後期	大阪府教育委員会	西大井遺跡第3次発掘調査概要 1983	第4遺構面下層出土 大形人形に伴い土師小皿20枚 まとめて本文表記
西大井遺跡	4次	藤井寺市西大井2丁目地内		大形人形	平安(8~9C)	大阪府教育委員会	石川左岸幹線管渠築造遺跡群発掘調査概要・Ⅰ 林遺跡 西大井遺跡 1986	人形:第16層出土。報告者の小結で奈良・平安間の祭祀遺構について、この4次までの調査で「水利及び墓域に伴う祭祀の形態がほぼ完備」
小山遺跡	KM95-4区	藤井寺市津堂2丁目584・1,585,591-1~3	SX202 祭祀具集中地点	刀形、人形、舟形、鷲形、墨書土器器皿「六」	9C後半~10C	藤井寺市教育委員会	石川流域遺跡群発掘調査報告・Ⅲ 1997	
河合遺跡		松原市川合町	大溝1	墨書人面土器、ミニチュア壺、ミニチュア甕、ミニチュア高杯、人形5枚	8C中葉	大阪府教育委員会	河合遺跡 1987	人形:正面全身像(完形はなし)
和泉				該当遺跡無し				

(2002.11.30現在)

※表中では「人形」としているがこれらは全て木製人形代のことである。

3. 「鬼道〔通カ〕」墨書土器からみる「まじなひ」

溝100104出土の墨書土器（612）の内容が「鬼の道切り」に伴うもので、道饗祭^{みちあえのまつり}を連想させ得ることは既に述べた（p.117～118）。

ところで「鬼の道切り」とは蕃客送神を目的とした境界祭祀を指す。つまり、その地域の四方の境や衢（巷）、辻といった道路で疫神などの鬼を丁寧^{まじなひ}に迎え饗応し、その地域に入り災厄をもたらす前に満足させ引返して貰う、若しくは災厄なくして通り過ぎて貰うことを目的とし、彼等の行く手を遮る事にある。このような境界祭祀は文献上では、道饗祭や四角四境祭、疫神祭や蕃客送境神祭や障神祭、追儺などの所謂オニヤライに相当し、その方法は主だったものを挙げれば以下の通りである。

謂 卜部等於京城四隅道上 而祭之 言欲令鬼魅自外来者不敢入京師 故預迎於路而饗遏也
 釈云 京四方大路最極 卜部等祭 牛皮麀鹿猪皮用也 此為鬼魅自外莫來宮内祭之 左右京職相預
 （『令義解』神祇令 道饗祭条）

宮城四隅疫神祭 ^{若底祭京城}
^{四隅禰此}

五色薄繩各一丈六尺 ^{等分四所}…（中略）…牛皮熊皮鹿皮猪皮各一張…（後略）

（『延喜式』臨時祭宮城四隅疫神祭条）

畿内堺十處疫神祭…（割注略）

堺別…（中略）…金鐵人像各一枚 …（中略）…牛皮熊皮鹿皮猪皮各一張…（後略）

（『延喜式』臨時祭畿内堺疫神祭条）

これらは道饗祭、四隅疫神祭、畿内堺疫神祭と祭儀そのものは違うが、いずれも境界祭祀の一端を示し、共通点がみられる。つまり疫神などの鬼を饗応するのに「牛皮熊皮鹿皮猪皮」を「各一張」用意し、その祭域の四隅（境界）に張って祭祀を執り行うのである。4枚の獣皮は祭祀中に疫神が祭場から出られないようにするための見張りであり、なおかつ共に饗応される、疫なす存在・姦しき存在^{かだま}である疫神の象徴でもある。このような疫鬼を祓う祭祀は、祓いの要素を強く持ち公的祭祀の一環、即ち年中行事として古代より貴族社会（支配者階層）で行われてきた。中世になっても同様に、貴族社会において鬼の影響が大きかったことが文献史料から窺える。「鬼道〔通カ〕」墨書土器の時期（12世紀後半）より時代は下るが、『吾妻鏡』寛喜3（1231）年5月4日条に

於即巽方可修鬼氣祭 然者今年世上云疾疫云餓死可被除也 疫癘事

とあり、疫病流行の予言を受け、巽の方角で鬼氣祭を行っている。なお鬼氣祭とは四隅疫神祭の系譜を引く陰陽寮管轄下の祭祀である。また日蓮の『立正安国論』には

近年より近日に至るまで天變・地天・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半を超え、之を悲しまざるの族、敢て一人もなし。

…（中略）…若しくは七鬼神の號を書して、千門に押し、若しくは五大力の形を圖して、萬戸に懸け、若しくは天神地祇を拜して、四角四堺の祭祀を企て、若しくは萬民百姓を哀みて、國主國宰の徳政を行ふ。然りと雖も、唯肝膽を摧くのみにして、彌飢疫逼る。

とあり、13世紀後半にも鎌倉幕府によって四角四堺祭を行っていたことがわかる。

古代末～中世段階において、都市民（貴族・民衆）の間で広く行われていたこれら境界祭祀は道祖神信仰をはじめ陰陽道など様々な習俗と複雑に絡み合い形状を変えて、道々の衢、祠・堂宇などで行われる村落内祭祀の一部として定着していったと考える。その祭祀形態は中世に成立した諸々の絵巻物の中に民衆と共に描かれた道祖神を祭る祠などから垣間見る事ができよう³⁾。ただ、『記紀』神話にも見ら

れるように道祖神と考え得るチマタノカミは古代から存在しており、決して道祖神信仰が平安後期に出現した訳ではないという点については留意する必要がある。

また民俗学的知見においては地域の境・衢（巷）・辻などといった境界はあの世とこの世をつなぐ霊的・神聖なもの、異界への出入口と捉えるが、当時もまたこの様に考えられてきた節がある。

鬼とはこの異界と人間界との境界（道路上やムラのはずれの一定地点）を自由に往来でき、道を通じてやって来るものであった。境界祭祀が村落内祭祀の一部となった背景には新しい「鬼」の概念が新たに形成されたのであろう。日本には大陸文化流入の過程で奈良時代以前の古代、「鬼」は大別して2つの性格を持っていた。1つは死者の靈魂が鬼であるとする中国を起源とした“鬼”の概念であり、もう1つは、鬼は邪気であって鬼（気）とする日本独自に形成された「オニ」「モノ」の概念が生活実感として存在するものであった。この日本独自の鬼はニギミタマに対するアラミタマ、即ち邪しき神であった。『和名類聚抄』に拠れば

人神を鬼といふ。於迹。或説に云ふ、於迹とは隱の音の訛れるなり。鬼物は隠れて形を顕はすことを欲せず故に以て稱するなり

とあり、「隱」字の音をもってオニと読んだとする。中でも災厄を起こすのを専門としたオニについては「鬼」が充てられた。

こうした観念が「モノ」を疫神、疫病の流行を「穢悪キ疫鬼」の結果とみなし、諸国疫癘は「鬼神より来」とされた。つまり鬼は疫神（疱瘡神）と把握できるのである。それが平安初期には怨霊思想・雷神思想と絡んで、新たな展開として都市民（貴族・民衆）によって「鬼」の概念が形成・変化し、ここでは生魂・死魂に近いカタチの霊的怪異事象がモノノケの、疫神などの目に見えなくても実在感のある怪異事象がモノによる災厄と意識されるに至った。この点については『古今和歌集』序に

ちからをいれずして あめつちをうごかし めに見えぬ鬼神をもあはれとおもわせ、とあることから当時の鬼の実態が窺える。貴族社会で捉えられてきたこの「鬼」に対する考え方は平安中期以降末法の世となった時代背景や民衆の中で息づく「鬼」に対する畏怖とも相俟って、具体的イメージを伴いながら急速に成長していく。中世には「鬼」のイメージが完成していたようで、『吾妻鏡』建長5（1253）年5月4日条で端午の赤紙神符に

（前略）…三ニハ三台護身符。此符をかくれれば。三災九厄の病難を除く。三災とは盜賊疾病飢饉也。

此三難にあへども一切恐れなし。皆悉消除す。九厄とはもろへの厄難をのぞく事也。…（後略）とあり、中世民衆の恐れていたものは「盜賊、疾病、飢饉」であったのが窺え、これら災厄は鬼が運ぶものとされていた。

さて、問題としている墨書土器は、土器の真中に「鬼道〔通カ〕」を示しそれを「皮」で取り囲んで鬼の通り道を切ろうとする「まじなひ」の土器であり、その墨書の様相は先に文献で掲げた境界祭祀の一端に類似する。つまり境界祭祀の様相がこの1枚の中に集約されていると考え得るのである。また「鬼」という字は鬼字の活用形・種々相を示した『中山御符秘抄』下巻 第十三項に「鬼 調伏時書」⁴⁾とあり、この土器の用途はまさに鬼の調伏であったといえよう。

本来、道饗祭にかかわるものであれば墨書される皮の数は前挙した『令義解』や『延喜式』からも判るように「牛・熊・鹿・猪」の4枚であるから、土器にかかれる皮の枚数も4枚でいい筈である。しかしこの土器には6枚の皮が描かれているのは何故であろうか。皮が4枚ではなく6枚であるのはこの土器の、まじなひの目的が「鬼の道切り」にあることに関係すると思われる。つまり道々の四方からの鬼

の侵入を防ぐだけでなく、所謂鬼の通り道である鬼門の北東並びに、黄泉の国があり「タマカゼ（悪霊の吹かせる風）」の吹く方向として当時の民衆が恐れた西北の方角をも封じる必要があったのではないかと推察した。また「皮」の内一番右上にあるものは「伏」とも読めなくもなく、鬼を調伏すべき意味を持って5枚の皮と「伏」を記した可能性もあろう。この場合4枚の皮は四方に張る獣皮を、残りの1枚は祭祀を執り行う方相氏（卜部）もまたその恐ろしい形相の為に平安後期には追讎対象に転じた事を考えると、彼等の熊皮を纏う姿を表すか。そして上下方向の天を示すとする「ノ」（ハライ）は鬼を祓うことに通ずるのかもしれない。また、この土器には墨書した文字を後で塗り潰す特徴がある。これは祭祀の最後に鬼を封じ込めた印として塗り潰したのではないかと思われる。つまり塗り潰すことで鬼の通り道を切ったないしは鬼を封じたとし、サイノカミやチマタノカミに象徴される悪霊邪気を防ぎ祓う呪力を有す塞ぎ石の機能を求めたと考える。このように読み解くと、まさに一枚の土器の上で「鬼の道切り」を行ったことになるのである。

なお、呪歌と思しきカタカナの判読から本歌の検索等も試みたが探り当てることができなかった。

4. おわりに

以上、「鬼道〔通〕」墨書土器を中心に文献史学や民俗学の視点から考え得ることを列記し、読み解いてきた。玉櫛遺跡出土の限られた呪術遺物を通して、その医療体制が完備していない社会の中では病と「まじなひ」は密接に関わりあってきた事が窺える。そして古代も中世も「まじなひ」とは人々の生活の一部として完全に溶け込んだもの、或いは生活の中である程度の支配力を持っていたものではないかと考える。精神生活を扱うだけに結果として、どうしても推論が多くなってしまいう傾向は否めないが、彼等の精神生活の一端を紐解く糸口となれば幸いである。

註

- 1 兵庫県立博物館『古代兵庫への旅－奈良・平安の寺院と役所－』 2002
- 2 拙稿、『大阪文化財論集Ⅱ』（財）大阪府文化財センター 2002所収
- 3 『年中行事絵巻』巻三や『信貴山縁起絵巻』などにみられる。
- 4 水野正好1985b及び1989より引用

引用・参考文献

- 久世康博「辻の祭祀考」『研究紀要』第2号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995
- 志田原重人「出土呪符にみる逐疫神の様相」『草戸千軒』No.151 1986
- 高橋昌明『酒吞童子の誕生 もうひとつの日本文化』中公新書 1992
- 馬場あき子『鬼の研究』三一書房 1971
- 水野正好「招福・除災－その考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985a
- 水野正好「鬼神と人とその動き－招福除災のまじなひに」『文化財学報』第4集 1985b
- 水野正好「魍魎魍魎・鬼 鬼 鬼 鬼 鬼」『草戸千軒』No.196 1989
- 山本忠尚「文字史料にみる鬼と鬼瓦」『日本の美術391 鬼瓦』至文堂 1998

※なお文献史料は『延喜式』『令義解』『吾妻鏡』は新訂増補 国史大系に、『古今和歌集』『立正安国論』は日本古典文学大系に拠った。

また、『立正安国論』は日本古典文学大系『親鸞集・日蓮集』に所収されている。

第8節 出土蘇民将来札の検討

中野 麻理子

1. はじめに

疫病から身を護るための呪符である蘇民将来札は、現在もなお三重県度会郡を中心とした志摩や南伊勢地域において、正月の門飾りとしてよく掲げられている。小稿ではこの蘇民将来札を取り上げ、遺跡から出土した蘇民将来札の集成を行うとともに、玉櫛遺跡で出土した蘇民将来札について若干の検討を加えてみたい。

2. 蘇民将来伝承と研究

文献・古記録に伝わる「蘇民将来」伝承の中で、管見において最古と考えられるものは『備後国風土記』の逸文である。その概略は次の通りである。武塔神が旅の途中に日が暮れたため二人の兄弟に一宿一飯を頼んだところ、弟の巨旦将来は富裕にもかかわらず断わり、兄の蘇民将来は貧しいながらも歓待した。武塔神は、疎略に扱った巨旦将来を討って蘇民将来一家を救い、「後世に疫気があれば、蘇民将来の子孫とって茅の輪を腰に着ければ難から免れられるであろう」と言ったというものである。

蘇民将来については、民俗学や国文学、文献史学、考古学など多方面から研究がすすめられている。これまでの考古学における蘇民将来の研究史をまとめてみたい。

箱山貴太郎氏は、現在も信濃国分寺で配布されている蘇民将来符について、その製作法において厳格な制限があるものの、符の総角部分は比較的变化があり時代の変遷に伴い推移したと述べている¹⁾。倉澤正幸氏は、信濃国分寺の蘇民将来符や遺跡から出土した蘇民将来札・符の検討から、板状呪符木簡（蘇民将来札）から角柱状護符（蘇民将来符）を経て現在の形状へ至るという時代的・形態的変遷を明らかにし²⁾、嶋谷和彦氏は出土蘇民将来札・符を全国的視野から捉え、その集成をはかるとともに出土地が兵庫県より東の地域に限定されるという分布の偏在性を指摘した³⁾。

また、地域的視点から出土蘇民将来札の検討も試みられている。水野正好氏は、西ノ辻遺跡出土の蘇民将来札は石切劔箭神社から頒布されたものと推測している⁴⁾。井上伸一氏や秋山浩三氏は、河内国河内郡の蘇民将来札出土遺跡と今もなおこの地域に存在する歴代組の関係から中世陰陽師集団の存在を傍証した。また文献史料の援用によって集団的特殊性が古代まで遡及する可能性を示唆している⁵⁾。

3. 出土蘇民将来札について

著者が集成した63点の出土蘇民将来札（表11）から把握できることを簡潔に述べたい。蘇民将来札の内容は「子孫」系と「住宅」系の二種類に大別でき、これに加えて呪句・呪図・梵字の種字などが記されているものなど多様なあり方が認められる。「蘇民将来…」の文言のみの札は、13世紀以前の遺物と共伴することが多く、「蘇民将来…」に呪句・呪図・梵字の種字などが組み合わせられて内容が複雑になる札は、14世紀以降に増加する傾向にある。また呪図が記された札は、三重県以東の札に確認できるという地域差が認められる。札の形態は、短冊形や先の尖った劔先形・切り込みがある形・穴が開けられたものなどに分類でき、出土例や民俗例などから立てかける・突き刺す・打ち付ける・ぶら下げるなどの使用法が推測できる。また、蘇民将来札は井戸や溝など水に関わる遺構から見つかるケースが多い。

これらの札は、出土状況から呪符の効力が無くなった時点で水辺に廃棄されたものと推測できる。

4. 玉櫛遺跡の蘇民将来札

次に、玉櫛遺跡で見つかった蘇民将来札の地域的性格についてふれてみたい。なお、紙幅の都合により出土状況や形態的な特徴は割愛した。本文をご参照いただきたい。

玉櫛遺跡より約2km北側の茨木市元町には、茨木神社が鎮座している。茨木神社の創建時期は明らかではないが、宝徳元（1449）年の棟札が確認されていることから⁶⁾、少なくともこの時期まで遡ることは確実である。元文元（1736）年に記された『茨木神社文書』「神事祭礼之事」には、祭礼として湯立・里神楽・翁渡りの式・清祓の式があげられおり、この清祓の式は、現在も行われている蘇民将来伝承にちなんだ「茅の輪くぐり」の神事のことを指している。また本殿北側には、式内社の天石門別神社があり、牛頭天王が祀られている。中世の摂津地域では、『延喜式』の神社名がほとんど残らず牛頭天王を祭神とした神社が多数存在したことが文献などから指摘されている。推測の域を出さないが、この現象は中世後半のこの地域において戦乱が続いたことなどから、ことのほか牛頭天王への信仰が盛んだったことを示すのであろうか。または当該地域に進攻した織田信長の神社破壊行為に対し、信長の出身地尾張にある津島神社と同じ祭神牛頭天王社を仮に祀ることで逃れようとした自衛策の結果とも考えられる。いずれにしても玉櫛遺跡の蘇民将来札は、中世における牛頭天王信仰に基づいて作成・配布された可能性が推測できる。

慶長8（1603）年2月、陰陽道を家業とする安倍晴明の子孫土御門家が、後陽成天皇の勅を奉じて天曹地府祭を執行した。この時、摂河の陰陽師たちが「例ニ依り摂州・河州民、具官トシテ参仕」した記録がある⁷⁾。その後の寛永10（1643）年に、摂津国嶋下郡鳥飼村・茨木町大字茨木・嶋上郡高槻町上田部・岩手村大字古曾部などの摂河地域の12ヶ村に住む陰陽師たちで歴代組が組織された⁸⁾。この歴代組陰陽師たちは朝廷の儀式に奉仕するだけでなく、卜占などによって吉凶禍福を説く陰陽道を中世以前から民間に普及させていたことは十分想定できる。玉櫛遺跡に最も近い茨木町の歴代組陰陽師は、中世までは遡らないとされているが、玉櫛遺跡出土の蘇民将来札と在地陰陽師の関わりは否めないのである。

5. おわりに

これまで、出土蘇民将来札を概観するとともに玉櫛遺跡出土の蘇民将来札の地域性について若干の検討を加えた。

遺跡出土の蘇民将来札は、墨書内容が13世紀以降に複雑化していく傾向を見出し、札の形態や民俗例からいくつかの使用法を推測した。多くの蘇民将来札が水に関わる遺構から出土する点から、札の効力が無くなったため水辺に廃棄して浄化を計った結果と推測した。

次に玉櫛遺跡出土の蘇民将来札について、中世後半における摂津地域の情勢下から牛頭天王信仰が盛んになり、茨木神社を始めとする牛頭天王社によって作成・頒布されたものと推測した。さらに、この地域の陰陽師の存在から、在玉櫛遺跡出土の蘇民将来札は在地陰陽師による加担の可能性を想定した。

今後は出土蘇民将来札のより個別具体的な検討と地域的比較などを検討していきたい。

小稿をまとめるにあたり下記の方々から多くの御指導・御教示・御協力を賜りました。末筆ながら御芳名を記して深く感謝の意を表します。

小野亜由美・海邊博史・駒井正明・鈴木雅美・村上紀夫・渡辺昇（50音順・敬称略）

註

- 1 箱山貴太郎「蘇民将来考」(『信濃』第4巻第1号 1952)
- 2 倉澤正幸「蘇民将来符の形態的変遷について」(『千曲-郷土の研究-』第94号 1997)
- 3 嶋谷和彦「民間信仰の考古学」(『季刊考古学』59号 1997)
- 4 水野正好「鬼神と人とその動き-招福除災のまじなひに-」(『文化財学報』第2集 奈良大学文学部文化財学科 1986)
- 5 井上伸一「河内国河内郡における牛頭天王信仰とその奉祠集団」(『歴史の広場』第4号 2001) / 秋山浩三「21世紀に遺る陰陽師集団の祭祀-河内額田陰陽道「歴代組」-鎮宅靈符社祭祀次第-」(『大阪文化財研究』21号 2002)
- 6 『茨木市史』(1969年)
- 7 額田歴代組編史委員会『陰陽道と額田歴代組』(1957)
- 8 滝川政次郎「陰陽道と枚岡」(『枚岡市史』第1巻 本編 1966)

<表11引用文献>

- 9 鹿島町教育委員会『鉢形地区糸里遺跡発掘調査報告書』(1990年)
- 10 木簡研究第13号 (1991年)
- 11 木簡研究第23号 (2001年)
- 12 白根市教育委員会『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』(1983年)
- 13 木簡研究第7号 (1985年)
- 14 木簡研究第15号 (1993年)
- 15 新発田市教育委員会『新潟県埋蔵文化財だより』No.6 (1990年)
- 16 木簡研究第12号 (1990年)
- 17 吉川町教育委員会『寺町遺跡第三次発掘調査報告書』(1995年)
- 18 木簡研究第18号 (1996年)
- 19 木簡研究第20号 (1998年)
- 20 焼津市教育委員会『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報VI』(1984年)
- 21 木簡研究第6号 (1984年)
- 22 木簡研究第22号 (2000年)

表11 出土蘇民将来札一覧表

63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32		
六条遺跡	六条遺跡	六条遺跡	大物遺跡	猪名庄遺跡	森北町遺跡	安倉南遺跡	安倉南遺跡	砂入遺跡	兵庫	長曾根遺跡	観音寺遺跡2次	竜華寺遺跡2次	榎附遺跡2次	鬼虎川遺跡26次	鬼虎川遺跡26次	鬼虎川遺跡25次	西ノ辻遺跡19次	西ノ辻遺跡19次	西ノ辻遺跡10次	西ノ辻遺跡9次	山之内遺跡	玉柳遺跡	玉柳遺跡	豊嶋郡糸里遺跡	豊嶋郡糸里遺跡	上津島遺跡5次	小曾根遺跡15次	小曾根遺跡15次	小曾根遺跡7次	小曾根遺跡7次	長岡京跡688次		
柱穴1	柱穴1	柱穴1		井戸7	自然河川	井戸	井戸	洪水砂内	洪水砂内	井戸1	井戸1	溝状遺構	土塚3	井戸1	井戸4	井戸4	井戸4	井戸1	井戸29	井戸5	井戸	井戸	溝	遺物包含層	遺物包含層	(井戸2)	土坑2	井戸1	井戸1	土塚	溝		
「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	「蘇民将来公子孫宅也」	
(17.5)×3.6×0.4	(18.1)×3.4×0.4	(18.0)×3.9×0.4	(66.0)×7.0×0.8	14.7×3.1×0.2	20.1×3.9×0.6	(12.0)×3.4×0.4	15.2×3.4×0.5	(11.6)×2.3×0.4	(28.0)×3.6×0.4	16.5×2.1×0.2	16.2×(1.7)×0.2	13.8×1.8×0.2	14.3×3.2×0.2	17.2×2.1×0.3	12.0×(2.5)×0.4	12.3×3.5×0.4	(18.3)×4.0×0.4	11.2×2.1×0.3	11.8×3.3×0.2	14.3×3.1×0.3	17.7×1.7×0.2	(16.7)×3.5×0.4	(10.6)×3.0×0.6	9.0×2.3×0.55	(17.2)×5.1×0.6	75.9×5.1×0.8	14.5×3.85×0.3	14.5×3.0×0.3	17.0×3.2×0.3	(17.2)×2.4×0.6	2.7×1.3×0.2		
一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一四世紀	一四世紀	一一世紀	一一世紀	一五世紀	一三世紀	一三世紀	一四世紀	一四世紀	一一世紀	一四世紀	一四世紀	一四世紀	一三世紀	一四世紀	一四世紀	一三世紀	一五世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	八世紀
			47	45	16	43	43	25	25	18	37	39	14	34	34	36	25	13	13	25	10			10	10	31	16	16	16	29	11		

- 23 四日市市教育委員会『赤堀城跡』（四日市市埋蔵文化財調査報告 16 1986年）
- 24 三重県埋蔵文化財センター『ヒキタ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』（1992年）
- 25 木簡研究第16号（1994年）
- 26 三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺遺跡』（1991年）
- 27 三重県埋蔵文化財センター『内垣外遺跡発掘調査報告－多気郡多気町相鹿瀬所在－』（1997年）
- 28 岡本広義『壬生寺境内遺跡出土の蘇民将来札』（『元興寺文化財研究』38 1991年）
- 29 研究第4号（1982年）
- 30 豊中市教育委員会『小曾根遺跡第15次調査現地説明会資料』（1989年）
- 31 上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会『上津島遺跡 第5次発掘調査報告』（1997年）
- 32 松本啓子『山之内遺跡のまじない札』（『葦火』33（財）大阪市文化財協会 1991年）
- 33（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会『西ノ辻遺跡第9次発掘調査報告』（1996年）
- 34 大阪府教育委員会『鬼虎川遺跡第26次・西ノ辻18～20次調査概要報告』（1995年）
- 35（財）東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡第33次発掘調査報告』（1995年）
- 36（財）東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第25次発掘調査報告』（1998年）
- 37 木簡研究第8号（1986年）
- 38（財）東大阪市文化財協会『東大阪市文化財協会概報集1996年度（1）』（1997年）
- 39（財）八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅻ 竜華寺遺跡第二次調査』（『（財）八尾市文化財調査研究会報告34』1994年）
- 40 木簡研究第14号（1992年）
- 41 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター『松原市観音寺遺跡第二次発掘調査概要』（1986年）
- 42 堺市教育委員会『長曾根遺跡発掘調査概要報告堺市文化財調査概要報告第58冊』（1996年）
- 43 木簡研究第19号（1997年）
- 44 大手前女子大学史学科研究室文化財調査室『いな の』No.2（1990年）
- 45 木簡研究第21号（1999年）
- 46 尼崎市教育委員会『猪名庄遺跡』（1999年）
- 47 尼崎市教育委員会『大物遺跡発掘調査速報展』（1995年）

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
京都	#	#	#	#	三重	#	#	#	#	#	静岡	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	#	新潟	神奈川	茨城		
壬生寺境内遺跡	六大遺跡	内垣外遺跡	伊勢寺遺跡	阿形遺跡	赤堀城跡1次	中村遺跡	道場田遺跡	小川城遺跡	小川城遺跡	小川城遺跡	小川城遺跡	腰廻遺跡	腰廻遺跡	老木杉遺跡	寺町遺跡3次	寺前遺跡	寺前遺跡	寺前遺跡	綾ノ前遺跡	綾ノ前遺跡	馬場屋敷遺跡	馬場屋敷遺跡	馬場屋敷遺跡	馬場屋敷遺跡	馬場屋敷遺跡	馬場屋敷遺跡	馬場屋敷遺跡	馬場屋敷遺跡	跡形地区条里遺跡		
溝	溝	井戸32	井戸2	井戸110	溝	溝	土壇	井戸	井戸	城郭堀	城郭堀	河川	河川	土坑	井戸61	水路	水路	水路	井戸41	井戸47	溝周辺	溝周辺	溝周辺	溝周辺	溝周辺	溝周辺	溝周辺	溝6	遺物包含層		
「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」	「 <input type="checkbox"/> 蘇民将来子孫也」
（縦×幅×厚さ）	8.7×3.0×0.3	22.6×3.6×0.6	22.0×3.2×0.5	17.0×6.1×0.3	(9.0)×2.7×0.2	(7.3)×2.9×0.5	8.7×2.1×0.5	(29.7)×4.1×0.3	7.7×1.6×0.2	21.2×5.5×0.3	7.6×1.8×0.1		9.1×4.3×0.3	6.0×4.5×0.4	20.8×20.2×0.2	17.2×2.5×0.2	18.3×2.3×0.2	(17.1)×2.0×0.1			11.3×4.6×0.5	9.5×2.7×0.3	27.8×4.0×0.5	13.7×2.5×0.5	17.5×3.5×0.3	27.2×2.7×0.4	26.8×3.3×0.3	25.0×3.0×0.3	24.5×4.7×0.7	5.9×2.0×0.4	
九世紀	中世	特定不可	一五世紀	一六世紀	一五世紀	一五世紀	一六世紀	一五世紀	一五世紀	一五世紀	一五世紀	中世	中世	中世	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一四世紀	一四世紀	一四世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一三世紀	一四世紀	一五世紀	
10 28	19 27	25 26	24 25	13 23	22 23	20 21	20 21	20 21	20 21	20 21	20 21	11	11	19 18	17 16	15 16	15 16	15 16	14	14	12 13	12 13	12 13	12 13	12 13	12 13	12 13	11 12	9 10		引用文献

第9節 中世茨木における集落動向（試論）

鈴木 雅美

1. はじめに

茨木市域はもともと中臣氏の本拠地であった事もあり、かつてより藤原氏の関わりが強い地域である。平安時代中期以降、この地には藤原摂関家の積極的開発に伴う多くの荘園¹⁾が広がる。また中世以後はその氏神・氏寺である春日大社・興福寺に寄進され、15世紀半ばまで藤原氏系の荘園支配が続いていた。これらは当地域の歴史上周知されて久しい。また文献史料を紐解けば茨木市域内には、藤原摂関家関係の荘園のほかに公領・皇領のものもよく知られている。

今回調査した玉櫛遺跡をはじめ、中世遺跡と認識される集落遺跡は平野部だけでも市内随所に確認できるが、茨木市域での集落動向について纏めたものはなかったように思う。ここでは文献史料等と合わせ、玉櫛遺跡を中心に茨木市平野部における中世前半の集落の持つ特徴及びその動向を探ってみたい。

2. 文献史料からみた玉櫛庄の検討

中世前半の文献記載は荘園関係のものが主で、日記及び雑事記、目録などから知り得る断片的なものが大半である。これから中世茨木の検討に入る前に、玉櫛遺跡を考える上で大きく関わるであろう「玉櫛」庄、即ち「玉櫛」の文献記載について留意・検討しておく必要がある。以下扱う2つの文献はいずれも藤原氏の氏神である春日詣に際しての負担を示したもので、摂関家領であった事が窺えるものである。

仁平元年（1151）八月十日丁丑条

杭全 秣五十束、芻五十束 玉櫛 秣五十束、芻五十束 （『台記別記』巻5）²⁾

保元二年（1157）正月十二日戊申条

御厨五前、呈奉撰 屯食十具、香盤撰全 （『兵範記』）³⁾

まず、ここに登場する「玉櫛」はどこかの「玉櫛」庄を指すのか検討したい。これら文献上の「玉櫛」の記載が果たして摂津国嶋下郡玉櫛庄を指すのか、河内国河内郡玉櫛庄（玉串とも記す。以下区別のために玉串とするが、文献記載で示す場合は「玉櫛」としその限りではない。）を指すのかが問題となる。文献史学の立場から言えば一般的に「玉櫛」庄といった場合、河内の玉串川流域の玉串庄を指す事が多く、文献上でも玉串庄に関する記載が殆どである。だが春日詣に際して各荘園の雑事負担を示す文献記事、即ち『台記別記』の「玉櫛 秣五十束、芻五十束」及び『兵範記』の「とんじき 屯食十具、玉櫛杭全各五具、」といった「玉櫛」の記載については果たしてどちらの「玉櫛」庄であったか考える必要があり、この問題に触れずに論を進める事は砂上の楼閣になる恐れがある。

この2つの文献について『茨木市史』や先の『玉櫛遺跡』報告書では摂津国玉櫛庄とする。その根拠を先の『玉櫛遺跡』⁴⁾報告書から引用しよう。

玉櫛庄（玉串庄）は河内国にも存在するが、上の2つの史料に記載される玉櫛庄は榎並庄や杭全庄など摂津国の荘園と並んで春日詣での際に寄進していることや、他の荘園が摂関家領であることから同様に摂関家領である可能性が高く、摂津国玉櫛庄と判断した。

しかしながら摂津にせよ河内にせよ、どちらの「玉櫛」庄も摂関家領であるのは文献上間違いない事実であり、摂関家領である事だけを論拠とするのは無理がある。特に河内国玉串庄は藤原道長・頼通も

が治領した撰関家<九条流>最大の荘園である⁵⁾。また玉串庄に纏わる文献が多い事を根拠に、これらの記載も含め「玉櫛」庄に関する文献は一般的に玉串庄とされる。ただ玉串庄に隣接する荘園との境界争いなど示した他の文献⁶⁾と違って、これらは「玉櫛」の記載上、所属国名を連想させる周辺の地名が窺えない。したがってこの2つの文献が玉櫛庄か玉串庄かといった判断はつけられず、検討の余地は十分であろう。確かにこれらの文献はいずれも①撰津国住吉郡杭全庄と共に記載されている事、②『兵範記』の前文の「榎並庄」もまた撰津国東成郡榎並庄である事、③荘園名の記載は国別に纏めて記す傾向がある事といった共通点を有す。これらを考慮し、「玉櫛」の記載が撰津国荘園名に併記ないしは挟まれている事を踏まえれば、玉櫛庄の可能性は高いが、論拠とするにはまだ心もとない。そこでこの「玉櫛」庄が、後に近衛家か九条家のどちらに伝領したかによって玉櫛庄か玉串庄かに分類できるのではないかと、また「玉櫛」庄に関する文献を読みなおす事で何らかの糸口がみえるのではないかと思うに至った。

まず『台記別記』・『兵範記』を見直したい。『台記別記』は藤原頼長の日記『台記』の別記であり、通常の日次録とは別に須要の事項について詳記したものである。この中には平信範や平知信の記文が含まれるが、これらは彼等が撰関家の家司として頼長に書き献じたものと思われる。頼長は保元元年(1156)の保元の乱で敗死した事で有名であるが、藤原撰関家<九条流>の嫡流を受く忠通の弟である。ちなみに忠通の子の世代より撰関家は嫡子基実の近衛家と、兼実の九条家とに分家する。『兵範記』は



第170図 藤原撰関家<九条流>略系図

撰関家の家司平信範の日記である。信範は忠通、(近衛)基実とその子基通に仕え、後には鳥羽・後白河帝⁷⁾の院司も勤めた。彼は近衛家累代の家司であり、平家との姻戚とも連なった立場は、日記の上でも当時の新旧両勢力の内部に通暁し詳細な記述において評価が高い。なお当時の貴族にとって日記とは、詳細な日次録の日記無くして宮廷の年中行事は行えなかった程重要なものであった⁸⁾。

河内国玉串庄は九条家及び平等院に伝領された事が「九条家文書」より知られる。『台記別記』・『兵範記』は撰津国玉櫛庄とされるが、玉櫛庄自体の記載は以後みられない。ただ建久五年(1194)の『近衛家所領目録』の記載から隣接する沢良宜庄が近衛家領である事が判っている。沢良宜庄の初見はこの時であるが寛治6年(1092)の「僧定尊田畠売券案」⁹⁾に「攝津國下郡中條佐和良木村」とみえ、11世紀末には玉櫛周辺は開発済みであった。また茨木市平野部には近衛家領の荘園が多い事を含めてこれらの点を鑑みると、12世紀後半段階において撰津国玉櫛庄は近衛家伝領のものと考えられるのではないかと。

さらに別視点で「玉櫛」記載の文献を比較しよう。時代は遡るが康平5年(1056)年に頼通の春日詣に際し「^{つつみい}裏飯二百果」を負担している(『康平記』)。しかし約100年後の『兵範記』の記載ではその負担分は「屯食五具」である。裏飯や屯食は従者に与える^{こわい}強飯を指し、前者は木の葉に包んだもの、後者は鶏卵形に握ったものである。屯食の場合はそれを盛った膳を指す事も有り、恐らくこの記載も同様と思われる。だが五具とはいえその膳の上に一体幾つの握飯がのるか疑問であり、数量的には激減していると考えても問題なからう。また春日詣に伴う人数差もあり得るが、撰関家の参詣だけに少人数とは考えにくい。どちらも玉串庄の負担だとしても、撰関家最大規模でなおかつ良質な米を産出する荘園¹⁰⁾の負担としては落差が大きすぎはしないか。

また、荘園研究関係の文献等に目を通すとある傾向に気づく。「玉櫛」庄の文献記載の大半が玉串庄であることは前述したが、『兵範記』の「玉櫛」記載は玉串庄として引用するのに対し『台記別記』は取り上げられないのである。史料価値の問題もあろうが、信範、知信の紀文は混入ではない点を踏まえ

ればその価値が下がるものとは思えない。『台記』自体の評価が高いのだからその別記もまた同様に扱える筈であろう。ならばこれは玉串庄の他に別の「玉櫛」庄の存在を意味するのではないか。つまり玉串庄とは別の「玉櫛」庄が小規模ながら存在したと捉えられる。摂津国玉櫛庄が小規模な荘園であるならば、『兵範記』や『台記別記』の春日詣での少量負担もまた問題ないものと思われる。

以上の点からこの2つの文献記載の「玉櫛」庄は摂津国玉櫛庄と考えたい。その後文献上で玉櫛の記載がないのは、前掲の沢良宜庄の初見と関連するか。『茨木市史』や『玉櫛遺跡』で示す「玉櫛庄が沢良宜庄に吸収された」可能性は否めないが、筆者は別問題であると考えている。

3. 玉櫛遺跡と「ジョウラクジ」

ところで今回の玉櫛遺跡調査地東半の小字名は「常楽寺」である。調査区東半からは棟持ちの建物(堂宇)の存在を想像させる数々の中世瓦や仏具と思しき遺物のほか、供給地が限定される黄釉鉄絵盤の出土が目を引く。また基壇状遺構や土坑90062、ピット群など検出も何らかの仏教施設を連想させる。調査地が狭小のため何ともいえないが、遺構の広がり方などからこの中心は調査区外北東にあらう。これらの遺構・遺物から当所が小字名の示す「常楽寺」であった可能性はあるのではないか。現在も調査地近くの水尾4丁目には弥勒堂(第171図D2内a)があり、安置の仏像は13世紀の所産である事を鑑みると、何らかの関わりがあると考えている。

茨木の古刹・史跡に関する文献(天坊1961、茨木市教育委員会1980・1986・1990)によれば、弥勒堂は伝行基開基の浄土寺(伝承等では西方浄土寺)の一部でもとは七堂伽藍を配し、境内には瑞光寺・浄楽寺・上免寺・心願寺・迦称寺・慶明寺などの坊舎があったという。さてこの境内内寺院の一子院にある「浄楽寺」は「ジョウラクジ」と読む。その存続年代は「明徳年間高野山と確執を生じ、官裁終に浄土寺其他の坊舎を廃せしむ。更に天正年間織田信長其残余を焼き払いしかば、堂宇全く亡びて僅かに一小堂を存するに至りしなりと。」(天坊1961)とあり、寺院隆盛時期は玉櫛遺跡東半の仏教施設関連遺構・遺物と時期的な齟齬をきたさない。故に小字名に残る「常楽寺」は浄土寺内の「浄楽寺」と考える。

また同様な例は東奈良遺跡の南西部域にもみられる。「薬師堂」「垣内」「中之坊」の小字名に属する調査地点¹¹⁾がそれで、軒平瓦・硯・緑釉陶器が12世紀の遺物と出土し、付近にある蓮花寺が12世紀の仏像を安置する事から蓮華寺関連施設と位置づける。同様に茨木の古刹・史跡に関する文献(天坊1961、茨木市教育委員会1980・1986・1990)によれば、この寺院もまた伝行基開基で七堂伽藍を配すという。行基開基伝承を持つ古代から続く可能性が高い寺院は、平野部では浄土寺と蓮花寺の2寺のみである事と遺跡状況を鑑みれば、玉櫛遺跡東半の様相との類似が指摘できよう。

玉櫛遺跡を玉櫛庄または浄楽寺として捉えた場合、今回の調査で出土した軒平瓦の多くが播磨系瓦屋産で創建期の尊勝寺同範瓦である事は注目すべきであろう。この瓦は生産地の播磨地方及び供給地の尊勝寺以外に現状では出土例がなく、意図的な供給が窺われる。何故このような瓦が玉櫛で出土したのか。尊勝寺と玉櫛庄ないしは浄楽寺と何らかの関係があるのだろうか。この問題の解明は玉櫛庄・浄楽寺を理解する上で大きな意味を持つ。だが資料が少なく考古学的検討は無理があり、文献史料でもそのものの関係を示す記載は不明である。故にこの問題の解明は現状では不可能であり、諸方面からの今後の成果が期待される。しかし敢えてここで玉櫛への尊勝寺同範瓦の搬入の可能性を推察したい。

尊勝寺は堀河帝の勅願寺である。堀河帝は院政期にありながら、どちらかといえば摂関家と関係の強い天皇である¹²⁾。尊勝寺と玉櫛庄・浄楽寺の直接的関係は不明であるが、堀河帝と摂関家の結びつきが強

固とすれば、勅願は帝でも造営の進言は師通の可能性もあり、この3者の関係を見出せるかもしれない。

また院政期の都への瓦の搬入は摂関家と木工寮工人や国司との私的従属関係を中心にし、播磨産瓦の搬入の裏には法勝寺造営に際して活躍した高階為家など播磨国司の成功があったとされる。院政期の播磨国司は院司の重職を兼務し、為家以降は中関白家¹³⁾を中心とした藤原氏傍流の有力層が勤めているのも因果的である。なお尊勝寺造営〔康和4年(1102)〕時の播磨国司は中関白家の藤原基隆であり、この造営に伴い播磨国司重任の宣旨を受けている(『中右記』)。

そこで仮に播磨国司または尊勝寺瓦供給地とする播磨国多哥郡安田保の周辺の摂関家領で同様の成功を収めた受領貴族がいたとする。彼が玉櫛庄の家司としてこの地に赴いたか、所有していた玉櫛庄を摂関家に寄進して自らが在地支配を行ったとすれば、播磨での権力をこの地にも反映し、政権中枢部との私的関係で尊勝寺瓦を持ち込み得たのではないか。筆者はこの仮定と茨木の荘園の地域的特性から中関白家の関与を推測したい。いずれにせよ、七堂伽藍を配す大規模な浄土寺の一子院である浄楽寺に天皇勅願寺の瓦が搬入されるという事は、浄楽寺ないしは玉櫛庄関係者が政権中枢部と直結する者である可能性が考えられる。とすれば、瓦同様に意図的な供給が窺える黄釉鉄絵盤の搬入についても考え易い。玉櫛の地への播磨産瓦搬入の背景は推察の域を出ないが、玉櫛遺跡のある程度の位置づけはできよう。

4. 地形図・地籍図からの検討

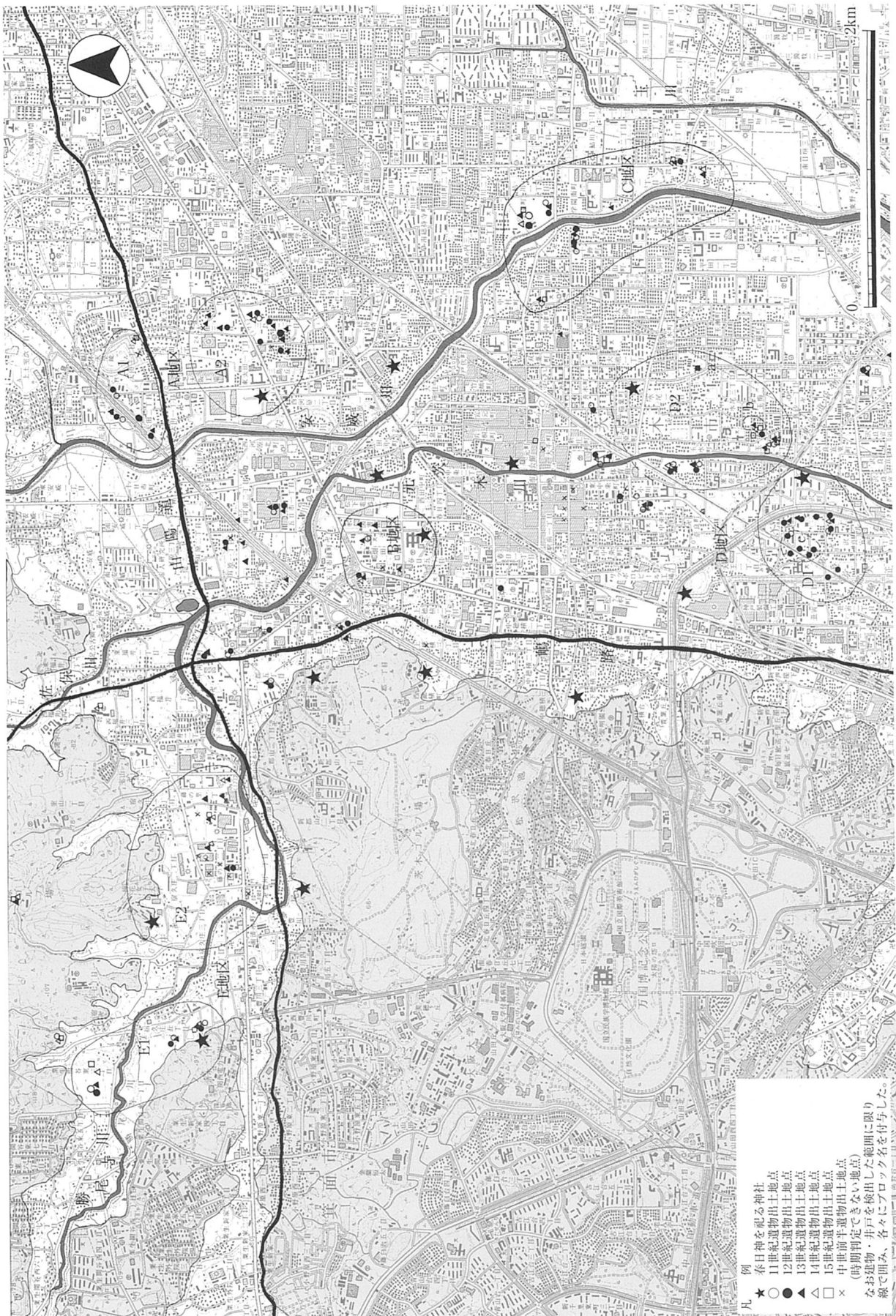
先に地籍と合わせ「ジョウラクジ」について検討したが、ここでは茨木市域での中世集落の探索において地形図・地籍図が有効か否かを考えたい。まず平野部を中心とする第2図の地形図に昭和44年(1969)の同範囲の地籍図と重ね合わせ、中世前半集落遺跡の分布状況を確認した。第2図は必ずしも中世の景観を示すわけではないが、景観復元の参考程度にはなるのではないかと考え使用した。しかし安威川や元茨木川が度々氾濫していた事もあり、両河川の形成する自然堤防上か微高地上に集落が分布するのを確認しただけで、地形図上で何か特徴的な結果は見出せなかった。

次に地籍図に中世前半の集落動向を窺った。調査の粗密及び未報告資料の多さから分布に偏りがあるが、第171図はその結果を纏めたものである。しかし地籍図上で「^{かいと}垣内」「□屋敷」「庄代」をはじめとする明らかな集落小字名上に載ったものは数ヶ所のみで、「□□寺」という寺院関連名小字名上に載ったものは今回の玉櫛遺跡調査地東半の「常楽寺」(D2内b)と東奈良遺跡南西部の「薬師堂」「垣内」「中之坊」(D1内c)に限定される。残りは大半が「□□田」若しくは「□反長」に位置し、地籍図では中世前半集落遺跡は田畠上に立地する。また宿久庄周辺には集落等を連想させ得る小字名が幾つか存在するが、これら以外はやはり集落・寺社関係に属さない。このことはこの地籍図が記す小字名の殆どが、少なくとも中世後半以降の地籍・地割を示すと思われ、中世前半まで遡らない事を傍証し得る。

以上の点から地形図・地籍図からの検討は、中世の茨木市域を究明する上で一部地域を除き概ね有効性に欠けるものと思われる。

5. 茨木の中世前半集落の動向

さて文献より動向の窺える嶋下郡の荘園は福井庄・安井庄・忍頂寺五箇庄・宿久庄・溝咋庄・造酒司領太田保(以上茨木市)・鳥飼牧・味舌庄(以上摂津市)・垂水東牧・吹田庄(以上吹田市)・公領粟生村(箕面市)などである。茨木市域にはこの他、沢良宜庄・玉櫛庄・三宅庄・井於庄・新屋庄・総持寺寺辺領・国衙領茨木などがある。またこの地域は春日社が多く、13世紀以降畿内での中心的流通商業



- 例
- ★ 春日神を祀る神社
 - 11世紀遺物出土地点
 - ▲ 13世紀遺物出土地点
 - 14世紀遺物出土地点
 - × 15世紀遺物出土地点
 - 中世前半遺物出土地点
 - (時期判定できない地点)
- なお建物・井戸を検出した範囲に限り線で囲み、各々にブロック名を付与した。

第171図 茨木市平野部の中世前半集落等分布図

品の和泉型瓦器塚の出土に比べ、流通域の限定される楠葉型瓦器塚の出土が目立つ事がよく知られる。ここでは第171図を使い、文献史料や瓦器塚の様相を窺いながら茨木市域の荘園並びに中世前半の特徴を捉えてみたい。なお第171図ではやや留意すべき点も含むが春日四神の天兒屋根命あまこやねのみこと（中臣・藤原氏始祖神）を祀る神社を春日社¹⁴⁾として取り上げ、藤原氏系荘園との関連を考える参考とした。

茨木市域で中世集落の発掘調査が顕著になったのは1993年の葦原神社東方遺跡の調査以降である。ここ近年の発掘調査によって茨木市平野部でも13世紀を中心とする瓦器・土師器などの遺物を確認している。しかし大半が水田に伴う攪拌した土層からの破片資料で、明確な遺構を検出する地域は概ね限定される。この分布状況のあり方は茨木市域における中世前半遺物の出土状況の多くが水田を主体とするか、湿地や旧河道など開発の及んでいない土地からの出土である事を示す。つまりこれらは中世前半の集落の積極的な在り方を示すと考えたい。ここでは河川等によって5地区8ブロックに分類し、A～E地区毎に茨木市平野部の中世前半の集落動向について記述する。

A地区は富田台地上に広がる。山陽道を挟んで北側のA1のブロック（太田遺跡中心）と南側のA2のブロック（総持寺遺跡・総持寺北遺跡）を確認した。A1は11・12世紀を中心とし13世紀には衰退、和泉型瓦器塚を主体とする。A2は藤原山陰創建の総持寺北側に位置し、11～13世紀に隆盛し14世紀に縮小する。瓦器塚は12世紀に僅かに楠葉型が流入するものの和泉型が主流である。文献と絡めれば春日社を内包しないA1はその所在地名から造酒司領太田保であろう。太田保については『玉葉』文治元年（1185）条以降文献記載がみられないのと遺跡の消長が似通っており興味深い。A2は新屋庄ないしは総持寺寺辺領といった藤原氏関連荘園のムラに相当すると考えられる。

B地区は小規模であるが、古代において嶋下郡衙推定地とする郡遺跡（畑田地区）・春日遺跡・倍賀遺跡を中心とし、春日神社を内包する。B地区は9世紀から集落が継続するが一旦12世紀に断絶、13世紀に再び集落を営む。瓦器塚は13世紀からみられるのと地域的な要所に位置するためか和泉型のみを有す。ここではこの北方に展開する五日市東遺跡・耳原遺跡を含めず、また同様に山陽道と三嶋路の接点に近い郡遺跡（畑田地区以外）・中河原遺跡でのブロック形成の認識をしなかった。これは13世紀の遺物を中心に多く出土するものの明確な遺構が伴わないためである。今後の調査が期待される。

C地区は溝咋・牟礼遺跡と目垣遺跡を中心とする安威川流域である。集落は安威川東岸域を中心に中世を通し継続する。最近の調査成果では溝咋・牟礼遺跡の間で西側へ地形が落ち込んだ低湿地部に中世水田面を検出し、安威川東岸の微高地上に形成の集落域とあわせた溝咋庄荘園内村落の景観復元への糸口を提示する¹⁵⁾。瓦器塚に注目すれば、11世紀は楠葉型が主流であるが、12世紀は西岸域及び目垣遺跡はそのまま楠葉型主流であるのに対し、東岸域は和泉型主体で楠葉型は余りみられない。13世紀以降はどの地域も12世紀の東岸域と同様の様相を呈す。文献では溝杭（咋）庄に相当し、安威川下流の目垣遺跡までを荘園範囲として擁する。なお目垣遺跡は後世目垣城が溝咋氏の本拠地として築城されており、溝咋庄であったと判断できる。溝咋庄は、建久3年（1192）に在地の溝咋氏が丹波局を預所として後白河帝（本所）に寄進した清浄心院領（『大徳寺文書』）が応永14年（1407）までに長講堂領となったもの（『長講堂領目六』）以外に、春日社または興福寺領の溝咋庄の存在（『春日神社文書』）も知られる。付近に春日社がなくその区別はつけかねるが安威川西岸域及び目垣遺跡集落、安威川東岸域集落での遺物の出土状況の違いは、荘園支配者の違いがその一因である可能性もあろう。

D地区は元茨木川下流域に広がる。東奈良遺跡の埋没開析谷南西部に広がるD1のブロックと東奈良遺跡元茨木川西岸域及び玉櫛遺跡を中心とするD2のブロックに分けられる。D1は11・12世紀に中心

を置き13世紀には衰退する。D 2は11・12世紀にもみられるが13世紀以降発展する。また瓦器埴は、D 1は11・12世紀とも楠葉型主体で流通し、D 2は11世紀が楠葉型主体、12世紀は両存し、13世紀は両存するが前半のある時期から和泉型が主流となる。D 2内玉櫛遺跡集落は一見、元茨木川の旧流路を挟んで居住域と寺域に別れるため別個の集落が広がるように感じるが、村落のコミュニティの中で捉えれば1集落であろう。いずれも春日社を内包し、藤原氏系荘園であると考えられる。文献ではこれらは広義での近衛家領沢良宜庄のムラ¹⁶⁾に当るか。ただD 1・D 2間で遺構状況と瓦器埴の様相が大別できるため、D 2は13世紀以降も沢良宜庄に含まずに玉櫛庄のムラと考える事もできる。なおD 2北側には明確な遺構を検出した新庄遺跡や舟木遺跡を中心とするムラがある。しかし新庄遺跡の古代より継続する分布状況はD 2内において異質である。国衙領茨木等の別ブロックを形成する可能性を考えると判断しかね、D 2に含めなかった。しかしD 2内集落の可能性は十分あり、ここではD 2の北限を破線で示す事でその可能性を含めるにとどめたい。

E地区は勝尾寺川左岸域である。古代より継続するE 1のブロック（宿久庄西遺跡・箕面市庄田遺跡・粟生間谷遺跡）の集落が11・12世紀の中心域となる。12世紀後半以降、集落はE 2のブロック（宿久庄遺跡）に拡大し中心域も移行する。瓦器埴に注目すれば、11～12世紀前半は楠葉型が主流である。和泉型瓦器埴は12世紀後半より搬入し、中心域がE 2に移行するとその主流を占める。分布もまた山陽道に最も近接する勝尾寺川左岸に展開する事からも、この和泉型瓦器埴の流入は商品流通との関連による変化と考える。またE 2内春日社はE 1から勧請したものである。文献では中宮職領宿久庄や垂水西牧（公領粟生村）、仁和寺領宿久庄などのムラに当るか。11世紀初頭に中宮大進藤原佐光が摂津守在任中に開発した田地を中宮職へ寄進して中宮職領が成立した過程から、E 1は中宮職領宿久庄のムラを含むと考えられる。

以上、主要な5地区8ブロックの集落動向をみてきた。その動向と共に出土瓦器埴の様相が楠葉型か和泉型かを示したのは、茨木市平野部の地域的特性を鑑みれば瓦器埴の出土状況の差違で荘園内村落の特徴を窺えるのではないかと判断したからである。

北摂地域の瓦器埴の動向については橋本久和氏が、時期による楠葉型・和泉型瓦器埴の意味合いの違いを述べている（橋本1991）。11・12世紀の楠葉型瓦器埴は藤原氏が楠葉東牧などで京域への上納品として作らせた公事、即ち限定品であり、出土する楠葉型瓦器埴はそれを藤原摂関家の荘園内で流通したものである。13世紀以降、楠葉型瓦器埴の分布圏の急速な狭小は、摂関家の没落とその荘園の崩壊との関係が否めない。また、和泉型瓦器埴についても13世紀以降のものが一般的に商品経済の中に組み込まれた流通品であるのに対し、11・12世紀のものは藤原摂関家以外の荘園で公事として作られ、各荘園に流通したと考え得る、商品経済の中に組み込まれていない瓦器埴である。

茨木市域においても瓦器埴の流入の仕方から、流通経済の発展した13世紀以降、山陽道に沿った平野部北半域並びに藤原摂関家の荘園の支配が及ばぬ地域は和泉型瓦器埴だけに变化するが、淀川に近い平野部南半域の集落は、量は減少するもののある程度楠葉型瓦器埴を内包するといった様相が窺える。

また茨木市平野部には春日神を祀る神社が多いのは11世紀～12世紀中頃に摂関家に荘園が集中した社会的背景と関係する。図の煩雑化をおそれ第171図にこそ載せなかったが、10世紀段階の分布状況と比べると、春日社を含む各ブロックが古代から続く平野部北半に対して平野部南半は11・12世紀段階で発生する状況が読みとれる。平野部南半の藤原氏系荘園の多くはこの時期に立荘したと考えられ、社会的背景と一致する。そして茨木市域の春日神が大体中世の勧請であるのを考えると、荘園支配手段として

その中心的な在地神に春日神を勧請し結びつける事で在地への浸透化をはかり、荘の中の鎮守社として精神的部分での支配体制の確立を試みたのだろう。また12世紀後半以降平野部南半の荘園が所謂撰閥家を中心に変容してきた寄進地系荘園の崩壊後も、院勢力の拡大に伴う急激な小規模皇領荘園の立荘や武家政権成立後の地頭によって窃取されることなく、その氏神・氏寺の春日社並びに興福寺に寄進・伝領する事でその地域支配の形態を保ってこられたのは、藤原撰閥家の地縁的繋がりも然る事ながら人々を結ぶ精神的・宗教的部分においてもその繋がりをも厚なものにした点にある。そこに当地域における中世前半の集落の特徴、支配体制のあり方が窺える。

6. まとめ

以上、歴史的流れの中で玉櫛遺跡並びに茨木市平野部の特性を捉えるべく、多岐にわたって玉櫛遺跡を巡る状況の検討を試みた。その結果、①前提条件として文献史料の検討から『台記別記』と『兵範記』記載の「玉櫛」庄は撰津の玉櫛庄と判断できる事、②今回の調査区東半は遺構・遺物の状況並びに「常楽寺」の小字名や文献史料から浄楽寺関連の仏教施設と考えられ、③尊勝寺同範の瓦から政権中枢部と播磨国司、玉櫛との関係の可能性を示唆できる事、④茨木市平野部に視野を広げれば条里等の復元によく使われる地籍図は寺院等に関連する区画を除けば大半が中世後半にまでしか遡らない可能性が高く、⑤現段階では中世前半の集落として概ね5地区を確認すると共に、春日社との関連と瓦器塚の様相から平野部南半にこの地域的特性がよく表れている事などを認識するに至った。

さて、荘園研究の中では、荘園内村落の核となり得る神社・寺院は一般的に荘・郷の鎮守社・本地堂など村落共同体の精神的紐体として荘園鎮守の典型的景観を示すとされる。茨木市域に春日社が多い一因もこの点に求めてきた。浄楽寺に伴う仏教施設の存在する13世紀の様相を鑑み、『茨木市史』や『玉櫛遺跡』で示すようにD1・D2を広義での沢良宜庄の各集落とするならば、その景観として集落には人々が寄りあう浄楽寺など本地堂の役割を持つような堂宇が存在し、春日神をも祀る式内社佐和良義神社は沢良宜庄の中心的な鎮守社と考えられる。荘園の中に幾つかの集落（ムラ）が堂宇を小集落の核として包括した形で存在し、その周囲に田畠が広がるその情景は、中世荘園のイメージとして著名な神護寺領紀伊国^{かせだのしょう}特田庄の荘園絵図の光景を彷彿させる。以上の観点からみれば玉櫛遺跡は中世荘園内村落の様相の一形態を示唆し得るのではないか。即ち文献史料、地籍図並びに絵画史料と丹念に合わせながら考古学的に景観をはじめムラムラの様相を復元し得れば、茨木市平野部の他の荘園についてもこの様な実態がみえてくる可能性があるだろう。

とはいえ、中世前半の玉櫛遺跡集落について「浄楽寺」との関連や遺物等の出土状況を熟考すればする程「文献記載にない=沢良宜庄に吸収された」とする、短絡的な可能性に疑問を感じざるを得ない。この可能性については数少ない文献史料等を駆使した諸方面からの検討が必要であり、周辺域（特に今回の調査地点の北東域）の調査データの更なる集積を待って今後の課題としたい。

註

- 1 荘園は庄園とも記すが、一般用語として扱う場合に「荘園」、文献上記載によって扱う場合に「庄園」「□□庄」と表記する。
- 2 『増補 史料大成』より出典。
- 3 『増補 史料大成』より出典。なお、同年正月条は日の十干十二支の違う二種が存在する。
- 4 (財) 大阪府文化財調査研究センター『玉櫛遺跡』1998 p.258
- 5 時代は下るが「九条家文書」によれば平等院伝領の河内18ヶ荘中、玉串庄の年貢負担は750石で最大規模の荘園であった。

- 6 諸例を挙げれば『小右記』長和4（1015）年4月5日条に隣接する辛島牧（藤原<小野宮流>実資所領）との境界争い、また『勘仲記』弘安4（1281）年4月30日条、弘安5（1282）年8月8日条、8月14日条、9月2日条、9月22日条には恩智新田の事を巡っての石清水八幡宮神人との衝突などが記されている。
- 7 この時期の天皇は上皇や法王になるため院号での呼称も考えたが、その場合住居としての院との混同が間際らしい。そこでここでは院政を行った天皇の呼称を取って□□帝と表現する。
- 8 参考に文献史学からの両書の成立した院政期の日記の価値を示しておく。日記は有職故実を記すもので、これを如何に多く伝承され、保持するかが政治的権力を得る上で重要であった。藤原摂関家が、院政期にあって没落しつつも権威を保持できた背景にはこのような点があった。また現代とは違う感覚で日記が営まれていた事に留意する必要がある。
- 9 『東寺百合文書』なお出典は竹内理三編『平安遺文』第4巻 東京堂出版（1963初版1986改訂）に拠る。
- 10 平等院建立時、頼通への寄進荘園に行った各庄の荘米の比較では、玉串庄のものが最も良質だったという（『中外抄』）。
- 11 1978・1986年調査。茨木市教育委員会『昭和61年度発掘調査概報Ⅰ』1986参照
- 12 藤原氏嫡流（摂関家）の母を待たぬ皇子が即位する傾向の強い中で、堀河帝は藤原賢子（師実養女）を母とする。摂政師実が有職故実の儀礼などを養育、成人後は関白師通と結託して執政し白川帝の聴政に必ずしも同調しなかった。また堀河帝の居した堀河院はもともと頼通領で師実に伝領したものである。
- 13 中関白家は藤原道隆（道長兄）系譜。道隆嫡子伊周が道長の策謀で失脚後、隆家（伊周弟）以下中関白家は没落し受領貴族化、藤原氏傍流となる。堀河帝期の播磨守は殆どが中関白家（隆家子孫）より選出、白川帝院司として重職を勤めた。
- 14 したがってここでいう春日社は必ずしも春日神社を指すのではない。またブロック外の春日社については勧請並びに創建時期が中世前半以降のものを一部含むので扱い方には留意されたい。
- 15 茨木市教育委員会『平成12年度発掘調査概報』2001及び『平成13年度発掘調査概報』2002
- 16 玉櫛庄が後世「沢良宜庄に吸収された」可能性を踏まえた場合、遺構・遺物が文献記載以後の時代にも出ていることから、ここでは敢えて「広義での沢良宜庄のムラ」と表現した。

引用・参考文献

- 『茨木市史』茨木市史編纂委員会 1969
- 『わがまち茨木 城郭編』茨木市教育委員会 1986
- 『茨木の史蹟』茨木市教育委員会 1980
- 『わがまち茨木 神社・仏閣編』茨木市教育委員会 1990
- 網野善彦他編『講座 日本荘園史 7 近畿地方の荘園Ⅱ』吉川弘文館 1995
- 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号（財）元興寺文化財研究所 1978
- 河音能平『中世前半の大阪』清文堂 2002
- 木村茂光『中世の民衆生活史』青木書店 2000
- 天坊幸彦『三島郡の史蹟と名勝』1961
- 橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度』高槻市教育委員会 1991
- 松蘭 斉『日記の家—中世国家の記録組織—』吉川弘文館 1997
- 森田 稔「東播系須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に—」『研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986
- ※5. 「茨木の中世前半集落の動向」での古代集落との関連部分は筆者他「摂津国嶋下郡における地方官衙についての一考察」『大阪文化財研究』21号で作成した分布図を基に記述した。なお小稿作成に伴う註不掲の文献史料は、基本的に『新訂増補 国史大系』に拠り、一部竹内理三編『鎌倉遺文』東京堂出版に拠った。また茨木市域の調査報告書を多く活用したが、第二章の参考文献と重複するため割愛した。

第Ⅵ章 まとめ

府営住宅建て替えに伴う玉櫛遺跡の調査は、今回をもって最後となる。ここで6次にわたった玉櫛遺跡の調査を時代順に総括して、担当者としての責を果たしたい（トレンチ名は第1図（p.1）を参照）。

1. 弥生時代

一連の調査で出土した縄文時代に遡る資料は、3Aトレンチ出土の晩期土器（長原式・船橋式）2点のみであるが、ごく小規模な集落が遺跡南半に営まれた可能性は否定できない。ただ弥生時代前期の遺物が未見である現状では、この集落の存続期間は短期間だったと考えるべきであろう。

さて本遺跡では明瞭な遺構こそ未確認ながら、1C・2Cトレンチを除く各トレンチで微量ながらも弥生時代中期から庄内式併行期にいたる土器・石器が出土した。今回の調査では第161図（p.210）に示したように、弥生土器は8Dトレンチ最下層付近で顕著にみつまっている。既往の調査での出土量はわからないが、弥生時代集落はおおよそ8Dトレンチ以南に存在した可能性が高い。

玉櫛遺跡に弥生時代集落が存在したとなると、西方約600mの地点に位置する東奈良遺跡との関連を検討せねばなるまい。東奈良遺跡は弥生時代前期に出現し、中期には居住域の周囲に墓域・工房域を配する大集落を形成したが、後期には数箇所からなる小規模集落に分散した。現時点では玉櫛弥生時代集落は、弥生時代中期に東奈良弥生時代集落の分村として出現し、庄内式併行期まで存続したと推定する。

2. 古墳時代

庄内式併行期以降、玉櫛に集落が営まれたのは5世紀中頃である。近隣の新庄遺跡や溝昨遺跡では初期須恵器を伴う集落を検出しているが、玉櫛古墳時代集落は中条小学校遺跡あるいは東奈良遺跡とともにこれらに続く集落といえよう。今回はFトレンチ検出の6世紀代の杭列に続き、集落の中心部分の一端を明らかにすることができた。6Dトレンチでは5世紀中頃から6世紀前半にかけての柵状遺構を中心とした遺構を、8Dトレンチでは6世紀末から7世紀前半にかけての掘立柱建物2棟を検出することができた。なお柵状遺構については諸特徴を列記したが（p.79）、性格を特定するにはいたっていない。

さて出土した須恵器を胎土分析した結果、千里窯跡群産の可能性が出てきた。一方生駒西麓産の土師器羽釜・竈、あるいは紀伊の製塩土器が出土しており、当時の土器の動きを知る手掛りとなる。

しかし、7世紀後半以降集落は粘土層に覆われる。この粘土層堆積の原因は、淀川南岸に施された大規模な築堤（茨田堤）工事によるもので、淀川以北一帯の湿地化を促進したという。

3. 奈良時代～平安時代前期

その後湿地環境だった一帯の水位が徐々に低下し、イネ科花粉・イネ珪酸体の急増が示すように、第Ⅵ遺構面上にはおおよそ正方位を指向する水田が営まれる。第Ⅵ包含層に微量ながら奈良時代の遺物が含まれることから、この水田跡を奈良時代に遡る条里水田と評価した。この環境変化の原因は、『行基年譜』『続日本紀』にみられる北摂地域の排水工事に求めることができるという。

一方遺構は未確認ながら、1D・8Dトレンチで微量の緑釉・灰釉陶器、製塩土器、瓦が出土し、10世紀代の黒色土器A類・土師器がほぼ同様の地点で一定量出土したことは、近隣に8世紀から10世紀代

の集落が営まれていた可能性を示唆する。特に8 Dトレンチでは数片ながら瓦がみつかり、仏教関連施設の存在をうかがわせる。やがて形成された溝10175および溝80305といった流路は、人形代や「封」墨書土器の出土からも明らかなように、祭場としても利用された。しかし10世紀前半にこの流路が多量の土砂で埋没、周辺にも被害が及び、既存の集落は廃絶あるいは他所への移動を余儀なくされたようだ。再び玉櫛の地が居住地として利用されるのは11世紀中頃である。

古代玉櫛遺跡が属した嶋下郡の奈良時代の主要遺構や土器の分布状況を検討すると、5箇所の集中地点を見出せるという。このうち東奈良遺跡を中心とする集中地点が、穂積郷の一部に該当する可能性が高く、現時点では玉櫛遺跡はこの範囲内の東端に位置する。

4. 平安時代後期以降（3小期に区分）

(1) 11世紀中頃以降7 D・10 D・9 Dトレンチ、3 Dトレンチ、1 A・3 A・1 Bトレンチ付近で集落形成。特に1 A・3 Aトレンチ検出の建物群は、13世紀後半までほとんど場所を移動しない。

(2) 12世紀から14世紀の7 D・10 D・9 Dトレンチ、4 Dトレンチ、Aトレンチ、1 A・3 Aトレンチ付近の集落展開。まず景観の特徴は自然流路30019の形成と廃川にある。12世紀に流路形成し、頻繁に側方移動を繰り返す自然流路30019には、杭列を打設することで対処した。杭列に用いた杭は、①太さのほぼ似通った樹齢10年前後のアカマツ・コナラ亜属・スギで、②杭の長さや先端の形状を揃えている点で、溝80305検出の杭とは大きな違いをみせる。杭列3にみられたような杭列の補修は、流路を固定化し維持管理することで居住域・生産域の安定化を図ろうとした表れであろう。

7 D・10 D・9 Dトレンチから、2型式の尊勝寺と同範軒平瓦および13世紀初頭の黄釉鉄絵盤が出土した。これらは陸揚地や生産地、供給先を除くとほとんど出土例をみないこと、仏具を彷彿させる遺物や基壇状遺構、さらには「常楽寺」という字名から、有力な寺院が存在したに違いない。この「常楽寺」が、行基開基伝承をもつ浄土寺の一子院と目される「浄楽寺」である可能性は高いが、尊勝寺やその造営主体との因果関係など、まだまだ謎に満ちている。

その他特徴的な遺物について。①和泉型の器形に楠葉型の調整を施す「折衷」型と思しき瓦器碗が、少なくとも11世紀末頃から12世紀前半に存在するようだ。その実態・分布・形態変化など詳細について、今後更なる検討が必要である。②精神生活の一端を物語る良好な資料－「蘇民将来」札や「鬼道」墨書土器－が出土した。前者は茨木神社をはじめとする牛頭天王社による配布を、後者は鬼の道切りを想定する。③2 A・10 Dトレンチで鼻線が出土した。絵巻物には、鼻線をもつ板材が礎石を有する神社仏閣あるいは屋敷の建築現場などでしばしば描かれる。鼻線の出土は、かような礎石建物の存在を示す資料となりうるかもしれない。

(3) 14世紀初頭自然流路30019の埋没・「常楽寺」の衰退とともに、集落の中心は2 A・4 Aトレンチへ移動し、堀と思しき区画溝を伴う屋敷地が出現する。さらに8 Dトレンチ西半で14世紀末頃から15世紀にかけての溝を検出した。これが区画溝なら、屋敷地が再度移動したことになる。

文献史料の検討によれば、当地は摂関家領玉櫛庄であったという。「常楽寺」の衰退と屋敷地の出現は、はたして「玉櫛庄管理主体の交代」を意味するのだろうか。この交代が、自然流路30019から元茨木川への動きと期を一にすること自体、偶然とは思えない。「管理主体の交代」や流路の変化は、荘園内の再編をもたらし、水利・水運など流域沿いの諸集落と複雑な共存・利害関係を生じさせたことは容易に想像できる。その実態解明は今後の大きな課題である。